

東北大学東北アジア研究センター叢書 第70号

仙台藩奉行大條家文書

—家・知行地・職務—

野本 禎司 編著

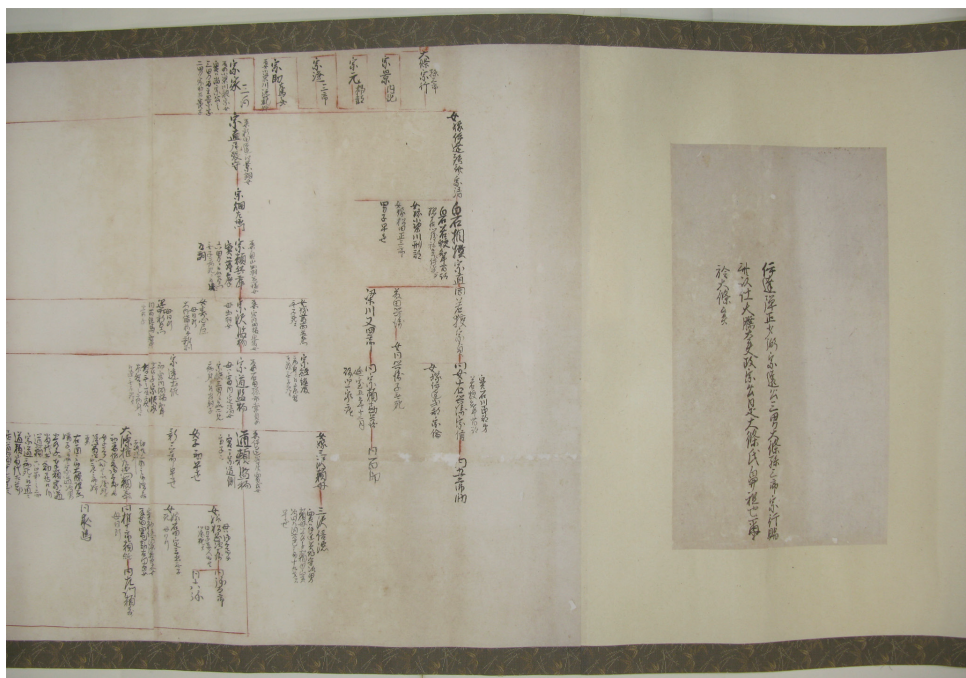


東北大学東北アジア研究センター叢書 第70号

仙台藩奉行大條家文書

—家・知行地・職務—

野本 禎司 編著



1 大條家文書 2-1 家系図（年月日未詳）

曰理郡坂本村高瀬村志願村志願村志願
 於三ヶ村合共百貳拾貳文並度為加増
 坂本村志願村志願村志願村志願村志願
 村合共拾貳文並合三百貳文之所
 之記
 全可令酒酒有やの法解
 大條家文書
 伊達忠宗黒印狀
 承応2年（1653）閏6月11日

2 大條家文書 4-7 伊達忠宗黒印狀 承応2年（1653）閏6月11日

大條墨

3 大條家文書 4-11-2 奉行職再役につき 宝暦6年(1756) 閏11月27日

4 大條家文書 3-20 若老方日記 安永7年(1778)閏5月5日



5 大條家文書 6-19-1 夢餘偶筆 天保6年(1835)



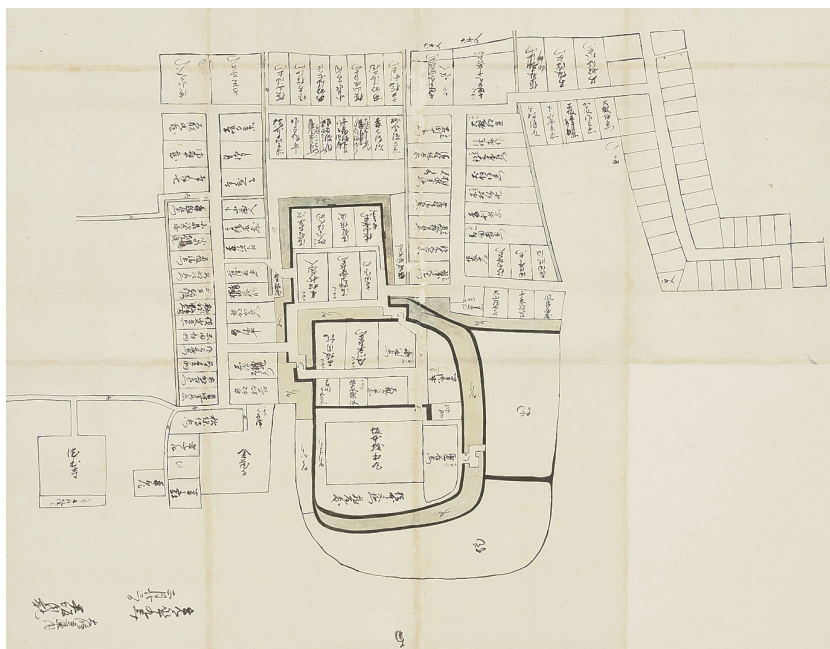
6 大條家文書 6-19-10-2 客座録 (御船入日暮図) (年月日未詳)



7 大條家文書 6-19-18 文苑餘芳 天保 11 年（1840）



8 大條家文書 6-19-19 一揮傳真 天保 11 年（1840）



9 互理郡坂本御家中図 寛永 19 年 (山元町歴史民俗資料館所蔵)



10 江戸時代寛永期の坂本と現在の坂元

堀切 (空堀) (北から)



11 坂本要害大手門（東から）



12 手前：大條家歴代当主墓石（東から）
左奥：大條家始祖 伊達家 8 代宗遠靈廟跡（現大條家祖先慰靈碑）

目次

口絵

はしがき

I 論考編

- 1 大條家文書と本書収載資料について
- 2 亘理郡山元町内所在の大條家関連遺産について
- 3 「若老方日記」からみた仙台藩の年中行事
- 4 『客座録』の挿入画について

野本 楨司 3
 瀧本 正志 12
 後藤 三夫 34
 菅沼 楓 49

II 資料翻刻編

凡例

- 1 家系・由緒 72
- ① 家系図（年月日未詳） 73
- ② 承伝記下 享保一八年（一七三三） 83
- ③ 密傳記卷第二（貞享二年（一六八五）） 92
- ④ 密傳記卷第三（元禄七年（一六九四）） 98
- ⑤ 密傳記卷第四（元禄三年（一六九〇）） 103
- ⑥ 御系図御判物御墨印御朱印御添目録入記 文化一二年（一八一四） 110
- ⑦ 入記 文化一三年（一八一六） 112

2 知行地・坂本要害・在郷屋敷……………

- ① 伊達晴宗判物 天文二二年（一五五三）…………… 117
- ② 伊達政宗黒印状 慶長九年（一六〇四）…………… 117
- ③ 伊達政宗黒印状 元和二年（一六一六）…………… 117
- ④ 伊達忠宗黒印状 承応二年（一六五三）…………… 117
- ⑤ 知行目録 承応二年（一六五三）…………… 118
- ⑥ 知行目録 寛永二二年（一六四四）…………… 119
- ⑦ 知行目録 寛文二二年（一六六二）…………… 126
- ⑧ （達書、坂本本郷ほか新田起目竿入につき）寛文一三年（一六七三）…………… 126
- ⑨ （覚、北浦村など四か村加増相済につき）宝暦一二年（一七六二）…………… 127
- ⑩ 奉窺候覚（坂本要害修補） 貞享五年（一六八八）…………… 128
- ⑪ 亙理郡坂元私要害屋敷普請奉願候覚（御扣）元禄一四年（一七〇一）…………… 128
- ⑫ （達書、要害屋敷堀藻草取払いにつき）貞享四年（一六八七）…………… 129
- ⑬ （返書、要害屋敷堀藻草取払いにつき）貞享四年（一六八七）…………… 129
- ⑭ 在郷屋鋪書出覚 元禄一四年（一七〇一）…………… 129
- ⑮ 在郷屋鋪書出之覚 宝暦三年（一七五三）…………… 130

3 職務

- ① 従不求三代勤功書上候扣 貞享四年（一六八七）…………… 133
- ② 若老方日記 安永七年（一七七八）…………… 135
- ③ 若老方日記 安永七年（一七七八）…………… 146

④	御申次手扣（安政六年（一八五九））	158
⑤	年中行事（覚帳）（文政一〇年（一八二七））	185
⑥	御下向御道中御記録書拔 安政五年（一八五七）	218
Ⅲ	山元町大條家文書目録	234
	執筆者紹介	266

はしがき

本書は、仙台藩の奉行職（家老職）をつとめた伊達家重臣・大條家に伝来した歴史資料「大條家文書」について、家・知行地・職務に関する資料翻刻とその概要解説・関連論考および文書目録を収録している。

大條家文書については、NPO法人宮城歴史資料保全ネットワーク（以下、宮城資料ネット）によって歴史資料保全活動が行われ、二〇二二年四月に東北大学東北アジア研究センターに設置された上廣歴史資料科学研究部門によって文書目録が作成された。現在、山元町歴史民俗資料館に古文書は所蔵されており、同館にて閲覧ができる。このたび本書を刊行できるのは長年にわたる丁寧な歴史資料保全活動による賜物であり、これまで調査に関わられたすべての方に深く感謝を申し上げたい。

筆者が、大條家文書と出会ったのは、二〇一九年夏である。目録作成を担当された荒武賢一朗教授（東北大学東北アジア研究センター上廣歴史資料科学研究部門）に紹介をうけ、宮城資料ネットの収集画像を佐藤大介准教授（東北大学災害科学国際研究所）から提供をうけた。両氏には日頃よりお世話になっているが、大條家文書の魅力にふれる機会をいただいたことに、ここに記して深謝申し上げたい。また、佐藤准教授から、東日本大震災以降、宮城県山元町の文化財行政に尽力されている瀧本正志氏をご紹介いただき、同町を荒武教授と訪問したのが二〇一九年秋である。この時に古文書だけでなく、坂本要害跡やその町並み、大手門や茶室などの関連文化財について巡見し、現在も確認できる大條家の歴史遺産を目の当たりにした。これ以降、瀧本氏には同町の歴史資料調査にあたり多大なご配慮をいただいている。また、同氏には、山元町所在の大條家に関わる歴史遺産を本書にて紹介いただき、地域に根づいた報告書とすることができた。このように地域連携を深めながらさらなる調査活動を展開しようとしていた矢先、新型コロナウイルスの感染拡大の影響をうけることになった。

二〇二〇年春頃から当部門の学術研究員や事務補佐員が日常的に実施しているセンター内での歴史資料保全活動が制限され、そのために宅勤務で大條家文書の翻刻作業を行った。この作業は、井上瑠菜氏（元学術研究員、現酒田市美術館）、後藤三夫氏、竹内幸恵氏（事務補佐員）、高橋直道氏（元事務補佐員）が精力的に取り組み、短期間のうちに刊行へと歩みを進めることができた。

また、後藤氏、菅沼楓氏（元事務補佐員、現新潟市美術館）は論考編の原稿を担当し、後藤氏は奉行職就任以前の若老（若年寄）や申次役の職務内容に関わる論考を、菅沼氏は大條家の教養レベルを知る上で重要な学芸関連資料のうち絵画資料を紹介する論考を執筆した。どちらも本書副題に掲げたテーマにとどまらない大條家文書の魅力を伝えている。

大條家文書の魅力は、文書目録を通覧いただければわかるように、江戸での役職内容、幕末維新期の活動、和歌など学芸・教養の習得過程など、近世日本の社会を知るうえで多彩な資料が含まれていることである。本書の刊行が、仙台藩研究のみならず、日本近世史を学ぶ多くの方に大條家文書を知っていただく機会になれば幸いである。

以上、本書の概要について、その編集経緯をふまえながら紹介させていただいた。東北大学東北アジア研究センターおよび上廣歴史資料学研究部門をはじめ、充実した環境のなかで調査・研究を進められていることに、末筆ながら関係する皆様に記して謝意を申し上げたい。

I 論考編

【論考1】

大條家文書と本書収載資料について

野本 禎司

はじめに

歴史資料「大條家文書」は、仙台藩の重臣である大條家に伝来した文書群で、現在、宮城県の山元町歴史民俗資料館が所蔵している。大條家文書の調査は、NPO法人宮城歴史資料保全ネットワークを中心に整理・撮影が進められ、東北大学東北アジア研究センター上廣歴史資料学研究部門が目録作成をおこなった。現在、九一四点が確定し、このたびの本書刊行にいたった。

ここでは、①大條家文書からみえてきた仙台藩政における大條家の政治的位置、②本書に収載した資料翻刻の概要解説および①に関わる具体的な内容について紹介をおこなう。

一 仙台藩における大條家の政治的位置

1 大條家の歴代当主と知行地

はじめに大條家の歴代の当主を確認したい。大條家は、伊達家の八代宗遠の三男・宗行を祖とする。仙台藩の家格制度においては、一門衆のつぎに位置する「一家」に所属する。歴代当主は、次のとおり明治維新を迎えるまで一七代つづいており、七代宗直以降が江戸時代以降の当主となる。

宗遠―①宗行―②宗景―③宗元―④宗澄―⑤宗助―⑥宗家

―⑦宗直―⑧宗綱―⑨宗頼―⑩宗快―⑪宗道―⑫道頼

―⑬篤恭（道任）―⑭道英―⑮道直―⑯道治―⑰道徳

傍線を引いた当主は、奉行職の就任者である。奉行職は他藩では藩政の最上位に位置する家老にあたる役職である。大條家の歴代当主の多くが奉行職に就任した。その就任期間については、表1を参照されたい。なかには一二代道頼のように、藩政の事情から、病氣にて奉行職を辞任した後に再任を要請される場合もあった（口絵3参照）。大條家は代々奉行職を務める家柄であったといえ、この点は大條家文書に残された史料の特徴ともなっている。

大條家が奉行職を務めるための経済的基盤となったのが、その知行地である。奉行職の役高は三〇〇〇石とされる。大

【表 1】大條家歴代の奉行・江戸留守居など就任期間

歴代当主		就任年	辞職年	備考
⑦宗直	尾張守			
⑧宗綱	左衛門			
⑨宗頼	兵庫、不求	慶安 2 年 (1649) 承応 2 年 (1653) 万治元年 (1658) 10 月	(1 か年勤務) 万治元年 (1658) 寛文 2 年 (1662) 正月	江戸留守居 江戸留守居
⑩宗快	監物、幽松	寛文 2 年 (1662) 正月 寛文 11 年 (1671) 4 月	寛文 6 年 (1666) 2 月 延宝 9 年 (1681) 7 月	
⑪宗道	監物	貞享 4 年 (1687) 3 月	元禄 6 年 (1693) 2 月	
⑫道頼	監物	享保 17 年 (1732) 6 月 宝暦 6 年 (1756) ⑪月	宝暦 3 年 (1753) 9 月 宝暦 12 年 (1762) 5 月 (没)	元文 2 年 (1737) 江戸家老
⑬篤恭	監物			
⑭道英	監物			
⑮道直	監物	天保 3 年 (1832) 正月	天保 14 年 (1843) 8 月 (隠居)	
⑯道治	長門・河内	安政 2 年 (1855) 7 月	元治元年 (1864) 9 月 (隠居)	
⑰道徳	孫三郎	元治元年 (1864) 8 月 慶応 4 年 (1868) 9 月	慶応 4 年 (1868) 4 月 明治 2 年 (1869) 4 月	

出典)『山元町誌』(1981 年)より作成。丸数字は閏月を示す。

條家は奉行職を務める家柄として知行高が増増され、江戸時代中頃までに四〇〇〇石に固定された。以下その変遷をみた

い。

まず戦国期、天文二年(一五五三)正月一七日に、六代宗家が伊達晴宗から伊達郡大条之郷(現福島県伊達市梁川町辺り)に知行を拝領していたことがわかる(資料翻刻編 2―①)。江戸時代に入り、慶長九年(一六〇四)八月二十八日、七代宗直が伊達政宗から気仙郡内(現岩手県気仙郡)に知行二〇〇貫余りを拝領した(資料翻刻編 2―②)。その後、元和二年(一六一六)九月、亘理郡坂本(現宮城県山元町)に知行替を命じられ、以後、大條家は「坂本要害」がある亘理郡坂本本郷を拠点に同郡高瀬村・真庭村(以上、現宮城県山元町)の三か村を中心として知行が増増される(資料翻刻編 1―②③参照)。その変遷を表 2 にまとめた。

寛永二十一年(一六四四)に二〇〇貫から二二〇貫に増加している。これは、仙台藩の検地の基準が一反Ⅱ三六〇歩から一反Ⅱ三〇〇歩に変更されたことによるもので、実質的な知行収入量が増えたわけではない。承応二年(一六五三)、二二〇貫から三〇〇貫に増加している(資料翻刻編 2―④⑤)。この加増地は、亘理郡の三か村だけでなく、志田郡下伊場野村(現宮城県大崎市)にも与えられた。また、寛文二年(一六六二

【表 2】大條家知行地の変遷

	郡名	村名	知行高				現在の行政区域
			I 寛永 21 年 (1644)	II 承応 2 年 (1653)	III 寛文 2 年 (1662)	IV 宝暦 12 年 (1762)	
陸奥国	亘理郡	坂本本郷	191 貫 789 文	241 貫 478 文	257 貫 946 文	(271 貫文)	山元町
		高瀬村	16 貫 351 文	16 貫 441 文	17 貫 842 文	(20 貫 934 文)	山元町
		真庭村	11 貫 860 文	11 貫 946 文	21 貫 43 文	(21 貫 43 文)	山元町
	志田郡	下伊場野村		30 貫 135 文	—	—	大崎市(旧松山町)
	刈田郡	円田村			19 貫 543 文	(19 貫 543 文)	蔵王町
	宮城郡	国分小泉村			4 貫 171 文	(4 貫 171 文)	仙台市
	桃生郡	深谷鹿俣村				12 貫文	石巻市(旧河南町)
	牡鹿郡	真野村				17 貫 710 文	石巻市
	遠田郡	北浦村				15 貫文	美里町(旧小牛田町)
	加美郡	四日市場村				5 貫 290 文	加美町(旧中新田町)
		計	220 貫文余	300 貫文	320 貫 545 文	400 貫文	

出典) I 寛永 21 年 8 月 14 日「知行目録」(大條家文書 4-21)、II 承応 2 年閏 6 月 21 日「知行目録」(大條家文書 1-29)、III 寛文 2 年 6 月 10 日「知行目録」(大條家文書 4-9)、IV 宝暦 12 年 12 月 29 日「(覚、大條監物殿御加増御割につき)」(大條家文書 5-66)

には刈田郡円田村(現宮城県蔵王町)、宮城郡国分小泉村(現宮城県仙台市)が新たに加増された(資料翻刻編 2—⑦)。このように大條家の知行地は、一円的ではなく、各地に分散されていた。なお、こうした知行形態は他の家臣たちにも共通する形態である。

2 大條家の役職と昇進過程

大條家の歴代当主は、先述のとおり奉行職就任者が多い。奉行職に就任するまでの履歴を確認すると仙台藩における一定の昇進ルートがみえてくる。江戸時代後期の当主の履歴をみてみよう。

一二代道頼

享保元年九月一五日 申次役

享保七年六月七日 若年寄、御馬申次兼役

享保九年九月一五日 評定奉行兼役

享保一七年六月二三日 奉行職

宝暦三年九月五日 奉行職を辞して、御近習申次

宝暦六年閏十一月二七日 奉行職

宝暦一二年五月三日 死去

一三代篤恭(道任)

宝暦一三年五月一日 申次、近習を兼ねる

安永二年九月 若年寄

天明九年八月 職を辞す

文化七年九月一日 死去

一四代道英

寛政六年五月一日 申次、近習を兼ねる

寛政一二年九月二八日 若年寄

享和二年一〇月二七日 評定役本役

文政八年七月二一日 死去

一五代道直

文政九年九月 若年寄

天保三年正月一日 奉行職

一六代道洽

年月日未詳 若年寄、評定奉行、御鷹申次兼役、大番頭

安政二年七月八日 奉行職

元治元年九月 隠居

明治二八年一〇月一日 死去

一七代道徳

安政五年正月 名代御奉公

安政六年八月 近習申次番頭兼役

万延元年七月二七日 徒頭小性頭兼役

同年九月二三日 小性組番頭

同年一二月一日 若年寄

元治元年八月朔日 奉行職（国老職）

大正一三年死去

これによれば、申次、近習↓若年寄（若老）↓奉行職と昇進していることがわかる。奉行職に就任する上で、申次役や若年寄（若老）という役職を経験することが重要であったといえる。こうした視点であらためて大條家文書目録をみると、「若老方日記」（資料翻刻編3—②、③）、「若老自分留写」（4—19）、「若老方自筆写」（3—29）と歴代当主が若老の役職内容を書き留めていることがわかる。その作成時期をみると、「若老自分留写」には「文政七年六月朔日御近習被仰付御留置者也」と書かれており、近習就任時であることがわかる。つまり近習就任とともに若老の役職を意識してその職務マニユアルの作成を開始していたといえる。若老の職務内容が仙台藩の年中行事と深く関わっていることは、【論考3】にて詳述している。奉行職を務めるための基礎的素養として年中行事を大過なく執り行うことが必要であった。また、ここで述べた奉行職に就任するまでの昇進ルートがわかるのは、大條家当主では一一代宗道からである（資料翻刻編3—①）。ここからは一七世紀後半頃から仙台藩の政治機構が官僚的性格を強めていったとみることもできよう。『宮城縣史』では、

おもに奉行職を輩出する一六家を「役職の家」として紹介している。こうした家に注目しながら、今後、仙台藩における政治機構の官僚化を具体的に検証していきたい。

二 本書収載資料について

1 家系・由緒

①家系図（年月日未詳）

本史料は卷子装されており、初代宗行から明治維新時の当主となる一七代道徳までの家系図である。江戸時代、大條家は分家を創出している。まず、七代宗直の弟である実頼を祖とし、元頼を始祖とした分家①、頼廣を始祖とした分家②である。さらに、頼廣家も分家をだしており、林頼を始祖とする（分家④）。そして、一二代道頼の弟頼恭を始祖とする分家③である。本系図の特徴は、大條家の女性たちの嫁ぎ先の家の当主も可能な限り収録していることであり、興味深い内容である。

②承伝記下 享保一八年（一七三三）

③密傳記卷第二（貞享二年（一六八五））

④密傳記卷第三（元禄七年（一六九四））

⑤密傳記卷第四（元禄三年（一六九〇））

これら四点の史料は、いずれも戦国期から江戸時代前期にかけての大條家の事跡をまとめたもので、「承伝」や「密伝」と史料名にあるように大條家の由緒に関わる内容となっている。仙台藩では寛永一三年（一六三六）の御牒蔵の火災により、検地帳をはじめとした藩政書類を焼失したため、家臣たちの家譜についてもあらためて記している。この四点の史料もこうした家譜編纂と関連があると思われる。大條家の本拠地である坂本に關係する物語やその開発の歴史など地誌的な側面もあわせもっており、江戸時代前期の大條家および坂本地域の歴史を知る上で貴重な史料である。

⑥御系図御判物御墨印御朱印御添目録入記

⑦入記 文化一三年（一八一六）

文化一二年（一八一四）

この二点の史料は、江戸時代後半、大條家が自身の家で保管する資料を整理、把握し、目録化していたことがわかる重要な資料である。いずれも作成年代以降の資料も追記されていることから、大條家が継続して、自身の家の歴史資料を管理していたことがわかる。⑥では、知行宛行状や知行目録、藩主より下賜された直筆の書などの管理のようすを書き留めており、藩主よりの拝領品を家宝として大切にしていたことがよくわかる。⑦では、主に役職や知行所支配などに関わって作成・

授受してきた文書類を整理していたようすがわかる。整理に際して数字（「壹」）、「五十」や、いろは（「い」）、「京」を付して、内容のまとまりごとに包紙などで整理している。当時の整理の状態のまま大條家文書は伝来されている。私たちが資料整理をおこなう前に、大條家においてきちんと資料整理がおこなわれていたことがわかる。仙台藩家臣のアーカイブズに関する研究を進める上でも貴重な情報を提供している。

2 知行地・坂本要害・在郷屋敷

①伊達晴宗判物 天文二二年（一五五三）

②伊達政宗黒印状 慶長九年（一六〇四）

この二点は、「晴宗様御判物・貞山様（伊達政宗御墨印）」「延享元年十一月入ル」と墨書された木箱に伝来した。両資料は、おそらくこの時に継ぎ合わされており（資料翻刻編1―⑥）、大條家にとって特別な意味を有していたことがわかる。大條家にとつては最初の知行拝領に関連する資料であり、家のアイデンティティに関わる大切なものであった。伊達晴宗の知行判物や伊達政宗の知行黒印状は多くは残存しないため貴重な史料といえる。木箱に収められた延享元年（一七四四）について、この年の正月に二代大條道頼が藩主に従って江戸に出府、六月には国元に戻るに際して重要な務めを果たし、

褒美を与えられたことがわかり、木箱の制作との関連が推察される。

③伊達政宗黒印状 元和二年（一六一六）

九代宗頼が、伊達政宗より岡崎と大蔵の地にあわせて七〇〇石余り拝領したことがわかる。大條家では、慶長九年に政宗より二〇〇〇石を拝領しており、どちらも黒印は同じ型である。本史料は折紙形式で作成されたものである。

④伊達忠宗黒印状 承応二年（一六五三）

⑤知行目録 承応二年（一六五三）

④は、二代藩主伊達忠宗より加増をうけた際の黒印状である。「忠宗君御黒印」と墨書された包紙に伝来した承応二年（一六五三）の知行宛行状である。なお、この八〇貫文の加増は、江戸留守居役を命じられたことにともなう拝領である。このときに加増されたのは、⑤の知行目録により亶理郡高瀬村に九〇文、真庭村に八六文、坂本本郷に四九貫文余り、志田郡下伊場野村に三〇貫文余りである。また、⑤からは下伊場野村の名請人の詳細がわかる。

⑥知行目録 寛永二年（一六四四）

この知行目録は、亶理郡三か村における個々の名請人がわかり、地域の歴史を知る上でも貴重な史料である。これにより一〇〇名余の大條家家臣団の石高階層についても知ること

ができる。また、寛永一九年に製作された「亙理郡坂本御家中図」（山元町歴史民俗資料館所蔵、口絵9）を参照すると、城下の屋敷配置と家臣名を比較できる。

⑦知行目録 寛文二年（一六六二）

⑧（達書、坂本郷ほか新田起目竿入につき）

寛文三年（一六七三）

⑨（覚、北浦村など四か村加増相済につき）

宝暦二年（一七六二）

右の史料三点は、大條家の知行地が宝暦二年（一七六二）に四〇〇〇石に固定されるまでの知行高の加増とその村がどこに与えられたのかを確認することができる。⑧のように大條家も他の藩士同様に新田開発よって知行高を増やすとともに、⑨のように役職勤務に対する褒賞によって知行高が加増されていたことに注目したい。

⑩奉窺候覚（坂本要害修補） 貞享五年（一六八八）

⑪亙理郡坂元私要害屋敷普請奉願候覚（御扣）

元禄二四年（一七〇一）

仙台藩の地方知行制の特徴は、要害という居館を拝領する制度があったことである。拝領した家臣は二〇家程で、要害を修復する際には、藩の許可を得なければならなかった。この二点の史料はいずれも大條家から藩に具体的な修復箇所を

示して要害修復を願ったものである。願書を提出する際には修復箇所が視覚的にわかるよう絵図面も合わせて提出した。貞享四年（一六八七）のものが残っており、【論考2】に写真掲載（絵図ホ・ヘ）されているので参照されたい。

⑫（達書、要害屋敷堀藻草取払いにつき）

貞享四年（一六八七）

⑬（返書、要害屋敷堀藻草取払いにつき）

貞享四年（一六八七）

要害の堀を管理維持する際にも藩に許可を得る必要があった。両史料は、貞享四年に大條家が堀の藻草を取り払うことを藩に願ったことに対する奉行衆の達書と、そのことに対する大條家からの返書である。藻草を取り払うことは藻巻（もまき、もくまき）と呼ばれ、毎年（あるいは二年に一回）夏に行われていた。これには領民を動員し、家臣が指揮して行っていた。地域における要害の象徴性を考える上でも藻巻は興味深い視点になりうるだろう。

⑭在郷屋鋪書出覚 元禄一四年（一七〇一）

⑮在郷屋鋪書出覚 宝暦三年（一七五三）

要害を中心にその周辺には家臣の屋敷（在郷屋敷）が配置された。仙台藩の要害とその周辺地域は、城下町のような景観をなしていた。右の二点の史料は、大條家の在郷屋敷の軒

数などを書き上げ、藩に提出することを目的として作成されたものである。要害のある坂本郷だけでなく、隣村の高瀬村にも在郷屋敷を配置していた。本史料から、在郷屋敷の軒数が増加していくすがわかり、坂本要害の周辺の在郷屋敷の拡大状況を知ることができる。

3 職務

①従不求三代勤功書上候扣貞享四年（一六八七）

本史料は、九代当主宗頼（不求）、一〇代宗快（幽松）、一一代宗道と、江戸時代前期に大條家が藩において果たした勤功を書き上げたものである。江戸での役割も具体的に書かれており興味深い。たとえば、天和二年（一六八二）一月に公儀火消を命じられ、火消頭を三〇日間務めたことを記している。大條家の当主は、先述のとおり申次役↓若老↓奉行職と昇進していくことが多い。こうしたルートは、一一代宗道からであることも本史料からわかる。

②若老方日記 安永七年（一七七八）

③若老方日記 安永七年（一七七九）

安永七年（一七七八）五月五日に、七代藩主伊達重村が参勤交代にて帰国して以降、翌年に江戸に出府するまでの一年間の藩主の動向にともなう若老の役割を記した日記である。

この内容については、【論考3】にて詳しくまとめているので参照されたい。その役割の大半は、仙台藩の年中行事に深く関わるものである。仙台藩政の日常が儀式化されており、細かな約束ごとのもと執り行われていたことが理解できる。

④御申次手扣（安政六年（一八五九））

本史料表紙には「道徳方」とあることから、一七代道徳が作成したものである。「若老方日記」とは異なり、行事の項目ごとに過去の先例を記録して儀式執行の作法をまとめたものである。その項目は、「年始披露并年中行事」「田村様御使者等之部」「日不定之部」「服付之部」「披露之部」「品披露之部」「肩書之部」「呼次之部」「御馳走役之部」「被御渡之部」「御間所之部」「御名代之部」「鶴御拝領之部」「上使之部」「同役申合」「供廻」「御申次遣太刀之部」の一七項目にわたる。これによれば、仙台藩の申次役は、江戸幕府の奏者番のような役割を果たしていたと考えられる。申次役がこのような覚書の作成を始めたのは元文六年（一七四一）とある（177頁）。

⑤年中行事（覚帳）（文政一〇年（一八二七））

正月元日から一年間の仙台藩の年中行事を書き上げたものである。近習の役割を書き留めたものが多く、大條家の当主が近習在任中にまとめたものかもしれない。一つ一つの行事に参加する際の服装、部屋的位置、所作などを記録したマニユ

アル的内容である。

⑥御下向御道中御記録書抜 安政五年（一八五七）

安政五年（一八五七）に一三代藩主伊達慶邦が江戸から国元に帰国する際の道中記録である。三月一日に江戸を出立し、同月二八日に仙台城に到着した。八泊九日の行程記録で、行程のなかで恒例として立ち寄る休憩場所や人物との挨拶のようすがわかる。奥州街道沿いの領主などからの献上品も書き上げられている。参勤交代が有していた多様な意味を見直すうえで興味深い資料である。

おわりに

以上のように、本書には、大條家歴代当主が藩の要職に就任してきたその背景やその職務内容を紹介する史料を中心に収載した。大條家文書の中には、こうした政治的史料だけでなく、文化的教養を理解するのに十分な歴史資料が多く伝来している。巻末に収載した文書目録を確認いただきたい。また、幕末期に西洋絵画、博物学的図譜などを描いた「客座録」という注目すべき史料が伝来しており、【論考4】にて紹介することにした。こうした文化的教養は本書で中心的に扱った役職を勤める上でも重要な意味をもっていたはずである。ま

た、幕末維新时期において大條家の当主は仙台藩伊達家の存続に重要な役割を果たしている。本書で紹介することができなかった内容や、残された課題も多い。豊かな内容をもつ大條家文書の分析を今後も進めていきたい。

【参考文献】

- ・『大條家坂元開邑三百五十年祭小志』（おもだか会々長・佐藤司馬、文星閣、一九六六年）
- ・山元町誌編纂委員会編『山元町誌』（宮城県亘理郡山元町、一九七一年）
- ・山元町誌編纂委員会編『山元町誌』第二卷（宮城県亘理郡山元町、一九八六年）
- ・野本禎司「仙台藩士の知行地支配―「要害」拝領・大條家文書から―」（荒武賢一朗・野本禎司・藤方博之編『みちのく歴史講座 古文書が語る東北の江戸時代』吉川弘文館、二〇二〇年）
- ・野本禎司「藻巻―要害の堀の維持管理」（『東北大学東北アジア研究センター上廣歴史資料学研究部門ニューズレター 史の杜』一〇号、二〇二一年）

【論考2】

亘理郡山元町内所在の大條家関連遺産について

―坂本城と城下の変遷を中心に―

瀧本 正志

一 はじめに

仙台領伊達家中で家格の高い「一家」の一員として家政を担う奉行職等を多数輩出してきた最上級家臣の大條家は、元和二年（一六一六）、仙台領主政宗から知行地に亘理郡坂本（現在の宮城県亘理郡山元町坂元）、居所に坂本城（後の坂本要害）を拝領以降、知行地及び石高に若干の変更があったものの、明治に至るまでの約二五〇年を一〇代の当主が一貫して治めてきた。

このため、本稿題の「亘理郡山元町内所在の大條家関連遺産について」は、仙台・伊達家関連遺産と称するべきなのだろうが、江戸時代終焉から一五〇年が過ぎた現在でも地元の古老等（旧家来末裔）はしばしば「大條の殿様の・・・」と口にし、領民と直接統治関係にあった大條家を身近な存在として無意識に受け入れていることから敢えて大條家としたも

のである。これは、江戸時代における徳川將軍家と家臣の諸侯との統治形態関係の相似ミニ版であり、仙台領伊達家の統治形態コピー版がもたらした産物と言えよう。

本稿では、江戸時代亘理郡坂本に所在する大條家関連歴史遺産の現況や居所の坂本城（坂本要害）に触れながら、特に知行地行政の中心であった坂本城下の変遷に注目して見ることにする。

なお、本稿では、大條家知行地としての「坂本」と「坂本本郷」から変化して現在に至る「坂元」との混乱を避けるため、特段の断りがない限り坂本と表記する。

二 坂本の位置と名の初出

1 坂本の位置（図1参照）

大條家の江戸時代における知行地の亘理郡坂本は、現在の宮城県南東隅部に位置し、福島県新地町に接する。西界は標高三〇〇m前後を呈し南北方向に走行する阿武隈高地の尾根筋とし、東方は太平洋に面する。南北の領界を阿武隈高地から太平洋側に向かって派生した丘陵が画す。坂本の地形は、谷地形が堆積作用により形成された小規模平野である。現在の街中心部から海浜まで二・五kmを測る。

2 地名としての「坂本」

①文献史料での初出 「坂本」の地名は、平安時代中期の承平年間（九三一―九三八）に編纂された『和妙類聚抄』の^{わみょうるいしゅう}日理郡四郷（坂本・菱沼・亘理・望多）の記載を初出とする。当時の坂本郷の中心地については、後述する発掘調査によって徐々に明らかになるうとしている。

②考古資料に残る最古の記載 平成二五年（二〇一三）から二七年（二〇一五）、坂本城から海側東方1kmの丘陵地に立地する「熊の柵遺跡」において、東日本大震災で壊滅的被害を受けた東日本旅客鉄道（JR東日本）常磐線の路線を現況から西方の阿武隈高地側への移設工事計画に伴う発掘調査が宮城県教育委員会によって実施された。この調査においては、全容解明には至らなかったものの、奈良時代から平安時代初め頃には遺跡の所在する丘陵上に郡の役所や施設が存在していたこと示す遺物が数多く出土し、古代律令期における東北地方史を解明するうえで注目された。

特に、土器や薄い板（木簡）に当時の役職・地名・年号などが墨書きされた出土品において、奈良時代後期から平安時代はじめころに生産されたと比定される須恵器の蓋や坏に「坂本」の名を看ることができ（図1）。

③名前の由来 「坂本」の地名は、『山元町誌』によれば、

街の東辺を南北に走行する幹線路「浜街道」が南から街へ入る直前にあり、「大神坂」と呼ばれる地形と位置に由来する。坂は全長五六〇m、標高は坂の下（麓）で四m、坂の頂上で二一m、比高差一七mを測る。

この坂の頂上近辺に先述した古代役所の存在を示す遺物が出土した「熊の柵遺跡」等が展開する。

④江戸時代絵図に見る坂本 本稿では検討資料として、以下の絵図を使用した（「絵図■」は本稿での略称。※の年代は筆者推定年代）。

絵図イ…山元町歴史民俗資料館蔵（口絵9）

「亘理郡坂本御家中図」寛永一九年（一六四二）

絵図ロ…山元町歴史民俗資料館蔵

「亘理郡坂本御家中図」※承応年間頃（一六五二）

一六五五）

絵図ハ…仙台市博物館蔵

「亘理郡坂本要害屋敷絵図」※寛文年間頃（一六六一）

一六七三）

絵図ニ…涌谷町教育委員会

「仙台藩領図」安永一二年（一六七二）～延宝二年

（一六七四）

絵図ホ…宮城県図書館蔵 県文化財指定

「亙理郡坂本要害屋敷惣絵図」貞享四年（一六八七）

絵図へ…山元町歴史民俗資料館蔵

「亙理郡坂本要害屋敷惣絵図控」貞享四年（一六八七）

絵図ト…山元町歴史民俗資料館蔵

「奉窺候覚」貞享四年（一六八七）（複製）

絵図チ…佐藤司馬編『大條家坂元開邑三百五十年祭小志』

（一九六六）

「明治維新時蕨首城平面図並家中屋敷」昭和八年

（一九三三）

これらの中で江戸時代に作成された絵図（残欠の為に全容が不明な絵図口を除外）には「坂本」と記されており、いずれも公的性格を有する絵図である。

三 大條家関連遺産

本稿では大條家関連遺産の一部である居城の坂本城と城下町や大條家御廟所のほか、磯浜唐船番所と検断について触れるとともに、昭和七年（一九三二）に仙台城下から坂本城三ノ丸跡に移設された「大條家ゆかりの茶室」についても紹介する。

1 坂本城【坂本要害・蕨首城】 さかもとようがい みのかくびじょう

①城の名称 坂本城は、大條家第八代当主の長三郎（後に左衛門）宗綱が主君で仙台領主の政宗より元和二年

（一六一六）に拝領した居城で、別名に坂本要害・蕨首城がある。

天正一七年（一五八九）の伊達氏と相馬氏との戦闘記録を記した史料において、坂本城が登場することから、築城時からの名称（領地名＋城）として判断される。

絵図イは、徳川幕府から全国の諸侯に「一国一城令」が發布された慶長二〇年（一六一五）から二七年後の寛永一九年（一六四二）、大條家第九代当主兵庫宗頼の家来の早坂内記が城の縄張や家中屋敷配置を記した城絵図で、「坂本城本丸」と記されている。この絵図が藩への届控なのか、家中での記録用かは定かでないが、大條家中最後の家老職（用人）を務めた末裔が所蔵していたことから、代々の家老職（用人）が引き継いできた公的性質を有する絵図であり、「二国一城令」が発布した後も坂本城として名前が認識・使用されていたことを示すものである。

名称が坂本城から坂本要害へ公的に変更された時期は不明だが、仙台藩内の要害が「城郭に類似する施設」として幕府に警戒・認識されていた環境下において、幕府への提出書図

を取りまとめる仙台藩庁はもちろん、城絵図を作成する各要害拝領者は現状報告や修繕願書における名称などにも細部にわたって注意を払っていたものと想像される。

貞享四年（一六八七）に作成された絵図への裏面には「控亘理郡坂本要害屋敷惣絵図」と記されており、この時期には公的に坂本要害の名が使用されていたことを示す。

葦首城名を江戸期の文書で見出すことはできない。葦首城の名の出現は、本丸跡に立地し、「大正九年（一九二〇）」の銘文を有する石碑に「城が葦首城山に築かれたことを由来とする。」旨が刻まれていることから、明治期以降から用いられたと推測される。昭和八年（一九三三）作成の絵図や後に大條家一八代当主の伊達宗康氏が編纂、昭和一六年（一九四一）刊行の「大條家五百年祭小志」においても看ることができるが、その出典元は大正九年（一九二〇）建立の碑文に求められる可能性が高い。

「坂本城」と「坂本要害」の名称が江戸時代における公式名称として使用されていたなか、「葦首城」が通称としてどのような形と範囲で用いられていたのかは不明であるが、明治維新以降に出現し、正式名と誤認されたまま現在に至った可能性が極めて高い。

家来や領民が城（要害）もしくは居所を指すとき、現在の

ような固有名詞的使用ではなく、日常的には「御館（おやかた）」もしくは「御城（おしろ）」と呼称していた状況が十分に推測される。さらに、公に正式城名を使用する機会が無くなったことも近代以降に城名「葦首城」を誕生させた要因と推定される。

②坂本城の誕生と城主 坂本城は、元龜三年（一五七二）に亘理氏家臣の坂本俊久により築城された。その後、天正十九年（一五九一）、亘理元宗の領地替えに伴い坂本氏も涌谷へ移る。その後、政宗の命により浜尾行奏が城改修を行ったとされている。改修後の城主は後藤信康、大町元頼、桜田元親、黒木宗俊、津田景康と変遷し、元和二年（一六一六）の大條宗綱の入城に至る。

③城の立地と縄張り（写真1参照） 坂本城は阿武隈高地から東方の海側へ派生する舌状丘陵の先端頂部に立地し、頂部標高二〇m、裾部標高五mを測る。地勢的には、沿岸側の幹線路である浜街道と内陸の伊具郡からの街道が交わる交通の要所であるとともに、江戸時代仙台領に接する相馬領との国境を固める第二次防衛線の拠点たる軍事的価値の高い要所であった。

城が立地する丘陵先端部の南から東側は阿武隈高地からの小河川と谷地（沼地）が占め、西方から北側は同高地からの

坂本川が位置し、城はこれらの自然地形を取り入れた総構えとなっている。

築城時の縄張りは不明であるが、江戸時代においては基本的に門周辺の虎口を除いては高石垣を有しない土盛り（土塁）や堀で構成された城郭であったことを貞享四年（二六八七）作成の絵図ホ・ヘで明らかことから、同様な縄張りであったと推定される。

当該の城絵図として最も古い寛永一九年（一六四三）作成の絵図イでは、本丸、二ノ丸、三ノ丸の三曲輪で構成し、全長1kmを超える堀を曲輪外周に設けるとともに、二ノ丸と三ノ丸との間にも内堀を設けている。

城外には計四本の堀川を設けているが、外側に位置する二本の堀川は、内側の堀川と方向や形態が違っていることから、外側堀川で挟まれた範囲を家中屋敷として城の惣構とした段階が存在していたと考えられる。その時期は築城時もしくはそれから時間が多く経過していないときと思われる。

貞享四年（一六八七）作成の絵図ホ・ヘは、他者が坂本城を立体として容易に理解できる程、一般的に城と呼ばれる城郭の縄張り（防衛施設）に限定して規模数値が記入されている。この表示は、城郭平面図に堀の水深や堤の水面からの高さ、さらには曲輪の土塁高を堀水面からと曲輪側からの両方

の数値などを記入した、いわゆる三次元的図面と言えるもので、城の極秘事項を丸裸にしたものと言える。

ちなみに、堀の水深は曲輪に接する堀で四尺（一・二m）、他所で三尺（〇・九m）、外堀内を画す堤高は水面から七尺（八尺（二・一〜二・四m）である。土塁の堀水面からの高さは、三ノ丸で一丈（三m）、二ノ丸では一丈三尺（三・九m）〜一丈七尺（五・一m）が多く、本丸南の腰曲輪では最大の七間（二・七m）が記されている。曲輪間においては、本丸南東隅での土塁の高さは腰曲輪から五間六尺（一〇・九m）である。なお、本図ホ・ヘの城下には惣構における重要な防御施設の堀川や土塁が記載されているが、これらに関する規模の記載は認められない。

最終的な坂本城の形態は、坂元川およびその支流や谷地（沼地）を外堀とし、内側に土塁や河川・堀で構成された城下町を取り込んだ惣構えとなっている。

城の西方からの攻撃に対しては、坂元川を外側に配し、その内側には家中屋敷地西辺に沿って南北方向に直線的な堀と土塁を設置している。浜街道が位置する海側からの攻撃に対応しても同様な施設を設けて対応している。

坂本城の特色のひとつに本丸の西側に二重の外堀の「空堀」と称される堀切を設けていることである。本丸の背後に連な

る丘陵尾根を断面形がV字形の薬研状に縦断して掘削したもので、敵の背後からの攻撃に対応した施設である。外側空堀（堀切）の規模は、貞享四年（一六八七）段階で長寸七五間（二三・五m）・深寸六間（二〇・九m）であったことが同年作成の絵図ホ・ヘ・トから判明している。現在の外側空堀は、維新後の開削で形状の一部に変容が認められるものの、幅二一m・深さ一一m・長さ九〇mを超える東北有数の威容を現在に至っても誇っている。

④城の改変 坂本城の縄張りには、新旧の要素が混在していることを看ることができ。築城当初の姿は、先述した堀切（空堀）を含む本丸と二ノ丸及び谷地（沼地）などの自然地形を活用した外堀だけであったと想定され、特に不整形な外堀や堀切（空堀）に古い要素を看ることができ。

これらに対して、三ノ丸は築城後の改修時に追加された可能性が高く、後述する城下町を含む惣構の構想にも合致することから、その時期を断定することはできないものの、天正一九年（一五九一）の浜尾行泰による城改修期に求めるのが妥当と考えられる。その理由としては相馬氏との戦いに備えた最前線拠点である城砦・駒ヶ嶺城へのバックアップ機能や第二次防衛拠点機能の強化が求められた時代背景が想定される。

⑤大手門 城内に残存する唯一の藩政時代の建物である（口絵11）。三ノ丸に位置するが、寛永一九年（一六四二）段階では設置されておらず、承応年間（一六五二～一六五五）頃に作成されたと推定される絵図口に虎口施設とセットで初めて「門」を記入されて登場する。寛文年間（一六六一～一六七三）頃に作成された絵図ハでは一階建の門が絵で描かれ、貞享四年（一六八七）の絵図ヘでは、現状と異なる構造の入母屋屋根建物が、別途貼紙絵で示されている。現存の大手門は、礎石建ての戸口両脇間に連子戸を配した三間一戸の木造平屋建で、桁行約五m（柱間正面三間・背面一間）、梁行約二・四m（柱間二間）を測る。切妻の屋根は、当初の茅葺を昭和以降にトタン葺に改修している。

現在の門の建築年代は、江戸時代と称されているが、正確な年代は不明で、部材加工痕跡や写真資料から江戸時代末～明治時代初期と考えられる。

平成一四年（二〇〇二）には坂本城の歴史や建築的に価値が高い建物として山元町の文化財に指定されている。

⑥現在の城跡 明治維新後に全国の城の大半が廃棄されていく中、「城郭に類似する施設」の坂本城も例外ではなかった。現在の本丸跡には坂元神社、二ノ丸には坂元小学校が建てられているが、総じて地形的（縄張的）にも往時の姿を残して

いると言える。

曲輪の縁に巡らした土塁や堤の大半は開削されて堀の埋め立てに使われて消失したが、三ノ丸大手門の両脇、二ノ丸登城口西側、外側空堀の本丸側には土塁の一部が残存して江戸時代の雄姿を見ることができる。

城堀は、先述の通りに埋められて田や一部は宅地化したものの、平面的形状に開削が加えられなかったことから、今でも地形図に痕跡を明確に残し、田植え後の姿は往時と変わらない。

また、小規模ではあるものの、堀に水を湛えた往時の姿は三ノ丸大手門を潜った左手先で大條家ゆかりの茶室と共に見ることができる。

⑦城下町の変遷 大條家が知行替えで元和二年（一六一六）に坂本を拝領してから明治維新に至る間、城下町がどのように変容していったかを絵図から見ると以下のようにまとめられる。

（i）家中屋敷の範囲拡大と街路整備

元和二年（一六一六）に大條家が坂本に入部した当時の状況を知る絵図は無く、知行替えから二六年後の状況から変化を見てみる。

絵図イ（一六四二年）では、城の周囲に家中屋敷エリア、

浜街道に沿って町屋敷のエリアと区域が明確に区分されている。

家中屋敷が城の北側に展開し、城下の街路には敵が攻め込んできた際に対応した「鍵の手」「食い違い」「丁字路」「袋小路」と呼ばれる防衛の工夫がなされている。城下の浜街道から城へ通じる街路も一本だけで、徳川幕府成立から間もない硝煙の匂いを微かに感じる時代の姿と当時の戦への緊張感を垣間見ることができる（写真2、3）。絵図に線で矩形に区画表示した城内及び城下の家中屋敷地には拝領された家来名が記され、一部の家来には名前の他に「馬上」と表記されている。この「馬上」は戦時の装備と身分、すなわち家格を示すものと考えられ、記された屋敷の配置は、城内の二ノ丸と三ノ丸、城外では浜街道から三ノ丸へ通じる街路に面したエリアに集中している。この要所への配置は、所在地によって家格を暗に示すとともに軍事的運用面や登城に際する利便性を備えたものであろう。すなわち、非常時における即応対応を考慮したものであろう。

三ノ丸大手門を東へ出た街路端区には「風呂屋敷」が配され、当時の生活の一端を知ることができる。町屋敷は絵図で文字表示されていないが、本絵図以降の時代に描かれた絵図との関係から、浜街道に面して矩形に線引きした区画を並べ

た個所と断定されよう。

絵図口（※一六五二〜一六五五頃）は三ノ丸とその周辺だけの残欠であるが、本来は図（イ…一六四二年）と同じ目的を持って作成され、規格も同じであった継紙の規格から推定される。作成時期は特定できないものの、屋敷拝領者を前述の絵図イと比較すると、一部に屋敷地替えもしくは新規抱えに伴うものと考えられる違いが認められるものの大きく変わっていないことから、前絵図から四半世紀以内に作成されたものと推定される。

この絵図イの段階では家中屋敷の新規造成が認められる。これまで空地だった三ノ丸北側堀向の敷地四分の三ほどが家来四人の馬上侍屋敷地に変わる。街路については、新たな屋敷地と堀との間に新街路を設けている。他の家中屋敷の状況については絵図の大半が欠失して全容を知ることができないが、絵図の記載様式の変化として、少なくとも三ノ丸周辺の本図に限定されるが、屋敷区画には前絵図イに認められなかった「歩侍」と「足軽」が屋敷拝領者名と共に新たに記され、引き続き「馬上」や「馬上屋敷」も記されている。本来は戦時の身分を示す「馬上」、「歩侍」、「足軽」がすべての屋敷地に記されていることから、戦時における備えの意識の高さが認められる一方、平時の身分（家格）としても認識されていた

と考えられるが、家格の違いによる敷地区分（エリア別の住み分け）は認められずに混在している。以上から、家中屋敷配置における統制規範的なもの（身分に基づく区分）が厳格に適用されていなかったと思われる。

絵図ハ（※一六六一〜一六七三頃）では家中屋敷の範囲拡大とそれに伴う街路の新設が認められる。家来の住居区分に大きな変化があり、身分（家格）別に住居エリアが区分されている。町屋との境界は以前とは一部に変化が認められる。この絵図には屋敷拝領者の名前など個々の情報記載は無く、区画に「侍屋敷」、「足軽屋敷」、「蔵屋敷」、「寺屋敷」、「町屋」だけの記載である。

先の絵図口で侍屋敷に変わった空地の残地も全て侍屋敷に変わり、既存空地の家中屋敷への利用が進められている。さらに、それまで田であった城の東側、家中屋敷エリアと町屋敷エリアとの間の土地空間が新たに侍屋敷に転用されている。この屋敷地拡大に伴い、新たな街路が浜街道から直線的に城へと整備されたが、浜街道から城への幹線路は旧街路のままである。

以前までの絵図には家格に応じた厳格な住居区分は認められなかったが、この絵図では大きく変容する。絵図の住居エリアは足軽屋敷と侍屋敷とに明確に区分され、足軽屋敷は城

の西側四区画だけとなる。各区画における個々の情報は不明であるが、侍屋敷と記した範囲が拡大している事実は、既存の個々の屋敷が広くなったのではなく、大條家が新規に召抱えた家来の階層の多数が歩侍以上であったことを示していると理解される。この家格に基づく家来の屋敷配置の再編が行われたのは、幕藩社会体制の安定確立と浸透化を背景とした新たな家中における階層社会の定着を反映したものである。

絵図ホ・ヘ（一六八七）では、更に家中屋敷（下中屋舗と表記）の拡大と街路整備が進められ、町屋（町屋舗と表記）との境界は以前とは一部に変化が認められる。先の絵図において田を家中屋敷（絵図の記載は侍屋敷）に転用した城の東側、家中屋敷エリアと町屋エリアとの間に残る田も家中屋敷に転用されている。城の西側においても、以前は寺屋敷（徳本寺所在地）であったところも家中屋敷に変わり、周辺も家中屋敷に転用され、変化している。

この絵図では、家来の屋敷を全て下中屋舗で表記しているため、家格別に屋敷エリアが設定されていたかは不明であるが、更に社会体制の確立が進んでいることから、家格の違いによる家中の屋敷エリアは身分別に規定されていたと推測される。

街路は、家中屋敷範囲の拡大に伴い、以前に新設された街路が城下の西端まで延長し、浜街道が坂本城下に入る手前から城下につながる新街路を設けている。また、田を埋めて家中屋敷とした区画においても、区画中央を南北に縦断する新街路を設けている。これら街路の整備によって城下の交通の便は格段に向上したと思われる。とは言え、新規に設けた街路の途中に「鍵の手」や「食い違い」を設け、更には土塁と組み合わせた虎口的な防御施設を設けている点は注目される。

絵図チ（一九三三）は明治維新時における坂本城と家中屋敷の配置を記したもので、基本的町割りには絵図ホ・ヘ（一六八七）から大きな変化はない。さらに、この状況は道の拡幅等の小規模な改変は認められるものの、現在の地形も同様であることから、現在の坂元地区の町割りは貞享四年から三三〇年以上過ぎた今も変化することなく継続していると言える。

（ii）寺屋敷の再配置【※筆者の推定年代】

絵図イ（一六四二年）には城の西方に金蔵寺、さらにその西方に徳本寺の名と寺域が記されている。

曹洞宗光明山徳本寺（写真4）は、同寺のホームページの沿革によると、嘉吉元年（一四四一）に伊達家から分家した

地頭大條孫三郎宗行が岩代国伊達郡大枝村（福島県伊達市梁川町）に建立、元和二年（一六一六）大條家の移封に伴い山元町坂本白小路に移転建立、貞享二年（一六八五）と安永五年（一七七六）に火災消失し、その後到现在地へ移るとある。

絵図ハ（※一六六一〜一六七三）には寺名が記載されていないが、前の絵図で寺名が書かれていた場所には二か所とも「寺屋敷」と書き込まれていることから、引き続き同地に所在していたと考えられる。

絵図ホ・ヘ（一六八七）では、寺名は記載されていないものの、金蔵寺は同じ場所に「寺屋輔」とあるが、以前に徳本寺が所在していた場所は「家中屋敷」に変わり、新たに城の南東方向の丘陵に「寺屋輔」と記されている。この場所は徳本寺の現所在地であることから、現在地に徳本寺を再建した変遷は、寺の沿革にあるように貞享二年（一六八五）の火災後に開始され、貞享四年（一六八七）に再建が完了したかは不明であるものの移転再建場所が確定していたことは明らかである。

徳本寺の再建が同じ地所で行われずに現在地への移設再建となったのは、一見すると家中屋敷地の確保を優先したように思われるが、徳本寺を移設再建し、その跡を新規家来屋敷に変えることにより、これまでやや防御機能面で手薄であつ

た城の西から西南部と南東部の防御機能の強化を図る狙いも存在していたと思われる。

特に徳本寺は、新たな場所が城と浜街道の中間に位置する丘陵上で、寺域も本丸程度の広さを呈していることから、坂本城の出丸的性格を有していたと判断される。

大條家御廟所（写真5、口絵12）は、坂本城と同じ丘陵の背後の標高二五mを測る尾根平坦地に位置し、城の本丸からは南へ二〇〇mほどの距離にある。

貞享四年（一六八七）に作成された絵図ホ・ヘには廟所と参道が記されている。矩形を呈する瓦塀と塀の東面中央に門を配した廟所内には、靈廟と思われる二棟の堂宇が南北に並び、廟所と書き込まれている。二棟とも二間四方の建物に縁を巡らし、瓦葺方形（宝形）屋根の頂部に宝珠露盤が描かれている。

現在の廟所は、絵図に記された靈廟建物や門を含む瓦塀は残存しておらず、大條家一八代当主伊達宗康氏が昭和一六年（一九四一）の大條家五百年祭の際に整備したままで、北側建物の伊達家八代当主伊達宗遠靈廟跡に建立した大條家先祖慰靈碑や南側建物の初代宗行靈廟跡を囲むように他所から移設した大條家初代宗行から一五代道直までの当主や縁者の墓石など三八基が並んでいる。

廟所内には建物基壇や礎石、塀基壇が残存し、特に二棟の堂宇で南側に位置する初代宗行靈廟跡は良好な状態で、靈廟建物の復元が可能である。

初代宗行靈廟跡は、東西二・一m・南北三・〇mを測る矩形を呈した廟所の南半部中央に位置する。建物は、残存する礎石から方二間三・七三mで、方五・六四mの縁が巡り、東面側に扉や階段を設けて正面としていたと判断される。屋根は方形（宝形）屋根で、東面側に向拝柱の束石が認められることから、東面屋根だけ向拝付の流れ向拝であったと推測される。建物の基壇は自然石を方形に配し、方六・六mを測る。

なお、母屋柱、縁柱、向拝柱で柱列の隅（端）及び中間に位置する自然石を用いた礎石及び束石の上面には、直径四・五cm・深さ三cmを測る円穴が彫られている。これは、柱底に設けた出ホゾと組み合って建物基礎の構造強度を高めるための工法で、江戸時代における建築技術の水準を示している。

この復元された建物と貞享四年（一六八七）作成の絵図ホ・へに記された建物と比べてみると、母屋や縁の構造を同じくするものの、扉、階段、屋根の形状などについては差異が認められる。

北側建物の伊達宗遠靈廟については、建物規模などを示す礎石などの残存状況が不良で、復元することが困難である。

残存する方六・九mを測る基壇が創建時のものと仮定した場合、初代宗行靈廟とほぼ同規模の建物であったと推定される。現在の御廟所は、平成一六年（二〇〇四）に記念物として山元町文化財に指定されている。

（iii）磯唐船番所跡（写真6）

磯唐船番所は、正保三年（一六四六）、江戸幕府の命により仙台藩が藩内に設置した五ヶ所の唐船番所（外国船監視所）のひとつで、坂本城から南東へ三・八km離れた太平洋に面した標高二〇mの磯崎山頂部に設置された。

安永一一年（一六七一）～延宝二年（一六七四）に作成された絵図二「仙台藩領図」には、「磯」と記された集落の南隣に所在が書き込まれている。

磯唐船番所に係る数少ない事件に元文四年（一七三九）の黒船騒動がある。ロシアの探検船三艘が磯浜沖を通過したことから、唐船番所が所在する大條家中はもとより、仙台藩内に緊張が走った。それら騒動の動静を記録した「唐船番所日記」は山元町の文化財指定を受けて、山元町歴史民俗資料館に保管されている。

現在は山元町文化財として指定され、同地に遺跡標柱や石碑が建つものの、いわゆる監視台や監視員詰所は残っていない。

(iv) 検断

大條家坂本領に南接して亙理伊達領(現在の福島県新地町)の飛地が宇多郡に相馬藩と接して所在していた。この、亙理伊達の宇多郡領の境近く、仙台へ通ずる旧街道の浜街道の南側には、検断が上平に設けられ(写真7)、足輕屋敷が配置されていた。現在でも浜街道脇には奥行きのある矩形の敷地が整然と並び、当時の面影を残している。

(v) 大條家ゆかりの茶室(写真8)

坂本城三ノ丸跡に立地する茶室は、昭和七年(一九三二)に仙台城下の支倉にある大條家屋敷から移築した建物である。

この建物は、東西三間半、南北四間の木造平屋建の茶室で、三部屋(四畳半茶室・次の間・十畳間)からなり、天保三年(一八三二)に仙台藩主から拝領して仙台城下の川内に所在する大條家屋敷に建築したものとされていた。建築後の明治二年(一八八八)に仙台支倉へ移築し、更に昭和七年(一九三二)に坂元の屋敷へ移築されて現在に至る。

仙台藩の上級武士階層における茶の湯文化を示す県内に残る唯一の江戸時代の建物として学術的史料価値が高いことから平成一四年(二〇〇二)に山元町の文化財に指定された。

茶室はこれまでひとつの建築物と思われていたが、平成

三〇年度(二〇一八)の建物の部材調査により、建築年代が異なる二棟の建築物を一棟に合体させた建築物であることが小屋組の状況から明らかとなった。

報告書によれば、四畳半間と次の間から成る建築物は木材加工痕跡(手斧仕上げ)などから建築年代が江戸時代以前に比定され、他方の十畳間建築物の建築時期は木材加工痕跡(台鉋仕上げ)などから江戸時代に遡る可能性は低く比較的新しいとされている。

天保三年に大條家屋敷に建築された際の茶室建物の規模や形状を知り得る史料を持たないが、明治四五年(一九一二)に建物規模を記載した建物配置略図には現在と同規模の建物が茶室と明記されていることから、明治四五年には既に現在と同じ様相を呈していたものと判断される。

また、四畳半茶室と次の間からなる建築物は、建築年代から拝領の茶室と判断することに問題はないが、小屋組の母屋材の残存状況が合体前の茶室建築物においても別の部屋が連なっていたことを示していることから、茶室拝領の後に改築が行われた可能性が極めて高い。

四 まとめ

本稿では江戸時代のほぼ全てにわたり亙理郡坂本を知行地とする大條家の関連遺産を見てきた。

知行地支配の中心である坂本城（坂本要害）の特色は、築城後に当初の縄張りを変えることなく次世代の戦闘方法に適合した機能を有した城に改変した、城郭構造において新旧の形態が混在する点にある。これは、我が国の地域における城郭の変遷を知るうえで極めて価値が高いと言える。

次に注目するのが家中屋敷の範囲拡大と街路整備である町割りの変遷である。

前述したとおり、領主の大條家は、絵図で確認された寛永一十九年（一六四二）から貞享四年（一六八七）に至る少なくとも四五五年間にわたり、家中屋敷の範囲拡大や街路整備を中心とした城下の町割りをダイナミックに行っている。その直接的要因は、拝領した知行高の増加に伴う家臣の増加に対応したものであろう。ちなみに、知行の大幅な増加は承応二年（一六五三）八〇貫（八〇〇石）、寛文二年（一六六二）二〇貫五四五文（二〇五石）、宝暦二年（一七六二）八〇貫（八〇〇石）となっている。

家中屋敷の拡大整備を含む城下の町割整備は貞享四年には

最終形態に達したが、その整備過程においては常に軍事的機能の強化を意識したものであった。この城や家臣屋敷をはじめ、町屋敷、寺屋敷、山川や沼や田など全てを取り込んだ惣構は、大條家が坂本に赴任してから熱望していた都市城塞坂本城の完成を物語っている。

この今で言うところの大條家版市街地再整備は、貞享四年以降は大きな変化は認められないまま明治維新を迎え、現在に至っている。当時の社会体制であったからこそ成したもののと言えるが、大條家が長年にわたり地域に果たした役割は大きい。

（付記）

本稿の作成にあたり、伊達宗行氏、舛岡和夫氏、野本禎司氏（東北大学）、佐藤大介氏（東北大学）、籠橋俊光氏（東北大学）、相模誓雄氏（仙台高等専門学校）、永井康雄氏（山形大学）にご教示を頂いた。

また、小職が東日本大震災復興支援の文化財保護を任務として着任した山元町役場においては、菊池卓郎教育長をはじめとする山元町教育委員会職員の皆様にご配慮を頂いた。

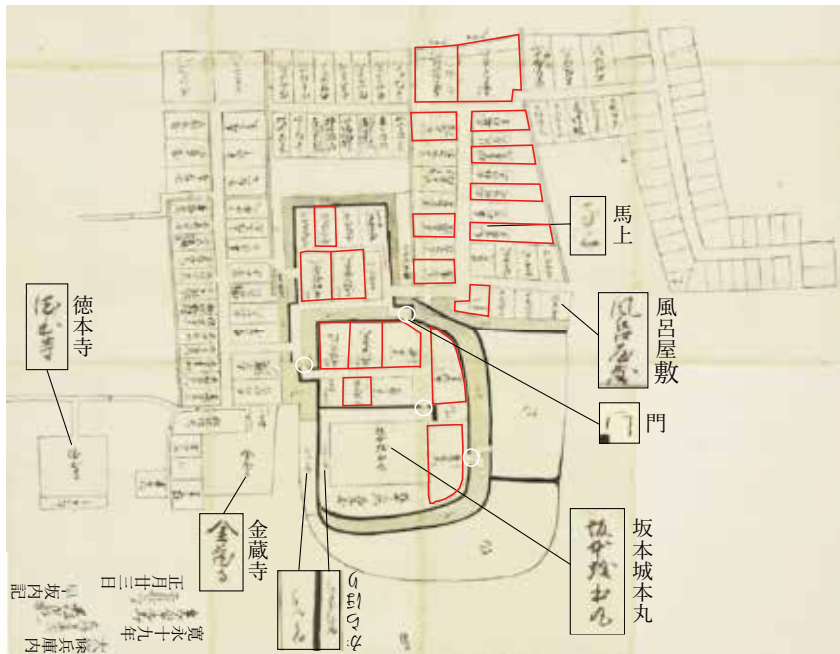
【参考文献】

- ・伊藤瀬平「蓑首城址の碑」(一九二〇年)
- ・伊達宗康編『大條家五百年祭小志』(一九四一年)
- ・磯部国芳「東北地方における茶室」(東北大学、一九五四年)
- ・佐藤司馬編『大條家坂元開邑三百五十年祭小志』(おもだか会、一九六六年)
- ・山元町誌編纂委員会編『山元町誌』(宮城県亘理郡山元町、一九七一年)
- ・田邊希文編『復刻版仙台叢書封内風土記』第二卷(宝文堂出版一九七五年)
- ・坪井利弘「古建築の瓦屋根」(理工学舎、一九八一年)
- ・志間泰治「5坂本要害」(『日本城郭史研究叢書第二卷「仙台城と仙台領の城・要害」』名著出版一九八二年)
- ・山元町誌編纂委員会編『山元町誌』第二卷(宮城県亘理郡山元町、一九八六年)
- ・伊達宗行『翠雨山房夜話(上) 支倉一〇〇年記念』(支倉百年記念会、一九八八年)
- ・舩岡和夫「内山家茶室実測報告書」(山元町教育委員会、一九九四年)
- ・伊達忠敏「蓑首城縁起」(『大條流伊達家記録』一九八八年)
- ・舩岡和夫「旧伊達家茶室(旧内山家茶室)の補充調査と今後のすすめ方に関する若干の報告」(山元町教育委員会、二〇一〇年)
- ・熊谷篤「要害という名の城―岩沼要害と仙台藩をみる―」(『岩沼市民図書館ふるさと展示室配布資料』岩沼市教育委員会、二〇一一年)
- ・初鹿野博之他『熊の柵遺跡ほか―常磐線復旧関連遺跡発掘調査報告書―』(宮城県文化財調査報告書第二四三集、宮城県教育委員会・東日本旅客鉄道株式会社、二〇一六年)
- ・野本禎司「仙台藩の知行地支配―「要害」拝領・大條家文書から―」(『二〇一九年度東北アジア研究センター秋季古文書歴史講座 第一回 配布資料』東北大学東北アジア研究センター、二〇一九年)
- ・野本禎司「仙台藩の知行地支配―「要害」拝領・大條家文書から―」(『みちのく歴史講座 古文書が語る東北の江戸時代』吉川弘文館、二〇二〇年)
- ・高橋直子「山元町指定文化財茶室部材調査報告書」(山元町教育委員会、二〇一九年)

山元町地形図

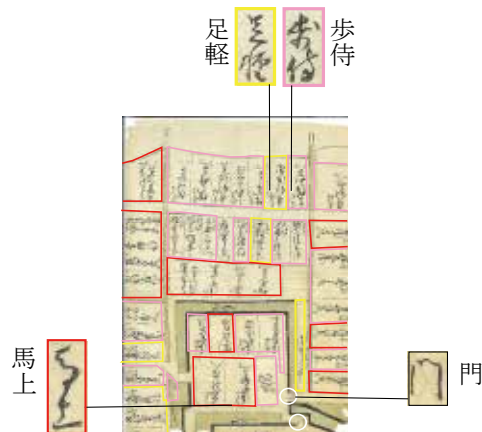


【絵図イ】



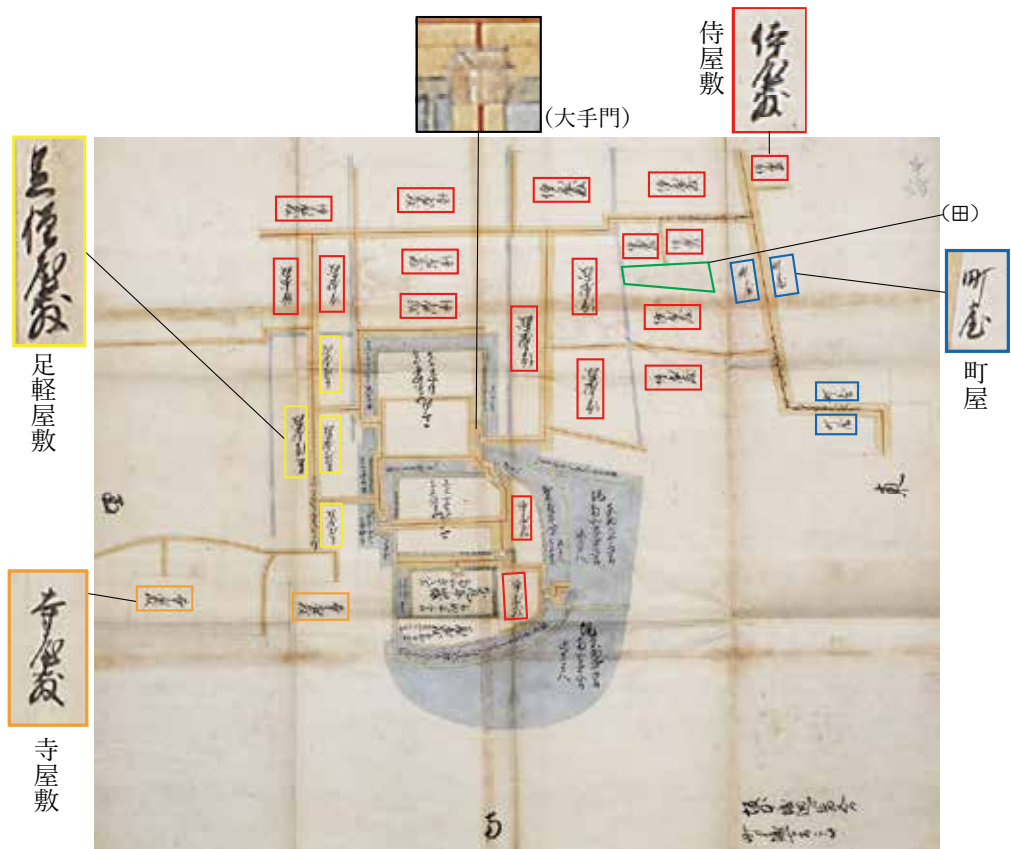
亙理郡坂本御家中図【寛永19年(1642)】〔山元町歴史民俗資料館蔵〕【絵図:上位北方向】
(※資料絵図に加筆改変) □:「馬上」記載屋敷

【絵図ロ】



亙理郡坂本御家中図【承応年間頃(1652~1655)】〔山元町歴史民俗資料館蔵〕【絵図:上位北方向】
※資料絵図に加筆改変 □:「馬上」屋敷 □:「歩侍」屋敷 □:「足輕」屋敷

【絵図八】



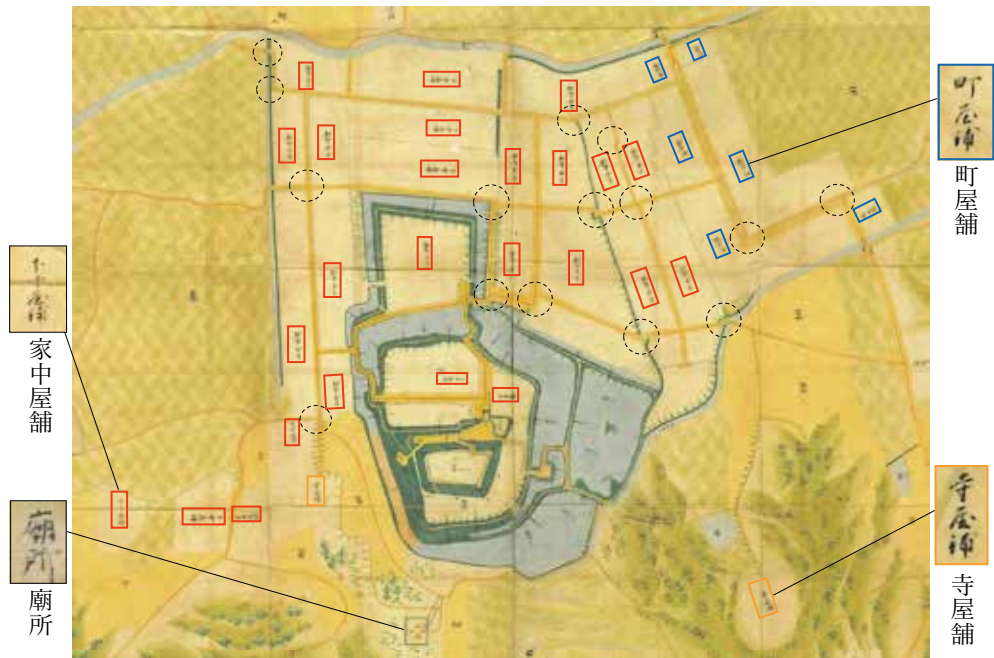
亶理郡坂本城屋敷図【推定寛文年間頃（1661～1673）】〔仙台市博物館蔵〕【絵図：上位北方向】
※資料絵図に加筆改変 □：侍屋敷 □：足輕屋敷 □：町屋 □：寺屋敷 □：田

【絵図二】

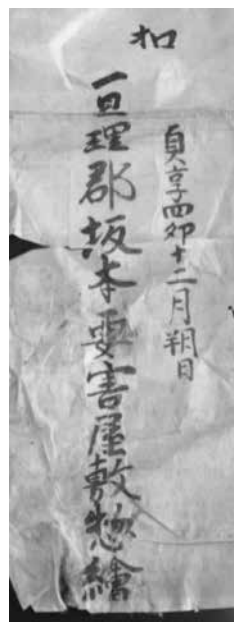


仙台藩領図（部分）【安永11年～延宝2年（1671～1674）】
〔涌谷町教育委員会〕

【絵図ホ、へ】

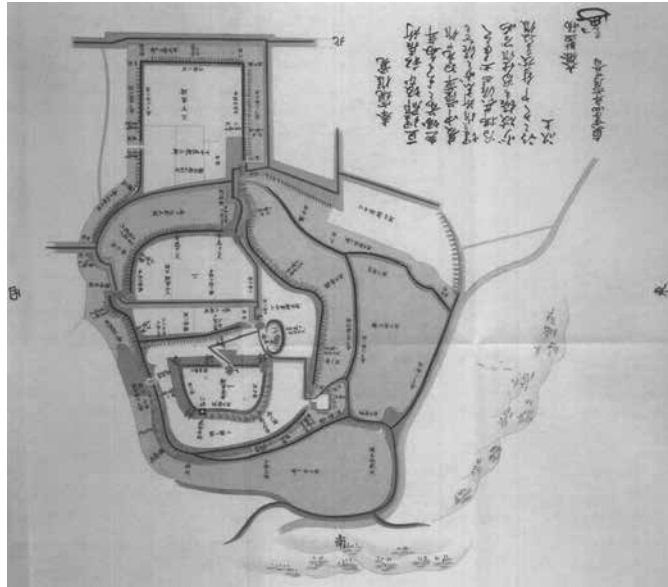


亘理郡坂本要害屋敷惣絵図【貞享4年(1687)】〔ホ:宮城県図書館蔵〕・〔へ:山元町歴史民俗資料館蔵〕
 □: 家中屋舗 □: 町屋舗 □: 寺家舗 (○): 鍵の手・喰い違い ※資料絵図に加筆改変



「亘理郡坂本要害屋敷惣絵図」裏書【貞享4年(1687)】
 〔山元町歴史民俗資料館蔵〕

【絵図ト】



亙理郡坂本要害「奉覧候覚」図【貞享4年（1687）】（複製）
[山元町歴史資料館蔵]

【絵図チ】



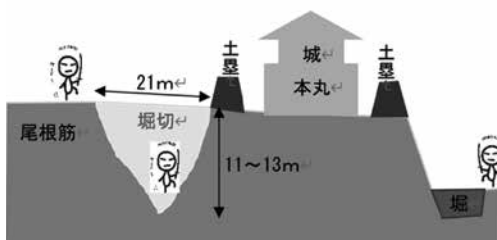
明治維新時養首城平面図 並家中屋敷【昭和8年（1933）】



【写真 1-①】坂本要害本丸跡(現：坂元神社) (東から)



【写真 1-②】坂本要害本丸跡と堀跡 (東から)



【写真 1-③】坂本要害堀切（空堀）イメージ



【写真 1-④】坂本要害二ノ丸土塁跡 (東から)



【写真 1-⑤】坂本要害二ノ丸北堀跡 (東から)



【写真 1-⑥】坂本要害二ノ丸北堀跡 (東から)



【写真2】城下街路「鍵の手」(東から)



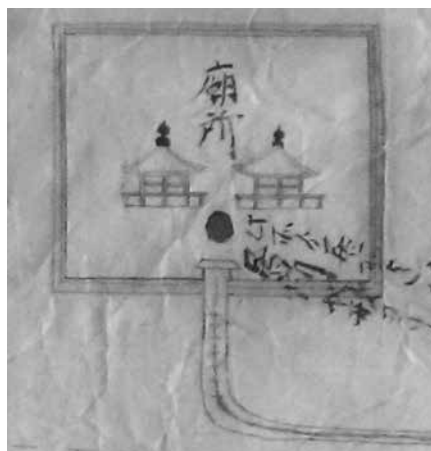
【写真3】城下街路「喰い違い」(西から)



【写真4】曹洞宗光明山徳本寺山門(西から)



【写真5】大條家初代宗行霊廟跡(東から)



(参考) 貞享絵図(1687年)の「大條家廟所」



【写真6】磯唐船番所跡（東から）



【写真7】大平の検断跡と浜街道「鍵の手」(南から)



【写真8-①】大條家ゆかりの茶室（南西から）



【写真8-②】大條家ゆかりの茶室（南東から）



【写真8-③】茶室小屋組（建物合体状況）（西から）
左側：10 畳書院 右側：茶室建物



【写真8-④】大條家ゆかりの茶室整備予定図（南西から）

【論考3】

「若老方日記」からみた仙台藩の年中行事

—安永七年、七代藩主重村帰国から

江戸出立までの一年—

後藤 三夫

はじめに

本稿では、「若老方日記」という同名の文書二冊の内容について、仙台藩の年中行事との関係から紹介する。

文書表紙に墨書された表題は、①「安永七年五月より八月迄若老方日記」（資料翻刻編3—②）、②「安永七年八月朔日より若老方日記」（資料翻刻編3—③）である（以下本史料）。本史料の収録期間は、①が安永七年（一七七八）五月から閏七月までの四か月間、②が安永七年（一七七八）八月朔日から安永八年三月二三日までの八か月で連続した一二月（一年間）であった。①の起筆日は七代藩主重村の参勤交代の国元到着日であり、②の最終日は重村の江戸への発駕日である。つまり、二冊は続きもので重村在仙時の一年間の藩政の一部を司る若老による記録である。

ここには仙台藩の日々の催事が詳しく記され、当時の藩政の一部であった諸儀式をうかがい知ることができる。その儀式を遂行する上で必要な「しきたり」「作法」は、身分の序列を確認・維持するものとして重要であった。若老とは、若年寄のことで仙台藩の職制の一つで奉行を補佐して、奉行、出入司支配外の「詰所以上の輩」である大番士以上の進退・諸事方の事務をつかさどった役職である¹。月番の担当者として「舍人、内蔵人、木工、日向」などの名前が見られ、それぞれ古田良智、平賀義雅、高泉景規、中村景貞のことと考えられる。当時の若老たちが共有した勤務の覚書が大條家に残されたものであろう。

なお、関連史料として「御申次手扣」（資料翻刻編3—④）、以下資料3—④）と「年中行事」（資料翻刻編3—⑤、以下資料3—⑤）を適宜紹介する。両史料とも本書資料編に翻刻を掲載しているので本文中に当該頁を記した。なお、「年中行事」は藩の儀式について、その服装や規式・次第について日不定で列記したもので、仙台藩の「年中行事」の詳細を知る上で貴重な史料である。

一 仙台藩年中行事について

仙台藩の年中行事については、中川学『仙台藩の武士と儀礼―年中行事を中心として―』がまとめており、行事の性格から五つに分類されている²⁾。

①主従儀礼（家臣が藩主の居所に参上、拝謁、飲酒、贈答を通じ主従の確認更新を行なう拝謁儀礼。年始御礼・五節句・歳暮御礼など）

②武家儀礼（武士としての意識を喚起する行事や武士の慣習・武士の嗜み。前者が野始・弓始・卯の日（具足開き）など、後者が連歌始・謡初・嘉祥など）

③宗教儀礼（寺院関連では心経会・護摩供・懺法・法問など、神社関連では、亀岡神社・鹽竈神社・東照宮祭礼など。こうした祭礼に際しての藩主の参詣、祝儀献納がある）

④祖先祭祀儀礼（歴代藩主と夫人・生母等に対する法事）

⑤民俗儀礼（武家や公家といった社会集団の枠を超えた民俗行事、餅を食べ祝う玄猪のほか、煤払、節分など）

本史料の細目を時系列に一覧にし、中川氏の五つの分類をもとに、筆者なりに記事内容から判断して整理したものを表1にまとめた。ただし、表中の分類については、次の点について留意いただきたい。たとえば、本史料では「参詣」との

み記すものが多くあり、その場合、③の神社参詣など宗教儀礼か、④の祖先祭祀儀礼か判別ができない。ただし、命日など法事による参詣と推定できるものは④祖先祭祀儀礼に分類した。また、天候により「御野御出兼候二付御延引」、あるいは藩主の体調が「御不快二付」の理由などにより行事を延期や中止した二一件は除外した。したがって、分析対象としたのは一六九件の記事となる。

二 「若老方日記」にみる年中行事の概要

本史料の記事内容について、先述の五つの分類における行事数を月別に示した表2を作成した。つぎに各分類の本史料中における割合やポイントを記した。

①主従儀礼（46／169件、28％）

主従儀礼は、下向直後、江戸参府前に多くなる傾向がある。

②武家儀礼（72／169件、42％）

ここでは武術訓練に通ずる狩猟が圧倒的に多く、教養を高める芸術関連は四件であった。狩猟は太陽暦で考えると、鳥の渡り期である春・秋に集中している。

③宗教儀礼（15／169件、9％）

④祖先祭祀儀礼〔26／169件、15%〕

寺院参詣が多くを占める。

⑤民俗儀礼（10／169件、6%）

五つの分類のうち①主従儀礼と②武家儀礼が記載の行事の七割を占める。これらが江戸時代の武家社会を維持する重要な行為であることがよくわかる。

以下、本史料に収録された一年間（一二か月）の年中行事の具体的な内容を五つの分類ごとに、仙台藩の行政・仕組みとそれにかかわる人々の生活の様子に注目しながら紹介していく。

1 主従儀礼

本史料の最初と最後の記事は、参勤交代の仙台到着、江戸参府出立の日であり、本史料の性格の大きな特徴である。どちらも藩主との主従関係を確認する行為である。

仙台下着と江戸発駕

参勤交代は幕府が諸大名統制のため隔年に江戸に出仕させた制度であり、外様大名は夏四月の交代とされた。七代藩主重村は、この年四月二五日に江戸を出立、九泊一〇日の行程を経て、五月五日に仙台に到着した。なお、重村の参勤交代は、今回も含めて往復一五回あった。着城当日（五月五日）は「御悦登城日」となり、家臣総出で

藩主を迎えた。一年後の出立は三月二三日、「御発駕、御供揃明半時、内蔵人岩沼御立へ罷出」とあり、早朝出発、昼食場所の岩沼まで同行したことがわかる。

家臣・社寺の御目見

御目見（おめみえ）とは、仙台藩の場合、詰所以上の家臣が藩主に拝謁することで、藩主は御座

之間に着座し、拝謁者はその身分により闕の何枚目の畳の場所など事細かに定められていた。主従儀礼計四六件のうち二〇件が該当する。江戸後期には「次第」の前例を知っておくことが、この儀礼を遂行する役人にとって重要なことであつた。御目見の用件はさまざまで家臣・社寺等が家督を継いだ御礼、隠居の御礼、病後の御礼などがある（資料3―④）。各家の身分、地位、職務、収入を引き継ぐことが認証される大切な行事である。ただし例外もあり、詰所以下の者が「詰所已上之役目」を仰せつけられたときにはどうあるべきかなど、若老たちがその扱いを都度協議し奉行衆の意を伺いながら対処した様子が記録されている（資料3―④、166～170頁）。御目見する者を藩主に紹介するにあたり「肩書」は重要であり、その前例を記録して間違いがないように若老たちは準備した。

武家の式日や祭日での拝謁

七月六日に「姫君様方七夕之御悦」とある。資料3―⑤では「七月七日御儉約中二付、御

座之間御祝御膳無之、於御休所御組附御三器御銚子御加上之被為祝」とあり（194頁）、江戸後期には経費削減のため儀式を省略し、柔軟に執り行われていたようである。八月一日は三朔日（正月元日・六月朔日・八月朔日）の一つ「八朔」で、家臣の拝謁が行なわれた。本史料には、同日に「新米御祝」と記されている。また、八月八日に「八朔の御祝義」とあるので日をずらして祝宴が開かれたのだろうか。九月九日は重陽の節句で御座之間において祝儀が行なわれた。このほかに十三夜、十五夜の月見行事、三月三日の雛祭り、五月五日の端午の節句の行事などが記載されている。それぞれ詰所以上の諸役人は藩主に拝謁するが、資料3―⑤にはその際の服装などの規則が記されている。また、節分については「御年男罷出、御膳番添之御上之間・御下之間江鬼打大豆搗之済而、鬼打大豆三方へ戴之」とあり、具体的な儀式内容を書き留めている。

産物の献上・振舞 四季折々の自然の恵みも年中行事に織り込まれ、それらは家臣に振る舞われ、恒例の儀式となり感謝と祈りが捧げられた。六月一九日に「御漁御拝領」とあるが、これは鮎だろうか。鵜飼も仙台藩領で行なわれており、この時期の鮎漁は釣りなども含めシーズン真っ最中であったはずである。八月一日は「初鮭御礼」とある。藩内の鮭漁は盛ん

であった。なお、当時は釣りも武芸の一つと考えられており、藩主みずからも行っていた。一〇月一五日は「御献上御茶」の「御口切」が行なわれ「振舞」があった。領内は茶の名産地が多くあったことが知られている。連坊小路の南側、柴田町の西側地区は、寛文十一年（一六七二）頃から茶の木が植えられて元禄八年（一六九五）まで藩の茶畑であった。茶畑廃止後は侍屋敷になって元茶畑という地名となった。このような領内の背景もあいまって御目見以上の家臣たちに新茶を振る舞う行事が定着していた。また「一月十五日、雁御拝領」、「一月晦日鶴到着」、「二月六日鶴頂戴御拝領鶴御頂戴有之」、「二月廿日、廿二日、御獲之鶴拝領被仰付」、「三月十五日、御拝領之鶴御鑑餅御披奥方御思召懸舞囃子等有之」とある。雁・鶴拝領については、資料3―④に行事の詳細が記されている（181～182頁）。なお、鶴拝味は鏡餅が添えられ酒肴が給せられるほど目出たい儀式であったようである。二月二〇日に「御獲之鶴拝領」とあり、捕獲地が記されていないが当地で狩猟できたことを示しており貴重な情報である。なお、鳥討自体は、武家儀礼に入れているが、ここでは鶴食という特殊性から主従儀礼とした。鶴は吸物にして限られた重臣達に振る舞われていた。鶴拝味については、資料3―⑤にも作法の記事がある（204頁）。

正月・歳末

正月元日、二日の両日は年始御礼が仙台城二の丸で行なわれた。翌日は恒例の野初となり、各藩士宅でも忙しい時期であったと思われる。なお、資料3―⑤によれば、正月三ヶ日の行事が記録されており（185～188頁）、城内では拝謁行事ばかりでなく宗教行事・祖先祭祀儀礼・武家儀礼などが関連し多忙な行事が目白押しであった。元日は朝から「御堂参詣」と「御膳御祝」、「着座御盃頂戴御流頂戴」、「朝御近習之輩御雑煮御酒御肴御料理」、「同日晩御夕御膳御座之間御祝」、「御夕御膳御祝以後、御茶於御前御茶道立之石之御手水晩御祝」と続き「同日着座御盃頂戴」とある。しかも「但御儉約中ニ候得共、年始三ヶ日ハ御座之間御祝ニ候」とあるように、三ヶ日の行事は儉約中であっても特別であった。三日は野初めで「朝、御騎馬ハ勿論、一騎打之輩（一騎）陳羽織着用御供揃」で登城した。本史料にはなかったが、関連して一月一日の「御用始」の行事があることを補足しておく。そして一年の終わり一二月二三日から歳末行事に入る。まず歳暮の挨拶で客人に舞や囃子の宴が披露されている。二八日には「歳暮御祝」で多くの役人が登城し、御礼儀式が執りおこなわれた。詰所以上の諸役人は総登城して藩主に祝儀を述べ、作法に従って飲酒が行なわれた。翌日は能の披露が行なわれたりもした。

2 武家儀礼

ここにおさめたのは訓練と収獲をとまなう武術鍛錬の儀式である。

御野・御野始 野山で狩猟することを「御野」といい、毎年正月三日に岩切の御野場にて藩主はじめ総出で行なった雉子狩で、軍事訓練も兼ね「御野初（おんのそめ）」といった（初鳥狩・野始逐鳥狩・観式とも）。岩切村から松森村にかけて一ヶ所に標幟場（御竜場）が設けられた。本史料において「御野」の記録は一九回に及び、江戸参府出立直前の四日前まで頻繁に行なわれた。一〇月二二日の御野では「志賀孫之丞并弟子共兵術被遊 御覧」とあり、武道家の志賀孫之丞の演武を上覧している。孫之丞は大番士で柳生国信の「柳生當流」の伝系者（柳生流の一系の流派）であった。また、一月一四、五日に「御山追」との記事もあり、勢子を動員、木の葉が散った真冬の狩りもあった。一月一九日には鹿狩が行われている。また、十二月一五日に「御野始ハ山奉行ニ仰付」とあるので、新年の最大行事の御野始のとりまとめを山奉行に命じたとみられる。

狩猟地 本史料から狩りのフィールドもわかる。たとえば、夏には蒲生、鱒川、阿川がみえ、八月二一日には「御供揃ニ而中田川鮭留御覧」とあり、中田川で鮭の漁が行われ、それ

に出向いている。また、一月二三日は「古川邊江御出鳥被遊」とある。大崎耕土（古川）は古くからの海跡湖である池沼（伊豆沼）が控え、採餌場として雁などが日中飛来した場所である。北帰行間近の雁を捕獲するには最適だったと思われる。二月一七、八日には「鶴代江御出」とある。鶴代は仙台城下東北部の田園地帯。当時は湿地が広がっており、昭和初期までマガンが飛来していた。「鳥屋」の記事も散見され、雁猟時期に鳥寄せするため捕まえた鳥たちを囲っておく場所のことか、鳥屋は四郎丸にあった。四郎丸は城下の南東方面で名取川下流域の右岸一帯で湿原の広がる猟場であった可能性が高く、本史料の記事の時期も、八月二十九日、九月二〇日、十一月六日、十一月十八日、十一月十九日、一月一三日、二月八日と、太陽暦で一〇月〜三月（表1の西暦参照）の冬鳥飛来の時期と一致する。鉄炮による狩猟記事も九月四日、十一月二五日、十二月四日と三回確認される。また、「追見山」という狩猟場も散見され、鶴代の北東部に「御裏林追見山」ともあるので、鶴ヶ谷山稜の北斜面のことかと思われる。武士による鳥猟は武芸としてみなされていた。なお、御裏林に供揃で「小鳥取方御覧」とあるのは「鳥構え」を見学したということか。「鳥構え」はカスミ網の一種で、庶民は禁止されていた捕獲方法である。

火縄銃と弓 火縄銃術は各流盛んに行なわれていたが、五代藩主吉村の時に井上外記流が御家流となつてからは大槻十郎太夫が御家流師範に任命され、広く藩士に教えることを命ぜられた⁴。本史料中に見られる「杉山台」とは、現在の台原地区一帯を指し、江戸期は大砲、鉄砲・弓類の射撃演習場で、藩主上覧が行なわれた。榴ヶ岡も乗馬や弓や騎射、鉄砲の稽古をした場所であった。弓術は小笠原流と日置流の二大潮流によつて伝えられ、仙台藩では日置流は二代藩主忠宗の時から盛んになった。歩射や騎射、通し矢という三十三間堂の軒下で矢を射り通した数で競う堂射（堂前とも）がある。なお、半分の長さ二五間で競うものを半堂という。堂形とは堂射の稽古を行なうため屋根を付け矢の弾道に囲いを簡易的に模した構造物をいう。縄と竹でより簡単に見立てたものは「折掛」と呼ばれ、これらは紀州、尾張、松江、加賀、仙台藩で行なわれた。「御始メ事」「一月八日九日」では一月八日、心経会が本丸ないしは二の丸において行なわれ般心を読む法会であったという（前掲『仙台藩の武士と儀礼』）。また弓始といひ一月八日の心経会終了後の一月九日、家臣から選ばれた射手が藩主の目前で弓を射つ行事があった。ここではこの二つの儀式が一体のため文化儀式にまとめた。

卯の日と馬 二月十一日卯ノ日御祝儀」。卯の日は二月最

初の卯の日に行なわれる具足（鎧兜）開きの行事で、詰所以上の者が藩主に拝謁し、祝儀の餅酒が下付された。「卯ノ日御祝義有之執事日向」とある。資料3―⑤にも詳述されている（190頁）。

「九月十九日召上候三歳御馬御覧被 仰出直々御稽古之被遊候」。その年に産まれた馬を当歳駒といい、満一才を迎えた駒が二歳駒で調教開始ができ台帳に登録され、三歳駒は売買の対象になる。上覧して購入するという「仙台馬上覧」は幕府の年中行事となっていた。この記事は日付からその一連の行事であったかと推定できる。「三月十日御献上御馬御覧」とある。東北は優良馬の生産地として平安時代以来の歴史をもつ。仙台藩・南部藩では奥州馬を毎年幕府に献上していた。三月二三日江戸に向け発駕しているので、江戸発駕にあわせその献上する馬を御覧になったのか。また毎年三月上旬から四月中旬まで国分町で馬市が立っていたのでこれとの関連もあるかもしれない。

供揃 「供揃」は行列を組んで出かけることで、ここでは三つの事例を取り上げる。九月二七日、「御供揃二而青根へ御出馬被遊」で、この青根温泉までの御出馬はここでは乗馬訓練を兼ねた供揃とした。一〇月二二日、「御供揃二而芳賀皆人屋敷へ被為 入」とあり、藩士の芳賀家を訪問したこ

とが記録されている。芳賀皆人とは、藩士芳賀景定（文右衛門・俊治郎）で⁶、安永五年に近習に進み、藩主重村より「皆人」の名を賜わった。このほか九月一四日に「萱場奎邸」に出かけた記事がある。萱場奎は文化人で歌人でもある。七代藩主・重村が「藩内きつての文化人」と云われた萱場奎邸に行列を組んで訪問している⁷。これらの記事からは、芸術を通じた藩主の交友関係もわかり興味深い。なお、資料3―④に行列の構成を記録した「供廻」についての記事があった（183〜184頁）。この構成は、このほか「在々江御名代上使之節」、「御法事の節」、「布衣御供之節」、「出火之節」、「年始歳暮の節」など目的により人数役目に変更がある。

連歌・御謡始 武家儀礼における文化関連の行事を以下紹介したい。詩歌の教養・心得は、武家社会でもその地位を認められる大切な儀式として加えられ、連歌会の文化的儀式でも精神性のある行事が加えられた。正月七日に行われた七種節句と連歌始は一对の行事で、仙台藩では七種節句の祝儀の執り行われたあとに御連歌始が行なわれた。一月七日の「御連歌」はこの流れの「御連歌始」であることがわかる。本史料には七種節句のことは書かれていない。資料3―⑤では、「出仕済而御直々御連歌之間々被為入、御連歌有之候、御連歌之節天神像御拝二付御間之内江服穢之者不罷出候、御供仕

御間之外御縁通ニ扣居候儀者指支不申候御連歌済而被為入候」(189頁)とあり、御連歌の際に天神像遙拝し、服忌の者は参加しないことになっていた。連歌も菅公に捧げる風習でもあったかもしれない。「一月十日御謡初御次第之通」とあり、新年最初の能の謡が披露され、藩主から盃が下付された。

3 宗教儀礼

寺社の祭礼や宗教儀礼などに対する藩主の参詣などをみていく。まず一月二二日に松島へ重村は参詣している。五大堂ならびに瑞巖寺へ参詣し、五大堂へ「御献納物持参」している。神社参詣は次の六社が特に崇敬されたようで、本史料では、愛宕神社(越路)Ⅱ六月二四日、陸奥国一宮鹽竈神社(塩釜市)Ⅱ七月一〇日、資料3―⑤によると、法連寺から御釜鎮守へ参詣、その後船で松島の瑞巖寺へ向かうルートがあった(213頁)。大崎八幡神社(青葉区八幡町)Ⅱ八月一五日、「大崎八幡御神事御参詣 帰国御兼 亀ヶ岡へも御参詣被遊」とあり、亀岡八幡神社(青葉区川内)にも参詣している。この日は月見の日でもあった。東照宮(青葉区東照宮)Ⅱ九月一七日を例祭日として、東照宮祭礼があり、藩主は参詣した。なお、三月一四日に「御供揃二而 一宮へ御参詣 御直々東照宮へも御参詣」と、塩釜から城下に戻り東照宮参詣することもある。

た。また、「御城中愛宕社」の参詣もあり、城中の社があったことがわかる。「五月五日、五月六日、七月廿日、八月七日、十月十六日、十一月七日、十二月十五日、三月朔日、三月七日」については「御参詣」とのみの記述で、月忌など祖先祭祀儀礼の可能性もある。

4 祖先祭祀儀礼

祖先祭祀儀礼には一般的に一定の日にかが経過したとき故人を偲んで冥福を祈る法事があり、その中で命日に行なわれる法要に月忌と正忌がある。月忌は前藩主の命日に行なう法事、正忌は歴代藩主の命日にする法事のこと、伊達家始祖伊達朝宗とその夫人をはじめ伊達政宗以降の歴代藩主を弔う行事が執り行われている。仙台帰国後の五月一六日「万善堂御参詣、瑞峰殿・善応殿江御参詣」を始めとして、瑞鳳寺(初代政宗)、大年寺(四代綱村、六宗村)、萬寿寺(四代綱村夫人・仙姫)、孝勝寺(二代忠宗正室・振姫、綱宗側室初子)、満勝寺(伊達家初代朝宗)、光明寺(同夫人)などへの参詣が記されている。なお、政宗と宗村は同じ五月二四日で瑞鳳殿と大年寺にて同日それぞれ正忌行事が行なわれている。また、城中(二の丸)には城中祭祀堂(万善堂・御堂)があり祖先崇拜思想に基づく祖先祭祀儀礼が行なわれた。御正忌の

執り行われる廟と対象者が資料3―④にまとめられており(180頁)、藩士にとって重要な行事であった。真浄殿は、東照宮にあった歴代江戸幕府將軍の位牌が納められていた位牌所である。なお、本史料における具体的な法事の記載は、一月二〇日の大通院殿(六代宗村四男村倫)の三回忌がある。

5 民俗儀礼

この年の土用入は六月二五日で、翌廿六日に家臣は暑氣見舞いで「土用伺」をした。また、本史料には「風入 御宝物 御風入」との記事が散見される。虫干しのことで部屋・衣類・書物などに風を通して、湿気をとった。空氣の乾燥する秋から冬にかけての時期に通算六回行なわれた。それから一二月二七日には「御煤払」が行われ、新年を迎える大掃除が仙台城内でも歳末の行事として行なわれていた。また、本史料には重村七女にあたる「お甫(ナミ)様」の誕生と夭逝の記事がある。七月二六日に「御七夜御祝儀」が執り行われ、そこで「御名お甫様と被附遣候」と命名された。しかし誕生の喜びも束のまで、翌々月(閏七月を挟んで)の八月二日に「お甫様御死去」とあり、生まれて四十二日程で亡くなったことになる。お七夜の祝儀のあと三十五日後であった。

おわりに

七代藩主・重村の在仙時の一年を通した二冊の若老の記録からは、若老が有職故実の諸知識を必要とする多難で多忙な年中行事の儀式をこなしていた様子がわかる。数々の仕事を遂行するため前例等を調べ決断し実行していったと考えられる。淡々と記録し、将来に役立てようとする仕事人の緊張感がここには溢れている。ただし、本史料の形態は職務マニュアルではなく、日記なので儀式そのものについては事細かな記述がない。しかし、日記だからこそ時代に生きる人たちの息吹が感じられる。

年中行事とは、季節ごと、地域ごと、家ごとに多少の違いがあるが同じ自然観の歴史を共有するため、各儀礼はそれぞれ濃淡あるものの身分を越えて共通するものである。本史料は、藩の記録なので行政的要素と大名家ならではのものが含まれる。拝謁や諸儀礼は武家社会の再生産のために必要不可欠なものといえ、前例主義を尊重した当時の社会の特性といえる。その起源とされるのが朝廷行事とするとその奥深さは計り知れない。

注

1 仙台郷土研究会編『新版仙台藩歴史用語辞典』（二〇一五年）。

2 中川孝『仙台藩の武士と儀礼―年中行事を中心として―』（大崎八幡宮、二〇一四年）。

3 菊田定郷『仙台人名大辞書』（仙台人名辞書刊行会、一九三三年）

4 後藤三夫「仙台藩外記流師範大槻家史料報告」（二〇一八年）。

宇田川武久「仙台藩外記流鉄砲家業人大槻家の履歴書」（『鉄砲史研究』第三九三号、二〇二一年）。

5 青根温泉の佐藤仁右衛門家文書には奥方達が温泉旅行を楽しんだ十日前後の湯治の記録等仙台藩関連の文書がある。佐藤仁右衛門家文書については、高橋陽一編著『江戸時代の温泉と交流―陸奥国柴田郡前川村佐藤仁右衛門家文書の世界―』（東北大学東北アジア研究センター、二〇一三年）参照。

6 安永九年四月に鷹匠の班に列し百石の加増、天明四年十一月近習使番となり、又百石が加賜され世禄三百石となり、文化八年没、享年七十八、仙台新寺小路妙心院に葬る（前掲『仙台人名大辞書』）。

7 萱傍齋（いつき）とは、五城楼下一閑人萱傍齋・一閑人平氏章ともいう藩内きつての文化人。萱場全（かやば・もく）。良吏、諱が氏章、傍齋と号す。小字養之進、のち多聞、または輪太夫或いは勘解由と称し、のち奎と改める。五代藩主吉村に若いときに仕え（二十歳前後と推定される）、六代宗村、七代重村の三代に仕えている。出入司から累進し若年寄に至った。その活躍は左の通り。「時に会々官倉に火災あり、粟数万石を焼失す。奎謂へらく好機乗ずべしと、則ち封内の隠田を検索して忽ち意外の歳入を増加し巨万の賦税を収むるを得たり。其機智毎に人の意表に出づる。

概ね此の如く、終に是を以て名を成す。在職四十余年、文化弐年十二月十六日没す。享年八十九、仙台茂ヶ崎大年寺に葬る。文事に長じ国風詩文を善くし、曾て佐久間洞巖の観蹟聞老志を書写し全二十巻を完成させた。時に八十五。」（前掲『仙台人名大辞書』）。

表1 「若老方日記」細目一覧（安永7年5月～同8年3月）

NO.	月	日	西暦	行事名	分類
1	5月	5日	17780530	御着城御悦（7代重村／下向期間4/25～5/5）	①
2		5日	17780530	大年寺御参詣	③
3		6日	17780531	大年寺御参詣	③
4		7日	17780601	大年寺御延引	—
5		9日	17780603	御下向為御祝儀御料理拝味	①
6		24日	17780608	御目見	①
7		16日	17780610	万善堂御参詣 瑞峰殿 善応殿江御参詣	④
8		18日	17780612	御供揃御野江 御出被遊	②
9		21日	17780615	御目見披露	①
10		22日	17780616	御法事大年寺御参詣	④
11		24日	17780618	大年寺御参詣 瑞巖寺様御正忌ニ付瑞峰殿御参詣	④
12		26日	17780620	御供揃御野江 御出被遊	②
13		28日	17780622	御目見 家督御礼 病後の御礼	①
14	6月	4日	17780628	見性院様御正忌ニ付瑞鳳寺へ御参詣	④
15		6日	17780630	御下向ニ付御子様方江御饗応	①
16		7日	17780701	御参詣御延引 御堂計	④
17		11日	17780705	御鉄炮七曜立御星被遊 大槻十太夫	②
18		12日	17780706	御参詣御延引	—
19		14日	17780708	蒲生へ御出	②
20		15日	17780709	家督の御礼 病後の御礼	①
21		16日	17780710	御参詣御延引	—
22		17日	17780711	鱒川ニ御出	②
23		19日	17780713	御漁御拝領	①
24		20日	17780714	大年寺様御正忌 御参詣御延引	④
25		21日	17780715	御座之間へ 御出	①
26		22日	17780716	御供揃ニ而御野へ御出	②
27	7月	23日	17780717	御供揃ニ而御野へ御出	②
28		24日	17780718	大年寺御参詣	④
29		24日	17780718	越路愛宕社御参詣	③
30		25日	17780719	土用入	⑤
31		26日	17780720	土用伺	①
32		27日	17780721	御不快	—
33		1日	17780724	御不快	—
34		4日	17780727	万寿寺御正忌ニ付御堂江御参詣	④
35		6日	17780729	姫君様方七夕之御悦	①
36		7日	17780730	珊瑚院様御年忌御法事瑞鳳寺	④
37		9日	17780801	姫君様式三郎様方御生身霊御悦義御肴代ニ指上	①
38		10日	17780802	今朝明六二寸通 御召出（御野袴御羽織）	①
39		10日	17780802	一宮御神事	③
40	閏7月	12日	17780804	御参詣御延引	—
41		15日	17780806	御祝儀	①
42		16日	17780807	御祝儀	①
43		16日	17780808	御延引	—
44		17日	17780809	御用日	①
45		20日	17780812	大年寺御参詣	③
46		21日	17780813	御野へ御出	②
47		26日	17780818	御七夜御祝儀 安産	⑤
48		16日	17780822	御座之間江御出	①
49		7日	17780828	大年寺御参詣御延引 万善堂江御参詣 南方へ 御出馬	④
50		16日	17780906	御帰城	—

NO.	月	日	西暦	行事名	分類
51	閏7月	20日	17780910	東照宮真淨殿 万寿寺孝勝寺江 御参詣 (重複)	④
52		20日	17780910	(東照宮真淨殿) 万寿寺孝勝寺江 御参詣	④
53		21日	17780911	御用日	①
54		24日	17780914	大年寺御参詣	④
55		28日	17780918	御座之間江 御出	①
56		29日	17780919	御供揃御野	②
57	8月	1日	17780921	八朔の御祝儀 新米御祝	①
58		2日	17780922	お甬様御死去	⑤
59		4日	17780924	御供揃御野	②
60		7日	17780927	大年寺御参詣	③
61		9日	17780929	阿川へ御出	②
62		11日	17781001	初鮭御礼	①
63		12日	17781002	御参詣御延引	—
64		14日	17781004	於榴ヶ岡騎射見聞	②
65		15日	17781005	大崎八幡御神事 御参詣 御帰国御兼 亀ヶ岡へも御参詣被遊	③
66		16日	17781006	御参詣御延引	—
67		21日	17781011	御供揃ニ而中田川鮭留御覧	②
68		22日	17781012	御旗元足輕弓 御覧	②
69		22日	17781012	御旗元足輕鉄砲 御覧	②
70		24日	17781014	大年寺御参詣御延引被 仰出 御堂へハ御参 詣被遊	④
71		27日	17781017	御供揃ニ而杉山台へ於御對面所御宝物御風入有之	②
72		28日	17781018	御宝物御風入有之 前日廿七日方	⑤
73		29日	17781019	御供揃ニ而四郎丸雁御鳥屋へ	②
74		朔日	17781020	御座之間へ 御出	①
75		2日	17781021	御宝物風入	⑤
76		3日	17781022	御供揃御野	②
77		4日	17781023	御奉行衆諸鳥討留候義如願	②
78		5日	17781024	於榴ヶ岡御旗元弓鉄砲 御覧	②
79		6日	17781025	御奉行衆寄合出勤無之	—
80	9月	25日	17781025	御野御出兼候ニ付御延引	—
81		7日	17781026	御参詣御延引	—
82		8日	17781027	御供揃ニ而榴ヶ岡へ 御出御旗元足輕弓鉄砲御覧被遊	②
83		9日	17781028	御座之間御祝有之	①
84		10日	17781029	御供揃御野へ御出	②
85		12日	17781031	堂形之者共日置流之者とも近の前被遊御覧	②
86		14日	17781102	御供揃萱場柵下屋敷へ被為 入	②
87		16日	17781104	御参詣御延引	—
88		17日	17781105	東照宮御祭礼ニ付御参詣	③
89		18日	17781106	御供揃次第御裏林へ小鳥取方御覧	②
90		19日	17781107	召上候三歳御馬 御覧被 仰出直々御稽古之被遊候	②
91		20日	17781108	御供揃ニて四郎丸雁御鳥屋へ御出	②
92		24日	17781112	大年寺へ御参詣 万善堂	④
93		25日	17781113	御裏林追 懸山ニ 御出被遊	②
94		26日	17781114	御供揃 御野へ御出	②
95		27日	17781115	堂形之者共御日置流之者共近の遠の堂指ノの御覧被遊	②
96		9日	17781116	式日御礼如兼而之被為 受	①
97		29日	17781117	御供揃ニ而青根へ 御出馬被遊	②
98		29日	17781117	御宝物風入	⑤

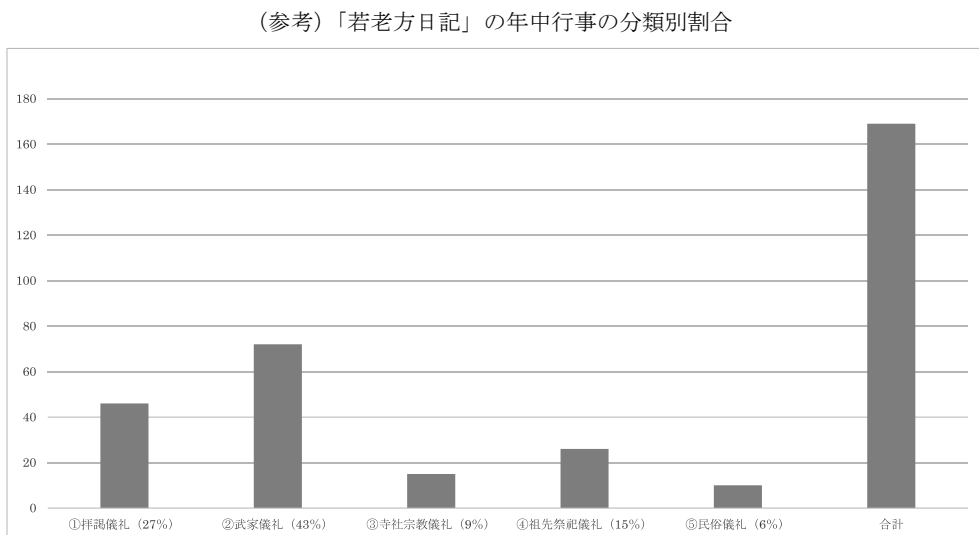
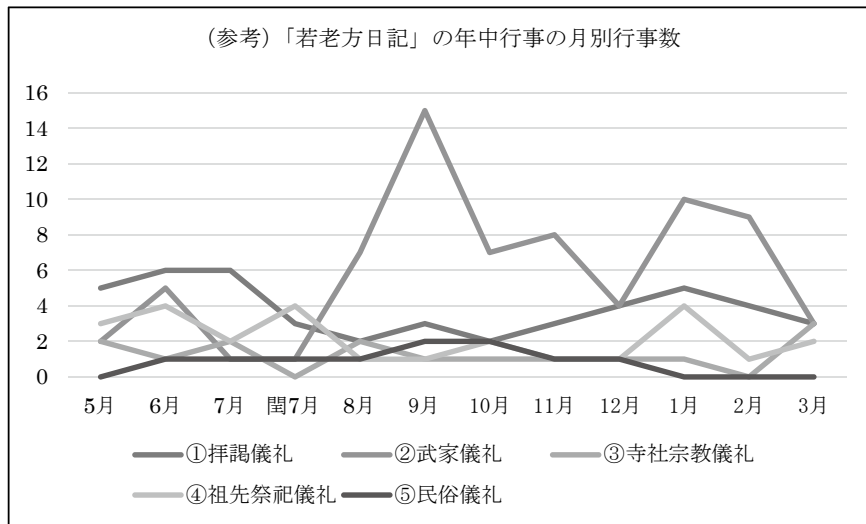
NO.	月	日	西暦	行事名	分類
99	10 月	11 日	17781129	帛城 御直々御堂へ 御参詣	④
100		12 日	17781130	真浄殿御参詣御延引	—
101		14 日	17781202	真浄殿御参詣	④
102		15 日	17781203	御献上御茶 御口切	①
103		16 日	17781204	大年寺御参詣	③
104		17 日	17781205	御堂風入有之	⑤
105		18 日	17781206	追見山ニ御出有之	②
106		19 日	17781207	御野へ 御出有之	②
107		21 日	17781209	御供揃ニ而芳賀皆人屋敷へ被為 入	②
108		22 日	17781210	志賀孫之丞并弟子共兵術被遊 御覧	②
109		25 日	17781213	御供揃ニ而御野へ御出有之	⑤
110		26 日	17781214	御供揃ニて追見山へ 式之通 御野始ハ山奉行ニ仰付	②
111		28 日	17781216	御座之間へ被為出	①
112	11 月	29 日	17781217	御野へ御出有之	②
113		日	17781218	明六時御供揃追見山へ御出	②
114		1 日	17781219	御座之間へ 御出、御證文風入	①
115		3 日	17781221	御證文風入有之	⑤
116		4 日	17781222	御供揃にて御野被為出	②
117		6 日	17781224	御鳥屋へ御出有之	②
118		7 日	17781225	大年寺御参詣	③
119		8 日	17781226	御裏林追見山御出	②
120		9 日	17781227	御裏林追見山御出	②
121		12 日	17781230	御参詣御延引	—
122		13 日	17781231	御野へ被為 出	②
123		15 日	17790102	姫君様雁御拝領被為遣分候	①
124		16 日	17790103	御さんけい延引	—
125	12 月	17 日	17790104	奥御對面所ニ而社家参	①
126		18 日	17790105	寒入朝六時御供揃御鳥屋へ被為 入	②
127		19 日	17790106	曉七時御供揃堂谷御鳥屋へ被為 入	②
128		20 日	17790107	大通院殿三回忌 寒入伺	④
129		25 日	17790112	寒鴨 御出馬	②
130		4 日	17790121	寒鴨御出馬御供	②
131		6 日	17790124	明半時御供揃追見山へ	②
132		12 日	17790129	御延引	—
133		13 日	17790130	御山追式之通	②
134		14 日	17790131	御山追式之通	②
135		15 日	17790201	御参詣	③
136		21 日	17790207	追見山へ御出	②
137		23 日	17790209	歳暮御祝儀悦 舞囃子有之	①
138	1 月	24 日	17790210	大年寺御参詣	④
139		25 日	17790211	御給仕計揃なし	①
140		26 日	17790212	御給仕計揃なし	①
141		27 日	17790213	御煤払	⑤
142		28 日	17790214	歳暮御祝有之	①
143		1 日	17790216	御次第之通	①
144		2 日	17790217	表出仕有之	①
145		3 日	17790218	御野始メ	②
146		4 日	17790219	けいこ	②
147		5 日	17790220	寺院方御礼	①
148		6 日	17790221	御別祭	④
149		7 日	17790222	御連歌之間	②
150		8 日	17790223	御始事	②

NO.	月	日	西暦	行事名	分類
151	1 月	10 日	17790225	御謡初御次第之通	②
152		12 日	17790227	御延引	—
153		13 日	17790228	御鳥屋へ御出	②
154		14 日	17790301	御野へ御出	②
155		15 日	17790302	出仕有之御座之間揃	①
156		16 日	17790303	御参詣御延引	—
157		17 日	17790304	御城中 愛宕社御参詣 東照宮御参詣	④
158		18 日	17790305	真浄殿（東照宮）へ御参詣萬寿寺孝勝寺へ	④
159		18 日	17790305	（真浄殿へ御参詣）萬寿寺孝勝寺へ（重複）	④
160		19 日	17790306	芦ノ口山御鹿狩	②
161		21 日	17790308	御野 御出有之	②
162		22 日	17790309	松島へ御参詣	③
163		23 日	17790310	古川邊江御出鳥被遊	②
164		28 日	17790315	御法事等江戸ニ有之出仕無之	—
165		30 日	17790317	鶴到着	①
166	2 月	1 日	17790318	表出仕有之	①
167		4 日	17790321	御帰城御座之間ニ而御揃	—
168		6 日	17790323	御拝領鶴御頂戴有之	①
169		8 日	17790325	御鳥屋へ御出	②
170		11 日	17790328	卯ノ日御祝儀	②
171		12 日	17790329	御野 御出	②
172		14 日	17790331	式日之御礼有之於御座之間	①
173		26 日	17790402	御野へ	②
174		16 日	17790402	御参詣御延引	—
175		17 日	17790403	鶴代へ御出	②
176		19 日	17790405	追見山へ御出御直々御野有之	②
177		20 日	17790406	御獲之鶴拝領被仰付	①
178		20 日	17790406	鶴代江御出	②
179		24 日	17790410	大年寺御参詣	④
180		29 日	17790414	鳥屋江御出追見山被遊（重複）	②
181	3 月	1 日	17790417	大年寺御参詣	③
182		7 日	17790423	御参詣	③
183		8 日	17790424	満勝寺孝（光）明寺萬寿寺孝勝寺御参詣	④
184		9 日	17790425	追見之御馬見分罷越	②
185		10 日	17790426	御献上御馬御覧	②
186		14 日	17790430	御供揃ニ而 一宮へ御参詣 御直々東照宮へも 御参詣	③
187		15 日	17790501	御拝領之鶴御鏡餅御披奥方へ御思召懸舞囃子等有之	①
188		16 日	17790502	両御堂 瑞鳳寺大年寺へ御参詣	④
189		19 日	17790505	御野へ御出	②
190		23 日	17790509	御発駕 御供揃明半時 岩沼御立	①

（出典）No. 56 まで大條家文書 3-20（資料翻刻編 3-②、No. 57 から大條家文書 3-35（同 3-③）

表2「若老方日記」の年中行事の分類別行事数

安永7～8年	5月	6月	7月	閏7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
①主従儀礼	5	6	6	3	2	3	2	3	4	5	4	3	46
②武家儀礼	2	5	1	1	7	15	7	8	4	10	9	3	72
③寺社宗教儀礼	2	1	2	0	2	1	1	1	1	1	0	3	15
④祖先祭祀儀礼	3	4	2	4	1	1	2	1	1	4	1	2	26
⑤民俗儀礼	0	1	1	1	1	2	2	1	1	0	0	0	10
合計	12	17	12	9	13	21	14	14	11	20	13	11	169



【論考4】

『客座録』の挿入画について

菅沼 楓

一『客座録』の概要

『客座録』は半紙本、二〇巻二〇冊の体裁をとる。内容は日常で目にした様々な文物の手控冊となっており、文字の他、絵による記録も多く含まれている。書名は保管時に全二〇冊を包んでいた紙に「客座録廿冊」と題されること、また「客座録」と直接表紙に墨書したものであることによる。しかし、中にはそれ以外の題名が記されたものや、一冊に巻数を記した題箋が複数枚挟まるものもあり、元来二〇冊全てが「客座録」と題されたとは考えにくい。おそらく後の所蔵者が本冊をまとめる際に「客座録」と名称を統一したのであろう。なお本稿においては、全二〇冊の総称として「客座録」の名を用いることとする。

『客座録』のうち、記された年代が判明する冊子を表にまとめたものが「表一」である。少なくとも天保三年（一八三二）から嘉永年間（一八四八～五三）までの約二〇年間にわたり

記録が続けられているのが分かる。

本書の筆者は、大條家第一五代・大條道直（一七九六～一八七八）であると考えられる。道直は諱を道直、初め称左衛門または多門と称し、後に監物と改め、是水と号した。本冊子の成立年代である天保年間から嘉永年間に大條家の当主の座に就いた人物である。

『仙台人名大辞典』によると、道直は明治十一年（一八七八）に享年八二で没しており、『客座録』が記された期間は、逆算するとおおよそ三十代半ばから五十代であると推定される。この間の道直の動向として『山元町誌』には、文政九年（一八二六）若老、天保二年（一八三一）奉行御用、翌三年正月に奉行にそれぞれ命ぜられたとある。天保一四年には隠居し、家督を大條家一六代・道治に譲った。このように道直は藩の要職に就いていたが、『客座録』には藩務に関する内容はほとんどみられず、あくまでも個人的な興味・関心に基づいたものであると言える。

また、「表一」からも分かるように、各冊子の成立年代と題箋の巻数順は必ずしも一致しない。これは先ほども述べたように、後の所蔵者が本冊を『客座録』としてまとめる際に、各冊子に巻数を記した題箋を付したためと考えられる。

二『客座録』の内容

『客座録』は、冊子ごとに日記、模写図、紀行などの描き分けはされていないが、記録する対象は各冊で大まかな傾向がある。そこで以下『客座録』全二〇冊についてその概略を記していく。挿入画に関しては、内容を「表二」にまとめた。

1 「夢餘偶筆」(史料番号…6-19-1)〔口絵5〕

表紙に「夢餘偶筆」「天保乙未八月十六日」と墨書され、天保六年(一八三五)周辺に記されたものであると分かる。内容は、西洋画の模写が最も多く、洋人の肖像画や天子の図、紋章の縮写がみられる。図像のみならず、蘭方医・大槻玄沢(一七五七―一八二七)の長男で同じく蘭方医の大槻玄幹(一七八五―一八三八)著『西韻府』や、中国明代に刊行され、西洋の科学技術を紹介した叢書『天學初函』の写しもみられ、道直が蘭学に興味を持っていたことが分かる。また、中国明時代の画家、林良(一四一六―一四八〇)の竹に雀図、奥絵師・中橋狩野家初代の狩野安信(一六一四―一六八五)の人物図、やまと絵風の乗馬図など中国や日本の模写も含まれる。

2 「Memoireluek」(史料番号…6-19-2)

表紙に「Memoireluek 1833」と墨書され、天保四年(一八三三)頃に記されたものと分かる。一丁目表には「客座録拾」「天保五年甲子四月十六日俊」と墨書された題箋が挟まる。

『夢餘偶筆』同様に、道直が見た西洋婦人の肖像画や西洋風の紋章の写し、中国絵画の縮写が含まれる一方、スイセンや梅などの花卉、金魚などの魚類を写生した図もみられる。加えて遠近法を用いて実景を描写した図も含まれている。

3 無題(史料番号…6-19-3)

題名、年代ともに不明である。本冊には雅楽の六調子のうち、盤渉調と大食調各曲の調子譜が書き込まれる。

4 無題(史料番号…6-19-4)

題名、年代ともに不明の冊子である。内容は陣羽織の形や文様を記録したものとなっているが、所蔵者等の情報は記されない。細部の配色や文様まで細かく描き込まれているため、何を目的として描いたものなのか興味深い。

5 無題（史料番号…6―19―5）

本文中に嘉永六年（一八五三）四月一四日の年月日がある記事や、嘉永七年（一八五四）年に刊行された松居信著『萬国船舶図譜』の写しがあり、嘉永年間頃に記されたものと推察される。内容は、冒頭に海沿いの風景を描いた図を数頁にわたり描き、続いて奥絵師・木挽町狩野家の狩野常信筆「房州能島正景図」や、定型的な布袋図の他、植物や魚の写生図、大工や犬のスケッチなどが載る。その他、琵琶湖を高台から見下ろした風景図も含まれている。

6 「客座録巻四」（史料番号…6―19―6）

表紙に「客座録巻四」「道齋送人□藏」とある。本文中に嘉永六年（一八五三）ペリー来航時の幕府の対応に関する記述が見られることから、嘉永年間以降に記されたものとみられる。アメリカ船のスケッチも含まれており、異国の動向に対する道直の関心の高さが窺える。加えて、寛政九年（二七九七）刊行の鋏形蕙斎著『鳥獣略画式』の模写が数点含まれ、略画にも興味を示していたのが分かる。その他、西洋画、中国画の縮図、高僧像の模写などが含まれている。

7 無題（史料番号…6―19―7）

弘化三年（一八四六）一〇月に筑波山周辺を訪れた際の記録や、翌四年の日記、屏風の模写などが含まれる。

弘化三年の旅では筑波山の実景図や常陸太田市にある長幡部神社の扁額のスケッチを残している。翌四年の日記には、一関藩重臣の田村精倫のもとを訪れ、ともに絵や歌を楽しんだのが記録される。藩を越えた文化的な交流がみられるのは興味深い。日記の間には道直が実際に訪れた土地の風景が描かれており、旅の道中に持参したものであると分かる。

8 無題（史料番号…6―19―8）

一丁目表に「客座録九」と墨書された題箋が挟まる。内容は実景描写が大半を占め、「大津」、「小玉浦」、「大玉浦」などの地名がみえる。また石碑や、新長谷寺の鐘楼に記された銘文の模写など、備忘のために残したとみられるものが含まれている。その他、英語を附載したイギリス船のスケッチも残しており、当時の日本に入っていた異国情報の片鱗が窺える。

9 無題（史料番号…6―19―9）

題名、年代ともに不明の冊子である。内容は寺社の宝物に加え、日光東照宮や岡崎の松応寺など徳川家ゆかりの寺社にみられる葵紋の図様のスケッチなど、学術的な探求心に基づくものが多い。また、天保年間に刊行された『江戸名所図会』に所載の寺宝の挿図をそのまま写したと思われるものもみられ、実際に現地に赴き現物を模写したのではなく、書物から学んだ知識を記録するために描いたものと考えられる。

その他に洋書の挿図の写しや、中国、日本の書画の縮図、実景図などが含まれる。

10 無題（史料番号…6―19―10―1）

一丁目表に「客座録十一」と墨書された題箋が挟まる。内容は書画や石碑の図様、振り子時計や花桶などを見たままに記録したものとなっており、描いたものの統一性はない。江戸の下谷で売り出していた腎薬「延齡固本丹」の看板のスケッチも見られることから、出先でも持ち歩き備忘録として記録を付けていたのだろう。

11 「客座録」（史料番号…6―19―10―2）〔口絵6〕

表紙にうつすら「客座録」と墨書のあとがみられる。表紙

見返しには「客座録十三」との題箋が貼られる。

本冊中興味深いのは、船着き場の風景を描いた二つの実景図である。一つは日暮れの様子を、一つは暁の様子を描いたのが図中の文字から判明する。両図ともに描いた日付と「写真」という文字が付されることから、目の前の景色をそのまま写すことを意識して描いたものであると分かる。遠近法を用いて奥行きある空間を描き出しており、道直の画技の高さが窺える。

その他には過眼した書画の縮図や、大宮八幡宮所蔵の鷹の絵馬の模写、植物の写生図などが含まれる。

12 無題（史料番号…6―19―11）

一丁目裏にそれぞれ「客座録拾四」「客座録拾五」と記された二枚の題箋が貼られる。本冊序盤には熱海本陣を務めた今井氏湯店の別亭「一碧楼」の看板文字と、初島を眺望する風景図がみられ、熱海方面への旅行に携帯したものであると分かる。それに続き、曾我物語に登場する虎女の木像模写が描かれるが、これは大磯の鴨立庵（現神奈川県大磯町）に安置された同像であると考えられる。その他、船の図や木挽町狩野家の狩野晴川院養信（一七九六―一八四六）筆の縮図などが含まれている。

13 「西郊寫真 附随録」(史料番号…6-19-12)

表紙に「西郊写真 附随録」「天保甲午(一八三四) 正月十一日起筆 四月十六日後」と墨書され、表紙見返しには「客座録八」と記された題箋が貼られる。

「西郊写真」と題されるように、本冊の大半は江戸より西の風景を描いた実景図が占める。臨濟宗妙心寺派の別格本山・平林寺の境内や、多摩川を高台から眺望した風景、秩父山を南から眺めた風景などを淡彩で描く。その他、府中にあつた旅宿・信州屋で談笑する人々や漁人から玉川の鮎を買う人々、馬のスケッチなども含まれ、道中で見にした事柄をそのまま記録する。

14 「客座録」(史料番号…6-19-13)

表紙に「客座録」と篆書体で墨書される。一丁目表には「客座録拾六」と記した題箋が貼られる。本文中に「甲午五月五日□」、「天保甲午歳」などの記述がみられることから、天保五年(一八三四)周辺に記されたものと分かる。

本冊前半部には、淡彩でオランダ船や中国製の仮面のスケッチを残しており、異国に対する道直の興味関心が窺える。中間部には、漢詩文とともに高尾山を登山した際に実見した景色を淡彩画で残している。後半には、動植物の写生図や実

生活で目にした様々な事柄を記している。

15 無題(史料番号…6-19-14)

表紙見返しにそれぞれ「客座録拾七」「客座録拾八」と記した二枚の題箋が貼られる。

前半部の「温泉日札」と題された文章によると、天保六年(一八三五)春に道直は体調を崩したため、閏七月に小田原の医者のもとを訪ねた。日記形式の文章とともに、道中に目にした風景や建物、人々を描いている。続けて、翌七年三月一七日の浅草三社祭で奉納された拍板舞の様子も記しており、本冊を記した大体の年代が分かる。

中間部には中国清代に刊行され、日本の文人画にも大きな影響を与えた画譜『芥子園画伝』から本文を転写したものや、明代末の文人・陳繼儒(一五五八—一六三九)の山水画を模写したものの、動植物の写生図が続く。また渡辺畢山(一七九三—一八四一)が所持していた沈南蘋の画冊から花鳥図を写したと思われる図も載る。渡辺畢山と道直の間に直接交流があったかは不明だが、両者が同じ文化圏内にいたのが窺えるものである。

16 「文苑清娛」(史料番号…6-19-15)

表紙に「文苑清娛 天保改元甲辰出□」と墨書され、天保一五年・弘化元年(一八四四)頃に記されたものと分かる。一丁目表には「客座録廿」と記された題箋が貼られる。

内容は、水戸藩の医者・川口長孺(一七七三—一八三五)の『芸苑小録』、幕臣で兵法家の平山行蔵著(一七五九—一八二九)の『鈴林危言』、儒学者・荻生徂徠(一六六六—一七八二)の『答藪震菴書』など、目にした書物の書き写しが大半を占める。絵画に関するものとしては、長井定宗(二六六八—一七〇三)著『本朝通紀』中の室町時代の水墨画家・雪村(一五〇四—一五八九)の事跡を記した箇所、文化四年(一八〇七)に白河藩藩主で老中の松平定信(一七五九—一八二九)の指示で制作された「春日権現験記絵」摸本の奥書の書き写しが含まれる。

17 無題(史料番号…6-19-16)

表紙見返しに「客座録五」と記した題箋が貼られる。

内容は西洋、中国、日本の作品の縮写が大半を占める。中でも日本の作品には勝川春水(?!?)の美人画や尾形光琳(一六五八—一七一六)の雁図、伊藤若冲(一七一六—一八〇〇)の鶴図がみられる。その他機織り機のスケッチや、

蟹を写生した図が含まれる。

18 「客座録」(史料番号…6-19-17)

表紙に「客坐録」「天保壬辰」と墨書され、天保三年(一八三二)頃に記されたものである。一丁目と二丁目の間には「客座録二」と記した題箋が挟まる。

植物や風景の写生図、奥絵師・鍛冶橋狩野家初代狩野探幽(一六〇二—一六七四)、駿河台狩野家初代・狩野洞雲(二六二五—一六九四)、清原雪信(二六四三—一六八二)合作の「豊干寒山拾得図」の縮図、作者不明の花鳥図の模写などが含まれる。前述の『芥子園画伝』のように、道直は当時中国から日本に入ってきた画論も学んでいたようであるが、本冊中には清代初期の画家・龔賢(?!一六八九)の『画訣』の転写がみられ、中国絵画の学習過程を知る参考になる。

19 「文苑餘芳」(史料番号…6-19-18)〔口絵7〕

表紙に「文苑餘芳」「□□一月朔一日起筆」と墨書される。

一丁目と二丁目の間に「客座録一」「客座録拾九」とそれぞれ記した題箋が二枚挟まる。本冊後半に「庚子二月廿四日遊於拾四谷十二社」と書き込まれる実景図が含まれることから、天保一一年(一八四〇)頃に記されたものと分かる。

本冊は「客座録」全二〇冊の中で含まれる挿入画の数が最も多く、その大半が中国と日本の絵画の模写図で構成される。それら模写の傍らには「雲煙藏」「佐野屋藏」と記されるものがあり、それぞれ幕末期の江戸の書画商・安西雲煙（二八〇七―一八五二）、同じく江戸の豪商で書画収集家の大橋淡雅（二七八九―一八五三）が所蔵した書画であることが判明する。安西雲煙、大橋淡雅らは江戸で書画展観会を頻繁に開催しており、道直もそこに出入りしていたのが推測される。

加えて本冊前半には、戦国武将・村上義清の子孫、村上佐馬之介の肖像画も描かれ、道直の人物交流の様子が窺える。

20 「二揮傳真」（史料番号…6―19―19）〔口絵8〕

表紙に「二揮傳真」「天保庚子仲冬初七」と墨書され、天保一年（一八四〇）頃の起筆だとみられるが、本冊中には弘化三年（一八四六）に記された写生図も含まれており、数年間にわたり書き続けられたものと推察される。一丁目表には「客座録七」と記した題箋が貼りつけられる。

内容は動植物の写生図が多くを占める。中でも鯉を描いた図〔口絵8〕は、輪郭を細線でとり、グラディエーションをつけながら彩色を施して鯉の生命感を表しており、道直の観察眼と描写力の高さが感じられるものとなっている。

三 挿入画の分類

『客座録』にみられる挿入画を分類すると、

- ① 目にした絵画作品や書物のなどの記録図
 - ② 動植物または風景の写生図
- の二種に大別できる。

①に分類される記録図については、一九世紀前半の江戸画壇を代表する絵師・谷文晁（二七六三―一八四二）をはじめ、その門人の多くが記帳の習慣をもっていた。中でも文晁門下で田原藩の家老職についた渡辺華山は、常に小冊子を持ち歩き、目に入るものがあればすかさず模写を行っていたのが知られる。画集やカメラがない時代は、手持ちの冊子に模写した図が情報を後に振り返る際の唯一のメディアであり、作画にあたっては画面を構築する際の粉本としても利用されていた。道直が明確な意図を持ち記録をしていたかは本冊からは判断できないが、常日頃から冊子を携帯し、頻繁に見たものを記録する習慣をもつ人物であったのが分かる。

『客座録』中、最も頻繁に見られるのは、日本や中国絵画の模写図である。画面全体を写したものから、一部分のみを写したもので様々であるが、いずれも素早い筆致で構図や形態を正確に捉えており、道直の画技の高さが窺える。中に

は彩色まで写したものもあり、模写を通して学んだ色彩感覚は、後述の写生図においても発揮されている。また模写した絵画は、やまと絵から俳画、文人画、人物画などと幅広く、特定の傾向を見出すことは難しいが、それだけ道直の関心が多岐にわたっていたのが分かる。

続いて多く目に留まるのは寺社仏閣の宝物や扁額の記録である。これらは実際に現地に赴き模写したものもあれば、『江戸名所図会』などの書物から転写したものもある。道直は旅行など遠くの場合へ出かける際にはこの冊子を持ち歩いていたようで、日記や紀行文と共に各地で目にしたものを記録している。

また、日本や中国文物と並び、西洋文物の模写図が多いのも特徴として挙げられる。道直が『客座録』を記した天保・弘化の頃は、すでに洋書や洋画が一通り国内にもたらされ、蘭学研究も盛んに行われていた。加えて異国船が次々と日本に來航し国内の緊張も高まる中で、道直も西洋事情に対して興味関心を持ったと考えられる。例えば無題(6・19・8)には、『文政七申五月廿八日末』『六月十一日帰帆』と書き添えられた船の絵がみられるが、これは文政七年(一八二四)にイギリス人が水戸藩領の天津に上陸した天津浜事件について記したものである。この他にも『客座録』には異国船來航に関する

記事が多く散見され、道直が外交問題に対し大きな関心を寄せていたのが分かる。

『客座録』には大槻玄幹など日本の蘭学者が記した書物の転写も見られるが、洋書から描き写したであろう西洋文物の図も多く含まれる。中にはオランダ語を学習した痕跡もみられることから洋書から直に外国の情報を得ようとした姿が想像できる。

②に分類される動植物や風景の写生図は、描かれた図に道直自身の視点が反映されているという点に①の記録図との違いを持つ。例えば、「二揮傳真」(6・19・19)には多くの動植物の写生図が描かれるが、その画面は見開き中央に大きく対象を写し、空いた余白にそれぞれの部分をクローズアップさせたものや、何通りかの角度から捉えた図を添えるものなどがあり、丹念に対象を観察する態度があらわれている。これらは書き直した線がほぼ見当たらず、最初に引いた線に対象の姿を的確に捉えており描写力の高さが感じられる。さらに淡彩を加えて対象の立体感を表し、特に鯉を描いた図はさらに彩色を加え生命感ある図に仕上がっている。

このような対象に対する真摯な観察態度や、それを写し取る高い描写力は、動植物の写生図のみならず風景図からも感じられる。

『客座録』に登場する風景図は主に江戸近郊、もしくは東海道中の風景を写したものが多く、仙台藩など東北の景色は一つも含まれない。これは『客座録』の執筆期間と道直の江戸詰めの期間が重なっているのに由来するとみられる。

風景写生図は、見開き半頁を横に使うか、もしくは見開きをそのまま使うかいずれかの形で描かれる。動植物写生図のように細密で固い線はみられず、柔らかい線で時に点描を交えながら大まかな形をとる。風景図の大半は、水平視で捉えたものが多く、道直が実際に目にした風景をそのまま描いたものとみられるが、例えば「客座録」(6・19・13) 中盤にみられる高尾山周辺の風景図については、「望高尾山」と題された図は俯瞰視、「琵琶瀑布」と題された図は下半分は俯瞰視、上半分は水平視という山水画にみられるような構図をとるなど、場所ごとに構図を工夫しているのが分かる。

加えて、近景から遠景にかけて物を小さく配し、奥行きを表す遠近法を用いる点も興味深い。遠近法は蘭書や蘭画の輸入により西洋からもたらされた絵画技法であるが、眼鏡絵や浮絵に取り入れられたのをきっかけとして徐々に普及し、後には浮世絵師も取り入れた。『客座録』においても、随所に遠近法を用いた風景図が描かれ、その用い方も極めて自然である。

四 書画展観会と『客座録』

『客座録』に含まれる多くの記録図のうち、日本や中国絵画の模写図が多く含まれることはすでに述べたが、道直がそれら多数の作品を実見した場として、江戸の書画会や書画展観会が想定できる。

「文苑餘芳」(6・19・18)の中盤には、日本及び中国絵画の縮図が連続で描かれるが傍らには所蔵者名が添えられている。そこにみられる所蔵者名を挙げると

「雲煙藏」↓安西雲煙

「佐野屋藏」↓大橋淡雅(佐野屋孝兵衛)

「大竹藏」↓大竹蔣塘

「靄崖藏」↓高久靄崖

「玉巖堂藏」↓太田玉巖

の名が見られる。

安西雲煙(一八〇七—一八五二)は江戸薬研堀の書画商で、屋号を和泉屋帟吉と称した。書画販売のほかに鑑定業でも知られ、書画の鑑賞や鑑定の心得、和漢の画家の逸話を記した『近世名家書画談』を刊行している。大橋淡雅(一七八九—一八五三)は佐野屋孝兵衛などの通称を持った下野宇都宮出身の商人で、後に日本町元浜町で呉服商や金融業を営み、

その傍ら書画収集家、鑑定家としても知られた。大竹蔣塘（二八〇一—一八五八）、高久靄崖（一七九六—一八四三）も共に下野の出身で、それぞれ書家、南画家として名を馳せた人物である。太田玉巖は江戸両国で書肆を営み、屋号を和泉屋とした。

これら人物は、天保年間以降、江戸において書画の批評・鑑定を行った文人たちの会合に頻繁に参加していたことが知られ、そこには他に水戸出身の画家・立原杏所（一七八六—一八四〇）や、渡辺崋山なども出入りしていた。同好の士によって催された書画会や書画展覧会は、幕末期になるとさらに盛んに開催され、大名などの上級武士層も参加者に名を連ねた。こうした会合に道直が具体的にどのような形で関わっていたのかは「客座録」中の記録からは判断できないが、文事を通して結びついた江戸の文人サークルの一端に道直も属していた可能性は高いだろう。

おわりに

『客座録』は、大條道直個人の興味関心のみならず、当時の武士が高い文化的教養と画技を有していたことを具体的に示す点においても重要な史料であると言える。記された内容

が多岐にわたるため、何らかの強い目的を持ち記されたものであるとは考え難いが、それだけに様々な側面から検討すべき内容を含んでいると言えるだろう。今回は挿入画に絞った紹介のみとなってしまったが、今後は大條道直の人となりや、他の文士との交流なども含め、改めて『客座録』を詳細に分析することにより、武士の文事の具体的諸相を解明することを課題としたい。

【参考文献】

- ・『山元町誌』（山元町誌編纂委員会、一九七一年）
- ・菊田定郷編集『仙台人名大辞書』（続仙台人名辞書刊行会、一九八一年）
- ・佐藤温「富商大橋淡雅の文事と時局」『近世文芸』八六、二〇〇七年
- ・同「幕末期文人の書画鑑定と書画市場―『書画観略記』を中心に―」『書物・出版と社会変容』八、二〇一〇年

〔表 1〕『客座録』成立年代

和暦	西暦	月日	冊子名
天保三年	一八三二		「客座録」【客座録二】（6・19・17）
天保四年	一八三三		「Memoiruek」【客座録拾】（6・19・2）
天保五年	一八三四	正月一日起筆 四月一六日起筆	「西郊写真」【客座録八】（6・19・12） 【客座録拾】（6・19・2） 「客座録」【客座録拾六】（6・19・13）
天保六年	一八三五	八月一六日起筆	無題【客座録十七】【客座録十八】（6・19・14） 「夢餘偶筆」（6・19・1）
天保一年	一八四〇		「文苑餘芳」【客座録一】【客座録拾九】（6・19・18） 「一揮傳真」【客座録七】（6・19・19）
弘化元年	一八四四		「文苑清娛」【客座録廿】（6・19・15）
弘化三年	一八四六		無題（6・19・7）
嘉永元年以降	一八四八		無題（6・19・5） 「客座録四」（6・19・6）

* 〔』は、冊子表紙に記された冊子名。【』は、冊子中に挟まれた題箋の冊子名をそれぞれ示す。

〔表2〕『客座録』挿入画一覧

資料名	No.	挿入画名	分類（＊）	備考（年代・文字情報など）
「夢餘偶筆」 6-19-1	1	池大雅筆 陶淵明図	記録図	「三氣日夕佳 霞樵」とあり。
	2	馬具	記録図	
	3	洋人乗馬図	記録図	
	4	西洋風文様	記録図	
	5	洋人肖像画（正面）	記録図	
	6	洋人肖像画（横顔）	記録図	
	7	西洋婦人肖像画（正面）	記録図	
	8	手のスケッチ	記録図	
	9	洋風文様	記録図	
	10	天使図	記録図	
	11	聖徳太子像 太刀部分	記録図	
	12	洋人図	記録図	
	13	洋人図（頭部）	記録図	
	14	天使図	記録図	
	15	林良筆 竹に雀図	記録図	欄外に「八月廿日」のメモ
	16	天使図	記録図	
	17	西洋軍人図（部分）	記録図	
	18	洋人乗馬図	記録図	
	19	西洋風景図	記録図	
	20	ピストル	記録図	
	21	魚藍観音図	記録図	
	22	山水図	記録図	
	23	王文筆 山水図	記録図	欄外に「王文」のメモ
	24	狩野安信筆 人物図	記録図	
	25	木蓮か	写生図	
	26	乗馬図	記録図	やまと絵風
	27	乗馬図（手部分）	記録図	
「Memoieluck」 （客座録拾） 6-19-2	1	ドクダミの葉	写生図	
	2	洋犬	記録図 / 写生図	
	3	西洋夫人図（顔部分）	記録図	
	4	西洋夫人図（全体）	記録図	
	5	森川許六筆 竹梅に雀図	記録図	
	6	洋風額縁	記録図	
	7	海景図	記録図	
	8	張秋谷筆 農村風景図	記録図	
	9	張秋谷筆 竹図	記録図	
	10	西洋夫人図（頭部）	記録図	淡彩
	11	西洋夫人図（胸部）	記録図	
	12	スイセンか	写生図	淡彩
	13	西洋夫人図（背面）	記録図	
	14	張秋谷 菊図	記録図	
	15	白鳥	記録図 / 写生図	
	16	西洋風文様	記録図	
	17	風景図	実景図	淡彩
	18	耕作図	記録図	淡彩
	19	中国人物	記録図	淡彩
	20	漁人	記録図	淡彩
	21	雲岫戴巖 牽牛図	記録図	淡彩
	22	梅	写生図	「二月廿一日寫」のメモ。淡彩。
	23	レンギョウ	写生図	淡彩

資料名	No.	挿入画名	分類（＊）	備考（年代・文字情報など）
	24	梅	写生図	淡彩
	25	サヨリ	写生図	淡彩
	26	風景図	実景図	
	27	樊圻筆 花鳥図	記録図	
	28	草虫図	記録図	
	29	草虫図（部分）	記録図	
	30	金魚	写生図	淡彩
	31	稚魚	写生図	淡彩
	32	鯉	写生図	淡彩
	33	蛙	写生図	
（無題） 6-19-3		挿入画なし		
（無題） 6-19-4	1	陣羽織	写生図	
	2	羽織文様	写生図	
	3	太刀文様	写生図	
	4	羽織文様	写生図	
	5	袴	写生図	
（無題） 6-19-5	1	海景	実景図	
	2	富嶽図	記録図	
	3	布袋図	記録図	
	4	狩野常信筆 房州能島正景図	記録図	
	5	子犬	写生図	
	6	鳥	写生図	「七月廿日」のメモ。
	7	船	写生図	
	8	植物	写生図	
	9	屋形船か	写生図	
	10	大工	写生図	
	11	犬	写生図	
	12	小袖	写生図（記録図）	淡彩
	13	アクラハゼ	写生図	
	14	トビハゼ	写生図	
	15	風景図（琵琶湖周辺）	実景図か	
「客座録 巻四」 6-19-6	1	十二支に関する版本の張付		
	2	『鳥獣略画式』の模写	記録図	
	3	西洋夫人図	記録図	
	4	西洋夫人図	記録図	
	5	西洋風獅子図	記録図	
	6	洋犬図	記録図	
	7	竹図	記録図	画中に「□□陀石上抽筋般若閑納画所筆」とあり。
	8	香合の瑞祥文様	記録図	
	9	アメリカ船	写生図か	
	10	鳥	写生図か	
	11	高僧図	記録図か	法然か。
	12	岩に梅図	記録図	
	13	月図	記録図	
	14	聖堂図	記録図	
	15	山水図	記録図	
	16	山水図	記録図	

資料名	No.	挿入画名	分類（＊）	備考（年代・文字情報など）
(無題) 6-19-7	1	風景図（山頂）	実景図	丙午（弘化三年、一八四六年）十月於府中駅高長筑波山図
	2	実景図	実景図	
	3	袋	写生図	
	4	花鳥図屏風	記録図	右隻・松に雉、左隻・柳に番の鳥
	5	鐘	写生図	
	6	鉄砲	写生図	
(無題) (客座録九) 6-19-8	1	花文様	記録図	淡彩
	2	山雀	写生図か	「大如山雀 食南瓜子」のメモ。色指定あり。
	3	難破船図	記録図	「AWANALE」「メノトトンノ出画」「文政七申年五月二十八日未」のメモ。
	4	船の図	記録図	「SHIP」「六月十一日帰帆」のメモ。
	5	西洋文物	記録図	
	6	イギリス船図	記録図	「BRITISH ERICATS」ケンホ画
	7	風景図（大津付近）	実景図	
	8	風景図（琵琶湖周辺）	実景図	
	9	風景図（港町の図）	実景図	
	10	風景図（断崖と船）	実景図	
	11	芦鴨図	記録図	「探山」の署名。
	12	風景図（場所不明）	実景図	
	13	実景図（小王蒲、大王蒲）	実景図	
	14	文班筆 花図	記録図	
	15	済泥硯の盆	記録図か？	
	16	西洋夫人図	記録図	
	17	建物の図	記録図	「屋形録」のメモ。
	18	植物	写生図	
	19	鏡	写生図か	「天明成化年製」のメモ。
	20	刀装具	写生図	
(無題) 6-19-9	1	洋風の鳥	記録図	
	2	洋書の表紙	記録図	
	3	風景図（場所不明）	実景図	
	4	風景図（場所不明）	実景図	
	5	風景図（場所不明）	実景図	
	6	西洋男性像	記録図	「Jactin Touin pin」のメモ。
	7	額題「山江」	記録図	
	8	鶴	記録図	
	9	牡丹文様	記録図	淡彩
	10	国安明神蔵国安神像	記録図	『江戸名所図会』第三巻 国安明神の記事からの転写。
	11	円福寺蔵古雲版	記録図	『江戸名所図会』十三 円福寺の記事に同図からの転写。
	12	倣王蒙筆 山水図	記録図	欄外に「擬黄鶴山樵」とあり。

資料名	No.	挿入画名	分類（＊）	備考（年代・文字情報など）
	13	竹図	記録図	画中に「新管右石 秋冬」とあり。
	14	絵馬	記録図	欄外に「所提筆」とあり。
	15	勝山琢舟筆 鶴図	記録図	画賛「なをもこいに身のよはい」「法橋琢舟筆」
	16	吾嬬神社蔵神宝古鈴図	記録図	『江戸名所図会』十八 吾嬬神社の記事からの転写か
	17	鹿島神社蔵神宝古鈴図	記録図	同上
	18	藤原縣鷹蔵新宝古鈴図	記録図	同上
	19	幟旗	記録図	
	20	松応寺 松平弘忠御廟紋	記録図	
	21	東照宮 松平左京大夫 三鯨形紋	記録図	
	22	松平太郎左衛門 家紋	記録図	
	23	鯨骨	記録図	「黒田老侯 庚申所置」のメモ
	24	新田城址出土古瓦紋	記録図	「上州新田城址所出古瓦紋」のメモ
	25	慈眼大師筆東照宮御影束帯紋	記録図	「石火屋師 渡辺氏家傳 慈眼大師筆 東照宮御影御束帯紋」のメモ
	26	葵紋	記録図	「尾州熱田ニ御座（加藤図書）之時 某者竹千代君ヨリ被下置御紋図」のメモ
	27	葵紋	記録図	「神祖 松平周防守ノ先祖松井左近ニ賜フ所ノ旗地木綿 長ハ尺七寸五分中七尺三寸五分」のメモ
	28	刀剣 銘	写生図か	「七寸七分味」「吉光」「富田氏蔵」のメモ
	29	鯉図	記録図	
	30	花瓶	写生図	「名物花瓶雀一声」のメモ
(無題) (客座録 十一) 6-19-10-1	1	人物	写生図か	
	2	洋犬	写生図か	
	3	猫	写生図か	
	4	文様	記録図	
	5	人物	写生図か	
	6	人物	写生図か	
	7	鶴亀文様 石碑	記録図	
	8	花桶	写生図	
	9	垂揺球儀	写生図	「丙午季春寫 応挙」の署名
	10	応挙筆 鯉図	記録図	
	11	葵紋直衣（下着か）	記録図	
	12	ヲタマキ草	写生図	「四月朔」のメモ
	13	武将図	記録図	
	14	風景（山頂付近）	実景図	
	15	仙人図（鉄拐仙人か）	記録図	
	16	「延齡固本丹」の看板	記録図	
	17	梅図	記録図	
「客座録□」 (客座録十三) 6-19-10-2	1	橋図	実景図	
	2	御船入 日暮図	実景図	「六月二十七日 写真」のメモ。彩色。

資料名	No.	挿入画名	分類（＊）	備考（年代・文字情報など）
	3	蓮	写生図	「七月一日 見山様中 写生図」
	4	提灯図	写生図	
	5	御船入 明暁景	実景図	「七月六日 写真」のメモ。彩色
	6	竹梅扇面図	記録図	画中に「女迂寓堪」の署名。
	7	竹図	記録図	
	8	竹図	記録図	
	9	山水図	記録図	
	10	拓本	拓本	
	11	植物	写生図	
	12	大宮八幡宮所蔵 鷹図絵馬	記録図	「奉掛 山屋不祥 寶前 慶安三暦七月十五日」「大宮八幡社頭所掛地金泥 由井正雪口奉也 十月二十日」のメモあり。
	13	春椿図	記録図	
	14	植物図	記録図	画中に「甲子仲秋樽盒方□寫□□」とあり。
	15	木の枝	写生図	
	16	岩に牡丹に鳥図	記録図	
	17	呉春筆 中国人物図	記録図	画中に「呉春」とあり。
	18	能舞台	実景図	
	19	白鷺図	記録図	画中に「子辛」の署名あり。
	20	竹梅に鶏図	記録図	画中に「圓光師 秋日 李安□庄丈見所図」の署名あり。
	21	蟹図	記録図	
(無題) 6-19-11 (客座録 拾四・拾五)	1	風景図 (初島付近)	実景図	図中に「ハツシマ」の文字。熱海からの眺望か。
	2	風景図	実景図	
	3	風景図	実景図	
	4	高僧図	写生図	「圓信堂 龍齋山雄順□」のメモ。
	5	大磯虎女木像	写生図	
	6	船	写生図	
	7	天狗面	写生図	
	8	鶴図	記録図	
	9	鶴図	記録図	
	10	鶴図	記録図	
	11	狩野晴川院養信筆 花卉図	記録図	画中に「晴川院法眼筆」とあり。
	12	船	写生図か	
西郊寫真 (客座録 八) 6-19-12	1	頭蓋骨	写生図	
	2	寺門	写生図	以下9まで平林寺（武蔵野）の風景
	3	扁額	写生図	「金鳳山」 石川丈山筆山門の額
	4	楼門	写生図	
	5	扁額	写生図	「凌霄閣」
	6	高僧図	写生図	「□立像」
	7	椅子式牀座	写生図	
	8	御堂	写生図	
	9	御堂	写生図	

資料名	No.	挿入画名	分類（＊）	備考（年代・文字情報など）
	10	鐘馗図	記録図	画中に「甲寅春二月寫遣子」の署名
	11	風景図	実景図	「西堀里嶽 三月十二日」のメモ
	12	風景図（桜道）	実景図	「金井 上れ」とあり。
	13	風景図（玉川）	実景図	「玉川」とあり。
	14	船頭	実景図	「乗機 拵」とあり。
	15	風景図	実景図	北から大山を臨む図
	16	風景図	実景図	
	17	風景図	実景図	越後諸国・秩父山を臨む風景
	18	風景図	実景図	西から京都を臨む風景
	19	風景図	実景図	東から富士山を臨む風景
	20	風景図	実景図	観音亭
	21	風景図	実景図	洞窟
	22	風景図	実景図	観音亭
	23	風景図	実景図	玉川上流の風景
	24	風景図	実景図	玉川付近の風景
	25	欣馬	実景図	
	26	婦系図	実景図	玉川付近の風景
	27	府中駅信州屋	実景図	
	28	西洋男性図	記録図	
	29	獅子文様	記録図	
	30	竹図	記録図	
	31	西洋男性図	記録図	淡彩
	32	梅に文鳥図	記録図	画中に「余嶺寫」の署名
	33	人物横顔図	写生図	
客座録 (客座録 拾六) 6-19-13	1	船（オランダ船）	記録図か	彩色
	2	オランダ国旗	記録図か	
	3	清人	記録図	
	4	人物（顔部分）	記録図	
	5	西洋女性図	記録図	彩色指定あり。
	6	オランダ国旗	記録図	
	7	清人（顔部分）	記録図	
	8	風仙花	写生図	「七月二十七日」のメモあり。
	9	風景図	実景図	画中に「土和田 後」「遅明發家 午後到大和 田秋由初収 水勢高址土人俸禄家向渉」とあり。
	10	風景図（望高尾山）	実景図	画中に「望高尾山」「晡時到山下 踞石上而送堅桃里云今夜宿 山下明朝登山 亦一奇則寫山下」とあり。
	11	風景図（望高尾山 其二）	実景図	
	12	コナン風呂屋	実景図	
	13	扁額「高尾山」	写生図	
	14	風景図（琵琶瀑布）	実景図	画中に「既至絶嶺又 就田政而降半 迹右梅入小径 而下径極嶮石角 如鋸每歩時艱難」とあり。
	15	風景図（下ノ瀧）	実景図	画中に「下山有又有 一瀑土人呼下 瀑布水射石間而」とあり。

資料名	No.	挿入画名	分類（＊）	備考（年代・文字情報など）
	16	風景図（高尾山下）	実景図	画中に「三 四面告山溝 邛 寂莫唯開巋 暗狗吠 余云 此中必有避 秦之 人」とあり。
	17	風景図（歓望亭・清源墓）	実景図	画中に「嘯時到遊校 連 山風景此 今春之觀亦少 別此日口霽 陰相半淳風 十 分可爰」とあり。
	18	風景図（清源墓）	実景図	画中に「座墓而眺墓 色 斷雀則宿山 中」とあり。
	19	鎧懸松	写生図	
	20	風景図（松達寺付近）	実景図	
	21	実景図「望玉川図」	実景図	「行禪山後」とメモあり。
	22	鷺図	記録図	
	23	植物	写生図	
	24	家屋	写生図	
	25	石	写生図	「望嗤石」とあり。
	26	風景図（場所不明）	実景図	
	27	風景図（里玉川図）	実景図	「二月廿日 行禪寺ハ山後 里玉川図」
	28	寺（本堂・楼閣）	実景図か	
	29	植物	写生図	アジサイなど数種類の植 物写生図。
	30	昆虫	写生図	マツムシか。
	31	植物	写生図	「外疎内密」とメモあり。 淡彩。
	32	植物（牡丹か）	写生図	彩色指定あり。
	33	植物（果実）	写生図	
	34	昆虫（蝶か）	写生図	淡彩
	35	鳥類	写生図	
	36	甲冑を着た男性	写生図	
	37	人物図	写生図	色指定あり。
	38	お堂	写生図	※ 37~38 何かの祭りに参 加する人々を記録したか。
(無題) 6-19-14 (客座録 拾 七・拾八)	1	弁天山所望図	実景図	「弁天山所望図」のメモ。 小田原の弁天山か。
	2	風景図（小田原周辺）	実景図	
	3	風景図（鎌倉稲村ヶ崎周辺）	実景図	「イナムラ」のメモ。
	4	風景図（沿岸）	実景図	以下9まで旅紀行
	5	寺門	実景図	「極手而」のメモ。
	6	寺・講堂	実景図	「其祠寺」のメモ。
	7	風景図（橋）	実景図	
	8	能見望達図	実景図	「能見望達図」とあり。
	9	風景図（水辺）	実景図	
	10	浅草三社癸拍板舞之図	実景図	「天保七三月十七日 浅草 三社癸拍板舞之図」とあり。
	11	花鳥図	記録図	「高乾」とあり。
	12	文様	記録図	「正徳年間吸物碗ノ紋章」 とあり。
	13	山水図	記録図	画中に「倣張子正 眉公」
	14	山水図	記録図	画中に「倣庫諸筆 眉公」
	15	山水図	記録図	画中に「倣夏禹公 眉公」
	16	山水図	記録図	画中に「倣趙久缺 眉公」

資料名	No.	挿入画名	分類（＊）	備考（年代・文字情報など）
	17	山水図	記録図	画中に「倣米裏陽 眉公」
	18	山水図	記録図	画中に「奂日識亭翻名蟲鼠両腸や上天 除張傷」とあり。
	19	山姥図	記録図	画上部に「花の色はうつりにけりないたづらにわがみせしむるながめせしまに」とあり。
	20	山姥図（顔部分）	記録図	
	21	月字	記録図	「土州 紀貫之 月字」とあり。
	22	慧能大師図	記録図	「六祖 慧能大師」「入唐秋月丑土」とあり。
	23	柳図	記録図	「舞風欺麟」「銭唐控元誠寫」とあり。
	24	鳥	写生図	彩色指定あり。
	25	茉莉花	写生図	「茉莉花 長三尺許 夏自四月至十月 草弁者似梅花」とあり。
	26	植物	写生図	
	27	蠨螂	写生図	
	28	土竜	写生図	淡彩
	29	植物（牡丹か）	写生図	
	30	竹図	写生図もしくは記録図	
	31	草虫図	記録図	彩色
	32	花鳥図	記録図	彩色
	33	花鳥図	記録図	彩色
	34	花鳥図	記録図	彩色
	35	花鳥図	記録図	彩色
	36	花鳥図	記録図	「明人双福」とあり。彩色。
	37	花鳥図	記録図	彩色
	38	風景図（鳥居）	実景図	
	39	風景図	実景図	淡彩
	40	風景図（海景）	実景図	
	41	風景図（沿岸部）		
文苑清娛 （客座録廿） 6-19-15		挿入画なし		
（無題） （客座録五） 6-19-16	1	小忌衣	写生図	
	2	勝川春水筆 美人図	記録図	「勝川春水画」とあり。
	3	紀貫之 山水水琴	記録図	
	4	高僧像	記録図	
	5	画題不明 軸物	記録図	「若要芙蓉真面目但記取甲子浦口若緑友人天民旬緑野」とあり。
	6	鶴図	記録図	「乙酉初春汝文郁寫」とあり。
	7	略画風の鶴	記録図	
	8	洋人衣装	記録図	
	9	唐美人図	記録図	

資料名	No.	挿入画名	分類（＊）	備考（年代・文字情報など）
	10	英勝筆 釣狐図	記録図	「封永年定津三呼翁享寛欲并書 本落不昧話露百王生顔 尖心因果埋没命呈静尺 強化白民主徒羅鬼門関 吐這野狐精未百丈山 竹里」とあり。
	11	風景図（場所不明）	実景図	
	12	風景図（場所不明）	実景図	
	13	風景図（場所不明）	実景図	
	14	風景図（場所不明）	実景図	
	15	風景図（場所不明）	実景図	
	16	風景図（場所不明）	実景図	
	17	尾形光琳筆 雁図	記録図	「法橋光琳」とあり。
	18	伊藤若冲筆 鶴図	記録図	「若冲居士」とあり。
	19	鶴文様	記録図	
	20	機織機	写生図	
	21	蟹	写生図	
客座録 （客座録 二） 6-19-17	1	穿心草	写生図	「六月十八日不忍池 華昌会」とあり。
	2	風景図（亀戸）	実景図	
	3	乳岩	写生図	「八月十八日於不忍池 写生図」とあり。
	4	靈芝	写生図	「八月廿三日写生図」とあり。
	5	豊干寒山拾得図	記録図	それぞれ豊干「探幽富筆」寒山「益信筆」拾得「雪女筆」と署名あり。
	6	カセ鳥人物図	実景図	
	7	松図	実景図	
	8	風景図（沿岸部）	実景図	
	9	風景図（沿岸部）	実景図	
	10	風景図（沿岸部）	実景図	
	11	高瀬舟	実景図	
	12	風景図（沿岸部）	実景図	
	13	風景図（沿岸部）	実景図	
	14	風景図（小舟）	実景図	
	15	風景図（屋敷並び）	実景図	
	16	実景図（沿岸部）	実景図	
	17	実景図	実景図	
	18	花鳥図	記録図	
	19	仙人図	記録図	
	20	龍	記録図	
文苑餘芳 （客座録 一・拾九） 6-19-18	1	尾形光琳筆 椿図	記録図	「光琳」とあり。
	2	狩野常称筆 文殊菩薩図	記録図	「常信門人常稱」とあり。
	3	村上佐馬之助図	写生図	「十一月十二日」とあり。
	4	布袋図	記録図	「黄檗即卯書」とあり。
	5	狩野探幽筆 風景図	記録図	「探幽筆」とあり。
	6	花鳥図	記録図	
	7	陸治筆 花鳥図	記録図	
	8	志道軒図	記録図	
	9	金霊（荔）芝	写生図	

資料名	No.	挿入画名	分類（＊）	備考（年代・文字情報など）
	10	往古神宝図（琴）	記録図か	
	11	往古神宝図（太刀）	記録図か	
	12	刀鏢	記録図か	
	13	日時計	写生図	
	14	尾形光琳筆 美人弾琴図	記録図	
	15	李彬筆 画卷	記録図	「四明李彬」「中文」とあり。
	16	子雲筆 岩に植物図	記録図	「子雲 朱鎮」とあり。
	17	呉小仙筆 蝦蟇仙人図	記録図	「江夏 呉小仙人画」
	18	狩野探幽筆 三十六歌仙図	記録図	淡彩
	19	送袁玉成図	記録図	「雲煙蔵」「仁智殿直錦衣鎮撫三山袁玉成写」明代・林景清の漢詩「送袁玉成画史归莆」を絵画化したものか。淡彩。
	20	山水図	記録図	「勝以」「雲煙蔵」とあり。
	21	書画軸	記録図	「大竹蔵」とあり。
	22	梅花図	記録図	画賛「繞屋梅下三十樹月明千里故人来 黄文立寫」「靄崖」とあり。
	23	岩に牡丹図	記録図	彩色
	24	昌栄筆 群鯉図	記録図	「昌栄」「佐野蔵」とあり。
	25	龍図	記録図	「啓書計」「佐野蔵」とあり。
	26	花卉図	記録図	「趙珣」「佐野屋蔵」とあり。
	27	山水図	記録図	画賛「何羣春課好」「仙台蔵」とあり。淡彩。
	28	山水図	記録図	画賛「縦調天野吟」「無名」とあり。淡彩。
	29	人物図	記録図	「翁形」「佐野屋蔵」とあり。淡彩。
	30	雪舟筆 人物図	記録図	
	31	書画軸	記録図	「玉巖堂蔵」とあり。
	32	山水図	記録図	「榮禎 己亥春口等 覚上□□」とあり。
	33	中国美人図	記録図	「陳賢」とあり。彩色。
	34	盆花図	記録図	「鄭鈺」とあり。彩色。
	35	山水図	記録図	「孫枝」「為可壬蔵」とあり。
	36	梅下人物図	記録図	「靄崖蔵」とあり。彩色。
	37	花卉（蘭か）	写生図	
	38	盆花図	記録図	「索亭」か。
	39	動物（土竜か）	写生図	
	40	波頭図	記録図	
	41	人物図	記録図	
	42	唐子老人図	記録図	「問松林、松林経幾冬 山川如何昔風雪与古同 是元颯句 乗名」とあり。
	43	山水図	記録図	
	44	布袋図	記録図	「探幽□□筆」
	45	柳沢淇園筆 寿老人図	記録図	「淇園柳里恭」
	46	唐子老人図	記録図	
	47	山水図	記録図	
	48	軍配人物図	記録図	俳画か。「黄蔵府」とあり。
	49	円山応挙筆 子犬図	記録図	「安永 応挙筆」とあり。
	50	円窓美人図	記録図	「敬女年客」とあり。

資料名	No.	挿入画名	分類（＊）	備考（年代・文字情報など）
	51	秀輝 二十一歳十像	記録図	「秀輝者生二十一歳十歳練川呂起搬宅」「飛鳴□ノ初ニアリ」とあり。
	52	洋人乗馬図	記録図	「胡聡寫」とあり。
	53	菊図	記録図	「安想」とあり。
	54	三十六歌仙（中納言朝忠）図	記録図	
	55	人物頭髮図	記録図	
	56	山水図	記録図	「楊州王元震製」とあり。
	57	花鳥図	記録図	
	58	桃竹扇面図	記録図	「美国禎為 明神丈寫」とあり。
	59	竹図	記録図	
	60	梅花図か	記録図	「□□李崑石寫」
	61	牽牛図	記録図	
	62	凌霄花	写生図	
	63	鶏図	記録図	「語話高乾寫」とあり。淡彩。
	64	蓮池鷺図	記録図	
	65	蓮葉	写生図	
	66	蘭図	記録図	
	67	高士詩作図	記録図	
	68	地黄	写生図	
	69	盆	記録図	「光林」とあり。
	70	人物（顔）	記録図か	
	71	風景図（土手）	実景図	
	72	風景図（屋敷）	実景図	
	73	風景図（遠山）	実景図	
	74	風景図（四ツ谷十二社）	実景図	「庚子二月廿四日遊於四谷十二社」とあり。
	75	高士図	記録図	「無名氏 図様ヲ案スルニ明人ナルベシ」とあり。
	76	漁人図	記録図	
	77	白衣観音図	記録図	
	78	寿老人図	記録図	
	79	達磨図	記録図	「天童第一座雪舟畫之」とあり。
	80	山水図	記録図	「衞馬祈永寫」とあり。
	81	山水図	記録図	「法按挙居人筆於玉黄米中金泓寫」とあり。
	82	高士図	記録図	
	83	沈石田図	記録図	「沈石田図長崎人所伝寫」とあり。
	84	鹿仙女図	記録図	「亜風吉クシユ毛女ノ図ナルヘシ」とあり。
	85	芭蕉翁図	記録図	「芭蕉翁五世苗裔桃仙年某俵拝画」とあり。
	86	仙人図	記録図	「崇禎庚申仲秋淳人 五明南□□」とあり。
	87	東方朔図	記録図	「崇禎巳卯年秋 清漳五明南□□」とあり。
	88	布袋図	記録図	
	89	菊図	記録図	「己保」
	90	人物横顔図	記録図か	
	91	洋犬（頭部のみ）	写生図	

資料名	No.	挿入画名	分類（＊）	備考（年代・文字情報など）
	92	鐘馗図	記録図	
	93	中国人物図	記録図	
	94	中国美人図（頭部）	記録図	
一揮傳真 （客座録 七） 6-19-19	1	ヒワ	写生図	彩色
	2	風折鳥帽子	写生図	「京都製ノ図 前ノ腰六七分程 高サ先ノ方図ノ如シ」とあり。
	3	ネズミ	写生図	
	4	李花	写生図	「李花 三月二日」とあり。彩色。
	5	棣棠	写生図	「棣棠 三月二日」とあり。彩色。
	6	植物	写生図	彩色
	7	ホタル	写生図	「四月十五日」とあり。彩色。
	8	虎耳草	写生図	「四月廿二日」とあり。彩色。
	9	植物	写生図	彩色
	10	植物	写生図	「六月二日」とあり。彩色。
	11	植物	写生図	
	12	植物	写生図	
	13	植物	写生図	
	14	植物	写生図	
	15	植物	写生図	
	16	鯉	写生図	「六月廿日」とあり。
	17	鳥	写生図	カラ類か。
	18	香炉	写生図	
	19	フクロウ	写生図	「弘化三 二月八日」とあり。
	20	モクレン	写生図	彩色
	21	芍薬	写生図	「弘化五四月六」とあり。
	22	欽物か	写生図	
	23	洋人帽子図	記録図	
「客座録廿冊」 6-19-20				貼紙ハズレ

（＊）分類については、以下の基準で分類した。
「記録図」…絵画作品や物、書物などを写したもの。模写図も含む。
「写生図」…目にした植物や動物などをそのまま写したもの。
「実景図」…目にした風景をそのまま写したもの。

II 資料翻刻編

【凡例】

一、本編は、山元町歴史民俗資料館所蔵大條家文書に含まれる史料を収載した。

二、収載史料の概要については、本書Ⅰ論考編【論考1】を参照されたい。

三、収載史料には通し番号を付し、文書名・作成年月日（または記述に含まれる年代）・文書目録番号を付けた。

四、文書目録番号は、本書Ⅲ所収の山元町大條家文書目録と対応している。

五、原則として人名など固有名詞の一部を除いて常用漢字に改めている。

六、かな文字については、原文通りにした。助詞の「者（は）」「江（え）」「而（て）」「与（と）」「茂（も）」は該当する漢

字を用いた。合字の「ㄅ（より）」も原文の表記通りとした。

七、改行については、原文通りではない。ただし、欠字・平出・抬頭は一部そのままの表記とした。

八、史料には適宜読点「、」や並列点「・」を付けた。

九、文中には、「表紙」「貼紙」「花押」など説明が必要な箇所を注記している。

十、割注については「〜」で示した。

十一、判読不能な文字は「□」（白ヌキ四角）で示した。

十二、現代では誤字と思われる文字を訂正せずに表記する場合、その文字の横に「マモ」を付けた。

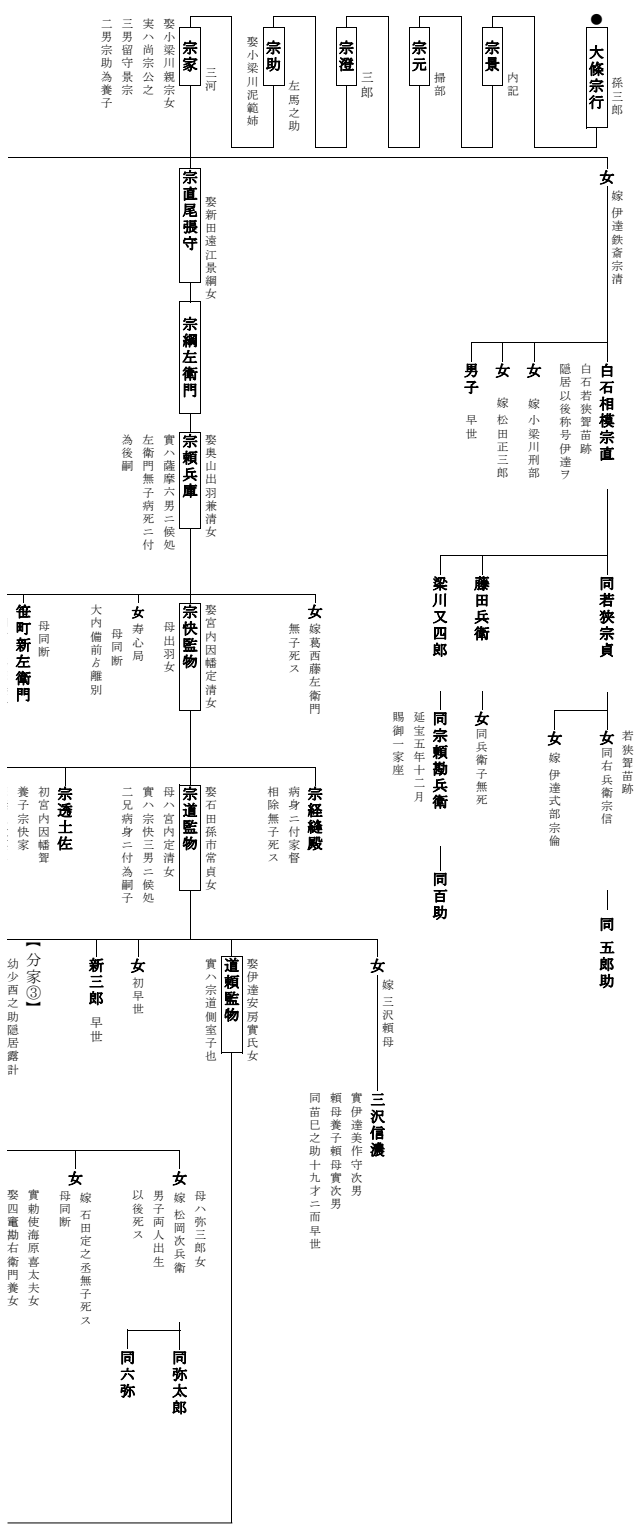
十三、史料の翻刻は、東北大学東北アジア研究センター上廣歴史資料学研究部門（当時）の井上瑠菜（学術研究員）、後藤三夫、竹内幸恵、高橋直道（以上、事務補佐員）が行い、編集・校訂は野本禎司が担当した。

1 家系・由緒

①家系図（年月日未詳） 2—1

* 当主を四角囲みにて、分家を○にて示した。

伊達禪正少弼宗遠公三男大條孫三郎宗行賜大膳太夫正宗公是大條氏鼻祖也爾於大條矣



同苗但馬聲養子

聖無之故戻し
家督被下也

病身ニ付候無子死ス

大條權左衛門頼泰

初娶佐藤孫三郎女

女子老人出生以後死ス

後富沢庄之助姉娶

右西之助大條理右衛門

嫡子ニ候処宗道次男

養子ニ奉願宗道

番代相勤居候内

道頼六歳之節宗道

病死ニ付底々道頼番

代相勤居道頼十七歳

之時分享保元年

番代相勤御知行

廿九貫六百九十老文之所

如願之分地被仰付

別而御奉公相勤其後

道頼家中屋敷江

御竿入分地都合三拾貫

十八文ニ罷成候

同權十郎頼純

母同斷

同求馬

同左門頼寿

女 線中嶋刑部

宗盈

中嶋十郎宗秋

娶長沼下記女

同兵庫成康

娶本多伊賀女

同十郎實信

娶亙理石見女

同後大夫胤時

同豊之助

女 川嶋重税行信室

女 富田老岐馬實室

女 大條仲二郎室

子孫左ニ記ス

布施清五郎

娶大條道頼女

女 線布庭數馬

女 初線天童右近同人死後

線片平數馬無子死ス

女 線古内治太夫

娶大町出雲女

古内新十郎

同苗傳左衛門聲養子

横沢八郎

女 線高野集人

無子死ス

芝田文九郎養女

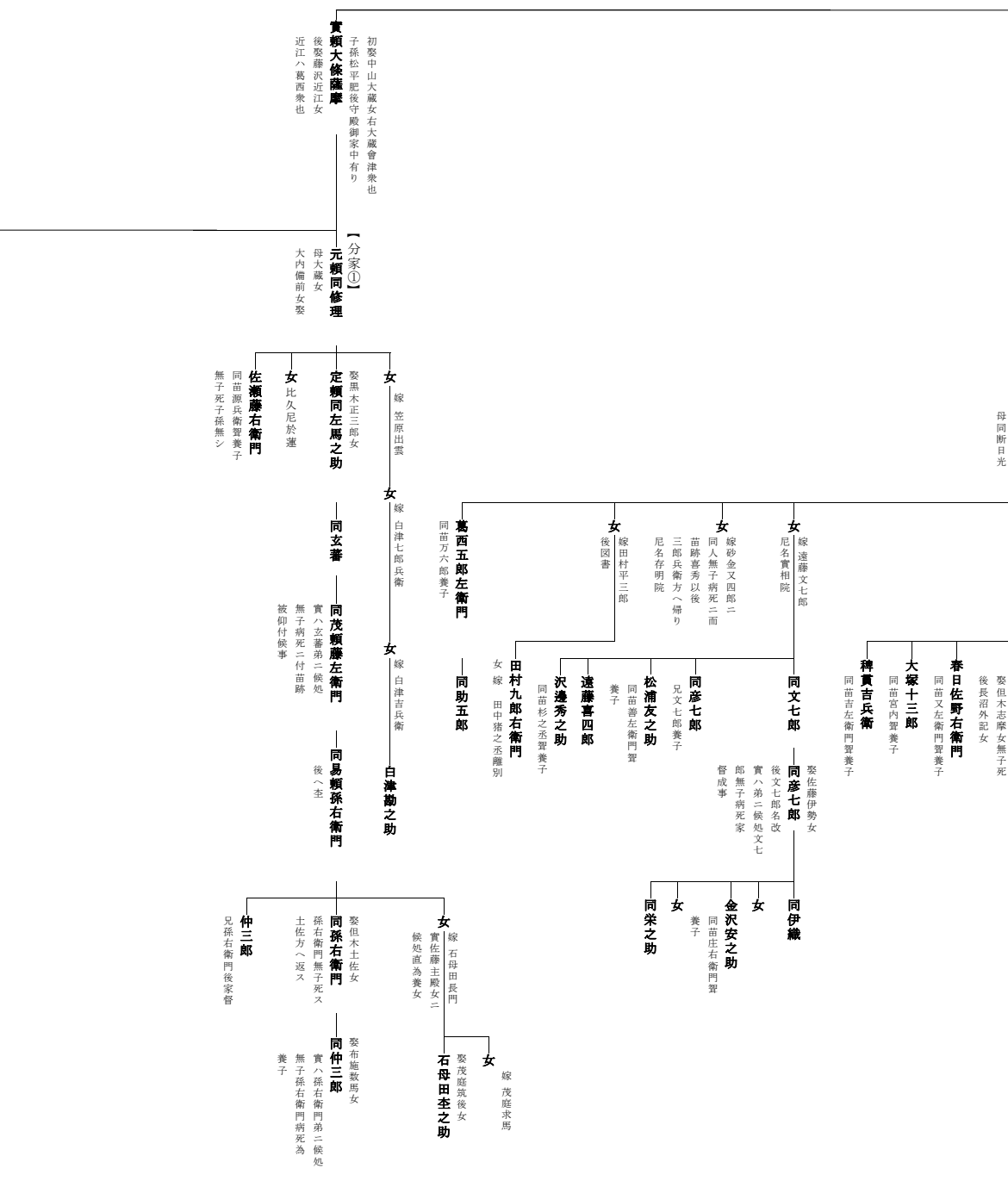
縁組

岩城勢

伊達左兵衛殿御次男

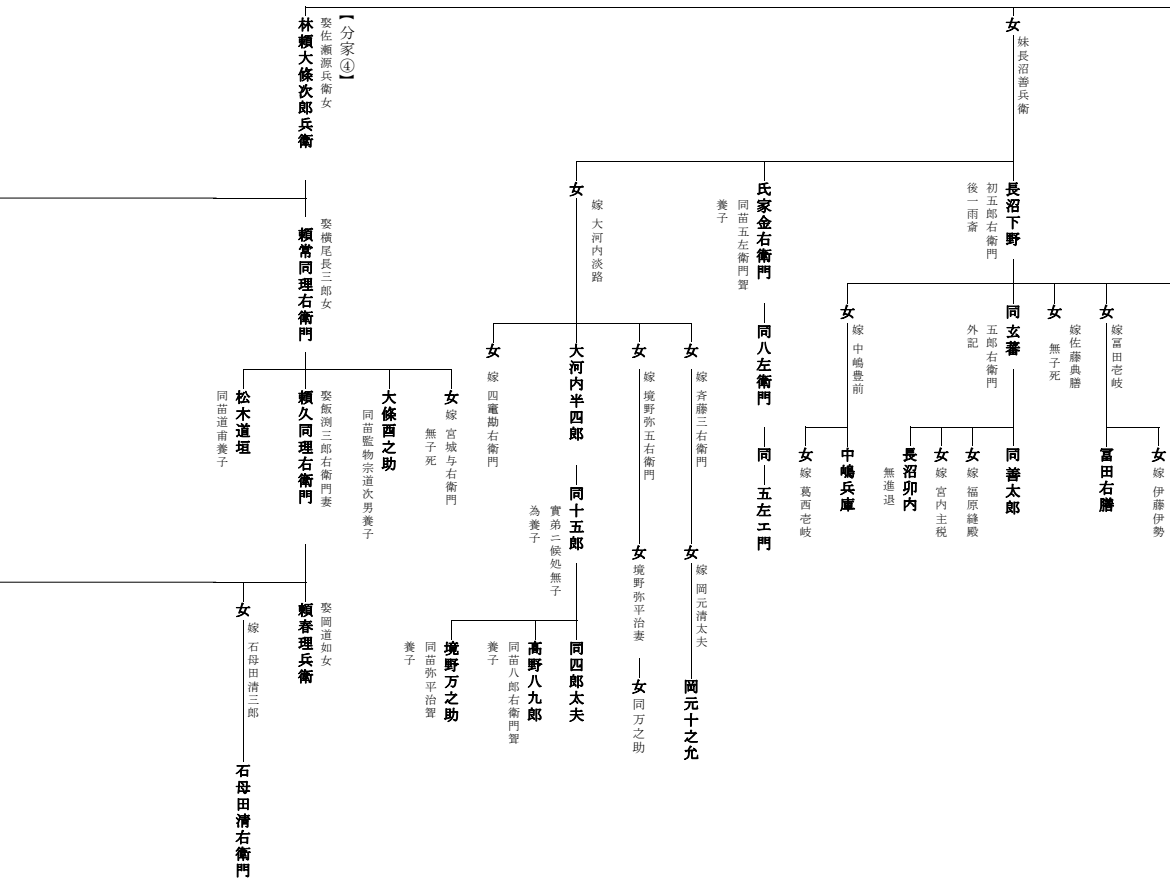
養子ニ罷成候処

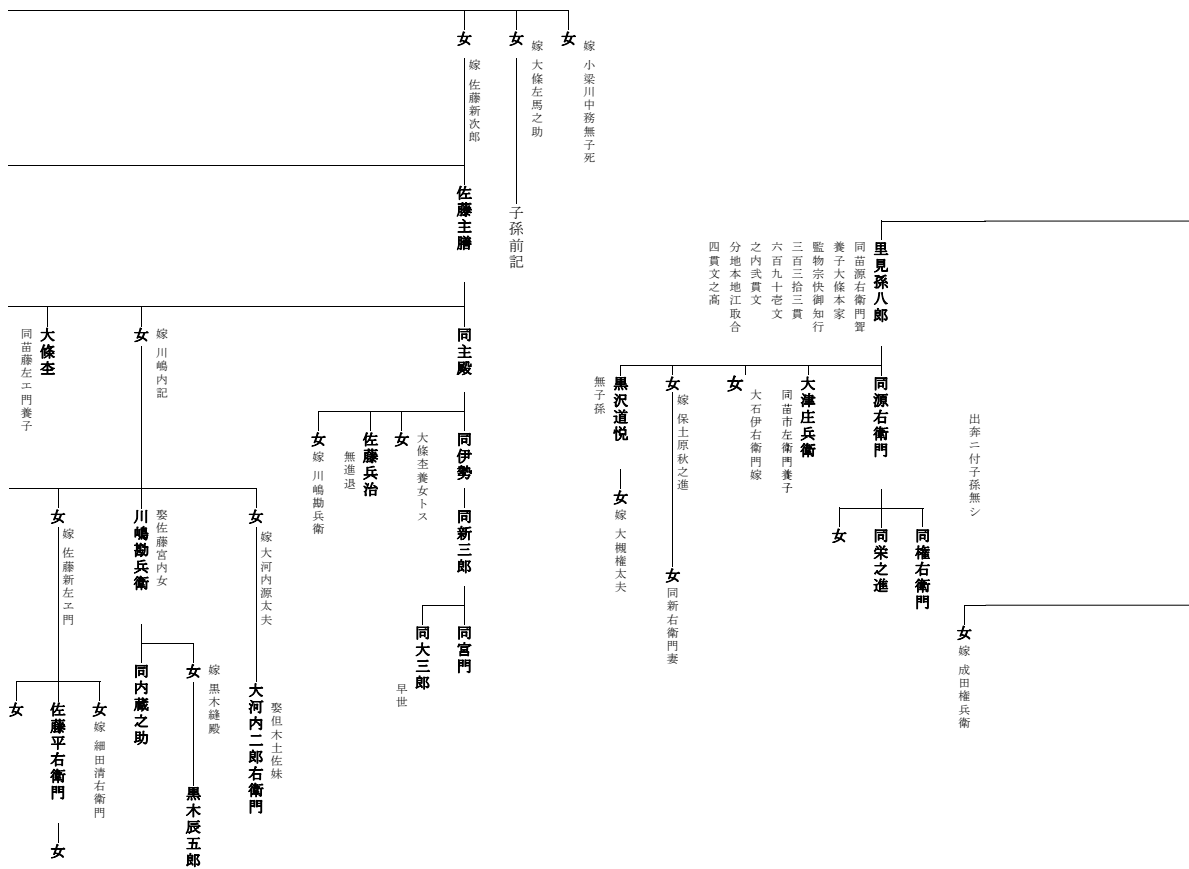
病身ニ罷成被相返

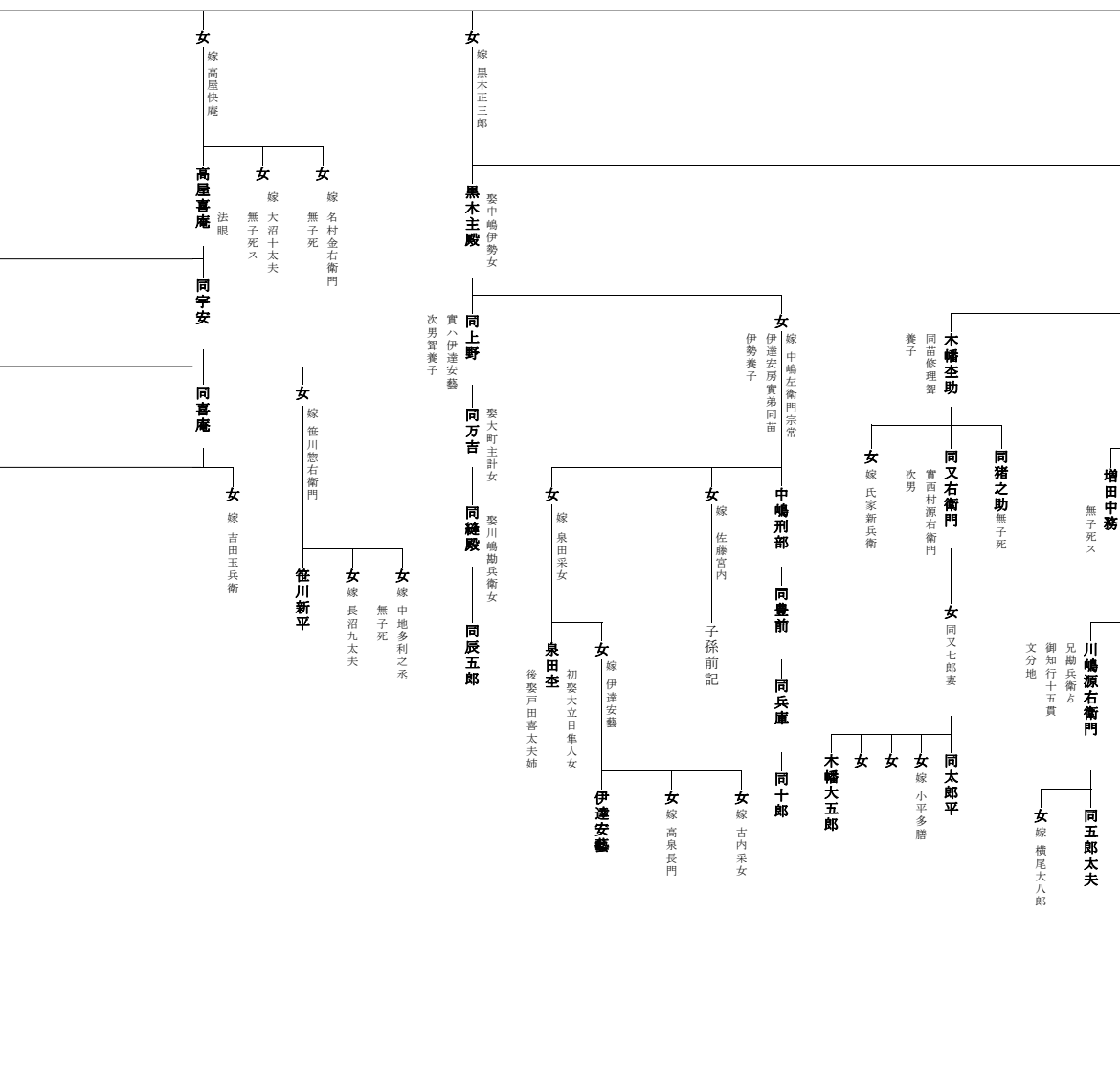


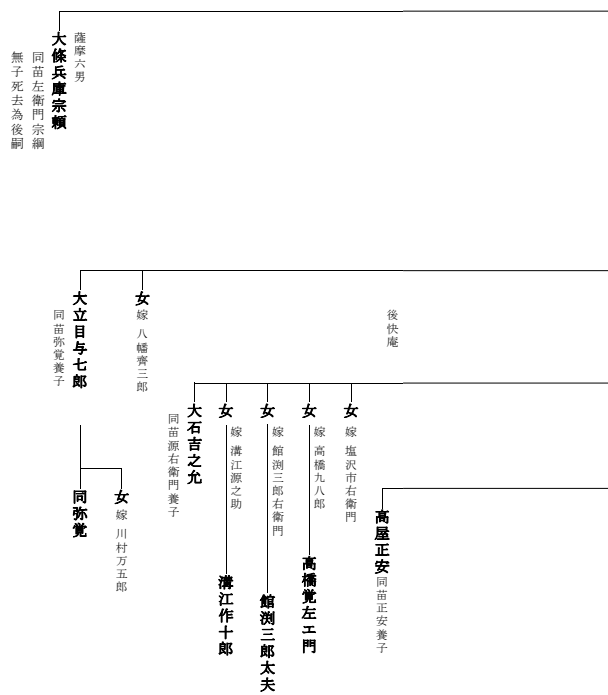
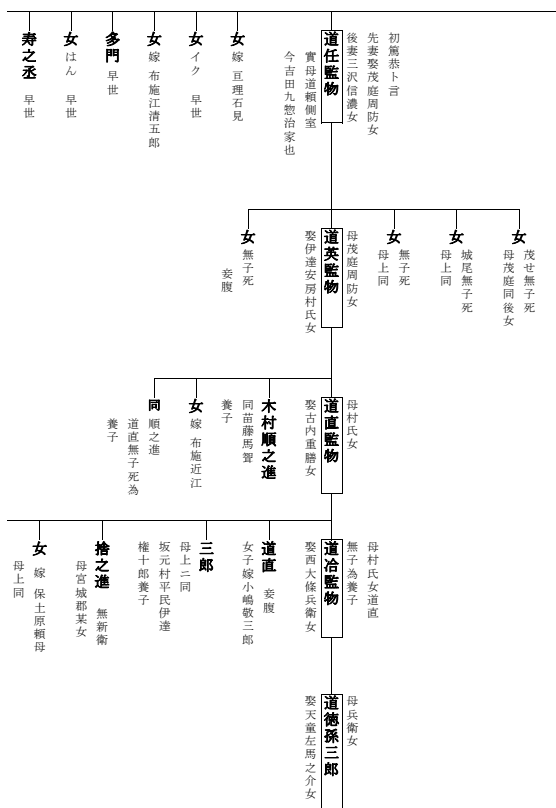
母 同断日光

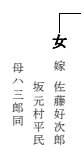
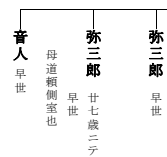












②承伝記下享保一八年六月 3 | 4 1

(表紙)

一 享保拾八年丑六月

承伝記下

式冊之内

從御先祖様御役義被相勤候義并御名改之事

一 兵庫宗頼公初之御名ハ国松様御法名ハ不求様と奉申、然二義山様御代正保元年二御国御番頭被仰付御勤被遊候内、慶安貳年二江戸御留主居役被仰付御勤二成置候、然所二早川様御部屋住承応貳年之春御懷守被仰付、段々被相勤内、万治元年十月十六日二御奉行職被仰付候、段々被相勤内御年頭御病人二被為成、寛文貳年正月廿九日如御願之御奉行職御免之上御隠居被仰付候儀而御後見様方被仰渡候由ノ事

一 監物宗快公初ノ御名ハ丑ノ助様新三郎様とも奉申、然二御法名ハ幽松様・不求様江御隠居被仰付候節無御相違御家督被仰付、直々御奉行職迄被仰付旨、原田甲斐殿を以被仰渡候由ノ事

一 大守綱村公御祝言ニ付、幽松様延宝五年三月十五日二江戸江御登被遊候、御祝言ハ同四月六日二御座候、幽松様二而ハ、御輿御受取被成置候、先様方之御渡人ハ稲葉七郎兵衛殿と申者、御貝桶ハ遠藤山城様御受取被成候、御渡人ハ田

邊權太夫殿と申者由御座候、御腰物杯ハ笠宮右衛門相勤申候、御祝言之御首尾万端御首尾好被相遊、同年四月廿二日二御下向被成置候由之事

一 監物宗道公慶安四年五月廿六日夜ノ九つ時御出生、御名初ハ千吉様、其以後金津江家督二被相成候而ハ權左衛門様、又此方江御帰參被遊候而ハ主計様、三郎左衛門様と申候、然二天和四年二月廿六日二監物様と御改被遊候事

一 延宝五年三月之内三郎左衛門様と奉申節、御小姓組被仰付、被相勤内、延宝八年正月廿八日二御申次役被仰付被相勤候由ノ事

一 天和元年十二月之内公義江之御年始御使者被仰付、同月十五日二江戸江御発足被遊候由ノ事

一 同貳年八月廿七日佐々伊賀様を以御国御番頭被仰付候事

一 貞享三年閏三月十五日若御年寄被仰付候事

一 同四年三月廿七日監物様江御奉行職被仰付由、大河内源太夫殿御上使二而江戸方被仰下候

一 元禄元年十一月十一日 日光山御普請惣御奉行伊達安芸様監物様江被仰付由、大浪九兵衛殿御上使二而御奉公を以被仰付候由ノ事

一 同六年二月之内監物様御病氣故御役目御免之願、長沼七九郎様を以佐々豊前様へ被相出候所、同三月三日御免被成置

候様被仰付候

一同五年十一月廿七日監物様仙台御立江戸江御登被成置候、此御登ハ日光山御普請御勘定相済、公義へ被相出候ニ御判形為可被遊御病氣ニ而被成御座候得共御登被成置候御病氣故原玄了老被相付御登被成候事

一監物宗道公御養子之儀御内々御願被遊候付而、元禄五年十月七日本多伊賀殿ヲ以被仰付候ハ其方義養子之儀由申聞候付筋目を以宮内土佐被仰付候由被仰出候、土佐様御家とくニハ宮内権六郎殿御子弟六之允殿被仰付候、土佐様ニ而ハ元六^(マ)五年十月十日ニ此方へハ御帰参被成候事

一古監物様御婚禮石田孫市様御女様延宝三年霜月廿六日於仙台被相調候事

一土佐様御事宮内ニ成御座候内ハ御名乗り秀清様と奉申候所此方へ御出宗透公と御改被成候事

宗頼公御上地之事

一不求宗頼公坂本本郷・根岸・真庭・高瀬・福田五ヶ村ニ而式百貫百拾三文御知行被成置候所、不求様御若年ニ而高知御拝領被成置候儀御遠慮之由ニ而御實父薩摩様方御願被相出、右御知行高之内四十九貫九百五十五文、元和五年方之地方被指上候、然テ百五十貫百五十八文ニ而御奉公被遊候、右御上地ハ高瀬・福田両村ニ而差上候事

一寛永十九年御竿入以後七拾貫文余り御竿出目御座候間、其節中濱ニ而五十貫文被指上候事

一不求様方御願ノ上寛永三年正月廿六日ニ被仰上、御新田拾五貫六百廿七文同七年ニ御竿被仰受、同九年方公義へ御役被為上候、右御新田ハ御手持方御金五十切被指上被仰受候、依之尔今御かい新田と申由ニ御座候

一不求様又候明暦四年三月十五日ニ新田廿貫五百四十五文被仰受候、右新田高之内拾八貫五百十六文坂元本郷、田代十七貫貳百八十文、畑代壹貫貳百廿六文、高壹貫四百壹文高瀬村、田代三百七十三文、畑代壹貫廿八文、高六百廿八文真庭村、田代六百貳十文、畑代八文、右三ヶ村取合廿貫五百四十五文、内田代十八貫貳百七十三文、畑代貳貫貳百七十貳文、右之通被仰受候事

一不求様御加増御拝領被遊候、承応二年閏六月十一日ニ八拾貫文御拝領被遊候、右御加増之地ハ高瀬村明屋しき九拾文、真庭村明屋しき八拾六文、坂元本郷中濱四十九貫六百八十九文、下いばのニて卅貫百卅五文、取合八十貫文御拝領被成置候事

一御同人様御代寛永十九年御検地、同廿一年ニ御割相済、御竿出目七拾貫文余り御座候内ニ而式拾貫文御拝領被遊候事
一御同人様御代寛永廿壹年八月之内佐藤新次郎殿御上地真庭

村上新田貳貫拾八文御拝領被成置候、勿論其節八軒之やしきも御拝領被成置候

一 八人之人頭ハ新次郎殿下中、渡辺久右衛門、荒但馬、庄子縫殿、荒新兵衛、足輕伊豆、同帯刀、同文二郎、同加賀、取合八人ニ御座候

一 不求様御代明曆三年ニ坂元本郷町役江御下中屋敷被相立候、右高田代貳貫四拾八文とノ土浮小路之事ニ御座候、屋しき割ハ万治三年ニ御座候、且又承応三年ニ御拝領被成候下いばの廿貫百廿五文明曆三年ニ被差上、右貳口廿貳貫百八十三文之替りニ小泉村ニ而四貫百七十文、刈田永ノ町ニ而十九貫五百四十三文、亘理真庭村ニ而金子市之丞殿御上地八貫四百六拾九文、三ヶ村ニ而卅貳貫百八十三文御割被替被仰受候、右御割被替之内小泉村永ノ町ハ御藏御帳箱ニ御座候、水帳之通相違無御座候、真庭村御割替ハ貳貫貳百五十三文、臺屋しき新三郎分四百廿四文、新次郎足輕金十郎分老貫貳百十文、肝入文右衛門分貳貫四百八十五文、右衆やしき新右衛門分五百四十九文、南やしき太衛門分三百六十六文、新次郎家中掃部分貳百四十八文、同人下中清藏分十六文、西やしき孫兵衛分拾八文、金子市之丞下中助衛門分五百四文、同人下中与藏分百廿三文、新次郎下中惣右衛門分九十四文、市之丞下中次郎右衛門分百五十九

文、新次郎下中助之丞分取合八貫四百六十九文、田代七貫七百六十文、畑代七百七文、人頭拾三人金子市之丞殿分御上地ニ御座候

御先祖様方御知行倍減之事

一 左衛門宗綱公御代貳百貫百拾三文津田豊前殿御知行被成候坂元本郷・根岸・高瀬・真庭・福田五ヶ村御拝領被成候ヲ直々不求様御知行被成置候所、元和五年ニ四拾九貫九百五十五文御上地被成置、百五十貫百五十八文ニ而御奉公被遊、右ノ御書付ハ元和六年六月廿七日之御日付ニ而大町駿河殿・永沼作左衛門殿御名付ニ而御座候、然所寛永三年ニ御新田拾五貫六百廿七文被仰受、百六十五貫七百八十五文ニ被為成候、同十九年御検地以後二割出卅三貫百五十七文御拝領貳百貫文之都合被為成候、此段ハ 不求様御自筆之御覺書ニ相ミヘ申候、其以後寛永廿一年ニ御竿出目之内貳拾貫文御拝領ニ而貳百廿貫文之高ニ被為成候、和田因幡殿・山口内記殿・奥山大学殿・富塚内藏允殿御書付其外御墨印も御座候、然所承応貳年ニ八十貫文御加増御拝領三百貫文之高被為成候、其後明曆四年ニ御新田貳十貫五百四十五文御拝領ニ而三百廿貫五百四十五文ニ被為成候、其以後 幽松様御代寛文十元年ニ新田拾六貫百四十六文被仰受候内三貫文平吉右衛門殿江被分進候、此高八一圓二笠ノ高二而被出申

候、其節迄ハ此方様御知行高三百卅三貫六百九十壺文ニ御座候所、貳貫文里見源右衛門殿へ、貳貫文大條源内殿へ被分進候故 普照様御代数年三百廿九貫六百九十壺文ニ而被成御座候、然所大條権右衛門様江廿九貫六百九十壺文之所被分進候、其後真庭村除屋しきニ而三百九文ノ所公義江御願被相出卅貫文之都合ニ権右衛門様へ被出候、御此方様御知行高当時ハ三百貫文ニ被為成候御事
惣御知行高三百貫文

内田代貳百六拾五貫九百八文

畑代卅四貫六十壺文、内卅九文田代入候

右之内ニ而村々仕分高

高卅八貫八百六十四文 本郷之内中濱高

内田代卅五貫八拾文

畑代三貫七百八十四文

米方三百九十文米ニ出候、畑方四分半一二出候

高十壺貫百卅五文 同郷之内磯濱高

内田代拾貫四百卅九文

畑代六百九十六文

米方三百七十文米ニ出候、畑方五分一二大豆出候

高卅七貫拾三文 同郷之内上道村高

内田代卅貳貫百文

畑代四貫九百十三文

米方四百拾文米ニ出候、畑方三分半一二大豆出候
高七貫三百四十八文 同郷之内下道村高

内田代六貫五百九拾六文

畑代七百五十式文

米方三百九十文米ニ出候、畑方三分半一二出候

高四拾八貫七百十式文 同郷之内坂元町高

内田代四十四貫四百八十七文

畑代四貫貳百卅五文

米方三百八十文米ニ出候、畑方四分半一二大豆出候

高畑代五百式文 同郷之内宮ノ脇御散田高

高畑代壺貫三百式拾文 同郷之内御下中三ヶ二抱

畑方四分一二大豆出候

高壺貫四文 御奉公人前ならし抱高

内田代七百九十六文

畑代三百四文

高九百十壺文 同郷之内古新田御奉公人前抱米掛

内田代八百卅六文

畑代七拾五文

高貳貫八百六十式文 同郷之内御奉公人前抱米掛

内田代貳貫貳百五十四文

畑代六百八文

米方四百卅文米ニ出候、畑代方四分一二大豆出候、御知行之内ニ而高銘ニ御座候、新田ニハ御座候へ共、御郡役相働不申候高ニ而御座候故早々御きんみ之ノ上右之通先年方被仰付来候

高拾貳百八十九文 同郷之内御散田高

田代九貫貳百九文 先年方有り来ル高

畑代壹貫八十文 年々高下ハ御座候被下候地又ハ古上

地有引故高下御座候

高百貫九百七文 同郷之内御下中印江給分高

内田代九十三貫六百五十七文 享保十八年之高是も年々

畑代七貫貳百五十文 高下御座候高

右拾貳口高坂元本郷高二御座候

高貳百四拾八貫百五拾壹文

此高之内ニ畑返不足高七拾文御座候

外

高拾壹貫九百四文 亘理郡真庭村高

田代拾貫七百九十九文

畑代壹貫百四十四文、此内ニ卅九文田代有リ

米方三百九十文米ニ出候、畑方四分壹出候

高廿壹貫百拾五文 同郡之内高瀬村之内

田代十九貫八百卅文、笠ノ濱

畑代壹貫貳百八十五文

米方三百七十文米、畑方五分一二大豆出候

右高之内本郷高と高瀬高と之仕分ヶ左之通

高十四貫六百六十文 坂元本郷高

田代十四貫五百九十九文

畑代六十壹文

高六貫七百八十六文 笠野高

田代五貫五百六十貳文

畑代壹貫貳百廿四文

高九貫七百八十六文 刈田郡圓田村之内永野町

田代三貫七百四十八文

畑代六貫卅八文

米方三百八拾文、畑方四分半一二大豆出候

高畑代壹貫四拾四文 宮城郡之内小泉村

此高ハ當時御散田ニ而被遣候事

御百姓方人馬被召仕候御定貞享三年之御定目也

一高壹貫文ニ御用夫馬貳疋下代乗馬壹疋取合三疋、但シ一日路登りか下りか片道斗御用夫馬荷物ハ定法之通

一米大豆ハ上道十里迄ハめん／＼斗落也、物成駄送仕候はつ也、但シ其所ニ而米大豆遣捨り之分ハ未進てハ為相勤不申

はつノ事

一糠藁も上道十里迄ハめん／＼金送、但、高尅貫文ニぬか
三百尅駄わり百把尅駄若百姓相對ならハ尅里之所ヲ武
拾文ツ、之駄ちん代被申筈ノ事、是又其所ニ而遣捨之分
ハ品々右同断

一高廿五貫文ニ尅人ツ、之詰夫代ニてハ高尅貫文ニ付本代
六十四文ツ、也、尅ヶ年ヲ貳両ツ、ニ而被召仕候、一日
ニ廿貳文貳分ツ、廿五貫文ニ尅人ツ、と申義ハ尅ヶ年
三百六十日相働申積リ也

一垣結代高尅貫文ニ付而本代卅七文ツ、是ハ御要害廻リ之
垣結人足ナリ、人足ニ而被召仕候ヘハ、右卅七文ハ被相除
筈、高尅貫文ニ付垣三間、輕杭尅間ニ三本ツ、百姓方々相
出シ垣結申筈也

一御立見仕候勘定仕立定法ノ事、田坪尅反之物成米尅石五
斗御座候ヘハ上毛田尅坪ニ付初七合之時ハ先田尅反之坪数
三百坪江七合ヲ懸之得者もミ貳石尅斗五合引ニ而尅石五升
米被相出候、右上毛尅石五斗方尅石五升引候ヘハ御立見相
入候、米四斗五升是ヲ中田之尅反之本代百卅文江割候ヘハ
引方三〇四分六厘と被成候事

附り追而之御了簡を以八合ノ上も割方を以毛付相極候事
一茶畑位付之事、上々茶畑五百文、上四百五文、中四百文、

下三百文、下々貳百文

一五色小役、拾人夫百文、垣結卅七文、詰夫六十四文、夫馬
八十文、入草九文、取合貳百九十文、何茂本代也

一ぬか廿文、わら十文、合三拾文、本代也

一米ハ尅石ヲ本代百文ノ代り、大豆ハ尅石ヲ六十文之代り

一上々田百七拾文、本代百文ニ付百七十六坪五合

一上田百五拾文、本代百文ニ付貳百坪

一中田百三拾文、本代百文ニ付貳百卅坪八合

一下田百拾文、本代百文ニ付貳百七十坪七合

一下々田八拾文、本代百文ニ付三百七十五坪也

一上々畑尅反ニ付八拾文、本代拾文ニ付卅七坪五合

一上畑 六拾文、本代拾文ニ付五十坪

一中畑 四拾文、本代十文ニ付七十五坪

一下畑 貳拾文、本代十文ニ付百五十坪

一下々畑 拾文、本代十文ニ付三百坪也

御下中御村方迄門明軒数

一貳百軒 御下中并上平中山御足輕迄

一九十七軒 当村除御足輕并御百姓迄

一拾四軒 真庭村除御足輕

一四十八軒 町屋しき御百姓

一廿尅軒 同所名子借屋

一七十八軒 中濱除御足輕并御百姓迄

一四十五軒 磯濱一字除御足輕迄

一九軒 赤坂除御足輕御百姓共二

一四十七軒 新濱一字除御足輕也

一六十八軒 笠ノ濱除御百姓共二

惣ノ六百廿七軒也

一坂元東町慶長十五年ニ相立候、但シ中濱方取移申由御座候、享保十六年迄百廿貳年成候

一上平御足輕町明暦二年ニ相立候、是も同年迄七拾六年ニ成候

一谷津又右衛門前之土手江御うへ立被成候杓共、延宝元年ニ式人立被置候、当年迄五十九年ニ成候

野場御書上公義江被相出候

大條兵庫代方打続此所御知行拝領被申候坂元・真庭・笠野浜野場御役野場ニ廬十三ニ而被申受候、寛文貳年之御改之時分ニも高三百廿六貫四百七拾三文亘理郡坂元村在所浜三ヶ村、此内真庭村廿九貫六百十八文寄合給分此所只今迄御受野場此度被下置候寄合給分所有之候得共、在所入合候如斯候、寛文二年十月晦日ニ桑原覚左衛門殿、春日十兵衛殿、須藤正右衛門殿江御書出シ被成候、其写手前ニ所揃被仕候、右真庭村廿九貫六百十八文之内上新田と申所雉子三つニ而御役野場ニ被

申受候、以上

延宝四年九月

清野木工之助

亀ヶ川弥左衛門

大井休左衛門殿

里見源左衛門殿

延宝六年ニ公義江御知行所改被相出候

高貳百四拾五貫七百卅壹文 亘理郡坂元本郷高

田代貳百貳拾六貫貳百卅五文

畑代拾九貫四百九十六文

内

高貳百八拾文田代百六十三文 白山坂海道倒

畑代百十七文

高田代貳貫四十八文、御下中屋しき倒、但シとふからし之事也

高四貫貳百五十三文田代四貫百拾六文 地続永荒高

畑代百卅七文

高貳百卅九貫百五十文 大條監物御知行高

田代貳百拾九貫九百八文、内四貫六百八十六文切替入

畑代拾九貫貳百四十貳文、内四百五十七文切替入

同村新田高

高四拾貳貫五百八拾八文内、田代卅八貫七百六拾文

畑代三貫八百廿八文

此内

高卅貳貫四百六拾文田代廿八貫六百四十壹文 大條監物

畑代三貫八百十九文

高拾貫百廿八文田代拾貫百壹拾九文 大條猪之助

畑代九文

同郡高瀬村

高七拾五貫七百拾五文

内九拾文明屋しき

百九十四文倒目

内畑代百七拾六文 安房殿

高拾八文

監物

田代十七文

畑代壹文

田代七拾貫貳百五十貳文

畑代五貫四百六十三文

内

高田代壹貫百四十壹文 地続永荒

高五十七貫九百五十七文田代五十四貫貳百七十六文 安房殿

畑代三貫六百八十壹文

高拾六貫四百廿三文田代十四貫八百十八文 大條監物

畑代壹貫六百五文

外新田高

高五貫廿壹文田代三貫四百五十三文

畑代壹貫五百六十八文

此内

高畑代五百拾八文 安房殿

高壹貫五百三文田代四百五十六文 大條監物

畑代三貫四十七文

高三貫文田代貳貫九百九十七文 平吉左衛門

畑代三貫文

同郡真庭村

高五十貫七百十貳文内四百五文明屋しき

壹貫七百六十五文切替被仰受候地続

田代四拾五貫八百廿六文

畑代四貫八百八拾六文

内

田代六拾三文倒目四十文 大條監物

廿三文 柴田九郎兵衛

高貳貫三百八十七文

田代貳貫貳百七十三文 地続永荒

畑代百拾六文

高拾九貫七百五十三文田代拾七貫九百廿八文 大條監物

畑代壹貫八百廿五文

高五貫文田代四貫五百廿八文 中津川左覺

畑代四百七十文

高四貫八百五十九文田代四貫五百拾八文 柴田九郎兵衛

畑代三百四十壹文

高三貫四百五十文田代三貫六十三文 平太郎兵衛

畑代三百八十七文

高三貫文田代貳貫六百七十六文 金子七郎右衛門

畑代三百廿四文

高五貫文田代四貫四百六十文 香味孫助

畑代五百四十文

高六貫八百八十三文田代六貫三百卅貳文 錦戸五郎兵衛

畑代五百四十九文

高畑代三百拾九文 日野又兵衛

同村新田

高三貫四百七拾六文

内

高九百六拾六文田代九百卅三文 大條監物

畑代三拾三文

高壹貫四百四文田代壹貫百九十五文 日野又兵衛

畑代貳百九文

高七百八十貳文田代六百五十五文 平太郎兵衛

畑代百廿七文

高田代貳拾三文 柴田九郎兵衛

高 三百壹文 御蔵入

右之通御座候、此末本地新田之分ヶ入用之儀も有之候ハ、見合首尾可申事

御知行高奉公人前百姓前分ヶ

高貳百七拾壹貫六百拾文、坂元本郷新田共二

田代貳百四拾八貫五百四十九文内廿八貫六百四十壹文新田

一百卅貳貫七百九十文 奉公人前

一百拾五貫七百五十七文 百姓前

畑代廿三貫六十壹文内三貫八百十九文新田

一拾壹貫八百十文 奉公人前

一拾壹貫貳百五十壹文 百姓前

右之外高瀬高・真庭高奉公人前・百姓前略之

坂元本郷真庭高瀬御蔵入新田并御給所御竿入年号之事

一寛永拾九年御分領中惣御檢地此時之御竿入ヲ御本地と申也

一正保元年、同四年兩年之御竿入明屋しき代、是茂御本地也

一明暦四年御竿入本郷・高瀬・真庭共二是ヲ古新田と申也

一寛文四年御竿入真庭御蔵入新田他給人新田白山坂海道倒替

地也

一寛文九年御竿入 今津御新田也

一同十一年御竿入 坂元本郷真庭高瀬^ベニ是ヲ後新田と云

一同年御竿入 地続切替新田本郷真庭高瀬^ベニ

一延宝三年御竿入 是ヲ切替新田と申也

一元禄元年ニ大肝入御役料江御竿相入候得共、是ハ出入有之、

此御竿ハ被相除候事

一同三年ニ御竿入 此新田ヲ坪刈と申也、大肝入役料也

右之通御竿入年号ニ御座候、地形出入等も有之、御竿入之年号等せんさく仕候ハ、右之年号を以せんさく可仕事

③密傳記卷第二（貞享二年） 4—4

（表紙）

「密傳記卷第二」

坂元城主元祖并所々城築之事

一亘理郡坂元城主元祖ハ坂元大膳太夫ト申、初ハ同郡本郷之内新城ニ居住、然所ニ居館高シテ屏風障子等朽、其上水不自由ニテ萬事不勝手之由ニて同本江之内中川原へ取移被申候所ニ、是又平場ニて要害悪敷御座候ゆへ古館^{クラ}江取移被申候由承傳申候事

一右古館ハ今之愛宕山ニ而御座候、此古館ニ居住之時分相馬

ヨリ敵乱入、大膳太夫打死被申候、其節下中分ニも在之候哉、又支配之給主衆ニも候哉、今岡村之内中山屋鋪甚兵衛先祖志子田甚兵衛ト申者も打死仕候、右大膳太夫息男其頃十二三ニて御座候処ニ敵及乱入己ニ危相見申候節、城之内ヲ忍出不知行方落行申候ヲ商人捕候而、方々江被売廻關東之内之在家ニ住居被申候由承傳申候事

一大膳太夫ニ而ハ打死与申候得共、下中堅固ニ城を守、大膳太夫役宅に新夫相入女子老人有之候ヲ守立罷在候由之事

一大膳太夫息男關東之内ニ住居与申候而田畑之働ニ申候所ニ元来家業ニ無之故、難行苦行にて月日ヲ送り被申候処ニ、頃ハ下春之初ニ苗代の鼻取ヲ被申候所ニ、或人遠乗ニ罷出候ヲ見申候而、此若子時ノ旦那ニ向申候ハ苗代ヲかき申候馬ハ自由不罷成候共、あの遠乗ニ罷出候馬ヲハ自由可仕由申を、或こも僧行懸り此言ヲ承不思議の事ヲ申者かなト聞ケ間歎敷思候所ニ若子の申儀ヲ馬乗承付我力乗たる馬ニ若子ヲ乗セ見申候へハ、乗様之善悪ハ知不申候へとも、自由ニかけ引被申様ヲ弥こも僧も不審ニ存、行末見届申度ト存候所ニ最早苗代のしろも仕廻宿へ罷帰候間、跡ヲしたい勸進ながら参内江入湯ヲもらい様子伺申候へハ宮仕の立ふるまい等もおとなしく幸焼米あかり申候ヲこも僧くわセ見申候処ニ、只人ニてハ無之喰様杯も各別故、其夜ハ其所ニ

致一宿一所ニふし二而、若子へ遺所を様々ニ向候へハ奥州
亘理郡坂本之城主坂本大膳太夫嫡子ト名乗申ニ付而、翌日
天明候而亭主ニ所望致身之代相立、右之こも僧つれ立坂本
江参候而大膳太夫下中衆へ右之段申聞候へハ何茂大悦安堵
之思をなし、従夫養育仕候而大膳太夫家督ニ相立、坂元之
城主ニ罷成候由之事

一右之古館ハ不吉之城之由ニて 公義御願被申被相出、今之
坂本之城其節ハミのくひ山ト申候ヲ改而築被申由ニ御座、
其時從 公義之御奉行ニハ濱尾善斉と申衆被相付候由承傳
申候事

一右之若子坂元三河と申候由、又こも僧者志子田甚兵衛跡目
ニ相入ニ而三河を守立、其以後亘理美濃様脇谷へ御所替ニ
て御移候時分三河ニても御供ニて参、尤甚兵衛跡目ニ入申
候、こも僧も参候由承傳申候事

坂元城主移替公義江御書上之事

亘理郡坂本私居住屋鋪元来方之館主承傳申候分左ニ

書上仕候覚

同郡坂元本郷ミのくび館元主

一 坂元三河

右三河儀ミの首山何年ニきつき何ヶ年罷在候哉承傳不申
候、三河ト申候ハ亘理美濃守殿御下中分ニ御座候由承傳候

得共慥ニハ相知不申候、其以後何年之頃ニ候哉、貞山様被
遊御覽濱尾善斉と申衆ニ被仰付、縄張等仕置候由承傳申候
得共、是以慥成儀ハ無御座候

一同二代目 後藤孫兵衛

何ヶ年住居申候哉年数ハ相知不申候事

一同三代目 黒木肥前

何ヶ年住居申候哉年数ハ相知不申候事

一同四代目 津田豊前

右豊前儀六七ヶ年程住居仕候由乍去慥ニハ相知不申候事

一同五代目 大條左衛門

元和貳年方同三年迄式ヶ年住居仕候事

一同六代目 大條不求

不求儀右左衛門家督ニ被仰付、元和四年方寛文元年訖、

四拾四年住居仕候事

一同七代目 大條幽忝

寛文貳年方天和元年迄式拾年住居仕候事

右之通承傳申候分書上仕候、私儀天和和式年同氏幽忝家督被下
置、当年迄三ヶ年ニ御座候、右同氏左衛門代方私代迄六拾九
年住居仕候、以上

大條監物

貞享元年十一月八日

渡辺七兵衛殿

右之御書付鈴木九兵衛御使者にて同日仙台へ被為差登候、右御代々御住居之儀岡村上臺屋敷御百姓九郎右衛門九十余歳ニ而病死仕候存命之内咄申候ヲ承置御用立申者也

坂本堂々并御縁日之事

古館六月廿四日

一愛岩^(マ)

寛永九年ニ相立申候

大仙蔵山四月七日

一神明

何百年已前ニ相立申候哉相知不申候

城之内三月廿二日

一明現

右同断

そうせん山七月七日

一薬師

右同断

新城山

一羽山権現

右同断

瀧山四月八日

一薬師

右同断

同所十月八日

一羽山権現

右同断

根岸山三月廿五日下午天神之事也

一天神宮

右同断

とはな山七月廿七日

一諏訪明神

右同断

磯山三月十七日

一観音

まいわ山

一熊野宮

何百年已前ニ相立候哉相知不申候

とうのくほ

一熊野社有り

右同断

白山坂

一白山権現社在り

右同断

水神山

一水神宮

右同断

合拾四ヶ所

真庭村

おりい山

一熊野宮社

何百年以前ニ相立候哉相知不申候事

わらひ

一ひしやもん社在り

右同断

真庭原九月十九日

一大明神

右同断

合三ヶ所

笠野濱

笠野六月十五日

一牛頭天王

大同貳年ニ相立申候

同所

一セウくわんおん

何年已前ニ相立申候哉相知不申候

合式ヶ所

亘理郡坂本

一丈六堂

宝治三年大歳己酉三月一日

但、右之通御城擣鐘の銘ニ御座候付而其返写差出申候、

右丈六堂ト御座候処ハかうかの辺ニ可在之かと申事ニ

御座候事

貞享二年二月十五日

右之通先大肝煎齊藤六右衛門方々公義江書上仕候ニ付而写置者也

右之外

中山

一熊野権現

公義へハ不申上候

中山

一白山権現

右同断

松ノ木

一熊野権現

右同断

坂本所々古館之事

亘理坂本元郷

一町北古館

誰之住居被成哉相知不申候

同村之内

一新城

坂本大膳太夫居住

同村之内

一愛岩山

右同居居住

同村之内

一さる内古館

誰之陣場ニ候哉相知不申候

同村之内

一陣ヶ森

右同断

同郡高瀬之内

一高瀬古館

右同断

右之通大守様御国廻りも可有之ト貞享貳年ニ被相改候事

坂本城并御廟所古館要害堀高廣之事

一上ノ堤 長サ百三間、横五十式間廣所ニテ

一増堀 長サ八拾八間、横七間半廣所ニテ

一稗沼 長サ六拾間、横四拾六間廣所ニテ

一御裏堀 長サ百卅四間、横八間

一川名七兵衛前堀 長サ百拾七間、横三間半

一大堀 長サ九拾五間、横八間廣所ニテ

一田中堀 長サ百九拾八間三方相廻シ、横八間廣所ニテ

一羈尾 長サ四拾貳間、横拾壹間

一明部堀 長サ四拾九間、横五間

一から堀 長サ七拾五間、横拾間、深サ六間

一御城 東北ノ角法八間半、北ノ方高七間、西北ノ角法高八間、西南ノ角七間半、西東角七間半

一御城廣サ 西ノ方拾六間、東ノ方拾九間、北三拾四間、南貳拾九間、此坪五百五拾壹坪貳合五夕

一愛宕堂 高サ貳拾貳間半、横拾間、西東立卅三間北南

一御廟所 高サ八間半、横四拾間程、西東長サ段々山続但北

南

一古館^{藏角} 高サ七間半、横拾七間半、北南長サ五拾七間西東

右之通御領内御城・御廟所・古館高廣并御要害御堀其之長横

ニ御座候事、右ハ

大守様御国廻りも可在之かと貞享二年ニ被相改候事

坂本御領内道法并大仙藏谷地長横之事

一貳拾五丁拾五間 御城方中濱海はた迄

一三拾壹町卅七間 同所方新地堺迄

一貳拾五丁三拾七間 南大森境迄

一三拾貳丁廿九間 同所方高瀬境迄

一壹里壹町拾四間 同所方金山堺迄

一六町半 同所方愛宕山迄指渡シ

一壹町卅貳間 同所方東山くさ迄指渡シ

一八丁拾八間 同所方須ヶ窪辺迄指渡シ

一五町 同所方御町迄

一壹里廿八町六間 高瀬境方新地堺迄

一壹里廿貳丁廿九間 金山堺方中濱海はた迄

一壹丁卅七間 御城方御廟所迄

一拾町五拾七間 大仙藏谷地上ノ堤方山室迄

一五拾貳間横

一坂本町町間三町四拾九間、同所町ヨリ松ノ木太右衛門前迄拾八町四拾八間、同所町方拾九町六間久保間勘十郎前迄、

同所町方貳拾三町五十三間真庭村肝煎文右衛門前迄、同所

町方磯濱江壹里四町四拾七間、同所町方貳拾貳町拾三間中

濱迄、同所方貳拾五町三拾間内野濱迄、同所町方壹り四町

四拾八間笠野迄

右之通大守様御国廻りも可在之かと貞享二年ニ被相改候事

坂本方岡方所々之道法駄賃代之事

一坂元町方新地町迄壹里卅五町四間 代五拾九文

一新地町方駒ヶ嶺町迄卅四町五拾貳間 代貳拾九文

一駒ヶ嶺町方黒木町迄壹里八町 代三拾七文

一黒木町方中村町迄貳拾八町 代貳拾三文

右坂元町方中村町迄四里卅三町五拾六間、駄賃代百四拾八文、
から尻ハ右之三ヶ二也

一坂元町方山下町迄壱り貳丁四拾間 代四拾七文

一山下町方亘理町迄貳り四町卅貳間 代六拾四文

一亘理町方岩沼町迄貳里拾九町四十間 代七拾六文

一岩沼町方増田町迄壱り廿六間 代五拾五文

一増田町方中田町迄三拾壱丁 代貳拾六文

一中田町方永町迄卅貳町四十間 代貳拾七文

一永町方仙台北目町迄卅三町 代貳拾八文

右坂元町方北目町迄拾里八町五拾八間、駄賃代三百貳拾三文、
から尻ハ右之三ヶ二也

一坂元町方金山町迄貳り卅丁三拾間 代七拾壱文

一金山町方丸森町迄貳拾八町四拾間 代貳拾文

一丸森町方峠迄貳り八町廿間 代五拾六文

一峠方梁川迄貳り卅町五拾貳間 代七拾壱文

右坂元町方梁川迄八里廿六町四拾間、駄ちん代貳百拾八文、
乍去丸森方梁川迄ハ山中故駄ちん代其時々相違之儀も在之候

事

一坂元町方筆甫迄六里拾貳町三十間 駄賃代不知

一坂元町方金山町迄貳り三拾町 代七拾壱文

一金町方角田町迄貳里四拾間 代五拾七文

一覺田町方白石迄四里拾六町廿間 代百廿三文

右坂元町方白石迄九里拾壱町、駄ちん代貳百五拾壱文二御座
候

一坂元町方山下町迄壱り廿町四十間 代四拾七文

一山下町方亘理町迄貳り四町卅貳間 代六拾四文

一亘理町方舟岡迄貳り拾五町廿八間 代七拾文

右坂元町方舟岡迄六里拾町四拾間、駄ちん代百八十六文二御
座候事

一山下町方金津町迄貳り廿町廿三間 代五拾七文

一金津方覺田迄壱り拾三町 代三拾七文

一亘理方金津迄貳り卅五町 代七拾七文

一亘理方角田迄貳り廿九町卅間 代八拾壱文

但夜討か坂返り

一金山町方金津迄壱り廿八町五十三間 代四拾五文

一金山町方新地町迄貳り卅五丁廿六間 代不知

一金山方駒ヶ嶺迄三里廿四町九間 代九拾貳文

濱方道法之事

一今神湊方今神濱迄 貳町四拾三間

一今神濱方今泉迄 拾壱丁四拾七間

一今泉濱方釣師迄 貳拾五町四拾間

一釣師濱方埦濱迄 拾壱町五間

一埦濱方磯浜迄 拾六丁卅四間

一磯浜方中濱迄 拾八町卅四間

一中濱方内野迄 貳拾三町貳拾間

一内野方笠ノ迄 拾五町拾八間

一笠ノ方花釜迄 拾貳町

一花釜方吉田迄 貳拾六町三拾間

一吉田濱方大畑濱迄 貳拾七町

一大畑濱方長瀬濱迄 四町拾六間

一長瀬濱方鳥屋崎濱迄 壱り貳町

一鳥屋崎濱方箱根田濱迄 八町三拾間

一箱根田濱方荒濱迄 七町三拾間

右之通方々道法駄賃代記置申候、右ハ貞享貳年四月之内改申候ヲ以写置申者也

④密傳記卷第三（元禄七年） 4—5

（表紙）

「密傳記卷第三」

從御先祖様御役儀御勤仕并御改名之事

一兵庫宗頼公初之御名ハ国松様、御法名不求様ト奉申、然
ニ義山様御代正保元年御国御番頭以被 仰付御勤仕被遊候
内、慶安貳年ニ江戸御留主居役被 仰付、承応貳年之春御

留主居御番ニ江戸へ御登被成置候、然所ニ 綱宗様御部屋
住之時分直々御懷守ニ被相付御勤仕被遊候、其内万治元年
十月十六日御奉行職被 仰付被相勤候処ニ御病人ニ被為成
御役儀被相勤御事御不叶ニ付而御隱居御願被相出候ハ、寛
文貳年正月廿九日如件御願之御家老職御免之上御隱居被仰
付候段両御後見様方被仰渡候事

一前監物宗快公初之御名ハ丑之助様、新三郎様ト奉申、御法
名ハ幽松様、不求様江御隱居被仰付候節御家督無御相違被
下置、其上ハ家老職迄被仰付旨原田甲斐様ヲ以被仰渡御勤
仕被成置候御事

一 大守綱村公御祝言ニ付幽松様延宝五年三月十五日江戸へ御
登被遊、同四月六日御祝言被遊候、其節幽松様ニテハ御輿
御請取被成候、御渡人稲葉七郎兵衛殿、御貝桶ハ遠藤山城
様御受取被成候、御渡人ハ田辺権太夫殿、其時分御腰物持
ハ砂金甚左衛門相勤申候、御祝言之首尾御仕廻、被遊候而、
同年四月廿二日ニ幽松様ニテハ御下被成置候事

一 監物宗道公慶安四年五月廿六日夜九ツ時御出生、御名初ハ
千吉様、其以後大條藤左衛門様、御家督ニ被為成而方権左
衛門様ト御改名、又此方へ御帰参被成候而主計様、三郎左
衛門様ト奉申、然ニ延宝五年ニ主計様ヲ被相改三郎左衛門
様ニ被為成、天和四年二月廿六日三郎左衛門様ヲ被相改監

物樣ニ被為成候事

一延宝五年三月之内三郎左衛門樣御小性組被仰付被相勤之内
延宝八年正月廿八日ニ御申次役被仰付被相勤候御事

一天和元年十二月之内三郎左衛門樣 公義江之御年始御使者
被仰付、同月十五日ニ江戸へ御発足被遊候御事

一天和式年八月廿七日三郎左衛門樣佐々伊賀樣於御宅御国番
頭以被仰付被相勤候御事

一貞享三年閏三月十五日三郎左衛門樣へ若御年寄御役目被仰
付被相勤候御事

一貞享四年三月廿七日ニ監物樣へ御奉行職被仰付候由、大河
内源太夫殿御上使ニて江戸へ被仰付候御事

一元禄元年十一月十一日、日光山御普請惣御奉行伊達安芸樣、
監物樣御兩人樣へ被仰付由、大浪九兵衛殿御上使ニて御奉
書ヲ以被仰付候御事

一元禄元年十一月廿九日、日光山御普請ニ付監物樣仙台方江
戸へ御発足、江戸へハ同十二月六日ニ御着被遊、御供衆五
拾九人日光御詰中ハ五拾五人之御人積リニ御座候

一元禄三年二月十日ニ監物樣江戸本所方日光山へ道中四日ニ
被出成、同年七月五日ニ日光ヨリ江戸へ御帰被成候、同年
十一月廿七日ニ江戸御立、仙台へハ同十二月六日ニ御着被
遊、同月十一日ニ 大守綱村公へ御目見被成候御事

一元禄五年十一月廿七日、監物樣仙台御立、江戸へ御登被

成候而同十二月六日ニ江戸御着被遊候、此御登ハ監物樣御
病氣ニて御用も不被相勤候へ共、日光山御普請御勘定相濟
公義江被相出候ニ御判形為可被遊御登被成、置候、御病氣
故原玄了老被相付被為相登候御事

一元禄六年正月三日、監物樣江戸御用被相仕廻、御国元へ御
下被成候、仍仙台へハ同月十三日ニ御着被遊候御事

一元禄六年二月十日、監物樣御病氣故御役目御願長沼七九郎
樣ヲ以佐々豊前樣被相出候所、同年三月三日御免之段被仰
渡候御事

一土佐宗秀公初之名ハ権十郎樣ト申、宮内ノ御家督ニ被為成
ニ而以後内膳樣、其後土佐樣ト奉申候、然ニ此方江御帰参
宗道公御養子ニ被為成候ニ付、元禄六年三月三日ニ御国番
頭被仰付候、右御番頭被仰付候得ハ監物樣へ御役目御免之
仰渡之節同前ニ被仰付候御事

一元禄七年夏中土佐樣ニても御病氣ニて御役目被相勤儀不被
為成ニ付而御役目御免之御願被相出候付而御願之通御番頭
御免被成候御事

幽松樣御隱居之事

一天和式年三月廿五日、幽松樣如御願之御隱居被仰付、御家
督無御相違三郎右衛門樣へ被仰付候、御隱居以後ハ御中屋

敷二被為成御座、同所二て御落命被遊候御事

監物様御養子之事

一 監物宗道公御實子就無之ニ御養子之儀御内々御願被遊候付而、元禄五年十月七日日本多伊賀殿を以被仰付候ハ、其方儀養子之儀内々申聞候付而筋目を以宮内土佐被仰付候由被仰出候、土佐様御家督ニハ宮内権六郎殿御子息六之允殿被仰付候、土佐様二てハ元禄五年十月十日此方江ハ御帰參被成候御事

宗道公御祝言之事

一 監物宗道公主計様卜奉申時分石田孫市様御息女様延宝三年霜月廿六日於仙台御婚禮被相調候、御乗物請取向井彦右衛門、御貝桶請取砂金甚左衛門・後藤大隅殿於御屋敷請取、依之向井彦右衛門ニ御太刀御馬代金老切被下之、御乗物受取申候節御乗物之脇ニて遣申候、石田孫市様御家来板橋次郎右衛門、御太刀目録遣申候御祝言之節惣差引向井彦右衛門、砂金甚左衛門ニ被仰付候事、御祝言之晚龜川弥左衛門、清野奎助、向井彦右衛門、砂金甚左衛門、谷津九郎右衛門ニ主計様・奥様方御樽代百疋宛被下置候御事

宗道公御名乗御拝領之事

一 監物様未主計様之時分延宝四年正月十九日於御城 大守綱村公方宗道卜御名乗御直シ 御直筆ニ御杓原江被遊御拝領

被成候事

宗秀公御名乗之事

一 土佐様御名乗本ハ透清様ニて被成御座候所、大條御家督ニ被為成候二而方宗秀公卜御改被成候事

宗頼公御上地之事

一 不求宗頼公坂本本郷・根岸・真庭・高瀬・福田五ヶ村ニて貳百貫百拾三文之御知行高二御座候所、不求様御若年ニて高知御拝領被遊候儀御遠慮之由ニて御実父薩摩様方願被相出右御知行高之内四拾九貫九百五拾五文元和五年之地方被指上、就テ百五拾貫百五拾八文ニて御奉公被遊候、右御上地ニハ高瀬・福田両村ニて被指上候由及承申候事

宗頼公御新田御拝領之事

一 不求宗頼公御新田拾五貫六百廿七文寛永三年正月廿六日ニ被仰上、同七年ニ御竿被相入、寛永九年方御役被相濟候、右御新田ハ御手前方御金五拾切被指上被仰上候付、御買新田卜申由及承候事

一 不求宗頼公御新田貳拾貫五百四拾五文明曆四年三月十一日ニ被仰請候、右御新田高之内拾八貫五百拾六文坂元本郷内〈田代拾七貫貳百八拾文、畑代老貫貳百卅六文〉、高老貫四百老文高瀬村内〈田代三百七拾三文、畑代老貫貳拾八文〉、高六百貳拾八文真庭村内〈田代六百貳拾文、畑代八文〉、三ヶ

村合貳拾貫五百四拾五文内〈田代拾八貫貳百七拾三文、畑代貳貫貳百七拾貳文〉右之通被仰請候御事

宗頼公御加増之事

一 不求宗頼公承応二年閏六月十一日ニ八拾貫文御加増御拝領被遊候、右御加増之地ハ高瀬村明屋敷九拾文、真庭村明屋敷八拾六文、坂元本郷中濱四拾九貫六百八拾九文、下伊場野ニテ三拾貫百卅五文、合八拾貫文御拝領被遊候御事

一 不求宗頼公寛永九年御検地、同貳拾壹年ニ御割相済、御竿出目七拾貫文余之内貳拾貫文御拝領被遊候御事

一 不求宗頼公寛永貳拾壹年八月之内佐藤新次郎殿御上地真庭村上新田貳貫拾八文御拝領被成候、右高之内三百七拾八文下中渡辺久左衛門分、貳百五拾文下中荒但馬分、貳百六拾六文庄子縫殿丞分、貳百拾壹文下中荒次郎兵衛分、百八拾貳文足輕四郎兵衛分、百四拾八文足輕帶刀分、貳百拾六文同文次郎分、三百六拾七文同加賀分、合貳貫拾八文、右高御拝領之時分右八人之屋敷八軒も御拝領被遊候御事

宗頼公御代御割替高之事

一 不求宗頼公御代明暦三年坂本元郷町後江御下中屋敷被相立候、右高田代貳貫四拾八文今之土浮小路之事ニ御座候、屋鋪割ハ万治元年ニ御座候、且又承応三年御加増ニ御拝領被成候下いばの三拾貫百卅五文明暦三年ニ被差上、二口合

卅貳貫百八拾三文之替リニ国分小泉村ニ而四貫百七拾壹文、刈田永ノ町ニテ拾九貫五百四十三文、亘理真庭村ニテ金子市之充殿御上地八貫四百六拾九文、三ヶ村ニテ合卅貳貫百八拾三文御割替ニ被仰渡候、右御割替之内小泉村・長之町ハ御帳箱ニ御座候水帳之通相違無御座候、真庭村御わり替ハ貳貫貳百五拾三文台やしき新兵衛、四百卅四文新次郎足輕金十郎、壹貫貳百拾文肝入文右衛門、貳貫四百八拾五文あらしき新左衛門、五百四拾九文南屋敷太左衛門、三百六拾六文新次郎下中掃部、貳百四拾八文同入下中清藏、拾六文ほそ屋敷孫兵衛、拾八文市之允下中助左衛門、五百四文同入下中与蔵、百三十三文新次郎下中与惣左衛門、九拾四文之允下中次郎左衛門、百五拾九文新次郎下中助之允、合八貫四百六拾九文内〈田代七貫七百六拾貳文・畑代七百七文〉人頭拾三人何茂金子市之允殿御上地ニテ御座候事

御先祖様方御知行倍減之事

一 左衛門宗綱公貳百貫百拾三文ニテ津田豊前殿御知行被成候坂元本郷・根岸・高瀬・真庭・福田五ヶ村御拝領被成候ヲ直々不求宗頼公ニテ御拝領被成候所ニ元和五年ニ四拾九貫九百五拾五文御上地ニ被成、百五拾貫百五拾八文ニテ御奉公被遊候、右御書付ハ元和六年六月廿七日之御日付ニテ大

町駿河殿、永沼作左衛門殿御名付ニて御座候、然所ニ寛永三年ニ御新田拾五貫六百廿七文被仰請、百六拾五貫七百八拾五文ニ被為成、寛永拾九年御檢地以後ニ割出卅三貫百五拾七文御拝領、貳百貫文之都合ニ被為成候、此段ハ不求様御自筆之御覺書御黒印箱ニ御座候、其以後寛永廿壹年ニ御割相濟御竿出目之内貳拾貫文御拝領ニて貳百廿貫文之高ニ被為成候、和田因幡殿、山口内記殿、奥山大学殿、冨塚内蔵頭殿御書付并御黒印も御座候、然所ニ承応貳年ニ八拾貫文之御加増御拝領ニて三百貫文之高ニ被為成候、勿論御黒印も御座候、其以後明暦四年ニ御新田貳拾貫五百四拾五文御拝領ニて三百廿貫五百四拾五文之高ニ被為成候、其後幽套宗快公御代寛文拾壹年ニ御新田拾六貫百四拾六文被仰請候内三貫文平吉左衛門殿へ被分進、三百卅三貫六百九拾壹文之高ニ被為成候、右御知行高之内貳貫文里見源左衛門殿、貳貫文大條源内殿被分進、当御知行高三百貳拾九貫六百九拾壹文ニ御座候事

御黒印写之事

高貳百貳拾貫文 本郷・高瀬・真庭村

但、寛永廿壹年八月十四日之御日付ニて兵庫様御名付ニて御座候事

高三百貫文

但、承応貳年閏六月廿一日御日付ニて御同人様御名付ニて御座候事

高三百貳拾貫五百四拾五文

但、万治貳年八月廿一日御日付ニて御同人様御名付ニて御座候事

御座候事

高三百廿貫五百四拾五文

但、寛文元年十一月十六日御日付ニて御同人様御名付ニて御座候事

高三百貳拾貫五百四拾五文

但、寛文貳年六月十日之御日付ニて監物様御名付ニて御座候事

右之外当御知行高之 御黒印ハ何枚在之候哉承知不仕候間写置不申候、此未相知申候ハ、写置可申者也

御知行高公義江御書上之事

惣高三百貳拾貫五百四拾五文 大條兵庫知行

内貳拾貫五百四拾五文新田

内

一貳百五拾五貫貳百貳拾貳文 亘理坂元本郷

内拾五貫五百九拾四文新田

一貳拾貫六百七拾四文 同郡高瀬村之内笠野浜

内四貫三百廿三文新田

一 貳拾貫九百五拾七文 同郡坂元之内真庭村

内六百貳拾八文新田

一 拾九貫五百四拾三文 刈田郡遠田村之内長之町

一 四貫百四拾九文 宮城郡国分之内小泉村

大條兵庫内

龜川三郎兵衛

寛文元年

八月廿六日

須藤正左衛門殿

春日十兵衛殿

右之通不求様御代 公義方御触ニ付而御書上被成候由及承
候、右御宛書之御兩人ハ其節之御郡御代官〔破損〕事

⑤密傳記卷第四 (元禄三年) 4—3

(表紙)

一 密傳記卷第四

四冊之内 一

野場御書上之事

大條兵庫代方打続此所御知行拝領被申候坂元・真庭・笠野浜
野場御役野場二廩十三ニて被申請候、寛文貳年之御改之時分
ニも高三百廿六貫四百七拾三文亘理郡坂元村在所續三ヶ村此

内真庭村ニて貳拾九貫六百拾八文寄合給分此所只今迄御請野
場此度被下置候寄合給分所在之候へ共、在所入合故如斯候、
寛文二年十月晦日ニ桑原覚左衛門様方春日十兵衛様・須藤正
左衛門様へ御書出シ罷出候、其写手前ニ所持被仕候、右真庭
村貳拾九貫六百拾八文之内上新田卜申所雉子三ツニて御役野
場ニ被申請候、以上

肝煎

弥次右衛門

延宝四年九月廿八日

大井休左衛門様

里見源右衛門様

右之通御触ニ付而先肝煎弥次右衛門方御代官衆へ御書上被
成候事

御家中人高公義江御書上之事

高千六百八拾八人内男九百八拾老人内百八拾三人十歳以下

女七百七人内百五拾老人十歳以下

内

一 六百七拾貳人内男三百九拾七人内七拾六人十才以下

女貳百七拾五人内五拾九人十才以下

奉公人

一 七百拾老人内男三百九拾六人内七拾七人十才以下

女三百拾五人内七拾人十才以下 足輕

一貳百三人内男百貳拾壹人内貳拾四人十才以下

女八拾貳人内拾九人十才以下 中間

一九拾四人内男六拾人内六人十才以下

女三拾四人内三人十才以下 家中内之者

一四人外四人庫之者 坊主

一四人内男三人 座頭

女老入

同郡真庭村

高六拾壹人内男貳拾八人内四人十才以下

女三拾三人内九人十才以下 足輕

二口合千七百四拾九人内男千九人内百八拾七人十才以下

女七百四拾人内百六拾人十才以下

大條監物内

龜川弥左衛門 重判

延宝五年後十二月廿二日

大井休左衛門殿

里見源右衛門殿

右之通御書上被成候、若此末々様之御書上被成候ハ、御家中御足輕中間等之分ヶ准之御書上被成候様ニ相心得可申事
御物成出方公義江御書上之事

高三百廿九貫五百貳拾文 坂元・本郷・笠野・真庭・刈田之

内長ノ町共二

田代貳百九拾貫六百三拾壹文

内

一百三拾三貫六百七拾貳文 奉公人前

一四貫貳百八拾壹文 色々引

一壹貫九百九拾九文 寺領肝入分

一貳拾五貫九百五拾貳文 当免引

引合百六拾五貫九百四文

殘上納百貳拾四貫七百貳拾七文

此物成

四拾九貫百四拾貳文方三百九拾四文米

一米五百貳拾五石八斗壹升九合 口欠共二

一七拾五貫五百八拾五文 田代方

畑代三拾八貫八百八拾九文

内

一拾貳貫七百五拾四文 奉公人前

一壹貫四百四拾七文 色々引

一五百貳文 寺領肝入分

引合拾四貫七百三文

殘上納貳拾四貫百八拾六文

内

一貳百卅八文 毎年大豆用捨
残貳拾三貫九百四拾八文

此物成

五貫三百貳拾貳文

一大豆九拾四石九斗九合四分半 一大豆口欠共

一拾八貫六百貳拾六文 畑代方

田畑代合九拾四貫四百四拾九文

此口代貳貫八百三拾三文

本口代合九拾七貫貳百八拾貳文

右之外小役

高百五拾三貫六百六拾九文外百七拾五貫八百五拾壹文外不出

一四拾四貫五百六拾四文 拾人夫・詰夫・垣結・入草・夫馬

合五色高老貫文ニ付貳百九拾文

ツ、

田上納七拾六貫五百五拾六文外四拾八貫百六拾壹文外不出

一貳貫貳百九拾七文 ぬかわら代内上納老貫文ニ三拾文ツ、

二口合四拾六貫八百六拾壹文

右出代合四百四拾四貫百四拾三文

此老分割七百貳拾切卜

今代七百拾五文

高四貫百七拾壹文 小泉村

但、皆金之所高老貫文ニ拾四切並シ

惣高合三百卅三貫六百九拾壹文

大條監物内

亀川弥左衛門

延宝五年閏十二月四日

大井休左衛門殿

里見源右衛門殿

右之通公義江御書上被成候、此末ヶ様之御書上被遊候ハ、此御物成出方江見合、先年之御書上二大躰相違無之様ニ首尾可仕候事

御知行所高改公義江被相出候事

巨理郡坂元本郷

高貳百四拾五貫七百三拾壹文内一百五文 明屋敷

一四貫貳百五拾三文 切替被

申請候

外一八百九拾文 起返

内貳百七十八文長ノ町地続替地

六百拾貳文真庭村同替地

内田代貳百廿六貫貳百三拾五文

畑代拾九貫四百九拾六文

此内

一貳百八拾文内田代百六拾三文 白山坂海道倒目

畑代百拾七文

一田代貳貫四拾八文 下中屋鋪倒

一四貫貳百五拾三文 地續永荒

内田代四貫百拾六文

畑代百三拾七文

一貳百卅九貫百五拾文 大條監物

田代貳百拾九貫九百八文内四貫六百八拾六文切替入

畑代拾九貫貳百四拾貳文内四百五拾七文切替入

同村新田

高四拾貳貫五百八拾八文

内田代三拾八貫七百六拾文

畑代三貫八百貳拾八文

此内

一三拾貳貫四百六拾文 大條監物

内田代貳拾八貫六百四拾壹文

畑代三貫八百拾九文

一拾貫百貳拾八文 大條猪之助

内田代拾貫百拾九文

畑代九文

同郡高瀬村

高七拾五貫七百拾五文

一九拾文 明屋敷

一百九拾四文 倒目

内畑代百七拾六文 安房殿

拾八文内 田代拾七文 大條監物

畑代壹文

内田代七拾貫貳百五拾貳文

畑代五貫四百六拾三文

此内

一田代壹貫百四拾壹文 地続永荒

一五拾七貫九百五拾七文 安房殿

内田代五拾四貫貳百七拾六文

畑代三貫六百八拾壹文

一拾六貫四百廿三文 大條監物

内田代拾四貫八百拾八文

内壹貫百五拾壹文内拾文ハ真庭村替地切替入

畑代壹貫六百五文

外新田

高五貫貳拾壹文

内田代三貫四百五拾三文

畑代壹貫五百六拾八文

此内

一畑代五百拾八文 安房殿

一壹貫五百三文 大條監物

内田代四百五拾六文

畑代壹貫四拾七文

一三貫文 平吉左衛門

内田代貳貫九百九拾七文

畑代三文

同郡直庭村

高五拾貫七百拾貳文

内一四百五文明やしき

一壹貫七百六拾五文切替被申請候地續永荒替地

内田代四拾五貫八百貳拾六文

畑代四貫八百八拾六文

此内

一田代六拾三文 白山坂海道倒目

内四拾文 大條監物

貳拾三文 柴田九兵衛

一貳貫三百八拾七文 地續永荒

内田代貳貫貳百七拾壹文

畑代百拾六文

一拾九貫七百五拾三文 大條監物

内田代拾七貫九百貳拾八文

畑代壹貫八百貳拾五文

一五貫文 中津川左覺

内田代四貫五百廿八貫文

畑代四百七十貳文

一四貫八百五拾九文 柴田九兵衛

内田代四貫五百拾八文

畑代三百四拾壹文

一三貫四百五拾文 平太郎兵衛

内田代三貫六十三文

畑代三百八十七文

一三貫文 金子長右衛門

内田代貳貫六百七十六文

畑代三百廿四文

一五貫文 香味孫助

内田代四貫四百六十文

畑代五百四十文

一六貫八百八拾壹文 錦戸五郎兵衛

内田代六貫三百卅貳文

畑代五百四拾九文

一畑代三百拾九文 日野又兵衛

同村新田

高三貫四百七拾六文

此内

一九百六拾六文 大條監物

内田代九百卅三文

畑代三拾三文

一壹貫四百四文 日野又兵衛

内田代壹貫百九拾五文

畑代貳百九文

一七百八拾貳文 平太郎兵衛

内田代六百五十五文

畑代百廿七文

一高田代貳拾三文 柴田九郎兵衛

一三百壹文 御藏入

右之通延宝六年三月之内相改我妻正兵衛殿・作間市兵衛殿江差出申候、真庭村他給人衆御藏入之田畑ハ慥ニ相知不申候覺申候通書付致申候、此末ニ自地共ニ田畑本地新田之分ケ慥ニ有之候間、末々高田畑之分ケ入用之儀も有之候ハ、此末之ケ條ヲ見合用可申事

御知行高奉公人前御百姓前分ケ公儀江御書上之事

高貳百七拾壹貫六百拾文 坂本^{サカモト}元郷^{モトキヨ}新田共ニ

田代貳百四拾八貫五百四拾九文内廿八貫六百四拾壹文新田

内

一百卅貳貫七百九拾貳文 奉公人前

一百拾五貫七百五拾七文 百姓前

畑代貳拾三貫六拾壹文内三貫八百拾九文新田

内

一拾壹貫八百拾文 奉公人前

一拾壹貫貳百五拾壹文 百姓前

高拾七貫九百廿六文 高瀬之内笠野浜

田代拾五貫貳百七拾四文内四百五拾六文新田

内

一貳貫百九拾三文 奉公人前

一拾三貫八拾壹文 百姓前

畑代貳貫六百五拾貳文内壹貫四拾七文新田

内

一七百七文 奉公人

一壹貫九百四拾五文 百姓前

高貳拾貫七百拾九文 真庭村

田代拾八貫八百廿五文内九百卅三文新田

内

一七貫八百六拾文 奉公人前

一拾貫九百六拾五文 百姓前

畑代壹貫八百九拾四文内卅三文新田

内

一九拾五文 奉公人前

一壹貫七百九拾九文 百姓前

右三口高合三百拾貫貳百五拾五文

田代貳百八拾貳貫六百四拾八文内卅貫卅三文新田

此内

一百四拾貳貫八百四拾五文 奉公人

一百卅九貫八百三文 百姓前

畑代貳拾七貫六百七文内四貫八百九拾九文新田

内

一拾貳貫六百拾貳文 奉公人前

一拾四貫九百九拾五文 百姓前

右之外

高拾九貫貳百六拾五文 刈田之内長ノ町

内田代七貫九百八拾三文

畑代拾壹貫貳百八拾貳文

高四貫百七拾壹文 国分之内小泉村

内田代壹貫八百四文

畑代貳貫三百六拾七文

惣高合三百卅三貫六百九拾壹文

田代貳百九拾貳貫四百卅五文

内

一百四拾貳貫八百四拾五文 奉公人前

一百四拾九貫五百九拾文 百姓前

畑代四拾壹貫貳百五拾六文

内

一拾貳貫六百拾貳文 奉公人前

一貳拾八貫六百四拾四文 百姓前

右高之内

一百五拾五貫四百五拾七文田畑共ニ奉公人知行高之分

但、除足輕持高共ニ相入如斯、此斷書ハ公義江ハ書上

り不申候

一百七拾八貫貳百卅四文田畑共ニ百姓前長ノ町小泉共ニ

龜川弥左衛門

延宝六年二月朔日

宛書なし

右之通公義江御書上被成候、若此以後ケ様之御書上在之候
ハ、右高之之分ケ被申候見合首尾可申事

坂本元郷・直庭・高瀬村御蔵入并自他給分御竿入年号之事

一寛永拾九年ニハ御分国中惣御檢地此時之御竿入ヲ御本地ト申也

一正保元年、四年兩年之御竿入明屋鋪代ト申也、是も御本地へ入乍去本地水帳江ハ相入不申、別而水帳有之候事

一明暦四年御竿入本郷・高瀬・真庭共ニ是ヲ古新田ト申也

一寛文四年御竿入直庭村御蔵入新田、他給人衆新田、白山海道倒替地共ニ

一寛文九年御竿入大條金八郎様御新田

一寛文拾壹年御竿入元郷・直庭・高瀬是ヲ後新田ト申也、三ヶ村共ニ

一寛文拾壹年御竿入地続切替元郷・高瀬・直庭三ヶ村共ニ

一延宝三年御竿入是ヲ切添新田ト申也、右三ヶ村共ニ

一元禄元年ニ大肝煎御役料江御竿相入候へとも是ハ出入有之、此御竿ハ被相除候事

一元禄三年御竿入大肝煎御役料、此新田ヲ坪引ト申也

右之通御竿被相入候年号ニ御座候、此以後地形書入等も右之御竿入之年号等穿鑿仕候ハ、右之年号ヲ以せんさく可仕事

⑥御系図御判物御墨印御朱印御添目錄入記

文化一一年八月改 1 | 23 | 1

(表紙)

「文化拾壹年

御系図 御判物 御添目錄 入記

御墨印 御朱印

八月改

天文貳拾貳年正月十七日

「○一晴宗君御判物壺通○

左衛門様御名前

慶長九年八月廿八日

「○一貞山君御墨印壺通○

尾張様御名前

右式通壺軸ニて箱入

「○一御系図 三本

壺箱入

寛永廿一年

「○一忠宗君御黒印壺通・

御添目錄在り

承應貳年

「○一忠宗君御黒印 壺通・

但、兵庫様御名本式包

萬治貳年

〔朱筆〕
○一綱宗君御朱印壱通・

但シ兵庫様御名元

〔朱筆〕
○一綱村様御黒印式通・

寛文元年壱通

内兵庫様御名元

〔朱筆〕
○寛文貳年

監物様御名元

天和三年

〔朱筆〕
○一綱村君御朱印壱通・

三郎左衛門様御名本

貞享元年

〔朱筆〕
○一綱村君御朱印壱通・

監物様御名本

宝永元年

〔朱筆〕
○一吉村君御朱印壱通・

監物様御名元、御添目録壱通在り

正徳五年

〔朱筆〕
○一吉村君御朱印壱通・

多門様御名元、御添目録在り

延享元年

〔朱筆〕
○一宗村君御朱印壱通・

監物様御名元、御添目録在り

宝暦八年

〔朱筆〕
○一重村君御朱印壱通・

監物様御名元、御添目録在り

宝暦拾貳年

〔朱筆〕
○一重村君御朱印壱通・

監物様御名元、御添目録在り

寛政四年

〔朱筆〕
○一斉村君御朱印壱通・

御添目在り、内蔵人様御名元

文化九年

〔朱筆〕
○一斉宗君御朱印壱通・

御添目録在り、監物様御名元

文政三年

〔朱筆〕
○一斉義君御朱印壱通・

御添目録在り

文政十一年六月

一〔朱筆〕
○一斉邦君御朱印壱通・

但シ 御添目録在り

御墨印

御朱印 拾六枚入 奁箱

一〇〇〇 御判物

〇〇〇 御墨印 貳枚入 奁箱

右へ本所御小屋儀御條目者御朱印式改り

〇〇〇 御添目録九枚入 奁箱

〇〇〇 一天正・慶長・元和年中

尾張様長三郎様御知行分ヶ御書付

公義江御賄金被指上候御書付合五通

〇〇〇 一天和式年

御本帳在り 奁通

大河内四郎兵衛殿方御野場等之御状三通

右 奁包也

〇〇〇 一 御家老中江被下置候

御書 箱入

〇〇〇 一 龜千代様御筆 奁箱〇

〇〇〇 一 從御先代様御拝領之

御真筆入 奁箱

〇〇〇 一 重村様御真筆 奁枚

〇〇〇 一 政宗様御真筆 奁枚

〇〇〇 一 忠山様御真筆 奁枚

〇〇〇 一 肯山様御筆 奁枚

右四口 奁箱二入

・ 右四枚之内三枚在之

奁枚相見得不申候事

右ハ文政九年六月御風入之節相改如此

〇〇〇 一 御家譜書上 奁冊

但シ御先祖様方道頼公迄

〇〇〇 一 同 奁冊

但シ道頼公方篤恭公迄

〇〇〇 一 同 奁冊

道任公方道直公迄

右御家譜御書上文政十二年四月御宝物箱江入

右三口御家譜ハ二重ニ相出候ニ付相除候

天保六年

一〇〇 印 奁包

天保六年

一 田原万平傳書 奁封

⑦ 入記 文化一三年五月

(表紙)

「 文化十三年

1 | 2 3 | 2

入記

五月

一

壹

〔一〕寛永四年五月三日也

壹包〇

貳

〔一〕元禄五年十月十九日

壹包〇

三

〔一〕元禄六年十一月三日

壹包〇

四

〔一〕同十四年八月廿四日

壹包〇

五

〔一〕同十四年

壹包〇

六

〔一〕同十七年三月廿弐日

壹包〇

七

〔一〕宝永弐年四月

壹包〇

八

〔一〕同三年正月十七日

壹包〇

九

〔一〕安藝様江之出入御書立

壹包〇

十一

〔一〕正徳四年十月 壹包〇

十貳 〔一〕同五年十二月十八日 壹包〇

十三 〔一〕正徳五年十二月十一日 壹包〇

十九 〔一〕貞享五年 壹包〇

廿一 〔一〕元禄十四年 壹包〇

廿貳 〔一〕大條西之助様御宛名 壹封〇

廿三 〔一〕御居館御修覆之儀二御奉書 壹通〇

廿四 〔一〕御居館御修覆御伺二付御奉書 〇

廿六也 〔一〕濱通・須賀通二ツ御取上之包〇 壹通

廿七 〔一〕寛保三年十月朔日 壹包〇

十六 〔一〕貞山様御代御墨印 壹通〇

十一

十七

〔朱筆〕
○●「元和二年兵庫様へ之御墨印○壺通

十八

「」貞享四年

三十六

「朱筆」一宝曆六年閏十一月廿七日 壺通〇

三十七

〔一〕海保ノ両替所御添替書付 壺通〇

四十二

〔●〕宝曆十三年御館御修覆御奉書○壺通

四十三
(朱筆)

「●」徳春院様御加増卷
壺通○

四十七番
(朱筆)

御指紙

五十一
(朱筆)

一明和七年十二月廿七日 壹封○

〔朱筆〕

壹包〇

〔抹消〕

一書□出来兼相除一右ハ御勤功書壹冊也

い

〔朱筆〕一元和八年七月六日 壺包〇

は

「朱筆」同三年 壺通〇

に

「（今案）」一寛永九年 壺通〇

(朱) へ

「●」一 同十八年
壺通○

と(朱筆)

「●」同十九年 同断○

七
(朱筆)

「●」同十九年 同断○

(朱)

〔一〕同十九年
老通○

(朱)

「●」立組 老通〇

但、寛永十九年とあり

わ

寛永一〇年 通〇

（朱力）

「○」同四年
壹通○

よ

〔朱筆〕 の 一延宝貳年 老通○	〔朱筆〕 ゐ 一同十三年 老通○	〔朱筆〕 む 一同六年 老通○	〔朱筆〕 ら 一同貳年 老通○	〔朱筆〕 な 一寛文貳年六月十日 老通○	〔朱筆〕 ね 一字田亘理御高野場卷 老通○	〔朱筆〕 つ 一同貳年 老冊○	〔朱筆〕 そ 一承應三年 老通○	〔朱筆〕 れ 一御知行割御目録 老通○	〔朱筆〕 た 一同年 老通○	〔朱筆〕 一寛永貳拾老年 老通○
---------------------------	---------------------------	--------------------------	--------------------------	-------------------------------	--------------------------------	--------------------------	---------------------------	------------------------------	-------------------------	------------------------

〔朱筆〕 ゑ 一貞享四年 老通○	〔朱筆〕 し 一御即位とある 八通入老綴○	〔朱筆〕 め 一萬治三年とある 老通○	〔朱筆〕 ゆ 一貞享三年八月 老通○	〔朱筆〕 あ 一延宝九年 老通○	〔朱筆〕 て 一同貳年六月 老通○	〔朱筆〕 え 一同年十二月 老通○	〔朱筆〕 こ 一貞享三年 老通○	〔朱筆〕 ふ 一天和三年八月 老通○	〔朱筆〕 け 一天和貳年正月十一日 老通○	〔朱筆〕 や 一天和貳年正月十一日 老通○
---------------------------	-----------------------------	------------------------------	-----------------------------	---------------------------	----------------------------	----------------------------	---------------------------	-----------------------------	--------------------------------	--------------------------------

〔朱筆〕 一同四年三月 老通○

ひ 〔朱筆〕 一同年四月 老通○

〔朱筆〕 〔付箋〕 一さ 山境為添に付伊達安藝守様々之書状老通○

も 〔朱筆〕 一坂元御居館と筆頭 老通○

せ 〔朱筆〕 一元禄二年 老通○

す 〔朱筆〕 一元禄四年四月 老通○

京 〔朱筆〕 一同五年 老通○

〔朱筆〕 一風土記 老冊○

〔朱筆〕 一密傳記 式三四 三冊○

〔朱筆〕 一家傳記 老冊○

〔朱筆〕 貞享二年とあり 老冊○

〔朱筆〕 一御勤功書 老冊○

〔朱筆〕 若老方 老冊○

〔朱筆〕 一日記 式冊○

十從御先代様御拝領之

御東筆 老箱

〔朱筆〕 一真庭臺山御林卷 老箱○

〔朱筆〕 文化十三年とあり 老箱○

〔朱筆〕 一御軍用物御見合御印符物老詰○

〔朱筆〕 寛延三年 老箱○

〔朱筆〕 一屋形様被為入候御留 老冊○

〔朱筆〕 一御成之節御次第 老冊○

〔朱筆〕 但シ小冊 老冊○

〔朱筆〕 一評定方留 老冊○

〔朱筆〕 宝永四年十一月十一日 老冊○

〔朱筆〕 一御居館廻り破損二付書付老通 老冊○

〔朱筆〕 一御家譜御書出相加へ 老冊○

〔朱筆〕 一写貳冊 老冊○

2 知行地・坂本要害・在郷屋敷

堅田

①伊達晴宗判物 天文二三年正月一七日 4—8—1

伊達西根大枝之郷内、一いしわた越後分、岡之郷内原田平左衛門之分、一山田伊豆守分、一原田孫四郎分、西原八田相除、一内谷彦四郎分、一まといさし新右衛門分、此内大塚信濃守買地をハ相除候、一にし大枝いせ守買地うる嶺岸、一山田新五郎分、一荻田徹妙之内斎藤上野守知行之辺此内しやうや畠をあひのそき候、伊達にしね大えた之内徳本寺分荻田この内徳本寺うつつの在家上長井小野川之内市川平三之分西根伊達崎之内飯塚藤右衛門之分松木内を相除而其外不殘各為加恩急度永代不可有相遣也、仍証文如件

天文廿二年癸丑正月十七日 晴宗（花押）

大枝左衛門尉殿

②伊達政宗黒印状 慶長九年八月廿八日 4—8—2

一式拾五貫九百八十九文 気仙ノ内 今泉
一拾六貫八百八十三文 おさへ
一三拾貳貫五百卅文 竹駒
一拾四貫仁百六十八文 さほ
一七拾仁貫七百拾六文 高田

一三拾七貫七百仁十七文
都合貳百貫百拾三文
右之所下置者也、仍如件
慶長九年

八月廿八日（黒印）

大條尾張守殿

③伊達政宗黒印状 元和二年七月二四日 4—2

岡崎之内

一五十貫仁百八拾八文

大蔵之内

一仁十貫九十六文

合七拾貫三百八拾文之所下置者也、仍如件

元和二年

七月廿四日（黒印）

大條兵庫殿

④伊達忠宗黒印状 承応二年閏六月一日 4—7

日理郡坂本本郷・高瀬村・真庭村右拾三ヶ村合貳百貳拾貫文、此度為加増坂本本郷・高瀬村・真庭村、志田郡下伊場野村合八拾貫文、都合三百貫文之所下行之訖（目録有別紙）全可令

領納者也、仍狀如件

承應貳癸巳年閏六月十一日（黒印）

大條兵庫殿

⑤知行目録 承応二年閏六月二日 1—29

知行目録

一貳百貳拾貫文 本知

此外御加増

曰理郡高瀬村

一九拾文 明屋敷代

同郡真庭村

一八拾六文 同代

同郡坂本本郷

一四拾九貫六百八拾九文

志田郡下伊場野村之内

一三拾貫百三拾五文

内

一五百貳十三文 志賀右衛門家中 越後

一八百五十三文 同 藏人

一七百四十三文 同 半左衛門

一五百八十貳文 同 惣内

一貳貫三百七十一文 同

一三百七十六文 同

一八百六拾三文 同

一四百九十貳文 同

一六百九文 同

一貳百八十文 同

一四百六十六文 同

一三百八十九文 同

一三百七十三文 同

一三百五十五文 同

一四百貳十文 同

一四百九十六文 同

一八百十仁文 同

一仁十六文 同

一五百四十五文 同

一七百九十七文 同

一五百貳文 同

一壹貫拾壹文 同

一壹貫五拾五文 同

一七百廿壹文 同

一貳百九十仁文 同

外記

九藏

左馬丞

官兵衛

与次衛門

弥藏

次左衛門

小左衛門

甚九郎

甚内

五郎兵衛

源右衛門

喜左衛門

久左衛門

惣右衛門

半右衛門

十藏

弥左衛門

惣兵衛

平内

喜平次

一 壹貫三百八十壹文	同
一 四百三文	同
一 四百廿六文	同
一 九百廿四文	同
一 七百卅四文	同
一 三百六十壹文	同
一 壹貫百九十五文	同
一 八百貳文	同
一 壹貫百九十五文	同
一 八百貳文	同
一 貳百五十七文	同
一 壹貫七百四十九文	同
一 六百七十壹文	同
一 七百拾文	同
一 貳百九拾文	同
一 百十仁文	同
一 五百拾文	同
一 三百八十文	同
一 五百十九文	同
一 百六十五文	同
一 六十九文	同

權七	同
作藏	同
作兵衛	同
織部	同
九郎兵衛	同
七兵衛	同
太兵衛	同
与右衛門	同
太兵衛	同
与右衛門	同
主馬	同
瀧善寺	同
満吉	同
徳右衛門	同
六左衛門	同
又兵衛	同
二左衛門	同
十左衛門	同
九左衛門	同
長左衛門	同

一 壹貫七百七十五文	同	權六
一 五十三文	同	十右衛門
一 五百卅三文	同	縫殿
一 百七十七文	同	休左衛門
都合三百貫文也		
御墨印之面割渡申者也、仍如件		
承応貳年		
壬六月十一日	真山刑部 ^印	
	(花押)	
	山口内記 ^印	
	(花押)	
大條兵庫殿		
⑥知行目録 寛永二年八月一四日 4—21		
知行目録		
曰理郡真庭村之内		
一 拾壹貫八百六拾文		
此内		
一 貳貫八百七拾九文	中屋敷	助兵衛
一 壹貫八百三拾六文	名生屋敷	将監
一 壹貫三百拾四文	南軒屋敷	十郎兵衛

一 壹貫三拾五文	原屋敷	奎介	一 壹貫三百九文	同	横山	文右衛門
一 貳百貳文	坂本町入作	清七	一 三貫四百拾壹文	同	早坂	帶刀
一 百拾七文	同	弥六郎	一 貳貫四百四拾四文	同	谷津	五右衛門
一 八拾六文	同	十郎左衛門	一 壹貫五百六拾貳文	同	砂金	弥五介
一 五拾貳文	同	彦右衛門	一 壹貫九百九拾六文	同	川名	七兵衛
一 百拾三文	笠野濱方入作弥八郎		一 六百三拾五文	同	早坂	清右衛門
一 百七拾壹文	同	平兵衛	一 壹貫三百八文	同	早坂	掃部左衛門
一 拾五文	同	茂左衛門	一 壹貫百三文	同	鈴木	五兵衛
一 貳貫貳拾仁文	肝煎館屋敷	文右衛門	一 壹貫七百四十四文	同	辺見	十兵衛
一 三百七拾八文	佐藤新次郎家中渡辺久左衛門		一 壹貫四拾文	同	谷津	長右衛門
一 貳百五拾文	同	荒 但馬	一 壹貫八拾四文	同	安部	次郎左衛門
一 貳百六拾六文	同	庄子 縫殿丞	一 七百貳文	同	高橋	藤藏
一 貳百拾壹文	同	荒 次郎兵衛	一 四百七拾三文	同	森	三右衛門
一 百八拾貳文	足輕	四郎兵衛	一 壹貫七文	同	大槻	伊右衛門
一 百四拾八文	同	帶刀	一 壹貫百六十六文	同	渡辺	新介
一 貳百拾六文	同	文次郎	一 壹貫五拾五文	同	清野	佐渡
一 三百六拾七文	同	加賀	一 七百五拾三文	同	清野	久兵衛
同郡坂本本郷之内			一 八百貳拾九文	同	佐藤	越後
一 百九拾壹貫七百八拾九文			一 貳貫三百九拾貳文	同	森	外記
此内			一 八貫三百九拾貳文	同	龜川	九右衛門
一 三貫七百六拾六文	家中	及川 平左衛門	一 六百五拾文	家中	高橋	利右衛門

一貳百三拾八文	同	文次郎	一五百六拾六文	同	作間 権右衛門
一貳百拾六文	同	橋本 五郎左衛門	一壹貫三拾三文	同	檜原 半右衛門
一八百八拾四文	同	青田 吉右衛門	一壹貫九百八拾文	同	岩渕 十右衛門
一壹貫六百六十貳文	同	鈴木 甚左衛門	一壹貫九拾三文	同	今村 覺右衛門
一壹貫四百拾七文	同	辺見 正左衛門	一五百六拾三文	同	下山 藏人
一三百九拾五文	同	宇佐美助七郎	一壹貫貳百貳拾壹文	同	田口 九郎右衛門
一貳貫九百四拾九文	同	渡辺 善右衛門	一九百九文	同	中村 次左衛門
一七百拾八文	同	引地 彦作	一貳貫八百八拾九文	同	大槻 将監
一七百九拾三文	同	鈴木 久左衛門	一三貫貳百四拾五文	同	木村 新藏人
一壹貫九拾九文	同	大泉 次兵衛	一九百三文	同	吉田 肥後
一五百拾貳文	同	高田 作介	一五百拾文	家中	秋保 伝右衛門
一六百貳拾文	同	安部 弥七郎	一九百六拾七文	同	大泉 宮内
一貳貫七百八拾文	同	亀川 市兵衛	一壹貫百拾四文	同	犬飼 作右衛門
一九百拾壹文	同	安部 彦右衛門	一壹貫五百貳拾三文	同	及川 主馬
一壹貫百三拾八文	同	早坂 源右衛門	一貳拾壹文	同	安部 文八
一八百六拾九文	同	佐藤 勘介	一六文	同	大泉 左馬之丞
一六百貳拾七文	同	森 与伝次	一五百拾六文	同	横山 九郎右衛門
一壹貫百四拾八文	同	木村 久七	一五百三拾三文	同	星 掃部
一三貫貳百拾三文	同	清野 勘左衛門	一百七拾八文	同	青田 与五兵衛
一壹貫貳百四拾文	同	大槻 六郎兵衛	一七百拾四文	同	檜原 九兵衛
一五百九拾六文	同	森 利兵衛	一六百貳拾四文	足輕	惣左衛門

一七百九拾四文	同	太郎左衛門	一六百貳拾九文	足輕	弥平
一八百三拾壹文	同	満九郎	一貳百九拾四文	同	助兵衛
一七百貳拾六文	同	徳右衛門	一六百五拾貳文	同	弥一郎
一八百六拾三文	同	惣吉	一貳百貳拾六文	同	甚九郎
一八百六拾五文	同	彦左衛門	一四百三拾八文	同	与吉
一四百三拾三文	同	半兵衛	一四百三拾九文	同	平兵衛
一壹貫九百五拾八文	同	与惣左衛門	一六百五拾三文	同	加左衛門
一三百四拾貳文	同	惣八郎	一五百三拾八文	同	藤左衛門
一七百三拾三文	同	茂介	一百六文	同	源太郎
一五百貳拾五文	同	五兵衛	一六百八拾七文	同	吉左衛門
一五百拾文	同	善介	一百九拾壹文	同	弥八郎
一六百八拾七文	同	作兵衛	一八百貳拾七文	同	清藏
一貳貫貳百三十五文	同	茂右衛門	一貳貫五文	同	次郎左衛門
一七百貳拾三文	同	弥六郎	一六百五拾六文	同	七郎兵衛
一四百三拾九文	同	李左衛門	一九百三拾七文	同	太郎右衛門
一貳百九拾壹文	同	五郎左衛門	一壹貫三百九拾四文	同	九郎左衛門
一百三拾五文	同	与作	一六百貳拾五文	同	三十郎
一百六拾壹文	同	二右衛門	一七百八拾六文	同	半十郎
一五百三拾九文	同	六左衛門	一三百八拾九文	同	弥九郎
一四百九拾九文	同	惣七	一三百貳拾六文	同	十郎兵衛
一五百六文	同	惣七郎	一四百拾八文	同	清左衛門

一五百七文	同	甚右衛門	一七百貳拾文	くらた屋敷	次郎右衛門
一四百九拾五文	同	与惣左衛門	一貳貫五百四拾文	清名屋敷	八郎左衛門
一五百九拾四文	同	李介	一壹貫五百三十五文	かへる屋敷	彦惣
一貳拾三文	同	六藏	一壹貫六百五拾壹文	同屋敷	満九郎
一貳百貳拾四文	同	助右衛門	一拾四文	町屋敷	茂太夫
一貳拾八文	同	源兵衛	一三貫貳百八拾五文	大肝煎	作右衛門
一九百貳拾五文	よけ屋しき	彦左衛門	一壹貫三百八拾六文	中嶋屋敷	藏人
一壹貫貳百三文	をよけ屋敷	十郎左衛門	一壹貫百九文	笠野濱 <small>ふ</small> 入作	平右衛門
一拾三文	中濱屋敷	観行院	一六百六拾貳文	同	弥市郎
一拾七文	同屋敷	弥七郎	一壹貫貳百四拾仁文	同	加賀
一壹貫九百五十四文	中山屋敷	甚兵衛	一三百貳拾貳文	同	九郎左衛門
一貳貫三百九拾七文	肝煎	弥次衛門	一四百八拾文	同	弥八郎
一壹貫四百貳拾仁文	町屋しき	源藏	一壹貫貳拾壹文	同	外記
一七百六拾五文	同	十郎兵衛	一七百五拾貳文	同	徳右衛門
一貳貫五百八十貳文	ひなた屋敷	二兵衛	一九百拾九文	同	平兵衛
一壹貫百五拾四文	上臺屋敷	九郎衛門	一六百貳拾壹文	同	源右衛門
一九百四拾七文	新屋敷	太郎衛門	一八百七拾九文	同	藤左衛門
一壹貫四百六十三文	ねき屋敷	次左衛門	一六百三拾四文	同	三右衛門
一壹貫拾壹文	松木屋敷	森八郎	一五百七拾壹文	同	源藏
一壹貫六百八拾文	はす内屋敷	清七郎	一五百拾文	同	茂右衛門
一六百五拾貳文	川原屋敷	小市郎	一八百五拾貳文	同	弥作

一百三十拾貳文	同	六郎兵衛	一老貫貳百三十拾貳文	同	新右衛門
一貳貫貳百貳拾九文	山室屋敷	弥左衛門	一九百八拾文	同	助七郎
一貳百九拾九文	町屋敷	四左衛門	一八百三拾五文	同	新兵衛
一老貫九百六文	同	久藏	一貳貫百九拾老文	同	左太郎
一老貫三百文	同	二藏	一三貫八百拾四文	検断	六右衛門
一九百八拾四文	同	弥九郎	一老貫六百五十七文	町屋敷	半三郎
一老貫七拾四文	同	弥六郎	一老貫七百九文	同	左平次
一八百六拾五文	同	文次郎	一老貫貳文	同	惣十郎
一七百六拾九文	同	孫市	一九百三拾貳文	同	三次郎
一五百七拾老文	同	与兵衛	一七百六拾九文	同	源七郎
一五百五拾九文	同	源一郎	一六百貳文	同	甚介
一六百三拾八文	同	惣左衛門	一七百五拾六文	同	大乘院
一八百文	同	孫惣	一老貫六拾五文	町屋敷	与次衛門
一老貫三百七拾九文	同	清七	一老貫百五拾九文	同	帶刀
一九百四拾五文	同	次郎衛門	一六百拾四文	同	与惣衛門
一貳百九拾五文	同	助三郎	一四百貳拾五文	同	縫殿
一七百三拾老文	同	市右衛門	一九百拾六文	長作屋敷	源次郎
一拾七文	同	雲戒	一老貫七拾八文	金藏寺	
一拾三文	同	彦七郎	一七百九拾七文	徳本寺	
一拾文	同	助右衛門	同郡高瀬村之内		
一拾四文	同	甚次郎	一拾六貫三百五拾老文		

此内

一貳百七拾壹文	足輕	源市郎
一三百六拾貳文	同	市右衛門
一貳百五拾壹文	同	次郎兵衛
一三百五拾七文	同	彦市
一三百八拾七文	同	与五兵衛
一貳百七拾五文	同笠野濱	帶刀
一壹貫百九拾貳文	笠野濱	加賀
一九百六拾七文	同	弥作
一三貫拾八文	同	茂右衛門
一九百三拾八文	同	正作
一八百五拾九文	同	惣五郎
一六百八拾七文	同	平右衛門
一六百四拾壹文	同	平兵衛
一三百八拾八文	同	惣十郎
一四百三拾四文	同	藤藏
一百三拾三文	同	藤左衛門
一三百七拾貳文	同	源右衛門
一百貳拾四文	同	源藏
一四百貳拾九文	同	九郎左衛門
一五百五拾九文	同	外記

一七百五拾八文	同	助四郎
一六百人	同	三右衛門
一拾壹文	笠野濱	又三郎
一七百五拾五文	同	德右衛門
一四百三拾壹文	同	弥八郎
一八拾七文	坂本方入作新右衛門	
一貳百貳拾三文	笠野濱	太郎左衛門
一四百拾貳文	同	惣次郎
一四百貳拾七文	同	弥市郎
一三文	同	光明坊
都合貳百貳拾貳文者	御墨印之面村付代高割渡申者也、仍如件	
寛永仁十老年	和田因幡	
八月十四日	(花押)	
	山口内記	
	(花押)	
	奥山大学助	
	(花押)	
	富塚内蔵人	
	(花押)	
大條兵庫殿		

⑦知行目録 寛文二年六月一日 4—9

知行目録

曰理郡坂本郷

一貳百五拾七貫九百四拾六文

同郡高瀬村内

一拾七貫八百四拾貳文

同郡真庭村内

一貳拾壹貫四拾三文

刈田郡圓田村内

一拾九貫五百四拾三文

宮城郡国分小泉村内

一四貫百七拾壹文

都合三百廿貫五百四拾五文 御墨印之面割渡申候、百姓屋敷

高名村委細水帳有之者也、仍証文如件

寛文貳年

六月十日

内馬場藏人印

景信（花押）

木村久馬印

重成（花押）

和田織部印

□（花押）

鵜田治右衛門印

重康（花押）

奥山大学

常辰（花押）

大條監物殿

⑧（達書、坂本郷ほか新田起目竿入につき）

寛文一三年六月二五日 4—12

一拾壹貫四百四拾五文 亘理郡坂本郷

但、寛文八年六月野谷地田拾四町歩、畑貳町五反歩、

出入司衆書付を以被申請候起目、同拾壹年御竿入

一壹貫六百九文 同村

右同所野谷地書付町数之外畑九町九反七百廿八歩之起

過、同年二御竿入

一三貫九拾貳文 同郡高瀬村

但、寛文八年六月野谷地田三町五反歩、出入司衆書付を

以被申請候内田三町壹反七セ拾貳歩、畑貳反貳セ拾七

歩之起目、右同年御竿入

三口合拾六貫百四拾六文

右之通大條監物新田起目起過共拾六貫百四拾六文之所、御竿入候年方被下置、右之内三貫文之所平吉左衛門ニ当物成リ被

分下、吉左衛門持来候御切米三両四人御扶持分指添被下置、
残拾三貫百四拾六文、本知行三百貳拾貫五百四拾五文、取合
三百三拾三貫六百九拾壹文之高ニ被成下候間、御本帳直御黒
印相調候様可致申渡候、但於江戸監物・主水遂披露
御前相済候段申来付如此候、以上

寛文拾三丑

六月十八日

修理
中務

飯田淡路殿

和田半之助殿

内馬場藏人殿

田村図書殿

右之通新田起目起過共被下置候分何茂如前書御本帳直 御黒
印相調可被申候、以上

同年

同廿五日

藏人

半之助

淡路

松林仲左衛門殿

甲田甚兵衛殿

右之通六拾壹人書込之御書付罷出候付書替如此御座候、以上

寛文拾三年

六月廿九日

大條監物殿

甲田甚兵衛^印

信勝(花押)

松林仲左衛門^印

實俊(花押)

⑨(覚、北浦村など四か村加増相済につき)

宝曆一二年一二月二九日 5 | 6 6

遠田郡北浦村

一拾五貫文新田

桃生郡深谷鹿股村

一拾貳貫文

牡鹿郡真野村

一拾七貫七百拾文新田

賀美郡四日市場村

一五貫貳百九拾文

右四口之通大條監物存生之内御加増御割此度相済、御郡方江
致首尾候間、地形御受取、当物成^方被納可被成候、以上

蜂屋五左衛門^印

宝曆十二年

十二月廿九日

大條悦之進殿

⑩奉窺候覚（坂本要害修補） 貞享五年五月二十九日

1—10—4

奉窺候覚

亙理郡坂本私居所要害屋敷本丸東之方掛作之下土手東之方方南之方訖折廻式拾七間四尺之所元来塀無御座候、此所土手少破仕候付如元修補仕度旨貞享三年七月申上如願被仰出修補仕候処、前広よりハ土手少々のせニ罷成無用心ニ御座候間、繪図江書付申候通ニ柵貫ニ仕度奉存、以繪図奉窺候、以上

大條監物

宗道（花押^{（抹消）}）

貞享五年

五月廿九日

柴田内蔵様

佐々豊前様

富田老岐様

江戸方被相返候御覚書ニ御座候事

⑪亙理郡坂元私要害屋敷普請奉願候覚（御扣）

元禄一四年七月二七日 1—49—4

亙理郡坂元私要害屋敷普請奉願候覚

一本丸廻リ塀詰之門西脇長三拾四間柱朽損大破仕候事

一本丸廻リ塀南之方長九間柱朽損大破仕候事

一本丸廻リ塀東之方長八間柱朽損大破仕候事

右之所々如元塀懸直申度奉存候

一二之門式間ニ式間屋ね朽損、貫并両脇土留板朽損申候間、

修補仕度奉存候

右四ヶ所普請仕度以繪図奉願候、以上

大條監物

宗道（花押）

元禄十四年

七月廿七日

中村日向殿

津田民部殿

富田老岐殿

遠山帶刀殿

布施和泉殿

御扣

⑫（達書、要害屋敷堀藻草取払いにつき）

貞享四年八月九日 1—47—2—3

亘理郡坂本要害屋敷堀如前々毎年夏中藻草為取泥拂、其泥二而土手之小破被繕度之旨願之趣遂披露候処、弥前々之通可被申付由

御意候、恐々謹言

貞享四年

八月九日

富田老岐

氏紹（花押）

佐々豊前

定隆（花押）

柴田内蔵

宗意（花押）

大條監物殿

⑬（返書、要害屋敷堀藻草取払いにつき）

（貞享四年）八月九日 1—47—2—2

御奉書拝見仕候、拙者居所亘理郡坂本要害屋敷堀如前々之毎年夏中藻草為取泥拂、其泥二而土手小破繕仕度由以絵図奉願候処、如願被仰付旨御意之段畏入有難仕合奉存候、恐惶謹言

大條監物

八月九日

柴田内蔵様

佐々豊前様

富田老岐様

⑭在郷屋鋪書出覺 元禄一四年一二月二五日 5—11

在郷屋鋪書出之覺

一老軒 要害屋敷 亘理郡坂元本郷

但、本丸・二ノ丸・三ノ丸迄

一百八軒 侍屋敷 同郡同村

内

一六拾四軒 寛永拾九年二拝領

一貳軒 同年拝領寺屋敷

一拾三軒 同年拝領二ノ丸・三ノ丸圍之内二在ル分

一拾五軒 承応三年二拝領

一七軒 寛文八年二拝領

一七軒 元禄五年二拝領

一貳拾四軒 侍屋敷 同郡同村

但、万治三年ニ知行高之内式貫四拾八文下中屋鋪ニ被除下候、右高式貫四拾八文ハ他村ニ而替地拝領仕候

一八軒 侍屋敷 同郡同村

但、延宝五年方六年迄野原段々切立屋鋪二仕、下中之者指置申候

一百式拾七軒 足輕屋敷 同郡同村

但、寛永拾九年方明暦式年迄段々拝領仕、足輕之者指置申候

一六軒 又下中屋敷 同郡同村

但、寛永拾九年二拝領

右六口合式百七拾四軒

一八軒 亙理郡真庭村、正保元年拝領仕候

内

一四軒 侍屋敷

一四軒 足輕屋敷

一五軒 侍屋敷 同郡同村

但、延宝五年方六年迄野原段々二切立、下中之者指置申候

右式口合拾三軒

一六軒足輕屋敷同郡高瀬村

但、寛永拾九年二拝領仕候

惣合式百九拾三軒

内

一七軒

要害屋敷

一式軒 寺屋敷

一百五拾三軒 侍屋敷

内一拾三軒 切立屋敷

一六軒 又下中屋敷

一百廿七軒 足輕屋敷

右之通相違無御座候、但此度在郷屋鋪之分委細相改書上可仕由被仰渡候付、如此御座候、此外切立屋敷共無御座候、以上

大條監物⑩

元禄拾四年 宗道（花押）

十二月廿五日

芦立正左衛門殿

真柳権之充殿

⑮在郷屋鋪書出之覚 宝曆三年十一月 5—12

在郷屋鋪書出之覚

一七軒要害屋鋪 亙理郡坂元本郷

但、本丸・二ノ丸・三ノ丸迄

一要害屋敷方御城迄道法十里三十丁

一百八軒侍屋鋪 同郡同村

内

一六拾四軒 寛永十九年二拝領

一 壹軒 真言宗金藏寺

同年拝領家中寺

一 壹軒 曹洞宗徳本寺

右同断

一 拾三軒 同年拝領二ノ丸・三ノ丸圍之内ニ在ル分

一 拾五軒 承応三年ニ拝領

一 七軒 寛文八年ニ拝領

一 七軒 元禄五年ニ拝領

一 貳拾四軒 侍屋鋪 同郡同村

但、万治三年ニ知行高之内貳貫四拾八文中屋敷ニ被

除下候、右高貳貫四拾八文有、他村ニ而替地拝領仕候

一 八軒 侍屋敷 同郡同村

但、延宝五年方六年迄野原段々切立屋鋪ニ仕、家中之

者差置申候

一 百貳拾七軒 足輕屋敷 同郡同村

但、寛永十九年方明暦二年迄段々拝領仕、足輕之者差

置申候

一 六軒 又家中屋敷 同郡同村

但、寛永拾九年ニ拝領

一 八軒 亘理郡真庭村、正徳元年ニ拝領仕候

内

一 四軒 侍屋敷

一 四軒 足輕屋敷

一 五軒 侍屋敷 同郡同村

但、延宝五年方六年迄野原段々ニ切立、家中之者差置申

候

一 六軒 足輕屋敷 同郡高瀬村

但、寛永十九年ニ拝領仕候

右一紙

一 貳百九拾三軒

内

一 壹軒 要害屋敷

一 式軒 寺屋敷

一 百三拾四軒 侍屋敷

一 十三軒 侍切立屋敷

一 百三拾七軒 足輕屋敷

一 六軒 又家中屋敷

右之通相違無御座候、但此度在郷屋敷之分委細相改書上可仕

由被仰渡候付如此御座候、此外切立屋敷共無御座候、以上

大條監物名代

宝暦三年

大條友之進

十一月

重判

御勘定奉行衆

右之通伊藤十郎兵衛殿を以其外方御問合仕候處、寛保年中
御前へ上り居候通ニ外不罷成由申来候様御案紙之通被罷在候
事

酉ノ

十一月廿一日

辺見八十右衛門

(貼紙ハズレ1)

「御宝物箱江相入申候御用物」

(貼紙ハズレ2)

「此足輕屋敷四軒大條権左衛門方へ享保十四年ニ品々奉
願、権左衛門御知行高三十貫文ニ相帰候様、右願相談
請取候事」

(貼紙ハズレ3)

「一八軒侍屋敷 同郡同(村カ)」

3 職務

① 從不求三代勤功書上候扣貞享四年三月一〇日

1-55-2

(表紙)

「貞享四丁卯年

從不求三代勤功書上候扣

三月十日

「

一拙者祖父大條兵庫儀、拾七歳ニ而元和四年正月大條左衛門病死跡式知行高貳百貫百拾三文之所無御相違從 貞山様被下置、引続御一家御座敷被 仰付候、然所兵庫若年ニ而高知拝領仕儀遠慮、其段大條薩摩願申上、右知行高之内四拾九貫九百五拾五文指上、百五拾貫百五拾八文ニ而御奉公致勤仕候

一元和八年最上源五郎殿御改易、最上・莊内・由利被召上、城御請取之節、兵庫儀も罷越、東根之城ニ罷在、夫方金山之城なめしニ参候而、取合日数五、六十日最上ニ罷在候由承伝候

一寛永九年新田拾五貫六百貳拾七文拝領仕、知行高取合百六拾五貫七百八拾五文ニ罷成候、同貳拾壹年惣御檢地御改二割出拝領之上、右新田出目貳拾壹貫五拾八文、取合貳百貳

拾貫文之高ニ罷成候

一正保元年從

義山様御国御番頭被 仰付、慶安貳年迄 六ヶ年相勤申候 一同貳年十月松田善右衛門殿為 上使御鷹之羈被遊御拝領候付而、為御札江戸江御使者ニ被差登候

一同四年八月 龜松様被遊御逝去候付而、江戸江御使者ニ被差登候

一慶安貳年江戸御留守居御番被 仰付、兩年罷登壹ヶ年詰仕候、承応貳年御留守居御番ニ罷登候処、直々 品川様江被相付、江戸定詰御奉公仕候、同年從 義山様御加増之地八拾貫文被下置、知行高取合三百貫文之高ニ被成下、万治元年迄六ヶ年相勤申候

一万治元年十月十六日品川様御代御家老職被 仰付候

一同貳年 大守様御誕生御七夜之内、兵庫儀子共多所持仕候間、御名を付可申由、品川様被 仰付候付、松千代様与御名奉附候而、御祝儀等指上申候、其後 品川様ニ而 龜千代様与御名御改被遊候

一大守様御宮参被遊候砌、御帰ニ直々兵庫御長屋江被為入候付、為御祝儀御脇指献上仕候

一同貳年 孝勝院様御遠行被遊候付而、御棺江被相付被指下候

一 万治三年知行所地付野谷地拝領、開発高貳拾貫五百四拾五文、拝領三百廿貫五百四拾五文之高ニ罷成候

一 兵庫儀、寛文貳年迄四拾五年御奉公相勤、同年正月廿九日依願隠居被 仰付、家督無御相違私父監物ニ被下置候、其節法体仕、不求与名相改申候、延宝四年二月七拾五歳ニ而病死仕候

一 私父大條監物儀、同氏兵庫家督無御相違被下置、引続御家老職被 仰付、同三年為当番江戸江罷登候所、同四年四月六日大守様初而 御目見被遊候付而、監物儀も御供仕、公方様江戸御目見仕候

一 監物儀、病人ニ而御役目勤兼申ニ付御免被成下度旨訴詔申上候処、同六年二月之内、当時役目御赦免之儀者公義御遠慮被 思召候、病氣之上者当分御用相勤候儀御免被成下候間、富塚内蔵丞並ニ知行所江も引籠養生可仕旨、兩御後見方柴田外記・原田甲斐・古内志摩を以被仰渡候、因茲御用相除在所ニ罷在候

一 寛文拾老年四月於江戸凶事ニ付而、御老中様為御意嶋田出雲守殿・大井新右衛門殿并兵部殿、右京様よりも片倉小十郎・富塚内蔵丞・監物三人連名之御状被差下、此節之儀候間病氣候共、監物・内蔵丞儀も小十郎ニ相加御用相足候様ニ与被仰下候間、早速仙台江可罷登由、小十郎方申遣候

付而、則罷登引続致定詰、小十郎・内蔵丞ニ相加、御用等致相談候

一 同拾貳年十一月廿九日天野孫大夫・姉羽八郎右衛門為御使者被指下、監物儀病氣無然候共、此節候間用事等相勤候様ニ被仰渡可然由、御老中より兩御申次衆を以被仰遣候条、江戸江も罷登可相勤旨 御意之段、古内志摩宅に而孫大夫・八郎右衛門引添申渡候ニ付、同年十二月江戸江罷登候

一 同拾三年五月五日 大守様被遊 御目見候ニ付而、監物儀も御供被 仰付、公方様江戸御目見仕候

一 同年知行所地付野谷地拝領、開発高拾三貫百四拾六文拝領仕、取合三百三拾三貫六百九拾壹文之高ニ被成下候、右高之内貳貫文天和元年親類之者ニ為分取申候

一 延宝三年 大守様初而御下国之節、監物儀御供被 仰付相勤申候

一 同五年御祝言之節、御輿請取役被 仰付相勤申候

一 同九年七月廿九日病氣ニ而御用相勤兼申候付而、御役目御免被成下候、御役目年数貳拾ヶ年相勤申候

一 天和貳年三月如奉願隠居被 仰付、家督知行高三百三拾壹貫六百九拾壹文之所無御相違拙者ニ被下置候、右高之内貳貫文、貞享元年親類之者ニ為分取申候

一 同三年二月監物儀法体仕、幽松与名相改申候、貞享三年九

月六拾五歳ニ而病死仕候

一拙者儀、延宝四年正月御祠堂御祭御役人ニ被 仰付候

一同五年二月御小性被 仰付候

一同年三月幽松江戸江罷登、同月廿三日ニ御目見被 仰付、

同廿五日より御小性御奉公毎日詰相勤申候

一同年五月 大守様御供仕、御国元江罷下、引続御小性御奉

公相勤申候

〇一

一同六年十月御一家・御一族衆嗣子御奉公、来年中被成御免

由御意ニ付相勤不申候

一同七年四月 御下向ニ付而、月次四季之御祭御役人被仰付

相勤申候

一同八年正月廿八日御申次御役被 仰付、御座敷者後藤孫兵

次ニ可罷在由被 仰付候

一同年閏八月江戸江罷登、御申次御番相勤候

一同年十一月廿八日 徳松様御移徒被遊候ニ付而、為御祝儀

公方様御台様江之御使者被 仰付相勤候、同九年三月御国

元江罷下候

一天和元年十二月十五日 年頭之為 御使者江戸江罷登相

勤、同貳年二月罷下候

一同貳年八月廿七日 大御番頭被 仰付候

一同年九月 御申次為御番江戸江罷登候処、同十一月公義火

消被仰付候ニ付、火消頭被仰付三十日余相勤申候而相煩申

候付、同三年正月末御暇被下置御国元江罷下候

一同四年二月廿六日ニ改名、監物与被 仰付候

一貞享三年閏三月十五日於 御座之間 御直々若老御役目被

仰付候、御奉公年数部屋住方拾貳ヶ年相勤申候、以上

大條監物

貞享四年丁卯

御書判

三月十日

永井縫殿殿

②若老方日記 安永七年五月五日 3—20

(表紙)

「 安永七年五月方八月迄

若老方

日記

五月五日

月番舍人

大河原方(ハツ壱寸通)御着城

一大手御門江御奉行衆(外記殿)・若老(月番壱人)罷出、

其外段々罷出居 御意有之

一詰之御門江御奉行衆(豊前殿)、少シ間ヲ置内藏人罷出

御意有之 於席々も 御意有之、御直々御座之間江被為入、御長鮑上之、御家老出座 御着城御悦、龍ヶ崎江始而御出候ハ、歛申上、披露御小性頭

御意有之、御退出、奥江被為入、重而表江被為出、

御衣装〔染御帷子・麻御上下〕御先立御小性頭、御刀、御刀番、萬善堂江被為入、御焼香御直々御坐之間江

御出御茵御着座、伊達撰津殿出座、御着城御怡被申上、披露御小性頭、此節將監殿可被罷出所不快二付不被罷出

一御膳〔二汁五菜・御懸盤〕御相伴下野殿・舍人・道穗

濟而

片倉小十郎被召出、御着城御悦等申上〔披露御奉行衆〕

御意有之、退出

一奥御対面江御出〔上段下〕御着座〔無御茵〕

御先立御奉行、御刀、御物置ベリ役

中嶋監物〔三之間御開内一畳目〕公義江御帰国御礼之御使者被仰付候付、御目見、御奉行披露、濟而上段

御茵御着座被為召、御本丸・西御丸御老中方江之御書被相渡、下段江退〔上段方四畳目程〕御使者江仰付候御礼申上

同人披露、御意有之、同人御取合申上〔披露人二ノ間御開内一畳目〕

次

御一門衆同息方老人ツ、〔三之間御開内二畳目〕出座、御家老披露、御会釈有之、何茂御右之方江着座

御意有之、退出、御直々表御対面所江御出、御一家・准御

一家・御一族〔下之御開内一畳目〕老人ツ、出座、右御悦申上、披露御家老、同所御縁通〔御開外一畳目〕御一家・

准御一家・御一族嫡子一同出座、右御悦申上、披露御申次、柴田源藏一人二付名元披露、

御襖際江御着座〔間之御襖障子披之、御家老衆〕詰所已上

諸役人御悦申上、披露御申次

於虎之間向張出、御一門衆息方母義内室使者〔披露御申次〕

被為入

一大年寺、御參詣御延引

一暮半頃退出、御中奥江可罷出所、夜二入候二付不被罷出

一撰津様御部屋二罷出、御歛申上

一端午御祝儀、姫君様方御時服被為遣、御使者〔御廣敷番頭〕、御姫様方右御使者を以御目録之通被指上、

順姫様・式三郎様方御道具役御使者を以御悦等被仰上候、右披露 舍人

六日

一御中奥江罷出御悦申上、昨日夜中退出仕候故、今日罷出候段御留主居へ申次候

一九少時御供揃二而大年寺江御参詣、御献納物等前日之通、右役侍御武頭

一今日御機嫌伺、且内膳殿御猶子被為成候御悦等御休所江罷出可申上所、御寢所被為入候二付、御次江罷出、御小姓頭江伺御機嫌御悦申上

大年寺御参詣前八ツ打候二付、御出迎不相詣、退出

七日

一大年寺御参詣御延引、御廟江御名代内藏人

八日無事

九日

一朝御膳過御座之間江御出〔染御帷子・麻御上下〕、御先立〔御小性頭、御刀、御刀番〕御茵御着座、水戸様〔御使者被仰付、江戸へ被相登候二付御目見〔下之御開外一疊目〕下郡山内記、披露御奉行衆

一片倉小十郎被召出、披露御家老、在所江御暇

御直々被仰出、御礼同人披露、済而退出

一伊達式部殿〔御開内二疊目〕出座、御目見〔披露御家老〕

御会釈有之、御障子之方江着座、御着城御歛被申上、

御意有之退去、大和殿・安房殿・駿河殿・真郎殿・上野殿

右老入ツ、出座、御会釈有之、御障子之方着座、

御下向為御悦義、今朝御料理拝味、在所江之御暇被遣候御

礼被申上、披露御家老、御意有之退出

一下之御開内壱疊目、大松沢中務在所江之御暇被下、披露御家老

十日、十一日、十二日御参詣御延引、十三日、十四日十五日

一御座之間江被為入〔無御茵御筋違〕御着座〔染御帷子・麻御上下〕、披露御家老衆

一宮 御名代帰リ、石田豊前御開内着座、御意有之、退

一端午之御時服御拝領〔御奉行訴居〕

御頂戴被遊御意有之、御奉行拝見被仰付、

御茵御着座、撰津様、御奉行衆当日御祝義被申上〔披露御

小性頭〕、御意有之、退

一戸田典膳・橋本左内被召出、切支丹之義如兼而之被仰付、此節御奉行伺書

次

御城番被仰付 中山左太郎

御近習兼役被仰付 大町内膳

御小姓組与頭被仰付 原多門

此節御奉行伺書、済而

奥御対面所へ御出、御茵御着座、御先立〔御奉行・御刀・御刀番〕、安芸殿・式部殿・若狭殿当日御祝儀被申上、披

露御家老、御意有之、退、内蔵殿伺、御機嫌上府

御目見、披露御家老、御意有之、退去

中目日向 upper 府二付御目見、披露御家老

一表御対面所へ御出、御茵御着座（下之御開内一疊目、披露御家老）、柴田蔵人（当番）済而、御襖際御着座、詰所已上、諸役人当日御悦申上（披露御申次）、済而被為入

十六日

萬善堂御参詣有之（染御帷子・麻御上下）

因縁殿、九御位牌、於萬善堂政徳院様・雲松院様・浄眼院様・性善院様御参詣、御直々

瑞鳳殿・善應殿江御参詣、御先立御奉行衆、御用遣有之二候二付内蔵人勤

大年寺様・續燈院様・御長松院様御廟大年寺之

萬善堂江も御参詣、御帰国御着被遊候二付、御先立御奉行衆

十七日、御延引被仰出

十八日

一五ツ半時御供揃御野江御出被遊（月番計出勤、御出後退出）

十九日、廿日

廿一日

一織部殿当番二付、上府於御座之間御目見被仰付、披露御家

老

廿二日、御法事初日五ツ時御供揃二而

大年寺江御参詣被遊、御名代若狭殿

廿三日

廿四日

五ツ時御供揃、大年寺へ御参詣、御次第之通

御帰城之節瑞岩寺様御正忌二付瑞鳳殿江御参詣、御先立若老、八ツ半時揃、於御座之間御法事相済候御悦、撰津様御奉行衆被申上、披露御小姓頭、御法事奉行、将監殿（下之御開内一疊目）御目見、御意有之、退、披露御奉行衆、大年寺（上之御開方三疊目）（御法事奉行披露御会釈有之、御間之内江着座、無御滞相済候御悦被申上、御意有之、退

御法事係り出入司、仮役荒井加右衛門（御開外一疊目）御法事奉行披露

廿五日、八ツ時御供揃二而御野江御出被遊

廿六日

廿七日

廿八日

式日出仕有之、於御座之間式部殿（御開内二疊目）御礼被申上、御奉行披露、内膳殿御猶子被遣義二御礼御障子方着

座被申上候、

奥御対面所ニ而御一門衆・御一家・御一族御目見有之、於表兼而之通諸役人御礼有之

一和田杣之助家督之御礼（御開内一暈目）家来共御目見被仰付、杣之助家来御目見御礼於御縁通申上

一柴田蔵人病後之御礼御肴献上、御目見被仰付

一大町兵庫兼役之御礼御客之間・虎之間張出迄御礼有之

廿九日、晦日

六月朔日、於御座之間御膳御祝有之、月番内蔵人

一御茵御着座（染帷子・麻上下）、御膳二汁五菜、御銚子御通、御相伴外記殿・内蔵人・柰林

御膳済而、御直々御奉行衆当日御祝義被申上、奥御対面所江御出、御目見有之、表江被為出、詰所已上之輩当日御礼申上、衣装染帷子麻上下

若狭殿江於馬場御座敷御料理被遣、一調物被仰付

二日、三日、無事

四日

見性院様御正忌ニ付瑞鳳寺へ御参詣可被遊所、御廟所御座被遊候ニ付御延引被仰出、御名代外記殿御参詣有之候得ば御堂御廟共、御先立若老

五日

六日

御下向ニ付御子様方表江御饗応舞囃子被仰付、饗応相済候御悦御休所へ罷出申上、御衣装被為直候、已後戻子肩衣

七日、御参詣御延引

御堂江計御参詣、御廟御名代 柰

八日、九日、十日

十一日

一於奥御対面所御傳受御鉄炮七曜立御星被遊

大槻十郎太夫始門弟中罷出、式部殿ニも被罷出

十二日、御参詣御延引被仰出

十三日

七曜立星御皆中ニ付御祝儀有之、於御休御膳御祝、御相伴式部殿・孫兵衛殿、御奉行衆・若老并御々切内へ御酒・御吸物被下、御菓込共傳受相済候、門弟江二汁五菜御料理被下、私とも御次へ罷出、御祝儀申上、頂載物御礼御小姓頭へ申上、

姫君様・御姫様・順姫様・式三郎様方御祝儀物被指上兼候義故、御小性組御使者申渡候事

十四日、明半時御供揃、蒲生へ御出有之（月番共二不

罷出）

十五日

御座之間江御出（染御帷子・長御上下）、御茵御着座、御奉行衆当日御祝儀被申上

一三沢深松殿（下ノ御開内二疊目）御奉行披露、御会釈有之、御障子之方着座（御字目録御硯蓋（載上置）、御意有之、御手自被遣頂戴、此節名改被仰付、則退去

御長鮑上之

三澤信濃殿

御太刀目録（上之御開外二疊目二置之、三疊目出座、御奉行披露之）御会釈有之、御障子之方（着座、元服被仰付、御一字被遣名改被仰付候御札被申上、披露前同、御太刀目録同人納之、御意有之、御手自御長鮑被遣、御刀被遣之、御奉行持出頂戴被持退、御陰二而被帶之出座（御開内二疊目）御長鮑御道具被遣之、御札被申上、披露前同、御意有之、退出、

三澤若狭殿

御太刀目録（上之御開外二疊目置、二疊目二而御札）

御会釈有之、御障子之方江着座、深杏殿元服被仰付、御字拝領名改被仰付、御道具被遣候御札被申上、披露御奉行衆、御意有之、退出、於三ノ間原多門御役之御札、矢野江助家督之御札申上、披露御申次、

奥御対面所江御出、無御茵下段御筋違御着座、御帰国御札被相登御使者帰、中嶋監物被召出、御目見、上段（被為揚

御着座、監物直々御奉公差上、下段御障子之方（退、御使者相勤御目見被仰付拝領物之御札、披露御奉行衆、御意有之、御取合有之、監物退去、御一門衆当日御札被申上一表御対面（御出、石川筑前・畠中要人当日御札申上（披露御家老、仏眼寺入院御札十帖一本（上段方六疊二置、七疊目御札）、披露御家老、

家督之御札村田誠之助

御太刀目録（上段方五疊目六疊目御札）

御会釈有之、御右之方江着座、家督御札申上、披露御家老、御意有之、御長鮑御手自被下、御座御長鮑頂戴御札申上、同人披露多田壱岐病後之御札、御肴献上（上段方七疊目置八疊目御札）、披露御家老、御縁通御開外誠之助家来共御目見、誠之助出座、家来御目見御札、廣縁御開外二而上、披露前同、

詰所已上諸役人兼而之通、披露御申次、

御客之間・虎之間張出、伺公之間諸御札等有之

十六日、御参詣御延引

十七日

十八日、中田川、鱒川二御出、五ツ半時御供揃（月番計出勤）

十九日、昨日御漁之魚御小性頭申談、於御次拝領

廿日、大年寺様御正忌御参詣御延引、御出有之候へハ御先立若老

廿一日

御坐之間へ御出（染御帷子・麻御上下）、御茵御着座、御先立（御小性頭・御刀・御刀番）

上野殿当番二付上二付、御目見被仰付、中目日向同断、織部殿御暇之御目見、石川筑前・畠中要人同断、於馬場御座敷織部殿御料理被遣、一調物二被仰付

廿二日、廿三日、八ツ時御供揃二而御野へ御出有之

廿四日、五ツ半時御供揃

大年寺へ御参詣、御城中愛宕社・越路愛宕社へ御参詣被仰出候处、御延引被仰出、御城中愛宕社御先立若老勤、越路愛宕御名代外記殿

廿五日、午ノ四刻土用入

四ツ時登城御目付頭於焼火之間、御手伝被仰渡有之

廿六日

土用伺、御機嫌御寝所被為入候二付、於御次御小性頭申上、御一門衆始大番頭等御機嫌うか、ゐ登城有之

廿七日、廿八日、御不快二付奥表共二御目見御礼等無之、諸役人御奉行喝

御手伝被仰出候二付、御一門衆当番御免、上野殿御暇被遣

御料理被遣、一調物被仰付

廿九日

七月朔日、御不快二付出仕御目見無之、月番奎

表諸役人御奉行衆喝

二日、三日、菅野元水再役二付直々御番二入、鎌田奎

惠見習二申渡

四日

萬寿寺様御正忌二付御堂江御参詣、御先立若老、御寺へ御名代御家老

五日

六日

姫君様方七夕之御祝、御帷子御単物以御使者被為遣、土用中御機嫌御伺被為遣物有之、御姫様・順姫様・式三郎様江御肴代被指上、披露月番

七日、御延引被仰出

御廟御名代くらん勤、珊瑚院様御年忌御法事瑞鳳寺二有之、御名代内蔵人勤

心定院様御法事江戸有之、大年寺心定院二も

御名代大番頭勤、心定院様御年忌二付御機嫌御伺、姫君様方以御使者小林構被為遣、珊瑚院様御法事二付御機嫌御伺御口上書を以被仰遣、御使者前同、右二付式三郎様方

口上書を以被仰上

八日

九日

姫君様・式三郎様方御生身靈御祝義御肴代ニ指上、明十日
一宮御神事ニ付御参詣、暁七半時御供揃被仰出、過ル七日
暮時方御清御城中服拂

十日

今朝明六二寸通御召出（御野袴御羽織）、御近習向出勤
御城中戾子肩衣、於一宮御先立外記殿、布衣御借舍人・頼
母・勇記御帛城御機嫌伺、詰所已上、登城常限七ツ時揃、
御帛城暮已後ニ付表触済

御帛城（夜五ツ時）御次へ安芸殿・式部殿・若老・出入司
等兼而之通罷出居、御直々御座之間へ被為入、御茵御着座、
御長鮑上之、撰津様御奉行衆御怡被申上、御意有之、退出、
披露御小性頭

十一日、十二日、御参詣御延引被仰出

大年寺へ御献納御燈籠、朝御膳迄奥御対面所ニ而被遊御覽、
若老・出入司・御祭祀奉行罷出居、揃明半時携之者麻上下
戾子肩衣江為召、八ツ時過被為出、御覽済

十三日

十四日

式三郎様方盆之為御祝義御口上書を以御肴代被指上、両御
堂へ御名代藏人勤（盆ニ付而也）、

七ツ半時御供揃ニ而お子様方御同伴御本丸へ被為入、松火
御覽

十五日 戾子肩衣

式三郎様中元之御祝儀以御口上書御肴代被指上、御座ノ間
御目見無之、表式日之御礼御奉行衆喝

盆ニ付大年寺御参詣之所御延引被仰出、御名代将監殿、御
堂へ者御参詣被遊、松嶋へ御名代舍人（十四日下り）

十六日 御延引被仰出、御名代外記殿

十七日、御用日、御奉行ニ罷出

十八日

御座之間江御出（染御帷子麻上下）、御茵御着座（御先立
御小姓頭、御刀、御刀番）

御用被仰付、此節御奉行伺書

大番頭被仰付 富田老岐

御目付・御使番被仰付（上野登・今田善作）

御武頭被仰付 上郡山軍太

済而奥御対面被御出、上段御茵御着座、御先立御奉行

家督之御礼平源左衛門

御太刀目錄（四之間御開際ニ置二疊目ニ御礼）披露御申次

表御対面所上段御茵御着座 入院御礼龍藏寺

入院御礼寿仙院 十帖本

心定院 置付

十帖老本（上段方六畳目置、七畳目御礼）披露御家老

十帖本（御開内壺畳目置、外一畳目二而御礼）披露御申次

御太刀目録（上段方七畳目二置、八畳目御礼）披露御家老

石見名代重門忤、初而之御礼茂庭小源太

於御客之間・虎之間張出候も御目見有之、披露御申次

十九日

廿日、大年寺御参詣

長松院様御正忌、大年寺様御月忌御兼被遊御参詣

大年寺萬善堂・長松院様御位牌へ御焼香、御直々御帰り、

御先立内蔵人勤

廿一日、御野へ御出有之

廿二日、廿三日、廿四日御延引被仰出、廿五日無事

廿六日

於江戸お定方安産、御女子様御誕生ニ付御七夜御祝義 御

座之間江御出（染御帷子麻上下）、御先立御小姓頭・御刀

御番、御茵御着座、御長鮑上之、被為祝

御誕生御女子様方御使者（御小性組）大内弥右衛門（御縁

通御開際へ御召出、内壺畳目二而披露名元計）

御誕生様方被為遣御祝義物何々上之御開内壺畳目置之

濟而 摂津様御家老衆

出産御女子様御誕生御七夜祝義、御名お甫様と被附遣候

御怡被申上、披露御小性頭

姫君様江（干鯛昆布）御目録を以被為遣、御使者尾崎金平、

御姫様・順姫様方右御使者を以一種御目録を以被指上候事、

順姫様御事、御姫様御同様姫君様御使者を以諸事可被仰上

相濟候事

式三郎様方御口上を以一種御指上（月番披露奎病キ、内蔵

人披露）御休所江罷出御悦申上、奥方江ハ不罷出候事

廿七日

廿八日

御座之間江御出（染御帷子・麻御上下）御茵御着座、御刀

御刀掛懸之、御先立（御小姓頭・御刀・御刀番）、摂津様

御家老当日之御祝義被申上、披露御小性頭、

奥御対面所江御出、上段御茵御着座、御先立御家老、安芸

殿・式部殿当日御祝義被申上、披露御家老、

表御対面所江御出、御襖際御着座、諸役人御礼被為受、濟

而被為入

廿九日

壬七月朔日

月番舎人

御座之間御出（染帷子・麻御上下）、御先立（御小性頭・御刀・御刀番）、

端午之御内書御奉書

御出前御床之上江置之、若老附居

御拝見後、同人被相渡

蓮飯刺鯖御酒御目録

御出前御床之上江置之、御奉行附居

御頂戴、済而、御小性組納之、

御茵御着座、御刀御刀掛懸之、撰津様御家老衆出座、当日

御祝義被御申上、披露御小性頭

御意有之、退去

奥御対面所へ御出、上段御茵御着座（御先立御奉行・御刀・

御刀番）、安芸殿・式部殿当日之御祝義被申上、披露御家老、

表御対面所へ御出（御先立・御刀）前同、

入院御礼 江巖寺

十帖一本（上段方六疊目置、七疊目御礼、披露御家老無着座退）

家督之御礼今田善作

御太刀目録（御開内一疊目二而御礼、披露御申次）

御襖際御着座、諸役人当日御礼、披露御申次

於御客之間

江戸番馬上益田幸助

公儀へ土用御伺、御機嫌被相登御使者帰二付御目見其外御礼も有之、披露御申次

良寛院六供圓教院

大嶺山へ良寛院代僧罷登候二付御目見被仰付、披露御申次、

御中奥御子様方江蓮飯御錠口方以御小性頭被分遣之、

撰津様於御座之間・三之間蓮飯頂戴被仰付、

於元焼火之間若老中村日向頂戴被仰付、右御礼於御次御小性頭へ申上、於御大所上段詰合御小性頭・御近習向頂戴被

仰付、為御礼若老詰所江罷出申上、無披露

二日、三日、四日、五日、六日

七日、大年寺御参詣御延引、御廟、御名代内藏人

萬善堂江御参詣有之

八ツ時御供揃二而南方へ御出馬被遊、御日帰、格二付御近習之輩当番計出勤

御出後退出、御出馬御供 舍人

八日、九日、十日、十一日、十二日、十三日、十四日

十四日御帰城之筈之所御逗留閑上江御帰り、十六日御

帰城与申来、十五日、表出仕御留主中之通

十六日四ツ半時御供揃二而御帰城、八ツ時登城可致旨

御奉行衆方申来

同日七ツ半時頃御帰城、御次へ罷出居、直々御休所江罷出

則退出

十七日、十八日、十九日

廿日四ツ時御供揃、九ツ時過召出

東照宮・真浄殿・萬寿寺・孝勝寺江御参詣被遊御出懸、御城中愛宕社へ御参詣、御先立若老・舍人、御座之間方御先立御奉行衆御出後、退出

廿一日、廿二日、御用日、御奉行衆御用被申上

廿三日、廿四日、四ツ時御供揃

大年寺御参詣、御廟御先立内蔵人

廿五日、廿六日、廿七日

廿八日

御座之間江御出〔染御帷子・麻御上下〕御茵御着座〔御先立御小性頭・御刀・御刀番〕

撰津様御家老衆当日御祝義被申上、披露御小性頭、御直々表御対面所江

御出上段御茵御着座、御先立御奉行

入院之御礼 恭心院

十帖老本〔上段方六畳目置七畳目御礼、披露御家老、無着座退〕

初なし御礼 治太夫悴 鈴木三弥

御太刀目録、御開際一畳目二置二畳目御礼、披露御申次

家督之御礼 伊達吉之助殿

御太刀目録・毛馬一疋〔上段方四畳目置使者廣縁御開内江被召出御礼申上、披露御家老〕

使者 鈴木寿左衛門

吉之助殿使者自分御礼 右同人

御太刀目録〔廣間御開ノ内置御開外二而御礼、披露御申次〕

御襖際御着座、諸役人当日御祝義申上、披露御申次、於御客之間

關東筋御普請方御役人 氏家寛弥

披露若老〔内蔵人〕、御奉行伺公、御意有之、始而之御礼、詰所以上之悴虎ノ間向張出御目見有之、披露御申次

於伺公之間へ

關東筋御普請方御役人・御勘定奉行・龍ヶ崎奉行兼役

鴫田友之丞

御目見〔御奉行伺公、御奉行披露〕御奉行衆御用遣問二合兼、披露舍人勤

廿九日、五ツ時御供揃御野へ不為出月番共二不罷出

晦日、無事

御城中愛宕社・因縁殿御先立之節御唐門前二而草履被可然事、別而格と申無之御座候、間違等無之ため記置候事

③若老方日記 安永七年八月朔日 3—35

(表紙)

一 安永七年 八月朔日方

若老方日記

安永八年 正月方

八朔

月番内藏人

御座之間

御出(白御帷子・麻御上下)、御茵御着座、御先立(御小姓頭・

御刀・御刀番)

御相伴 将監殿 藏人 勇記

御組付・御三土器・御銚子御加、御相伴へも土器出、御銚

子出、御膳(二汁五菜・御懸盤) 御茶受御茶御茶菓子御薄

茶召之、畢而御相伴輩一同御礼、御小姓頭御取合申上退出

御直々新米御祝有之

塗三方載之、御刀番上之、御奉行上之、御開内へ出座、披

露御奉行、一同下ノ御床際江被罷出居一人宛被召出 御手

自被下之帰座新米御祝被御怡頂戴之御例被申上、御小姓頭

披露御意有之退出

重而 摂津様御家老衆

土座当日御祝義被申上、披露御小姓頭

御意有之御退出

奥御對面へ御出、式部殿当日之御祝義被申上、式日之通濟
而表御對面所渡御、御襖際御着座、常之通詰所已上諸役人
当日御祝義申上、披露御申上

一 摂津様御座之間三ノ間ニて新米御頂戴被 仰付

一 御子様方へ御錠口方御小姓頭を以被遣候

一 於焼火之間御宿老、若年寄、中村日向、出入司右頂戴被仰

付、御小姓頭訴居直々御礼申上候

一 於御次詰合御近習之内番頭格以上頂戴被 仰付

一 御元焼火之間 二表詰合御郡奉行頂戴被 仰付

此節月番御奉行衆上面着座新米頂戴被仰付旨被申談 御郡

奉行縁通江罷出居、御郡奉行頂戴、仮役等之者迄頂戴濟而、

大番頭古内要人頂戴被仰付、此節詰所脇御座敷へ引込居障

子ハ明置候事、当日御祝義御中奥も罷出

一 於江戸於甫様御死去之段申来、早速登城、両御丸へ之御勤

書以御小姓入御覽、御次へ罷出伺、御機嫌御小姓頭申上、

同役衆も申遣段々出勤、御機嫌相伺候事、夜之四ツ時過江

戸紙面御奉行衆方届、内藏人月番

二日

お甫様御死去二付、今二日登城御帳二付可申上由触申来、

御帳へハ付不申、於御次御小姓頭申上、右触以夜中来ル

摂津様、御中奥二も罷出申上ル

三日

姫君様方お甫様御死去二付

屋形様へ井竈以御使者被遣、御姫様・順姫様・式三郎様方御寄合小井竈右御使者を以被指上

四日、明半時御供揃、御野へ被為出、月番共二不罷出候事

五日、六日

七日、大年寺御参詣、御先立舎人

下総守様御養子被為済候二付

明八日登 城御奉行喝可申上由触来ル、御近習向兼而之通申上ル

八日

順姫様方八朔之為御祝義御使者御肴代百疋以御目録被指上

九日、阿川江御出有之、明半時御供揃月番共二不罷出

十日、昨日御獲亀於御次御小姓頭申談、拝領直々御礼

同人へ申上

十一日

姫君様方以御使者初鮭被為遣候御礼ハ被仰上

御使者尾崎金平

十二日、御参詣御延引被仰出

十三日

十四日、羽稜亀長沼邑へ御出、五ツ半御供揃、月番出於榴ヶ岡騎射見分有之、八ツ時揃、内蔵人・蔵人罷越十五日

大崎八幡御神事御参詣、御帰国御着、亀ヶ岡へも御参詣被遊、私とも方布衣、御供無之

表諸役人御奉行衆喝

御帰之節表御玄関方被為入、御先立御奉行虎之間向張出、御客之間御目見有之、披露御申次、表御對面所上段御茵御着座、御先立前同

入院御礼 国分寺学頭

十帖一本へ上段方五疊目置、六疊目二而御礼御右之方へ着座御家老披露へ御会釈有之 御意有之退へ

大則殿二輪番之御礼清瀧院

十帖一本へ御開之内一疊目置、外壺疊目御礼披露御申次へ

御出座御坐之間於同日摂津様御家老衆当日御礼有之、下野

殿被召出、来月十七日御祭礼奉行被仰付、此節御奉行伺公

兼而御用被仰付候節之通御直々兩八幡之御参詣被遊候事

御帰之節表御對面所済而奥御對面へ御着座

式部殿二種へ二ノ間下之御開内壺疊目置、外壺疊目二而御

礼へ内膳様御養子へ被仰出候御礼、御家老披露、御意有之

退へ御一同御小姓組持出候へ済而被為入

於夜暮時方御参詣相濟候迄服穢之輩御帰迄相詰七ツ時下宿

十六日、御参詣ハ延引被仰出

十七日、十八日、十九日、廿日

廿一日、五ツ時御供揃ニ而中田川鮭留御覽御出在之、

月番共二不罷出

廿二日

御旗元足輕弓鉄砲 御覽被仰出候ニ付、私とも内見分之義志津馬申聞、於榴ヶ岡見分有之、内藏人・舍人・藏人五ツ時過出宿、藏人殿へ立寄一同罷越、榴ヶ岡入口江御小人目付詰居先拂罷越、左之方へ御旗元・足輕・同組頭等並居、右之方へ歩目付、少し間ヲ置御作事方役人、左之方へ志賀孫之丞、高野志津馬扣居会釈致、直々見分場所へ罷越、次ノ方御旗元・足輕頭扣居、御歩目付是亦脇ノ方へ罷出居、段々弓鉄砲相濟一通被濟候節少しノ間休息、直々見分場所之弁当用間もなく跡討方取立弓鉄砲濟而罷帰、前之通何も扣居段々会釈七ツ時頃罷帰ル

廿三日

廿四日、大年寺御参詣御延引被仰出、御堂へハ御参詣被遊段中島与市申聞

廿五日、御野御出雨天ニ付御延引被仰出、舍人殿入湯御暇ニ而被仰下、御鷹方月番ニ而勤

廿六日、明半時之御供揃ニ而四郎丸鷹御鳥屋へ被為出月番共二不罷出

廿七日、九ツ半時之御供揃ニ而杉山台へ御出有之

於御對面所御宝物御風入有之

廿八日

表向諸役人出仕、御奉行衆謁、御座之間共ニ御礼無之候事、御年忌正忌之節ハ御礼不被為受、尤申渡等無之候事、服付出仕之通、御宝物風入有之

廿九日

明六時御供揃ニ而四郎丸鷹御鳥屋へ 御出有之、月番も出勤無之筈之处、御宝物御風入ニ付出勤

九月朔日

月番 空

御座之間へ 御出、御茵御着座（染御袷麻上下）撰津様御家老衆当日御祝義被申上、御小姓頭披露、御意有之退出水戸様へ被御使者帰 下郡山内記

御目見披露御家老（首尾能勤一段之御意有之）

妹婚姻之御礼 中嶋与市

御肴一種（上之御開方三疊目置之、四疊目ニ而御礼、披露御奉行衆、御肴御小姓組持出之）

家督之御礼 伊藤五郎兵衛

同所三ノ間御縁通目錄披露御申次、奥御對面所江御出上段

御茵御着座、御先立御奉行、御刀・御刀番

婚姻之御礼 伊達安芸殿

御肴一種（二ノ間御開之内ニ置之、御開之外ニ而御礼、御家老披露、御意有之退出、御肴御小姓頭持出之）

御對面へ

御出（下段）御茵 御着座、御先立・御刀前同

入院之御礼 龍宝寺

十帖老本（御茵方三疊目置之、四疊目ニ而御礼、御会釈有之、御右之方着座、披露御家老）御挨拶有之、退出、十帖一本江戸番馬上持出之

御襖際江御着座、御襖障子御家老披之、御申次披露、詰所已上諸役人当日御祝儀申上、

御客之間下之間御目見、披露御申次、虎之間向張出

伊達安芸殿内室使者 森八郎右衛門

披露御申次済而被為入

當時方来二月中迄雉子御鳥屋 御免被成下間、於御次御小姓頭平井重税申聞、右御礼直々同人宅へ罷越

御奉行御詰所江月番罷越、雉子御鳥屋御免被成下段申談、為御礼私とも詰所へ被罷越、諸鳥討留之義御免被成下度願被申聞、御旗元・足輕頭を以伺、其外御近習向詰所ニ而申渡、御宿老衆・出入司ニも同所ニ而申渡、当病御用遣等ニ

而不罷出、面々者同席方傳候様向々申渡、病氣之者へハ以指紙申渡、御一門へ者以奉書申遣候事

屋形様へ從姫君様方以御使者内膳様御養子被為済御次調被仰遣御返礼被為仰遣、御姫様・順姫様・式三郎様方も右御使者を以御同様被仰上、新米被為遣候御礼も右御同様被仰上

二日、御宝物風入有之

三日、明六過御供揃御野御出有之、月番共ニ不罷出

四日

御奉行衆諸鳥討留候義如願御免被遣下候段被仰出候二付、御詰所へ罷越申聞候為御礼詰所へ罷越被申聞

五日

於榴ヶ岡御旗元弓鉄炮 御覽被仰出候处、雨天ニ付御延引八日天氣可被遊御覽被仰出

私とも御先へ罷越候様被仰付何も裏付上下、月番計裏付着用ニハ記録ニ有之候处、老人着用ニ而者於帰所代り合等之節可指支申合何茂裏付着用致候事

六日、御奉行衆寄合出勤無之

七日

御参詣御延引被 仰出、御名代内蔵人勤 御廟御寺 御位牌共ニ正五九月御寺有之由之事

八日

五ツ時御供揃二而榴ヶ岡へ 御出御簀元足輕弓鉄炮 御覽被遊、四ツ半時頃御召出、九ツ少シ前榴ヶ岡へ被為入、御入口江御簀元組頭並役罷出居（組頭御近習披露）少し間ヲ置志賀孫之丞・高橋志津馬罷出居無披露 御意有之 御見物所御入口江私共罷出居候、少し間ヲ置御奉行近江殿罷出テ居 御意有之 御見物所御茵御着座 弓始候義奎伺 御簀元足輕頭江申儘弓始、射場之内へ孫之丞・志津馬（麻上下）射前脇江内藏人・奎・舍人・藏人罷出居、御餅菓子上ル（御下被下置、御相伴近江殿勇記）鉄炮込段々濟、右之内御膳被召上、御相伴前同（私とも御下被下）惣躰濟、御好被仰出弓鉄炮有之、濟而の場盤 御覽 神明堂迄被為入、此節何と御借御見物所江御帰（御直々御帰城如前之何も罷出、御意等有之、退出帰宅暮半時）御頭々罷帰御直々御休所江罷出、弓鉄炮濟而孫之丞・志津馬被召出 御目見被仰付御意有之（御取合申上候事）

九日

御座之間御祝有之 御茵御着座（染小袖麻御上下）御先立御小姓頭・御刀・御刀番・御相伴近江殿・日向・皆人御組付、御三土器、御銚子御加、菊花入、御相伴江も土器御銚子返之、御膳（二汁五菜御懸盤）上之、御茶漬、御茶

御菓子、御薄茶上之、畢而御相伴一同御礼、御小姓頭御取合申上、御直々〇（當日祝義撰津樣御家老衆一同、御小姓頭披露、濟而〇）奥御對面所江 御出、安芸殿當日御祝義被申上、披露御家老 御直々表御對面所江 御出御襖際江御着座 御先立御奉行・御刀前同、間之御襖障子御家老披之、詰所已上諸役人當日御祝儀申上、披露御申次、於御客之間大番組 御目見被仰付、披露御申次、撰津樣御中奥江も罷出ル、御姫樣順姫樣式三郎樣重陽御祝義以御使者御肴代被指上、姫君樣二者御忌中二付相扣可然、御奉行衆へも申達、御祝義物相扣候事、御子樣方者被仰上可然由御奉行衆被仰聞、奎披露、姫君樣兼候樣被為成候間□□と御咄致候處、右之通 御指図二而相濟、好姫君樣・尾張姫君樣・御伯母樣（廿日御忌中十八日迄之由御奉行衆被仰聞）

十日、七ツ時御供揃御野へ御出有之、月番共二無出勤

十一日

十二日

堂形之者共、日置流之者とも近の前被遊 御覽（揃五ツ時）八ツ時迄馬場之座敷へ被為入

堂形之者共方段々始、壹尺二寸拾本迄惣射濟、六寸五寸之分已上二壹尺六寸へ申候者共へ被仰付、暮頃濟、射術濟而、高城宅三郎、矢崎又三郎、御意有之、奎御取合、濟而被為

入、長沼五郎右衛門門弟共二被遊 御覽、私へも裏御上下、宅三郎・又三郎麻上下、射手候者共裏付上下、甚太夫弟子被 御覽ニ付是亦麻上下、長沼五郎右衛門同斷、真淨殿御參詣御延引被仰出

十三日、十四日、九ツ時御供揃萱場奎下屋敷へ被為入
十五日

御座之間へ御出へ染御小袖麻上下へ 御出前御床ノ上へ置重陽之御時服御頂戴有之、濟而御奉行拝見仕候哉、御意有之拝見濟而 御拝領物御小姓組持退、御茵上ル、撰津様、御奉行衆当日之御祝義被申上、披露御小姓頭、奥御對面へ御出、御先立御奉行、御刀・御刀番、安芸殿・式部殿当日御祝儀被申上、御奉行披露、御意有之退去、表御對面へ御出御襖際御着座、御先立・御刀前同、間之御襖障子御奉行被之、詰所已上諸役人当日御札申上、披露御申次濟而被為入

一三ノ包馬とも五ツ半時揃二而馬場御座敷二而 御覽有之、私とも罷出居、暮時迄被為入

十六日、御參詣御延引

昨日馬とも残、御見立之馬とも今日御覽被遊

十七日、月番計出勤

暁七ツ時御供二而東照宮御祭礼ニ付御參詣、布衣御供 藏

人殿・与市・采女御見物処へ被為入へ朝月番出勤外不罷出へ、同御覽、御帰城之節御近習向迄罷出御悅申上、御帰之節御座之間へ御直々被為入、撰津様御家老衆出座、御祭礼相濟候御悅被申上、披露御小姓頭、御意有之退出、濟而被為入、此節 御休所へ御近習向々迄罷出御悅申上、重而御座之間へ御出御着座御茵無之、大立目下野出座、御祭礼奉行相勤候ニ付御目見、御家老披露、御意有之御退出、御直々奥御對面所へ御出、下段御着座謁、仙岳院へ上之御開之内江出座へ御祭礼相濟候御悅申上、下野披露御 祝有着座、御挨拶有之退出 被為入候節御座之間江御着座、東照宮御鏡餅仙岳院持参差上被申段、御小姓頭を以下野披露、御土器江分三方へ載之、御刀番上之 御頂戴濟而被為入、右御鏡餅於三ノ間撰津様、御家老衆、於焼火之間若年寄始御近習之輩詰合之者頂戴被仰付候、御參詣付服穢之輩十六日暮六ツ時御行水已後方御鏡餅御頂戴相濟候迄御目通へ不罷出、御歸り之節表御玄関方被為入、右之節御奉行衆へ御玄関上面へ御廣間ノ外二罷出不居、少シ間ヲ置近習向並居へ私二も御廣間ノ内番頭已上扣居、唯々迎者御奉行衆内二被罷出候節も有之、不同有之候処、此節御奉行御吟味被成、右之通相濟、右之段豊前殿・李殿へ被仰聞、依記置候事、私ともへ御奉行衆次々罷出可然吟

味之通申達候故私とも御小姓頭等者御間ノ内ニ罷有候様ニ被仰聞候事

十八日、御供揃次第御裏林へ小鳥取方御覽被為入 御出候段承知御罷出致候事

十九日

召上候三歳御馬 御覽被 仰出、直々御稽古之被遊候ニ付、私ニも罷出ニ不及旨田辺又治を以被仰出

廿日、廿一日、暁七時御供揃ニて四郎丸雁御鳥屋へ御出ニ付無出勤、今節頃方明日立、御献上之御鷹見分ニ土樋御鷹部屋へ参候、杳・舍人兩人罷越、内藏人当り役藏人御用支ニ付不罷越候

廿二日、廿三日

廿四日

大年寺へ御参詣例月之通之御供揃ニ而 御出被遊、大年寺之萬善堂江も御参詣、御急キ付小屋敷へハ不為入、御直々御帰城

廿五日、姫君様方御時服被為遣披露濟、御忌明已後被為在候事、四時之御供揃ニて御裏林追懸山ニ御出被遊候御出以後下宿申候

廿六日、七ツ時御供揃御野へ御出、月番共ニ罷出候
廿七日

五ツ半時御供揃ニ而下野殿へ被為入兼 御覽御直々堂形へ被為入、堂形之者共、御日置流之者共、近的遠的堂指ノ的御覽被遊、御直々平井主税宅へ被為遣、私とも直々主税宅へ罷出御機嫌被成為、於堂形御餅菓子御下被下置、御札御小姓頭申上、直々帰宅

廿八日

式日御札如兼而之被為受、表御對面所ニ而千手院入院之御札有之、御客之間御目見有之、披露兼而之通、於御座之間大松沢甚右衛門御目付御使番、橋本九十郎御武頭被仰付

廿九日

七ツ時御供揃ニ而青根へ御出馬被遊、何も兼而之通罷出

晦日、朔日、表出仕有之、二日、三日、四日、五日六日、七日、八日、九日、十日

十一日、青根御供揃八ツ半時

御帰城七ツ半過へ八ツ時過何も罷出居、表御玄關方被為入

御直々御堂へ御参詣、御座之間へ被為入、御長鮑上之、摂津様御奉行衆出座、御帰城御悦被申上、御小姓頭披露、私とも御休所へ罷出御悦申上候

十二日、真淨殿御参詣御延引被仰出
十三日

十四日、真淨殿へ御参詣

十五日

御献上御茶御口切御座候間、中ノ御襖建置（若松御壺 御出前御座候間相出、御茶道何も罷出居、若年寄付居、御印府箱持参致置）

御座之間へ御出（麻御上下染御小袖）ニて御茵 御献上之御茶 御自身ニ為詰、御供方相濟候へハ、御茶道為持、奥御對面罷越御勝手役人へ相渡、月番舍人亦以御座之間へ罷出、政徳院様・雲松院様・性善院様へ御献備之、御茶御詰方相濟候へハ如克候御茶持参「御茶道為越罷越爾後」式同断、又以御座之間へ罷出、若松壺江御印府相附、御壺御床へ御茶道上候節引退、直々奥御對面所江被越附居御拵為致候事、御膳相濟之節御茶道ニ為持御印府入御覽、此節若老罷出、御覽相濟義御勝手江御茶道ニ為持罷越御役人へ相渡御献上鮭五竈御掛被遊、御膳常之通、御相伴外記殿、良寛院道穩外手段無之候事、濟而被為入、重而御座之間江御出御茵御着座（御衣装前同）、兼而之通御家老衆御悦被申上、披露御小姓頭、奥御對面所へ御出、安芸殿・式部殿へ当日御悦被申上、御直々奥御對面所へ御出、表向諸役人式日御悦申上、御客之間へ御出、大番組御目見有之、披露御申次、濟而被為入

十六日

大年寺御参詣有之、御廟御先立 奎

十七日

御堂風入有之、月番罷出、麻上下若松之御壺へ御奉行御印被相附、御茶道等奥御對面所へ相詰居、月番壺人御印府相濟、御茶道ニ為持、御茶道部屋罷越、麻上下着用

十八日、追見山ニ御出有之、月番共々出勤無之

十九日、御野へ御出有之、七ツ時御供揃、月番共不出玄猪御祝揃七ツ半時御帰り已後御座之間御祝有之、濟而撰津様御家老衆御祝被申上、御小姓頭披露退出、被為入已後御座之間三之間ニ而撰津様御家老衆餅頂戴、濟而私とも頂戴、御小姓頭へ御礼申上退出

廿日

廿一日、九ツ半時御供揃ニ而芳賀皆人屋敷へ被為入

廿二日

柳ノ間御縁通ニ而志賀孫之丞并弟子共兵術被遊 御覽、私とも東ノ方御障子ノ所ニ罷出居、兵法濟而、孫之丞被召出名元披露、月番御意有之退出被為入

廿三日

廿四日

大年寺御參詣、御寺御先立 内藏人

廿五日

明七ツ時御供揃ニ而御野へ御出有之、月番共ニ出勤無之、御宝物御風入ニ付内藏人出勤

廿六日

四ツ時御供揃ニて追見山へ御出有之、御出後下宿

廿七日

廿八日

御座之間へ被為出、表御對面所詰役人御札兼而之通

廿九日、御野へ御出有之、月番共ニ不罷出

晦日、明六時御供揃追見山へ御出、月番共ニ不罷出

十一月朔日、月番内藏人

御座之間へ御出（染御小袖麻御上下）、御先立御小姓頭、御刀、御刀番、重陽之御内書御出前御床へ上置、若老附居（月番内藏人）御拝見被遊御着座候所ニ而、御内書等持退、直々奥御對面所之方へ引退、御納戸役人御大奉（於奥御對面所ニノ間ニ扣居）相渡ス、御茵御着座、摂津様御家老衆當日御祝義兼而之通奥御對面へ被為出、式部殿御札濟而、表御對面所江被為出、諸役人・式日御札被為受

一御證文風入、朝晩御奉行衆共ニ出勤有之

二日

一明三日立御時節御伺御使者橋本平八郎被相登候ニ付御書拝見、同人へ相渡、

御證文風入有之、朝晩出勤直々詰居候事

三日

四日

明六ツ時御供揃ニて御野被為出、月番共ニ不罷出、御納戸御道具風入有之候付罷出居、出入司も罷出候

五日、六日、御鳥屋へ御出有之、明七ツ時御供揃、月

番共不出（月番一人ニても罷越例も有之候事）（大年

寺御參詣有之、御先立内藏人）

七日、八日、九日、明半時御供揃、御裏林追見山御

出、月番共不罷出

十日、十一日、十二日、御參詣御延引被仰出

十三日、曉七ツ時御供揃候而御野へ被為出、月番出勤

無之

十四日

十五日

一姫君様廐御拝領被為遣分候ニ付、御使者桐ヶ窪源十郎、名元披露、御意有之、罷出御口上付指上ル、御被見濟候節、月番若老（上之御開際へ罷出居）、御目錄入 御覽、雁御頂戴、濟而御使者被召出、御直々御返答被仰遣、一同退去

一若老衆当日之御礼兼而之通奥御對面、表御對面所無別条御對面所にて入覽御礼有之

一於生樣御ひもととき御礼義、御中奥御悦ニまかり出候

一鷹御拝領御悦、姫君樣・御姫樣・順姫樣・式部樣へ御帳ニ付申上ル

十六日、御さんけい御延引、日向殿仮役被仰渡

十七日、奥御對面所ニ而以御望社家參被為半勝手次第

承候樣御小姓頭申聞

十八日、寒入、明六時御供揃、御鳥屋へ被為入、月番

共ニ不罷出

十九日、曉七時御供揃、堂谷御鳥屋へ被為入、月番共

ニ罷出ズ

廿日、大通院殿三回忌鳴物、寒入伺御機嫌今日申上ル、

兩日御出有之候付退、佐保山鹿狩、御山奉行内藏人

廿一日、廿二日、廿三日、廿四日、御延引

廿五日、寒鴨御出馬、明少前御召出、何も罷出

廿六日、廿七日、廿八日、表出仕有之、廿九日、晦日、

十二月朔日表出仕、月番奎、二日、三日、四日御帰城、

土用夜五ツ時過内藏人・日向罷出、寒鴨御出馬、御供

藏人

五日、六日、明半時御供揃、追見山へ被為出、無出勤

七日、御延引、御名代日向

八日、九日、十日、十一日、十二日御延引

十三日、十四日、御山追、御山奉行奎、十五日式之通

御野始御山奉行被仰付、御參詣御先立、御堂若年寄

御寺際參殿

十六日、十七日、十八日御野御出有之、節分御祝へ御

相伴内藏人へ有之

十九日、廿日、廿一日追見山へ御出、月番共ニ不出

廿二日、廿三日歳暮御祝儀悦、舞囃子有之、姫君樣方

被分遣雁、御役御次第之通

廿四日、大年寺御參詣御先立へ御寺日向、御堂内藏人へ

廿五日、廿六日、御給仕計揃なし

廿七日、御すすはらひ、非番ともニ出勤、うら付上下

廿八日、歳暮御祝有之

廿九日

安永八年

正月元日、二日御次第之通、月番日向、兩日共ニ御規

式済而御休所江罷出候

三日、御野始メ

御山奉行日向、一騎打へ内藏人・藏人へ、御留主居奎

御帰城被遊、御座之間ニ而御規式、畢而御休所江罷出

御野初メ御首尾能相濟候御悦申上ル

四日、五日之けいこあり

五日、寺院方御礼、六日、年御別祭

七日、御連歌之間御奉行衆次へ罷出居候

八日、九日御始メ事、前々之通り高橋治平伺候ニ付申

渡候事、畢而筆留ニ有り

若年寄上江初罷出居、御講釈濟而、若老の次列シ、御意有之、御のし被下、帰野御礼申上、末席の同役御取合申上ル段々不伺有之候ニ付、高橋治平伺申聞候ニ付、同役御中吟味之上同人へ申渡置候事

十日無御別条、十一日御謡初御次第之通、披露先引若

老

十二日、御延引

十三日、御鳥屋へ御出有之

十四日、御野へ御出有之、兩日共出勤なし

十五日、出仕有之、御座之間揃明半時、御膳御相伴々殿、

御膳已後表へ被為出

十六日、御参詣御延引

十七日、御城中愛宕社御参詣（御先立蔵人勤、無御供）

御直々東照宮・真浄殿へ御参詣、萬寿寺・孝勝寺御参詣

十八日、御別条なし

十九日、芦ノ口山御鹿狩、御山奉行 李

順姫様御疱瘡ニ付御悦申上ル、御出前出勤御悦申上ル 姫

君様・順姫様も御帳ニ付申上

廿日御規式

廿一日、御野御出有之

廿二日、松島へ御参詣御直々

廿三日、古川辺江御出馬被遊

正月晦日、鶴到着、月番日向出勤、御次第之通無品

廿八日、御法事等江戸ニ有之出仕無之、

二月朔日、表出仕有之

二月四日、御帰城へ七ツ時登城申来、八ツ時過出勤

五ツ時頃御帰城、御座之間ニ而撰津殿御家老御悦申

上ル御休所へも罷出ル

五日、六日、御拝領鶴御頂戴有之、奥御對面江御出、

（御のしめ御小袖麻御上下）御出前竊大橋源藏残居

若老月番上段下南ノ方御縁通へ罷出、付添居撰津様・御奉

行衆次ノ御開ノ外御縁通へ被罷出、御頂戴濟而、下段へ着

座、無御茵御意有之、撰津様・御奉行中御開之内へ入拝見

帰座、竊持退濟而被為入、御座之間ニ而撰津様・御家老衆

御悦被申上、御小姓頭披露、私とも御休所ニ罷出御悦申上、

御家老衆・私ともものしめアサ上下

七日、八日御鳥やへ御出、月番共二不出

九日、十日、十一日、卯ノ日御祝義有之、執事日向

十二日、御参詣御延引

十三日、御野御出有之、月番共二不出

十四日、十五日式日之御礼有之

於御座之間へ安部清右衛門出入司被仰付、蜂屋又左衛門御目付御使番列等唯今迄之通、森文五郎御郡奉行被仰付、表諸役人御礼被為受、御目見等有之、濟而鶴代へ御出被遊

十六日、御参詣御延引

十七日、十八日、鶴代へ御出、月番共二不出

十九日、追見山へ御出、御直々御野有之、月番不出

廿日、廿一日、鶴代江御出有之

廿二日、御獲之鶴拝領被仰付由、御小姓頭奉書申来、麻上下、拝味已後御小姓頭へ御礼申上ル

廿三日〈御姫様・式三郎様〉御痘瘡被為濟候御悦御帳

ニ奉申上候、御姫様・式三郎様酒湯被為下ニ付御悦御礼等の使者姫君様方被仰遣、御使者尾崎金平

廿四日、大年寺御参詣 御使者日向

廿五日、無別条

廿六日、廿七日、御野へ被為出

廿八日、兼而之通

廿九日御鳥屋江御出直々追見山被遊晦日鶴力谷山追見山ニ御出有之

廿八日、夜五ツ時前道中三日ニ罷下候、江戸番馬上佐賀勇治、大納言様御不例申来候〈廿四日薨御之段〉早速出勤、御勤書等御小姓頭入御覽、下宿ス、廿九日、晦日御出御延引被仰出、廿九日四ツ時御用之義候間出勤、御目付之弘之儀触申来ル、右ニ付御弘メ被 仰出、直々御機嫌も伺 御休所ニ被為 入候得バ可罷出処御向輕前ニ付、御小姓頭へ申上

晦日〈鈴木志摩二道中三日ニ被相登候て御手自御書被相渡候事〉奥御對面書へ御目見

朔日、鳴物中出仕等被相扣段御奉行へ被仰渡、御目付

申聞候御事、初而大年寺御参詣

二日、三日、四日御法事、五日、六日、七日御参詣

八日、満勝寺・孝明寺・萬寿寺・孝勝寺御参詣

九日、追見之御馬見分罷越

十日、御献上御馬御覽揃八時何も罷出居、兼而裏付上下着用之所御参府前御覽之節ハ亦以於江戸御覽被遊候間御常振ニ而御覽被遊、於江戸表御覽候砌御表上下被為下可然、勿論御在国尔而御留主中御献上候へハ又候御覽不被遊候間、此節ハ御裏上下被為下可然旨吟味被下度、藏人殿を

以向候処、吟味之通可然被仰出、以上御寺係りも内蔵人申證御取次も右之趣依而御参ニ付於御覽候節御常振之首尾致候事

十一日、十二日、十三日

十四日夜八ツ半時御供揃ニ而一宮へ御参詣、御直々東照宮へも御参詣、七ツ半頃御帰城、伺御機嫌、七ツ時出勤御休所へ罷出ル、御座之間ニ而御のし計上ル、御奉行御悦等鳴物中ニ付無之

○十五日

御拝領之鶴御鏡餅御披奥方々御思召、懸舞囃子等有之、濟而御休所へ罷出

十六日、両御堂、瑞鳳寺、大年寺へ御参詣、御堂御先立御奉行之所御用遣ニ付日向相勤

○十五日の分

歳暮之御内書御拝見、御鏡餅御頂戴、御一同也、御内書印頭へ床之上へ置、如兼而之若老訴居（日向）御鏡餅御奉行衆訴居、御内書御拝見、御直々御鏡餅等御頂戴、御筋違御着座、其節若老罷出御内書持参兼之通引退、其後御鏡餅等引、御囃子等有之、兼而之御座敷支度候付、出仕等相濟候已後詰所ニて見届、始末兼而之通、西ノ丸御奉書ハ追而御休所ニて入御覽可然、伺右之通御内書計御拝見、右 大納

言樣薨御ニ付之吟味也

仙三郎様御袴着御悦等御座之間披露若老

十七日、皆人屋敷ニ披為入

十八日、御首途

五ツ半時揃候而溜り御朱印披下、御座之間奥御對面所表御對面所へ被下、絵図之通御罷出、御次第之通私とも手段無之登り、同役方計也、御朱印被下御直々安房殿へ被為入、御帰り御座之間御家老衆御悦披申上、私とも御座所へ罷出ル、詰合御供の者計罷有、月番ハ下宿可致事ニ有之候処、詰居之衆直々御悦申上候、向後間違例へ不罷成様專一故ニも吟味致記置候事

十九日、御野へ御出、月番ともニ不相出

廿日、廿一日、廿二日

廿三日、御発駕、御供揃明十時、内蔵人岩沼御立へ罷出、月番并外一人御城ニ被在候事

④「御申次手扣」(安政六年) 2—4

(表紙)

「道徳方」

御申次手扣

目録

一年始披露并年中行事
 一田村様御使者等之部
 一日不定之部
 一服付之部
 一披露之部
 一品披露之部
 一肩書之部
 一呼次之部
 一御馳走役之部
 一被仰渡之部
 一御間所之部
 一御名代之部
 一鶴御拝領之部
 一上使之部
 一同役申合
 一供廻
 一御申次遣太刀之部
 〔朱書〕
 一「子」年始披露并年中行事
 一元日表御対面所江
 御出御先立御奉行衆御寄場江座シ会釈被致候所ニて呼次之
 者御規式帳持參致候間、入口御柱際江罷出、御規式帳向

江指置御目附呼懸次第呼次申候、御一門衆始一人宛着座迄
 被為出候下之御闕方二三疊目柱江參候節呼次候得者宜敷候
 事、御一門衆ヨリ着座までハ御奉行披露
 右呼続御一門衆方着座まで相勤、着座終之者之御太刀引
 二御武頭柳之間江罷出候節引退候、披露人ト違何時も御
 客之間之方江退申候、二日も同断
 一御盃頂戴之呼続ハ着座之輩一同御礼御広間江罷立候節罷出
 ル、披露人ハ此節御酌御小広間中程江罷出候節罷出、上之
 御闕より拾疊目ニ扣居
 但、披露人ハ正面横疊を外シ御襖之方壹疊之所江罷出着
 座申候、引退候節も前々同頂戴終之者御盃頂戴迄候跡ニ
 付御勝手之方へ退候事、二日も同断
 一御召出之呼次者御前ニ有之御土器ヲ引御給仕下之、御闕ま
 て罷越候節罷出候、披露人者段之御土器足打江戴御給仕柳
 之間ニて正面ニ向候節兩人罷出、下之御闕際内江罷出ル、
 御召出之者披露済候而御酌下江向候節罷出候、此節終之頂
 戴御闕之外江退候、柱ニ相当候、右呼次退候義者終之者頂
 戴ニ罷出立候節退候事、二日も同断
 一元日田村様御使者披露御家老衆ハ為勤、呼懸呼次共二肩書
 を申候、同日御一門衆使者呼次ハ田村様御使者呼次候者直
 し相勤候、右呼次ニ罷出候ハ御盃頂戴之輩頂戴相済、御酌

ハ勿論御前ニ有之御盃一字引候所ニて罷出候、右御使者披露御家老衆上之御闕之外一疊目ニ御太刀目録置之、拾五疊目ニ着座被成候節御使者御客之間の方ニ罷出候間御客ノ間、御闕内江入候節呼次候、御一門衆之使者ハ披露之御申次上之御闕之外三疊目御太刀目録置之、廣縁御張付より一疊目ト二疊目之中程二座、使者之者披露人之後を通り候柱ニ違し置使者御客之間方罷出、御闕之内江入候所ニて呼次之右披露人最初御太刀持参之節二者正面を罷出、御太刀目録無之御障子の方を受通り正面をはつし廣縁着座披露濟而御太刀取ヘ罷出候節ハ正面を罷出引候節ハ正面をはつし引退候、終之者披露人ハ追而罷出候者無之候故正面を引申候、右正面をはつし候義者

安永八年年始御規式之引揃之節御奉行衆御吟味之上被仰渡候、二日も同断

一 正月元日表御対面所御規式ニ付何も御寄場ヘ同役中罷出居候事、同日晚御対面所御規式濟而御夕御膳後大年寺江御出候節、虎之間向張出ニ而御一門衆使者始披露有之、右披露人者繰合ニて勤メ前之衆居残被為勤候事、表御対面所御規式相濟候得者御用無之衆退出被致候事

一同月二日表御対面所御規式ニ付元日之通御対面所御規式相濟、御直々虎之間御縁通迄御出、虎之間張出ニ而御一門衆

始使者御目見披露人繰合相勤候事

一同月三日御野初御出之節御広間重戸際ニて大町検断・青山五左衛門御目見被 仰付候、披露人ハ御用前相勤候ヘ但披露之部ニ有リ此ニ略ス同日晩御野初相濟御帰城被遊候御怡登城御連歌之間ニ扣居御通之御目見被 仰付候事

一同月四日ハ五日ニ諸寺院年始御礼申上候ニ付、十帖壺本持出、稽古有之候ニ付、同役中何も登城、尤御引濟有之共若年寄方前以申聞候事、常服

一 五日寺院御規式之節呼次引退候義、終之寺院罷出十帖一本納之者罷在候節引退可申候、着座之寺院御召出之寺院共呼次引退之義も同断

一 御召出之寺院披露之者ハ御召出終十帖一本之者十帖一本を引御座敷中程ヘ罷越候セツ披露之者引退候事

一 寺院呼次者肩書共ニ読申候、披露人ハ御目見之者罷出候方はり罷出御勝手の方ヘ引退候事

一同月五日年始ニ付寺院御礼申出候ニ付同役中罷出、元日二日之通御寄場ヘ罷出居、右済而退出

一同月七日七種御祝義ニ付出仕、御在江戸共ニ同断一年始病氣ニ付不罷出輩着座已上者元日二日之内使者ヲ以

御太刀馬代献上使者虎之間罷出候て御目見被仰付候、十五日病氣本復之輩ハ御目見願申上、十五日ニ

御目見被 仰付候、着座已下番頭格已上者病氣にて不罷出候得者親類名代にて御太刀馬代献上仕候、御規式済而已後右名代之者御連歌之間にて御奉行衆謁にて候、是又十五日	一二月朔日	同断
前本復二候得ハ御目見願申上候由之事	一同月十五日	同断
一同月十五日当日之御札年始之御札表御対面所・御客之間等	一同月廿八日	同断
二而御目見被 仰付披露繰合申候	一三月朔日	同断
一同月十五日表御対面所へ罷出、輪王寺松音寺始出家中罷出詰合有之、右二付而同役中罷出、右詰合之節御小広間御縁通御障子際へ御奉行衆・若年寄・大番頭・江戸番頭・出入司・御申次罷出居、右詰合二付而如兼而之登城仕候様前以御奉行衆方申来候事	一同月三日	上巳之御祝義、麻上下常之通
一同月廿八日当日之御札	一同月十五日	同断
一正月元日服着染小袖麻上下	一同月廿八日	同断
一同月二日 服付麻上下	一四月朔日	同断
一同月三日 同断	一同月十五日	同断
一正月四日 服付常服	一五月朔日	同断
一同月五日 麻上下	一同月廿八日	端午御祝儀、麻上下常之通
一同月七日 同断	一六月朔日	同断
一同月十五日 同断	一同月十五日	五節句之通
一同月廿日 同断	一同月廿八日	例之通
一同月廿八日 常之通（継上下着当日之御札）	一七月朔日	同断
	一同月七日	七夕御祝儀二付、番頭格已上白帷子麻上下例之通
	一同月十五日	同断
	一同月廿八日	同断

一 九月朔日 同断

一 同月九日 重陽御祝義、番頭格以上花色小袖麻上下

一 同月十五日 例之通

一 同月廿八日 同断

一 十月朔日 同断

一 同月十五日 同断

一 同月廿八日 同断

一 十一月朔日 同断

一 同月十五日 例之通

一 同月廿八日 同断

一 十二月朔日 同断

一 同月十五日 同断

一 同月廿八日 同断

一 大之月廿九日、小之月廿八日歳暮之御祝儀、染小袖麻上下、

御在国之節ハ登城、御奉行衆ヘ謁、御在江戸御帳江付退出

致候事

一年始御給仕稽古引揃之儀共ニ御小姓頭相達、幾日何時揃之

内ヤ申聞候間、兼而之通相勤候様、前年極月若老方申来候

ニ向罷出候御目付一同御奉行衆御詰所ニテ元日二日五日表

御対面所御規式呼次名元披露前後無之様念ヲ入引合相勤候

様との儀最前方被仰出候間、弥以不敬と不相ミ得様可相勤

由被仰渡候事

〔多〕^{〔朱書〕}田村様御使者等之部

一 田村様御使者元日御流頂戴被 仰付、右披露肩書を不申御

家之御召出同様二名元計致披露候

一 田村様御使者天保二年正月元日角張此右衛門御家之御召

出次へ被召出御流頂戴之節者御家之御召出同様肩書を不

名元計可致披露、二日目右此右衛門御家老惣代ニ罷出候ニ

付御盃頂戴被仰付、御家之御盃頂戴同然ニ披露ハ肩書を不

申、呼次ハ肩書を申候事ニ前々方相成居候所、文政十二年

御入部初而年始之節番頭格已上番頭格以下御家中惣代兩人

二日目御盃頂戴之節、肩書呼次ハ勿論披露可仕被仰渡置候

所、御入部翌年年始トハ品違候間、此度ハ前々之通り披露

可仕哉、福原縫殿へ佐藤但馬相伺候處、無御異儀旨被仰渡

候

一 正月二日田村様御留主居御家来惣代ニ罷出候ニ付御盃頂戴

被仰付候、御家之御盃頂戴同揃ニ候、右御家来惣代之披露

者肩書を不申、呼次者肩書を申候

一 田村様御家来惣代延享三年正月兩人罷出候處、呼次ハ兩人

共ニ肩書を可申哉相伺候所、伺之通可仕旨大條監物殿石母

田但馬ニ被仰渡候事

一 田村様御家老元日御盃頂戴ニ罷出候節、是迄ハ呼次ハ肩書

を申、披露人ハ名元計披露候処、此度御同役方吟味之上披露名元計ニ御座候間、呼次茂名元計申候方相当ニ可有之と吟味致、佐藤殿へ相伺候処、伺之通無御異儀故被仰渡候事
一文政十二年御入部初而年始に付田村様御使者御奉行衆披露ニて私共肩書呼次候所、二日目御家之御盃頂戴、次江田村様ヨリ番頭格已上御家中惣代鈴木七右衛門、番頭已下御家中惣代北郷隼人両人名前御次第へ相出候ニ付、右肩書披露之義相伺候処、呼次ハ勿論披露人共ニ御次第之通次書披露可仕旨、高泉奎殿方文政十一年十二月廿一日佐藤但馬へ被仰渡候事

一 田村左京太夫様御登 城被成候節へ左京太夫様御家老御目見被 仰付候所、御連歌之間前より六間御座敷之御廊下通ニて御目見被 仰付候、披露之義者御目付方兼而之通 小札受取田村左京太夫様家老沼田覺左衛門と披露致候事、右披露村田陽之輔相勤候

但、服付染衾麻上下、文政八年五月御用前松前主水、右御次第等御用箱ニ有之

一天保二年六月廿八日田村左京太夫様御使者平田求馬於御連歌之間下之間御廊下初而御暇被仰出御在着之御祝儀御答礼之御使者相勤
御目見被 仰付候に付肩書并服着之義、但木山城殿へ中嶋

淡路相伺候処、肩書を田村左京太夫様御使者と計披露可致服付者当日之服ニて可相勤被仰渡候事

〔朱書〕
「日」日不定之部

一 御参府御発駕前日御機嫌伺之登城御奉行衆へ謁、御下向御登城翌日も同然

一 御参府御発駕御下向御着城御当日登 城御祝申上御通之節御連歌之間二列席

御意有之候事、御参府之節前田橋御見送罷出候者登城御怡不申上候間、右之趣御目付へ相改候様、文化十四年被仰渡候事

一 暑寒御機嫌伺ハ御在国之節登 城於元焼火之間御縁通に御小姓頭へ出会相伺候事御帳無之、但御出等ニ而御小姓頭不詰合節ハ御留主番御近習を以相伺候事

一 御在江戸之節ハ大番頭格以上者使書を以申上、番頭格ハ御小姓頭宅へ罷出相伺候事、乍去大番頭格已上も御小姓頭宅へ罷出候内ニ中島左衛門相伝候事

一 二月卯ノ日同役之内方一人卯之日執事被 仰付、執事并登城御具足之餅頂戴之御札御差引之御目付へ申上ル、卯ノ日執事勤方諸同事等執事之若年寄・御小姓頭御申付、連名ニて御小姓頭方ニ而相伺候事物書を御小姓頭方物書例年相勤候事

但、執事被仰付候節御礼等二御奉行衆御宅へ罷出候義無之候、卯ノ日御祝儀ニ付表御対面所へ御出御上段御着座御祝有之

右之節御縁通御闕之外へ若年寄御申次罷出扣居

〔朱書〕
「不」服着之部

一年始服付染小袖麻上下

但、御入部已後始而之事、始者熨斗長襦

一卯ノ日執事并登 城之衆服付染小袖麻上下

一御癸駕御下向御当日服付麻上下

一御機嫌伺常服

一同役寄合之節年始初而之寄合継肩衣

但、新役寄合も継肩衣

一文政十一年七月十日左近之輔悴保土原但馬御番明ニ付奥御対面所ニ而御目見披露人麻上下、尤右当番中同人朔望申上候節も表御対面所披露人麻上下

一年始稽古常服

一御首途之日御目見有之節ハ披露人麻上下、寛延四年三月御首途之日御出御帰卜御目見有之候、仍而披露人服付麻上下ニ而可相勤哉、柴田源五郎相伺候処、無御異儀旨奥山主計殿被仰渡候

一御客之間上下之間

一御連歌之間

一夜据之間

一虎之間向張出

一元焼火之間御縁通

一伺公之間向留

一御へ切前

右席々ニ而不時御目見被仰付候節、披露服付吟味仕候処、不同ニ承伝相決兼候間、御指図被成下度由安永五年九月天童伊予御奉行衆江相伺候所、当日之服付ニて披露可仕由、石田豊前殿被仰渡候

但、他所者披露御吟味相伺候事

一鶴御拝領之節御申次兩人宛相詰候節服付染小袖麻上下

一鶴拝味被仰付候ニ付熨斗目着用之輩之分右熨斗目麻上下

一延享元年八月十九日於御客之間御入部ニ就而之御目見懸之者御目見被 仰付候処、兼而表御対面所外ニて常式披露御麻上下着不申候ニ付、黒沢掃部相伺候所、御入部御祝儀之方ニ而此已後共ニ 御目見懸之分麻上下ニて披露可仕由、後藤孫兵衛殿被仰渡候

一於御客之間向御座敷安永六年三月十一日高野山成就院便僧摩尼院 御目見被 仰付候節不時披露ハ常服ニ而相勤候筈ニ候所、他所出家之事故裏付上下ニ而可相勤や、泉田安芸相伺候処、無御異儀旨大立目下野殿被仰渡候

一天保三年六月六日舛屋平右衛門代替に付可罷下候所、病キニ而大手代山形小右衛門於御座之間ニ御目見被 仰付候

所、他所者披露服付之義、瀬上筑後相伺候所、披露人麻上下相当之由、此已後共々麻上下二而可相勤被仰渡候由二右筑後申伝候事

一於虎之間向罷出文化十三年十二月諏訪神主 御目見被仰付披露服付不分二付、石田完之丞相伺候处、当日之服付二而相勤候様被仰渡候

一御一門衆へ御料理被遣候節御馳走役服付常々ハ継肩衣、安永七年五月御帰国ニ付出府之御一門衆へ於馬場御座敷御料理被遣候御馳走役泉田大隅相勤候处、前々之通継肩衣ニ而相勤候处、大立目下野殿右服付御聞被成候間、前々之通ニ候由御答致候へ者、向後者御祝義事ニ而御料理被遣候節之御馳走役者麻上下着可申由、御同人被仰渡候

一宝曆十一年三月

姫君様方被進候御拝領之雁御披キ御奉行衆御詰所之上ニ而淡路様・伊達安芸殿御詰所ニ而御奉行衆御下り頂戴、馬場之御座敷ニ而御一門衆へ御料理被進候御馳走役瀬上筑後・沼辺越後・佐々久馬相勤候所、頂戴之衆熨斗目半襠ニ而候間、御馳走役服付御奉行衆へ相伺候所、染小袖麻上下ニ而可相勤由、柴田藏人殿被仰談候事

一文政十年三月廿一日於伺公之間御武頭松野作右衛門御使者帰りの御目見被仰付候、御申次披露之所兼而右席ニ而不時

御目見被仰付候披露人服付当日之服ニ相据居候所、右作右衛門義者一橋儀目録斃去ニ付公義江之御使者帰御目見被仰付候事ニ候間、右披露ニても当日之服ニ而苦かる間敷哉、松前主水殿相伺候处、兼而之通当日之服ニ而相勤候様、縫殿殿被 仰渡候、此節御用前福原主税

但、名元計披露致候事

一今日御目見共有之相伺候事、不時御目見ハ当日之服ニ而相勤可申先々被仰渡も有之候处、家督初而之御談等も当日之服ニ而披露仕宜ニ可有之哉、式日ニ有之候得者継肩衣等ニ而相勤候義も御座候处、扱亦家督初而之御礼等常服ニ而相勤候義も不相当之様ニ吟味仕此段相伺候处、御入部方ニ無之不時 御目見之分者常服ニ而披露可仕、縫殿殿被仰渡候事、尤同日於御座之間三ノ間御縁通諏訪市助家督之御礼申上候处、是以同様之義ニ有之候間、常服ニ而披露可然哉之段相伺候处、不時 御目見ハ家督初而之御礼共ニ常服ニ而披露仕宜段御同人被仰渡候事、文政六年八月廿一日 大條多門

一文政十一年八月十七日於御客之間下ノ間入院之御礼神明別当神宮司少々間ヲ置 御入部に付惣 御目見御用支ニ付懸之大番組並居 御目見被仰付家督之御礼初而之御礼申上候大番組并嫡子並居御目見被 仰付候所、惣 御目見之輩披

露人ハ麻上下之譯ニテ御次第相見得候ニ付披露人着用之儀
相伺候処、神宮寺江一人其日之服ニ而相着、惣御目見之者
へ一人麻上下ニ而相着家督之御礼方初而之御礼にて常式之
通一人相着披露仕候様、高泉李殿、梁川備中へ被仰渡候、
御用前 坂能登

一御対面所外御目見御入部方ニ無之分者当日之服ニテ披露

〔飛〕披露之部

一御目見之品人数ニ方手札有無之事 御役目或者御役替之

御證文ハ上下之御目見様に而、名元一通之披露者一兩人迄
ハ無手札披露可仕、誰一人立ニ而も肩書等品有之分ハ手札
ヲ以披露可仕由覺書ニ而宝曆三年五月津田丹波殿、柴田源
四郎へ被仰渡候

一正月三日大町検断 御目見之節ハ大町検断青山五左衛門へ
披露仕候事

但、右五左衛門披露ハ御用前出勤之事ニ候得共、御近習
兼役之伺候、御城ニ詰居候事ニ候ハ、右詰合之者為勤候
筈ニ申合候、何此義ハ其時之召合相定可申候

一其身 御目見前ニ而も御問ニ不合候節御披露相勤候事、宝
曆五年正月古内作大夫兼役迄仰付候御礼申上候ニ付、其身
御目見前出家之披露相勤候処、御目見前 御前ニ罷出候義
遠慮も可有之由、津田丹波殿御不審ニ付作大夫自分遠慮為

逢候処 御目見前之者御前へ罷出不申義と申御定も無之候
得共、逆も御目見前之者ハ繰合不罷出候様此已後共に心得
可申、勿論間ニ合不申義に候ハ、罷出不苦候由、柴田蔵人
殿被仰渡候

一文政十一年八月四日大肝入共、町之者共御入部ニ付御目見
之節之揃着座之譯者絵図ニ有之、右ニ付品々吟味被仰渡候
事、別冊手扣ニ有之此節之、披露振左ニ記

一同日立町年寄被下御扶持人並下肩書有之森利三郎、御宮町
肝入杉田勘左衛門、右兩人披露御立町年寄、御宮町肝入下
可致披露由被仰渡候

一大肝入御町之者ハ御次第通在々大肝入共下致披露、御城下
所々御町之者共下披露可仕旨被仰渡候

一在々大肝入格之者三人有之候処、在々大肝入格之者共下披
露可仕旨被仰渡候

右三ヶ条福原縫殿殿被仰渡、披露ハ梁川備中相勤候、御
用前坂能登

一御用遠慮之間柄披露不苦由之事

親子兄弟ヲ始メ御用遠慮之間柄年始常式共ニ披露不及遠慮
譯ニ可有之哉之内宝曆十年十二月相伺候処披露一通之義差
支無之由佐々久馬・鮎貝志摩殿被仰渡候
一御申次御用立払之節披露不相勤候事

宝曆三年八月一日伺公之間向溜二御目見有之候間、披露相勤候様天野源左衛門方申来候処、同日御申次何も御名代被 仰付、披露相勤可申者無之候由申遣候所、当日披露共二指支候哉ト申来候二付、何之披露も指支候由申遣候所、披露ハ大番頭方相勤候事

一大番頭方加勢相廻候節、御申次本役之者御座敷柄重キ方敷、披露加勢ハ輕キ方ヘ相廻候様、寛文三年十二月葦名豊前殿、氏家主膳江被仰渡候

一江戸上下之 御目見詰所已上以下共二名元計披露致候事、瀬上筑後等伺相済

一宝曆十二年田村図書江戸番頭隠居之御礼披露可仕や、黒沢掃部相伺候処、向後共二名元計披露可仕由、後藤孫兵衛殿被仰渡候

一御着城翌日為御機嫌伺御一家・御一族之嫡子登城 御目見被 仰付候節へ名苗字計披露候事

一宝曆五年正月氏家主膳名代氏家縫殿公儀江之御使者相勤年始御礼御使者ヲ以申上候処、此度罷下り之御目見兼而被仰付候二付、肩書之儀古内治太夫相伺候処、名元計披露可仕由柴田藏人殿被仰渡候

一安永四年正月廿八日黄金寺隆藏寺 御目見有之、肩書二年始之御礼と有之候故、稽古之節年始御礼申上候と天童久藏

殿披露候処、若年寄高泉奎出席之所、年始御礼と申二ハ及不申由申候間、過ル十五日大仰寺花足寺 御目見之節も右様披露致候由相答候処、御奉行衆ヘ相伺候ヘ者不及披露名元計披露可申由被仰聞候間、同役中ヘも伝置候様、右奎申聞候

一寛政四年五月十五日御入部に付御目見被仰付候所、右人数之内名代又ハ悴と肩書有之候所、呼次并披露人共二肩書相扣名元付披露可仕由御奉行衆方大町監物ヘ被仰渡候

但、御目見方ハ肩書共二呼懸候得共、御申次方二而八名元計披露可仕由被 仰渡候

虚空藏別当 国分寺衆徒

一大満寺 一善林坊

竜宝寺門徒 塩釜一ノ祢宜

一光明院 一春日撰津

塩釜祝祠 同三ノ祢宜

一志賀信濃 一鈴木老岐

落合観音別当 龜岡八幡宮神主代

一大善院 一永島丹波掾

天神別当 深谷白鳥明神別当

一光善院 一光明院

只洲別当 道禪神神宜

一鎌田此面

一穴戸長門守

一山派

一宮床鶴ヶ嶺八幡別当

一信受院

一正善院

右箇條肩書大年寺塔頭良覚院六供肩書前々々披露不仕筈二相済居候、同様之義二候間、肩書相扣名元計二而可然哉相伺候所、無御異儀旨遠藤勘解由殿被仰渡候

一御客之間二而御目見之輩ハ御談之品不及披露候、瀬上筑後等伺済

一御客之間

一夜据之間

一伺公之間向溜

一元焼火ノ間御縁通

一虎ノ間向張出

右席々二而御目見之輩ハ御礼之品披露不仕、名苗字計披露可仕候ヤ、宝曆十年瀬上筑後等相伺候处、無御異儀被仰渡候

〔但右御間所之外二ても詰所已下ハ早披露二不及名苗字計〕
(朱書)

一御客之間披露候儀、泉田安芸相伺候处、御間之外二扣居披露可仕由、宝延元年九月大條監物殿被仰渡候

但、一人披露候節ハ下々二本目之柱逢二披露人居候、兩人披露之節ハ筆頭之者上之方々二本目柱逢二居候、三人披露之節ハ上下之間ヲ見計ひ居相勤候、同所 御目見人数四拾九人迄ハ一人二而披露仕、五十人方上二候へ者兩人二而披露候、安永六年三月御目見人数百人以上披露之

儀も不相知候处、五十人以上ハ兼而兩人二而相勤候間、百人已上ハ三人二而披露可仕候ヤ、泉田大隅相伺候处、伺之通三人二而披露可仕由、大立目下野殿被仰渡候

一御申次勤方覚帳二夜据之間二而寺院社家等 御目見披露ハ御領内之者ハ名元計披露可申事

一天保三年九月朔日於御座之間三日間御縁通部屋住料被下候御礼修輔忤御小姓見習有賀四郎兵衛御目見被 仰付候節御礼之品披露可仕候ヤ、詰所已下之者ハ品披露不仕名代計披露处二覺居候得共不決二付相伺候处、此心得共二右様之義者名苗字計披露致候様、但木山城殿、御用前亘理石見へ被仰渡候事、右之節披露人ハ瀬上備後

一文政元年六月朔日江戸大蔵八右衛門伺候上無肩書披露仕候事

一文政十三年五月二日 御着城二付於表御対面所三席之嫡子御目見被 仰付候处、御次第二一同出座下有之候間肩書無之披露ハ一兩人迄ハ小札無ク相勤居候所、三人已上二継来候間小札之義ハ御奉行衆江相伺候处被致出候披露二小札持参仕候儀も無之候間、小書二仕不心付様二小札持参披露可仕由、芝多対馬殿被仰渡候御用前坂能登

〔品△〕
(朱書)

一於御座之間三ノ間

御近習目付被仰付候御礼

矢野甚右衛門

御二ノ丸御留主居列是迄之通被仰付候御礼

小梁川五兵衛

御近習被 仰付御役料御下知候御礼

大内小左衛門

御番医師御近習被 仰付候御礼

小川内玄縁

同

猪俣松順

右御通懸 御目見被 仰付候事二候処、矢野甚右衛門ハ御目附御役替大内小左衛門ハ養賢堂学頭添役方御役替、小梁川五兵衛ハ養賢堂御目付方御役替被 仰付、小川内玄縁、猪俣松順ハ此度御番医師御近習被 仰付候事二御座候而、御役替御役目被 仰付候御役料被下置列被 仰付候御礼申上候と致披露可然と致吟味候所、文化三年被仰渡候二ハ御番医師御近習被 仰付候御礼申上候と披露可致、此被仰渡も御座候得共、右ハ御医師計之儀と相見得、此度ハ相混候披露二御座候間、披露余り長ク相成可申前書之通可然と吟味仕候へ共、相粉候二付御奉行衆へ後藤兵馬相伺候候処、前書之通御役替御役目被仰付御役料被下置列被仰付候御礼申上候と披露可致段、石田豊前殿被仰渡候事、文政五年七月七日

一文政七年七月七日於
表御対面所御縁通

初而之御礼左膳忒

砂金小膳

菊之助忒

増田泰太郎

家督之御礼

山口直之進

右一人宛被召出御太刀目録御縁通御闕之際方一疊目二置之二疊目二而礼御申次披露之右之通御次第へ相出候処、御目付伊庭市右衛門申聞候二者右一人宛被召出候と申文言被相添候間、私共方御次第も相除候様申聞、右三人之者之内砂金小膳・増田泰太郎兩人一同二被召出、山口直之進ハ一人被召出候由申聞候二付段々吟味致候所、初而御礼御太刀上嫡子兩人被召出候儀ハ不分、是迄右様之披露致候義ハ無之候二付、其段申談候所、御入部之節ハ兩人一同被召出披露兩方へ兩人相出候例有之由申聞候得共、御入部とハ相違候義故触合候間、梁川左衛門相伺候所、御太刀上嫡子初而之御礼ハ一人宛被召出候事二候間、御目付へも申伝候様、松前采女殿被仰渡候

〔朱書〕
二品△

一文政七年閏八月廿八日於御座之間三ノ間

家督之御礼御番医師御近習 佐藤松湘

右目録献上御闕之外一疊目御礼申上候処、家督之御礼申上候訳二披露可仕哉、名本計披露二而可然候や、但馬披露致候事二候所不決二付御奉行衆へ相伺候候、家督之御礼申上

候訳ニ披露可仕被仰談候事、瀬上美濃

〔朱書〕
品△

一文政九年七月七日於御座之間大坂御藏元舩屋平右衛門名代山形小右衛門へ御暇被下候ニ付御目見被 仰付候所、披露触合候ニ付相伺候処、名元披露之後逗留中段々御丁寧被成下候御礼も上候ト披露可致旨、芝多佐渡殿・梁川備中へ被仰渡候、尤其節 御意有之頂戴物被成下候ニ付、右持退書而出座、右御礼申上候節之披露ハ

御意被成下頂戴物被成下候御礼申上候と披露可致旨是又御同人方被仰渡候

右小右衛門被召出候御座敷畳目等御次第へ相出不申候ニ付、触合段々吟味致候所、御座之間二之間御縁通御闕之際ニて御礼頂戴物ハ二之間御闕際方三畳目江持出シ四畳目ニ而頂戴重而出座之節ハ上段初之通罷出候事へ此節畳之目之義ハ御小姓頭方ニ而御奉行衆江相伺右役申聞候ニ付右之通相濟候事、御用前梁川備中

但、右同様之御目見天保三年六月も有之候ニ付披露人服着等不決ニ付瀬上筑後相伺濟御服付之部ニ有之候事、品柄ハ右文政九年七月と同品ニ付相略ス、尤畳目等も天保三年六月之絵図ニ有之事

一文政十一年七月十日左近之輔悴保土原但馬願之上当番相勤

候ニ付、同日於奥御対面所 御目見被仰付候ニ付細書を以縫殿被仰渡候処、誰悴とハ披露ニハ不及、保土原但馬卜計披露仕候様、縫殿殿高泉彦三郎へ被仰渡候へ畳目ハ奥御対面所三ノ間御闕之外一畳目、御用前高泉彦三郎

但、右同様之披露天保三年八月十日若狭悴石母田左進御番明御目見之節も不決ニ付相伺候上中村宗三郎相勤候譯文政十一年七月同様ニ付相略ス右宗三郎先例不明ニ付相伺候事

一右嫡子当番中朔望御祝儀申上候節ハ表御対面所御闕之外一畳目披露御申次無苗字名計左進と披露ス〔朱書〕披△披△披△津广ノ部二出、披△加ノ部二出

〔朱書〕
志 品披露之部

一文政十一年於表御対面所小島縫殿之助家督之御礼申上候節披露之義不分ニ付、芝多兵庫相伺候処、家督之御礼申上候ト披露可仕由被仰渡候事

一文政元年六月朔日於表御対面所大年寺役僧巨海少林院輪番之御礼申上候所、披露不分ニ付相伺候所、御次第書ニ相出候通大年寺役僧巨海少林院輪番之御礼申上候と披露可仕由、福原縫殿殿大内主税へ被仰渡候

一宝曆二年十月被遊 御着城、詰所以上御悦申上候義大年寺へ御参詣之節式日出仕之通御目見被 仰付候処、披露之義

柴田源七郎相伺候処

御着城御怡申上候ト披露可仕由、津田丹波殿被仰渡候

一延享二年五月一日被遊

御着城、翌日二日為御機嫌伺、詰所已上輩登 城御目見被仰付候節披露之義佐々伊賀相伺候所、御機嫌伺奉ト披露可仕由、後藤孫兵衛殿被仰渡候

一安永七年御下向之節御一家・御一族之嫡子三四人宛罷出名苗字 御着城并初而龍ヶ崎江被為入候御怡申上候ト披露可申上由、秋保外記殿被仰渡候

一寛政六年五月十五日寺院輪番之御礼申上候二付、四年被仰渡候通何院輪番之御礼申上候ト計致披露候所、安永七年被仰渡候通順王院大幻庵輪番之御礼申上候ト申様ニ披露可仕由、遠藤美濃殿日野英馬江被仰渡候

一表御対面所詰所已上御役目御役替等品有之分名元披露已後何々之御礼申上ルト披露可仕事

一宝曆五年氏家主膳名代縫殿義番頭格二列被仰付候御礼申上候節肩書之事古内治太夫相伺候処、列被仰付候御礼ト披露可仕由、葦名豊前殿被仰渡候

一宝曆八年太田一郎左衛門御役目之御礼御鑓奉行兼役之御礼ト肩書ニ有之故大町山城御申次ニ加勢ニ被相廻披露相勤候二付相伺候処、御役替之御礼ト計披露仕様御差図ニ付右

之通致披露候、然所安永五年萱場奎於奥御対面所色々御礼申上候節肩書披露之御礼申上候悦肩書披露之承前々不同ニ有之候故泉田大隅相伺候処、御役列被仰付御加増御役料御鑓奉行兼役被仰付候御礼申上候ト披露可仕由、芝多近江殿被仰渡候

一同年十月馬籠佐太夫御目見之節御役替御役料之御礼申上候ト披露致候所、右之趣披露ニ而者無然候已後ハ御役被仰付御役料被下候御礼申上候ト披露可仕由、伺公之間ニ而御目見之節も同様可仕由、芝多近江殿石田定之丞へ被仰渡候

一宝曆四年十月飯田左門苗跡之御礼申上候節、下郡山隼人披露之義二付古内治太夫不急之品相達兩条之例隱居入院之御礼披露一篇之義を差置致置候義ニ而此度之例江者不引合左門ハ苗跡之御礼ニ而品違候間、苗跡之御礼ト披露不仕不叶事ニ候、夫共ニ難決候ハ、其時々相伺候義ハ格別隱居入院之例を以名元計披露可然ト隼人へ申談候義者不引合ニ候、向後念ヲ入可相勤由御奉行衆方古内治太夫へ被仰渡候

一宝曆十年九月御召出之寺院入寺之御礼申上候節肩書共ニ披露仕様御奉行衆被仰渡候二付、御召出之輩家督之御礼申上候節も同様之義ニ御座候間肩書披露可仕哉、鮎貝志摩殿へ太田一郎右衛門相伺候処名実承候、向後肩書共ニ披露可致候、初而之御礼ハ御奉行方ニ而も不致披露候間誰忤誰ト

計致披露候様御同人被仰渡候事

一 宝曆十二年閏四月森田孫九郎家督之御礼御役之御礼申上候二付、披露之義瀬上筑後相伺候処、家督御役之御礼申上候ト披露可仕由、鮎貝志摩殿被仰渡候

一 安永六年二月良覚院隠居妙知院住職之御礼申上候披露、木村久馬相伺候処、住職之御礼申上候ト披露可仕由、石田豊前殿被仰渡候

一 文化九年 廿二日 御目見諸寺院之内入院又ハ輪番之御礼共ニト肩書有之候所、兼而右両条御礼肩書披露仕候得共、此度ハ間々右之品有之披露人間違も無以元呼次ニも右肩書為呼候方ニも可有之哉、御奉行衆ヘ相伺候処、此度ハ御入部ニ付御目見之方主ニ立候間、肩書不及披露寺号計披露可仕旨遠藤勘解由殿被仰渡候

但、此度に限り右御礼之肩書相添候義ニ候由被仰渡候

一 文化十一年五月九日 御下向已後御暇 御目見被仰付候節片倉瀧口御目見披露触合候ニ付、御奉行衆ヘ相伺候所、無名元在所江御暇被 仰出候御礼申上候と披露可仕由、松前和泉殿被仰渡候

一 文化十三年八月朔日竹田玄悦筆頭御近習被 仰付候御礼御座之間三之間ニ而 御目見被仰付候所、披露不分ニ付、御用前之者相伺候処、御番医師御近習被 仰付候御礼申上

候ト披露可仕由、福原縫殿殿被仰渡候

一 伺公之間 御目見ハ御目見ハ何人ニ而も先名元を致披露後何々之御礼と披露申候事難決事ハ其時々相伺可申事

一 寛延三年権太夫名代名村忠兵衛 御目見肩書披露相伺候所名元計披露畢而何々之御礼ニ申事計披露可申由、後藤孫兵衛殿被仰渡

但、名代奉公之者肩書相扣向後其身名元計披露可申由、寛保九年十二月被仰渡候事

一 宝曆十年十月南十左衛門其外御役目之御礼申上候、大條孫三郎殿披露候所、御役替御役目之御礼申上候ト披露仕候所、芝多藏人殿・葦名豊前殿・津田丹波殿御列座、此已後詰所已下之者詰所已上之御役被仰付候節ハ御役目之御礼申上候と計披露致候様下郡山隼人ヘ被仰渡候

一 元焼火之間ニ而 御目見之者何人ニ而も先名元を致披露、後何々之御礼共候事、^(朱書)「品△品△品△披ノ部ニ有」

〔加〕肩書之部

一 正月五日寺院呼次ハ肩書共ニ読可申候事

一 大年寺塔頭御目見被仰付候節、肩書不及披露段相濟居候間、良覚院六供も同様に候間披露不仕方可然候や、瀬上筑後に相伺候所無御奏蒙旨御奉行衆被 仰渡候
一 嫡子次男披露ハ親兄等無苗字 御目見之者ヘ苗字相付披露

可仕候事

一使者 御目見ハ誰使者誰ト披露可申御礼之品不及披露、太刀折紙者主人献上ニ候間、主人之席ニ置、使者ハ御闕之内隅ヘ相出候事

但、右ヶ條前ニ申伝有之候事

一家来 御目見ハ誰家来誰ト披露、同家来ニ候得者二人目方ハ名元計披露可仕候、太刀折紙ハ御闕之内ヘ置、披露人ハ御障子之方ヘ相付候、御目見之者御闕之外ヘ罷出候、宝曆十年十月高泉薦之助家来御目見之節御縁通御闕之外一晷目ヘ罷出候処御闕方放事也

御前方御見得不被成候得者御闕際まで罷出候様、鮎貝志摩殿・大立目下野殿御一同柴田藏人・奥山出羽ヘ被 仰渡候、稽古之節能々教可相出事ニ候

一惣而御領内之寺院

御目見ハ寺院号計披露、其所者披露不仕様、寛延三年十月三日奥山主計殿被仰渡候

一安永五年十二月橋本兵九郎御目見被 仰付候所、肩書ニ伊豆子九十郎忤橋本兵九郎と有之候、先日輩名十郎御目見之節、内藏人名代主水忤輩名十郎ト肩書有之候得共、各様ニハ主水忤輩名十郎ト披露被成候間、九十郎忤橋本兵十郎ト披露可仕哉、石田定之丞相伺候所、其通披露可仕由秋保外

記殿被 仰渡候、扱又先頃於御客之間甚太夫子忠藏忤安達万吉ト披露仕候処已来ハ御客之間之披露も同格ニ可仕哉相伺候処、無御異儀旨御同人被仰渡候、名代御奉公之者誰名代誰ト肩書ニ有之候ニ付、肩書共ニ披露可仕哉、寛保元年十二月西大條権四郎物書を以相伺候処、肩書者相扣向後者其身名元計披露可仕由、大條監物殿被仰渡候

一文化九年 廿二日諸寺院御目見之節伺左ニ

〔朱書〕一熊野堂神宮司別当

〔朱書〕一龍宝寺六供、大崎八幡宮別当

一国分寺別当

一同院主

〔朱書〕一平泉中尊寺經藏別当

一国分寺学頭

〔朱書〕一熊野堂神宮寺学頭

肩書在名寺披露不仕候所、右朱点置候分計相除披露可仕や、御奉行衆ヘ相伺候所、無御異儀旨遠藤勘解由被仰渡候

一嫡子御目見被 仰付候節始而被罷出候節ハ誰忤ト披露致、年始等ニ罷出候節ハ肩書披露ニ不及候段、石田豊前殿被仰渡候、文化十四年正月

一安永五年九月安達甚太夫嫡孫初而之御礼申上候節、肩書之通甚太夫子甚藏忤安達万吉ト致披露候、同年十一月橋本

伊豆嫡孫於表御対面所初而之御礼申上候節肩書之儀相伺候
処、近々御客之間二而も祖父之名者不申誰忤何之誰卜披露
仕候筈二相濟候

一御客之間上之間二而寛延三年東山八幡寺 御目見披露肩書
之義相伺候所、御領内之者ハ何方二而も肩書披露不仕由、
奥山主計殿被仰渡候

〔朱書〕
披△

〔朱書〕
御客之間上ノ間力

一安永四年正月道祖神主宍戸長門守肩書披露可仕ヤ大町兵
庫相伺候所、名元計披露可仕由御奉行衆方被仰渡候

一他所之者を御次第書二有之候処名共二披露申候事

〔朱書〕
虎ノ間向張出シ

一同所二而明和八年正月廿八日中村兵力使者高野新兵衛 御
目見有之候、名元小札二兵力へ御苗字被下紋拝領被仰付候
御礼卜有之候間、右之品披露可仕候や、馬籠作太夫相伺候
処、中村兵力使者高野新兵衛卜計披露可仕由御指図有之候

事

〔朱書〕
同々

一延享三年十一月十五日三日市太夫次郎名代益善太夫御目見
被 仰付候、肩書共二致披露候

〔朱書〕
興 呼次之部

一表御対面所二而御奉行衆御披露仕申次呼名元小札受取候
事、表御対面所御家老披露之節御申次呼次候分御目見仕候
者名元小札御目付方相渡候様被成下度由、宝曆十一年閏四
月大松沢中務相達候所承知被成、御目付方へ被相渡候御次
第を以呼次候様可仕候、若右御次第相渡御目付方差支候儀
も候ハ、名元書被相渡候様御目付へも被仰渡候由、鮎貝志
摩殿被仰渡候

但、近年ハ御目付方御次第相廻候間右を写取相勤候事
一文政元年五月五日於奥御対面所 御着城之日御帰国御礼
之御使者并御一門衆御悦申上候御奉行衆披露呼次相勤候
所、御一門衆苗字附披露も苗名付や、松前和泉殿御差図二
ハ如是相勤、表御対面所三席モ同断呼次候様被仰渡候
一御番被仰付候節 御目見并御番明二付在所へ之御暇被仰出
候節呼次不申様、文政三年十月十一日平賀美濃殿方被仰渡
候事、右中島左衛門御用前

一文化九年七月於御対面所御目見有之人数も無之候得共、呼
次可仕候や御奉行衆へ相伺候所、呼次仕候様被仰渡、御入
替已後段々呼次相勤候様、惣御目見之外御目見呼懸無之候
所、呼次仕候砌ハ呼懸被下候様申達候所、御承知被成候由、
片倉小十郎殿被仰渡候

一呼次可仕候事左二

一家督之御礼

一初而之御礼

一婚礼之御礼

一御役目御役替等被 仰付候御礼

一同代替等之節隠居等之使者

一呼次二不及候事左二

一忤嫡孫 御目見被 仰付候御礼

一御一門衆・御一家等之家来御目見被仰付候御礼、是迄段々

呼次之間不同相成居候ニ付天保二年三月廿八日奎殿江松前
主水相伺候所、右之通相濟候間、已来右肩書之通呼次致可

申候事

一忤 御目見被 仰付候御礼申上候節ハ名元披露無之候ニ付

御奉行衆披露ニても呼次無之筈之事

但、文化九年朔日御次第等引合、文政九年十一月十五日

亘理伯耆宅寄合之節吟味相決候事

一文政五年五月五日 御着城之日 奥御対面所ニ而出府之御

一門衆并御帰国之御怡之御使者呼次小札御次第之外ニ御目

付佐賀勇治方々相廻シ夫々呼次等披露割之通相濟、尤右御

一門衆於同所在所之御暇被 仰出候節も同様小札同人方々相

廻候、御申次呼次相勤候事

但、右小札相廻候義ハ

英山様御代御下向之節御目付方御次第相廻候所、右之名

前御次第二無之候ニ付呼次并披露指支候間、大小札相廻

候様、奥山大隅、御目付山崎源太左衛門ニ相談候処、奥

御対面所之義御目付方ニ而拘不申段申聞候ニ付、左候へ

者何方方も申聞候所無之候ニ付、福原縫殿奥へ相達候所、

已来吟味相廻申様御目付へも相談候様可致段被仰聞候ニ

付、御同人御断之由ニ而相談候所、尚吟味可被致申聞承

知候訳近々御申聞置候所、此度御目付中輪々代りニ相成

候事ニ候間、右之趣佐賀勇治へ相談候所承知候段申聞候、
両度共ニ小札相廻候ニ付、右ヲ以呼次等相勤申候間已来

為見合之記置候事

一御奉行衆披露ニ而 御目見有之節ハ一人之節も呼次可致事

ニ為濟候事

〔知〕御馳走役之部

一御一門衆へ御料理御餅可仕等被遣候間、右之内一人御馳

走役相勤候様御奉行衆方被仰渡候節ハ御用前之者出勤相努

候、御用前病氣等之節ハ前日御用前出勤也

一御一門衆へ御料理被遣、乗馬見物被仰付候節ハ煙草盆相出

候事、御一門衆へ於馬場御座敷ニ御料理遣候節、煙草盆相

出候義不同ニ候所、向後ハ見物之内煙草盆相出候様可相心

得候、右之趣御馳走役御申次ニも可相廻由、津田丹波殿被

仰渡候段、宝曆五年三月大條孫三郎へ御目付南十左衛門方
方申聞候事

一文政十一年八月朔日、保土原但馬御番明二付石川筑前も同
断、於馬場御座敷御餅菓子被下候二付、御馳走役坂能登相
勤候处、石川筑前へハ御奉行衆を以御意有之、保土原但馬
へ者御意無之由右罷登へ高泉木工殿被仰渡候事、但右但馬
ハ部屋住二候、如斯

一文政十一年九月十一日御番明二付伊達安芸殿へ於馬場御座
敷御餅菓子被遣、同断二付中目内匠江於同所御餅菓子被下
候付、御馳走役佐藤但馬可相勤之所、同日高泉彦三郎当番
二付同人相勤候、御一門衆へハ御相伴御近習医師湯目純安
罷出居三席計へ被下候節ハ御馳走役計二而相伴之御医師無
之候、且馬場御座敷へ引通候節ハ御一門衆并三席詰所へ御
馳走役罷越馬場御座敷へ案内致、右御餅菓子頂戴済而安芸
殿会釈被致候間、御馳走役罷越頂戴之御礼被申上、右内匠
ハ御馳走役扣候处へ罷越右御礼申上候、直々如元之案内御
小広間裏御縁通角之柱之所まで御一門衆三席共ニ致案内候
事

但、御一門衆并三席一同御餅菓子被遣候節ハ近来相伴之
御医師無之由ニ而尚又御奉行衆御手元ニ而も御吟味相成
候处、前々ハ御一門衆三席一同之節も相伴御医師被仰付

候事ニ御記録ニも相ミ得、右同日者湯目純安被 仰付候
事ニ相済候段御馳走役相勤候高泉彦三郎申聞候事

右之節御用前

〔朱書〕「知ハケ條津ノ部ニ出△」 佐藤但馬

〔朱書〕「於」被仰渡済居候部

一表御対面所御規式之節出入司仮役之者江大番頭格ニ無之
御申次本役之者列座ハ出入司上ニ相列候様ニ安永六年大町
将監殿御指図相済候事

一御目見之席計ニ無之人数も御目付方申来候、且御用前相立
相勤候事

朔望并不時ニ御目見有之節只今迄之御目付方御目見之席
計申来人数等一円相分不申二ヶ所ト申来候得ハ、拙者共
式人罷出候所、御対面所と席計申来候へ者拙者共一人罷
出、御目見候者三四人も候得者御間ニ合不申候間、此未
一ヶ月御用前相立相勤、御目見有之節ハ尤御用前之者へ
御差出遣候而只今迄之通席々を書付一席ニ何人と人数を
申遣候様仕度品々西大條権四郎筆頭同役連名ニ而御奉行
衆へ寛保三年二月相伺候处無御異儀候間、御用前相立可
相勤候、且御目見之者人数之義ハ其時々右江申越候様御
目付へ申渡候段大條監物殿・遠藤文七郎殿・後藤孫兵衛
殿・黒沢要人殿方被仰渡候、但、御用前誰相勤候との義

前月晦日ニ御奉行衆へ申達、御目付へも御用前之譯同様遣候、御在江戸之節ハ御目付へ不申遣候

一御用前を御申次月番誰相勤候ト相達候処、以後ハ当番御用前誰相勤候ト可相達由、宝曆十年十二月鮎貝志摩殿方拝書を以被仰渡候

一御申次覚書等致置可相勤候事

元文六年田村隠岐守様御家来惣代呼次之義ニ付、已来之義被仰渡候節面々御申次覚書等も不仕空覚一篇ニ而相勤来候、以来ハ覚書等致置相勤候様可仕由、西大條権四郎

へ黒沢要人殿被仰渡候

一御用向之義諸事先役方後役江伝候様被仰渡候、近年一通り之御役方下々輕キ支配之輩迄之面々御用向之義ハ勿論当座之勤方共ニ諸事吟味粗末ニ成、先役之者ハ後役へ申伝薄、後役之者ハ先役江承合候義頼入不申相ミ得候間、勤落不調法も多く、上之御世話多御作法も書失候様に成候間、向後ハ訖度相改互ヲ施略無之様可相勤、品々も御書付ニ而寛保二年六月佐々伊賀へ大條監物殿被仰渡候

一諸達等前以其向諸物書へ内談不申筈之事、近年諸達事等其外共ニ面々了簡ニ相決兼候事ニ候得者、其向諸物書へ及内談ニて首尾追々相違候得者、誰ニ及内談候ト申出候者も有之候由相聞得候不都合之事ニ候間、向後難決事ニ候ハ、

頭々へ伺可得差図候書役之輩ニ而も内談并書面ヲ以取合候共諸物書へ向後自分分挨拶可為無用旨面々江向寄ニ相廻候様明和八年十一月芝多主税殿方申来候

一文化九年御一門衆始家督之御礼申上候砌家来共御目見有之候処、右之内下ケ物相付候者相見得同役共致吟味候所、從前々不相成事ニ承伝候、乍去相決兼候ニ付下郡山左近相伺候処、下ケ物付御目見不相成事ニ候為取候様御目付之御首尾可被成由遠藤勘解由殿被仰渡候

一御申次不足之節大番頭等方被相加候由之事ニ寛延三年同役不足、来年始披露御間ニ合兼候間、仮役一人被仰付候様仕度 趣中村日向相達候処、從前々右方御申次同役不足之節者大番頭等方被為加候筈ニ相済居候間、弥以大番頭之内方繰合を以一人御申次加り候義御目付江被 仰渡候由、奥山主計殿被仰渡候、御目見有之候節右同役之内御用引ニ而御申次不足之節ハ其段直々御目付へ可申断候、其時之相達候ニハ不及候御目付へも被申渡置候由寛延三年村田市郎へ津田丹波殿被仰渡候

〔朱書〕御間所之部

一諸寺院 御目見之節誰一席ニても御礼之品替之節者十帖一本置付ニ不仕筈之事、文化十三年十月廿八日御召出寺院築本寺入院之御礼、同御召出順王院等兩寺輪番之御礼 御目

見被仰付候所、各三ヶ寺同席ニ付十帖一本置付ニ候所、入院輪番之御礼品も違候義置付ニ而ハ如何之由御目付へ申談候処、誰御礼之品を違候而も一席ニ候得者、置付ニ仕候様御奉行衆方被仰渡候段申聞候ニ付、同役中吟味之上入院輪番御礼之違候義尤御次第書ニも江戸番馬上持出之義兩様ニ相見得候間、右様之節ハ置付ニ不仕候様御吟味被成下度置付ニ有之候得者披露人も相替可申様無之一人ニ而色々之御礼披露相違之義も候へ者如何ニ奉存候段、御用前佐々伊勢相伺候処、迫而御指図可被成由ニて同年十一月十五日已来共ニ右様之節ハ置付ニ不仕様御日付へも御指図被成候段、松前和泉殿被 仰渡候

一 安永七年五月御下向御当日柴田内藏人忤同氏源藏登城 御目見被 仰付候処、御次第書ニ御対面所廣縁と計有之何方へ罷出可然哉前々之儀不相分候ニ付、泉田大隅相伺候所、御対面所御闕之外一畳目ニて御悦申上候様可仕由、秋保外記殿被仰渡候

一 寛延元年閏十月朔日元焼之間披露之義泉田安芸相伺候処、御座敷之内ニ而披露仕候様、奥山主計殿被仰渡候

一 御座之間披露之節ハ御三ノ間披露ハ御闕方三畳目御太刀等置、四畳目ニ而御礼、同所御縁通ハ方方申候事

一 夜据之間披露人ハ御敷居之候外ニ扣居候事

一 御申次勤分覺書帳へ扉之間向張出使者披露ハ常之通品替候義ハ其時之相伺可申、伺公之間向溜 御目見之節も同断ニ有之候事

一 元焼火之間御縁通 御目見之節披露人居候所、不同有之候ニ付、安永三年中島与市相伺候処出仕等之節ハ横手ニて披露可仕候無左節ハ御出被遊候御向通ニ居披露仕、不同ニ不仕様、御奉行衆被仰渡候

一 奥御対面所方元焼火之間御廊下右披露人ハ 御目見之者左之方ニ扣居候

一 伺公之間溜 右披露人ハ御連歌之間向御廊下ニ扣居

〔美〕御名代之部

一 所々御名代被 仰付相勤候節届ニ罷出候へ者御奉行衆出会候御祭祀奉行ニ而届ニ相越候へ者他行等ニ無之候ハ、扣居御名代首尾能相勤候段直々申断引様候事

一 御法事等ニ而 御名代相勤候砌大番頭格ニ無之御申次供之小性ニ麻上下為着候義、石田定之丞品々相伺候処、改而不及 吟味候間、是迄之通召連候様、秋保外記殿被仰渡伺書被相返候安永六年十一月

一 獅山様・長松院様御法事御病御名代之節 肯山様御廟御向通無御前後相勤候事

一 安永六年七月長松院様御法事御塔婆御供養之節、屋形様御

名代石川大和殿御子様方御名代御申次相勤候所 肯山様御廟御向通無御礼直々 長松院様御廟罷通候所 肯山様御廟之御向ハ睨と御礼仕罷通候様已来ハ相心得候様、其節之御法事奉行後藤孫兵衛殿ニ而大和殿始何も被仰談候、然処同年十二月獅山様御法事ニ付 御子様方御名代御申次相勤、大年寺ハ相詰始君様御名代ニ柴田藏人相詰候ニ付、七月御法事之節孫兵衛殿被仰談趣藏人へ申伝候得者、前々共ニ右様ハ覺不申由ニ而折節自分拝ニ而伊達式部殿・伊達六郎殿被相詰候ニ付、右御兩人へ藏人殿御問合候処、御兩人ニ而も前々獅山様・長松院様御廟ニ罷通り節 肯山様御廟之御向通御礼致罷通候義無之由被申聞候ニ付、御法事奉行石田豊前殿へ藏人方詰合候頭立物書を以右之品々伺候所 肯山様御廟ニ向ハ少シ心を付罷通候迄ニ而御前渡御礼仕罷通候而ハ不及候段被仰聞候段、御申次へも可申通置由可致御答候旨、藏人申聞候

一御法事ニ付御廟柵木御門内薄縁之上長襠之括ハツシ相勤候
答

一安永六年十二月、雲松院様御法事之節御子様方御名代御申次相勤候御法事之間 御廟へ屋形様御名代衆始何も御名代相勤候所、御申次方相勤候、御名代共ニ柵木御門内ニ薄縁敷有之候得共其間折々靈峰と御縁しめり相ミ得候故同所方

長襠括り外し候而ハ互之しめり御廟勤候節水走り蹶不敬之義も候得者如何と心付、柵木御門内ニ而手水致括り候儘ニ而宝華林御門迄罷出、同所ニ而括り外シ御名代相勤候、然ル処方丈へ罷帰已後御目付境野軍太夫詰所へ罷越申聞候ニハ先刻御廟御名代 屋形様・姫君様之御名代衆ハ柵門内ニ而括解被相勤候、右ニハ宝華林迄括之儘ニ而被相越候ニハ前例も有之哉と承候間、睨と例も無之候、御正忌之節も長襠ニ而相勤候処摺筵等も無之候故、宝華林迄括候儘ニ而罷越候と而ハ 屋形様御名代・姫君様御名代方ハ私共後レ相廻、右両 御名代之被罷出候躰ハ不心得候所、靈峰薄縁しめり相見得候故、長襠引候義も相成間敷存候間、括之儘而罷越候と申候処、追而罷越申聞候に者薄縁も敷有之上を括候儘ニ而被相越候ハ不宜候、尤手水以後宝華林ニ而括外シ候得者折角清めの手も穢候事ニ候ニ候得ハ手水前ニ括外シ以来ハ被相勤方ト可致吟味候由申聞候、相答候ハ成程薄縁有之節ハ柵木御門内ニ而括外シ候義ハ左様可致候、併大雨等にて薄縁も敷不申候様候義縦令敷置候而も水滴居候節ハ括外シ兼候義も可有之、何括り已前ニ手水致候様之義ハ御法事中ニ計も不限指支候事も可有之、此段ハ私共方ニ而御法事奉行秋保外記殿へ申達兼而御家老衆御正忌御名代被相勤候節ハ如何様に被成候哉、手水ハ必括外し候以後ニ限り

候卜申義ハ難成候事ニ可有之、御吟味御指図被成下度由、
泉田大隅相伺候処、向後御摺筵敷候節ハ柵木御門ニ而括解
御正忌等ニ而薄縁も無之砌ハ宝華林ニ而解相勤候様可仕旨
被仰渡候

一所々御名代相勤候節刀取草履取等致候処左之通

一瑞鳳殿 一善心殿

一感仙殿 一万寿寺殿

一浄眼院殿 一孝勝寺殿

右御廟御唐門之外ニ而草履取候事、御拝殿ニ而御名代相
勤候節ハ脇指帯候儘ニ而相勤候事

一大年寺様 一続燈院様

一長松院様 一政徳院様

一雲松院様 一叡明院様

一観心院様 一永慶院様

一信證院様 一広徳院様

一性善院様

右御廟柵木御門内ニ而刀取、草履取、脇差ハ相帯候儘

ニ而相勤候事

一青龍院様

右御廟東門柵木御門外ニ而草履・刀取候事

一文政十一年正月十六日 正山様御名代石川大和殿始御名代

一統柵木御門内上草履相用、手水桶之辺迄参候所、御目付
難被相用御場所之由申聞候二付、一統不相用相勤候所、大
和殿御寺へ引取候已後御法事奉行大蔵殿へ今日御廟柵御門
内上草履難相用由御目付申聞候所、是迄段々相用居、不同
ニ而触合候而も如何ニ候間、何レ共聴と御吟味被成下度相
談被致候、其後三月八日 正山様御百ヶ日御法事之節静樂
院様寿相院様・御名代高泉彦三郎、守真院様御名代私相勤
候二付、御目付之柵木御門内方斯雲界迄草履相用候義ハ如
何御吟味相成候哉之訳為間合候へ者、御名代之衆へ晴雨不
拘ハ相用宜敷由御名代相勤候節計不苦、外ニハ不罷成由、
尚彦三郎殿方も先刻御相談有之候間、右之趣御伝被下度由、
其節懸り之御目付大河内源左衛門申聞候間、記置候事（文
政十一年三月、福原主税）

一大年寺万善堂へ御名代之節ハ万善堂御縁通ニ而脇差取相勤
候事

一満勝寺様・光明寺様御寺へ御名代相勤候節ハ脇差取候事

一伊達安芸殿在所へ御名代罷下候節ハ御名代被仰付罷下候段
家来方安芸殿家来へ申越、涌谷着已後向方役人へ家来を以
為申談候ハ明幾日 御名代相勤候所何時相越可然哉之余為
承候、右法事懸役人方勤候而宜兼候節御沙汰致候間、其節
寺へ相越相勤候様申聞候間、当日御名代罷越候節安芸殿ニ

ハ玄閑迄罷出、同所方直々安芸殿案内致度客殿へ罷通居、右之所二而出家中読経等有之、濟而法事懸之家老罷越、御名代相勤宜敷段申聞候節、御名代相勤濟而段々御子様方御名代等迄相濟候所二而直々廟等へ罷越、御名代相勤直々於宿へ引取候事

一文政四年九月十六日觀心院様御法事之節、屋形様御名代石川大和殿、信恭院御名代大町民部、御姫様御名代塩森土佐、静楽院様御名代後藤兵馬、守真院様・寿相院様御名代遠藤大藏、右之通被、仰付相勤候所、方丈方御仏殿へ参候節御一門衆一同罷越候所、御一門衆刀持二人信恭院様御名代之先へ相立候二付不相当之様二相見得候間、同役共三人吟味之上御目付伊場市右衛門へ致相談候得ハ、向々吟味可申聞由二而引取追而申聞候ハ私共方二而致吟味候所不相当二候間、大和殿供頭へ申談已来ハ、御名代様へ相立候様致首尾候旨申聞候間、已来之義も可有之候間相記置申へ塩森土佐・遠藤大藏・後藤主馬

一御申次被、仰付御祭祀奉行方奉書ヲ以天保三年七月七日於万善堂御次之間智鏡院殿へ屋形様御名代始而被、仰付泉田主水相勤候所、御札申上据之儀不決二付同日御物書頭立石田正太夫へ同人問合候所、御祭祀奉行方奉書卜御奉行衆方奉書卜ハ差別有之様二ハ御座候へ共

御意を以被、仰付候上ハ別而差別無之、仍而御札申候上之方相当之由二右正太夫申聞候間、同日御月番高泉奎殿へ右主水罷出下宿前二付御札取次候申置候事

但、右御札ハ物書へ出会可申上候事

(朱書)
「津」鶴御拝領之部

一鶴御拝領之節勤有之候二付段前々之罷出候様御奉行衆方申来候節御用前筆頭方段之繰合兩人宛御詰候事

一寛延元年十二月廿六日宿繼御奉行并御鷹之鶴御頂戴二付御申次兩人相入候二付罷出候御奉行衆方申来罷出勤方覺

一御門迄脇番頭三人兩人ハ鶴請取、一人ハ御奉書受取、御足輕御玄開迄持参、御玄開方大番組四人罷出受取、若老先立、大番頭ハ前二候へ者麻上下二而御客之間御縁通迄罷出、同所二而鶴取揆シ御小広間御縁通二て申次請取候

一上段へ指上扣居御奉行月番下段御奉書持参扣居候御縁通如兼而之御奉行・若年寄扣居

伊達下総殿へ於馬場御座敷御料理被遣候二付、御馳走役松前八郎相勤候、御奉行御拝領之鶴之段箸付前二申達候事

一同日於御同所伊達六郎殿御番明二て御料理被遣候二付、御馳走役梁川備中相勤候、御本汁御拝領之鶴被遣候段見越御口付鈴木権八郎申聞候二付、箸付前御拝領之鶴之段申達候事

右両条共ニ御家老を以寛々頂戴被仕候様

御意御座候ニ付初度月替り之節御奉行衆へ申達御同所へ

案内仕候事、右頂戴即席之御礼御馳走役へ被申上候ニ付

御奉行衆詰所へ罷越、御月番縫殿殿へ被申達候事

一同日御拝領之鶴御吸物御酒無役之三席へ於御同所被下候ニ付御馳走役梁川備中相勤候、此節被罷出候者亘理伯耆一人計二候、右即席之御礼御馳走役へ申上候処、御奉行衆下宿被致候ニ付、月番縫殿殿へ直々被相越物書中目謙藏ニ出会申達候事

一同日御奉行衆於御詰所御家老衆へ御拝領之鶴御吸物御酒御肴二種拝味被仰付候ニ付、御馳走役石田定之丞御給仕指引御小姓組與頭安倍義之介相勤即席之御礼被申上候段御馳走役へ被仰談候ニ付御小姓頭柳田正親病氣ニ付、当番同役高野雅楽江御家老衆鶴拝味之御礼申上候段申談候事

但、右御馳走役罷出候席文政四年二月廿五日段此度之鶴拝味被仰付候節但馬相勤候ニ付、相談致候上御重戸立居候壁付之方へ扣居候差引承候節御襖之方へ罷出居

一御一門衆へ御拝領之鶴被遣候ニ付箸付前申達候義ハ御次第二も無之候へ共、御料理之内何々江被相加候との義も不相知義ニ候間、前文之通申達候方相当之義ト同役方へ吟味候訳申達候事

一御奉行衆へ之御馳走役御申次近習ト御次第二相出居候ニ付

定之丞相勤候事

一梁川備中殿 福原縫殿

石田定之丞殿

明十五日御一門衆始鶴拝味被仰付候節、右御馳走役可被相勤候勤方之義ハ御小姓頭方へ被申越御次第見届可被相勤、候已上

三月十四日

右之挨拶連名ニて遣ス

右之通申来候ニ付御小姓頭へ定之丞御用前ニ付申談候御次第見届夫々首尾致候、尤同日 御目見も有之、鶴拝味之方御次第共ニ御目付方方も相廻候事、右拝味候方者出仕過何も拝味被仰付候

一鶴拝味之御奉行衆名前高泉左殿、福原縫殿殿、後藤兵馬殿、芝多佐渡殿ハ御相伴被仰付候ニ付、御吸物御渡不被下候事
右拝味之節御用前 石田定之丞

〔朱書〕
「志」上使之部

一十七ヶ寺へ上使相勤候節之勤書之事、安永七年八月千手院へ上使荒井嘉右衛門相勤候勤書同役中へ吟味差出候不同ニ認相出候様ニ而者如何ニ候間為見合之記置

半紙剪紙ニて

千手院

藏海

竜宝寺住職被仰付旨

御意二御座候

右之通今日上使相勤申談候処難有仕合奉存候、御請宣下被下候様被致度旨被申聞候間、此段相達申候、已上

八月朔日 荒井嘉右衛門

一文化十三年五月七日大聖寺・法蓮寺住職被 仰付候節上使佐々伊勢相努、同年八月十九日東昌寺塔頭願滿勝寺住職被仰付候節、大内主税上使相勤候所、両寺共二送迎等前々伺済居候例へも不相当二付両人方々品々申達候所、前例之段被申聞候二付、同役中吟味申上、同十四年十月品々御奉行衆へ相伺候所、同十二月左之通被仰渡候事

一下郡山監物殿松前和泉左之通追々共二被申聞致承知、御一門様并御盃返上之寺院已下へ上使被成下候節山門外迄出迎追而御一門格寺院へ住職被仰付候ハ、玄關鏡板迄ハ相送候様法蓮寺・滿勝寺へも申達候、尤御一門格并御盃返上之寺院へ上使被成下候節ハ送迎共ニ玄關鏡板迄被罷出候様是以申達候条、其御心得可有之候、已上

十二月十五日

一上使相勤候様御奉行衆方申来候節是又御用前之衆罷出候事

在郷江之上使等候へ者前月御用前之衆相勤候事

〔朱書〕
〔毛〕同役申合

一御申次宅寄合之事、日限ハ十五日多ハ御用前宅一ヶ月一度宛

一御近習兼役之御申次病氣之節ハ廿日置病躰番頭格以上二付若年寄へ申達候二不及候事

但、御近習之輩若年寄へ相達候二付紛候間留置候事

一不寄何事繰合相立置可申不時出勤ハ御用前之者相勤候事

一同役被 仰付候ハ、即日使者を以怡申遣候事

一月並寄合之節一汁一菜或ハ茶漬、但同役寄合時之無之候間

御用寄合相済候ハ、先ハ寛々咄も可致ト吟味ヲ以右之

通申合候、御用寄合ハ八時前済候事二候得共、賄酒等

相出候事二無之候へ者後々自分之咄も致候義無之候様

前文之通申合候事

〔朱書〕
〔登〕供廻

一在々江御名代上使之節供廻リ

一徒二人 一小性二人

一草り取一人 一鍬持一人

一轆尺四人 一挾箱一人

一竹馬一荷二ても二荷二ても外ニ家来不差遣難叶節ハ時宜ニ

寄而可召連候事

一 常々御城下御名代之節供廻

一 小性二人 一 徒一人

一 草り取一人 一 鍬持一人

一 箱持一人 一 轆尺三人

但、馬ニても歩ニても不指支候事

一 合羽箱一ツニても二ツ有之候も勝手次第、但此御時節之承ニ候間何分ニも不指立節ハ相略候義勝手次第之事ニ有之前文之通申合置候へ共相略候義ハ勝手次第第二申合候事

一 御法事之節 御名代供廻り

一 小性二人 一 徒一人

一 草り取一人 一 鍬持一人

一 挟持一人 一 轆尺三人

一 合羽箱一箇但二ツニても勝手次第

右大番頭格已上ハ小性麻上下為着徒二人召連候事

一 布衣御供之節供廻り

麻上下着 黒羽織着

一 小性式人 一 徒式人

一 口付一人 一 鍬持一人

一 草り取一人 一 対箱持一人

一 沓箱持一人 一 合羽籠持一人

但、九月十七日東照宮御祭礼之節御小性絹布着用致候事

一 出火之節供廻り

一 小性二人 一 徒一人

一 弓張灯燈一 一 高灯燈一

一 草り取一人 一 鍬持一人

一 纏持一人

一 年始歳暮供廻

但、私日年始ハ御法事御名代供廻同様可然候、歳暮ハ常々

御城下御名代供廻可然候

一 在々江御名代之節御伝馬被借下候事

但、支配頭へ御伝馬御借下度段相達候へ者御奉行衆方御

聞判相出、右者御勘定奉行へ差出首尾合候事

御申次太刀目録遣部

一 御一門衆之名代使者之太刀

一 三席之名代使者之太刀

一 三席御役目御役替御申次方以下之御役被仰付之御礼

御目見之節之太刀

一 御一門衆并三席之家来御目見被 仰付之節之太刀

御火消格

頭役

一 御城中 一 御徒小性組

同

一 御鷹匠組

同

一 御簾元足輕

江戸番頭格

右指引当番之大番頭一人内一人御申次御近習

但、此義文政十一年三月御吟味相濟候事、右表御申次有之節ハ御城中御火消指引一人殘人数ハ南北八ヶ所火消指引申合前之通可相勤候事、若人数無之一人之節ハ御城中相勤八ヶ所ハ不及相勤候事

南方

南方四ヶ所御火消指引大番頭九人色々有相略ス

但、御城当番之節ハ御城中御火消相勤可申事、其他脇番頭等役々名々有相略ス

一 評定所

御給主組

一 亀ヶ岡八幡宮

御簾元足輕

一 大年寺

御鷹匠組

一 瑞鳳殿・感仙殿・善応殿

紹山様御廟

御鷹匠組

御名掛組

北方

北方四ヶ所御火消指引大番頭九人色々有相略ス

但、御城当番之節ハ御城中御火消相勤可申事、其他脇番頭等役々色々有相略ス

一 東照宮真浄殿

御不斷組

一 大崎八幡宮并龍宝寺

御給主組

一 孝勝寺

御徒小性組

一 万寿寺

同

一 万寿寺

御名懸組

⑤年中行事（覚帳）（文政一〇年） 3—4

（表紙）

「年中行事」

年中行事

正月

元日

一元日朝御櫛中御近習之輩

御前江罷出候事（但、御入部翌年ハ熨斗目、半襦二而罷出候事）

一同朝御座之間御祝二候御入部翌年ハ熨斗目長襦二候

但、御俵約御年限中二候得共三ヶ日ハ御座之間御祝二候一同朝御堂御参詣御供二廻り候御近習等奥御對面所御庭

方御座之間御庭江廻り

御参詣相済引取候節も同所方引取候事

一 御膳御祝之節台天目於 御前御茶道立之御手水ハ石之御手水ニ候（右御近習之拘り候事ニも無之候得とも為心得之記置候）

一 表江被為出候節御重戸片方へ明候計ニ而取払不申候

一 表御規式相済御休所へ被為 入候節、若老筆頭御近習之輩出座、元日御規式無御滞被為済候御祝申上候、但御入部翌年は熨斗目長襦ニ候得とも済候後、熨斗目半襦ニ相直候、御夕御膳御祝ニも右服ニ而罷出候事

一 元日朝御近習之輩表御帳へ附不申候事

一 元日着座御盃頂戴御流頂戴之輩御目付へ名前断候（右名前銘々老人ツ、罷越御目付へ断候）

但、御目付方揃候間廻り候様坊主を以申遣候節御次同席共御用支ニ而只今方廻兼候間、御間ニ合候様廻り可申段断置候

誰老人参り断候

一 元日朝御近習之輩御雑煮御酒御肴御料理（御料理ハ御雑煮頂戴ニ候以後ニ頂戴いたし候）

当番非番共ニ致頂戴候

但、御台上段ニ而頂戴、右同様御礼ハ不申上候

一同日晚御夕御膳御座之間御祝（石之御手水ニ候）

御入部翌年ハ熨斗目半襦

一同日晚御菜附御賄当番之者計被下候

但、品々朝之通同断

一 御夕御膳御祝以後大年寺江

御参詣御出以後非番之輩致退去候事

但、文政十二年 正山様御廟江之御参詣御延引被 仰出候所、御座之間御夕御膳御祝相済候以後非番致退去候事

一 当番者大年寺江 御参詣以後常服ニ相直候事

一 大年寺江 御参詣表御玄関（御玄関切石江薄縁敷候節ハ御近習之輩右薄縁江罷出候）御帰之節御勝手御玄関ニ候

二日

一二日朝御櫛中御前へ不罷出候

但、御入部翌年始ニ計罷出候（服熨斗目半襦）

一二日朝御座之間御祝御茶於御前御茶道立之、石之御手水晚御祝同前（御入部翌年ハ御座之間御祝朝）御膳江ハ熨斗目半襦ニ而御休所へ出座御祝相済候得共、御夕御膳へ染小袖麻上下ニ而罷出候

但、御儉約中ニ候得者年始三ヶ日ハ御座之間御祝ニ候

一二日御規式済候ニ付御休処ニ而出座御怡不申上候

但、御入部翌年ニハ申上候

右出座御怡相濟候得者染小袖麻上下二相直候

一同日着座御盃頂戴御流頂戴家役共御帳へ附不、申名前銘々御目付へ相断申候へ御入部翌年ハ御盃頂戴之輩ハ勿論表へ御寄場等二而罷出之輩共二熨斗目長襠へ

但、御目付方揃候間廻候様申遣方江元日之通

一表御規式相濟候得者御夕御膳前二非番之者致退出候事

御夕御膳過当番常服二相直し候事

但、御入部翌年二而も品々右同断

一二日朝詰之者計菜附御賄同日晚当日計同様被下候

但、御礼者不申上候

三日

一三日朝御騎馬ハ勿論一騎打之輩陳羽織着用御供揃致 登城候事

但、御騎馬并一騎打之輩華衣立附陳羽織二而も小袖立付陳羽織二而も宜候、右支度二而御次へ罷出候事、御騎馬

ハ御小性頭・御近習番頭・御近習目付・御物置ノ役・御目付二候所人馬ハ兼而之通下馬揃二候、馬ハ鞍置二而杳

箱共二揃候間、別而首尾合等二及不申候

一御入部翌年ハ御殿詰之詰所以上之輩熨斗目半襠

一朝於御休所御雑煮御組付等御祝御膳者常之御膳指上、口出之節於御座之間、御若水指上候

一老騎打之輩始何も御供之者共二御膳前御櫛中方段々二御前

へ伺御機嫌二罷出候、御供揃被仰出候節一騎打之輩者御先江罷越候、中勢引被仰付候者も一同御先江罷越、原ノ町御藏下八四郎所二扣居、同所方野羽織二相直、中勢引相勤福右衛門所二而陳羽織二相直、老騎射討而御扣場方又以野羽織二相直、中勢引相勤、御仕廻場方直々御弁當場迄罷越、御同所御寄場等相勤頂戴物等致御立、以後引取申候、御鷹匠頭者同所へ罷出頂戴物等致御立前引取申候

但、御櫛中御規式二付罷出候訳二ハ無之、御山江罷出候

二付伺御機嫌二罷出候訳二候、御行列引続ハ御山奉行并御山奉行付御目付并御使番江御小性頭御近習列次第引続

引取申候

一三日之日 御城御留主二罷在候者若老衆より紙面を以被仰付候、御次二而御小性頭・御祭祀奉行へ御近習共兼へ御近習目付・御小性組与頭罷出候

但、御入部翌年ハ熨斗目半襠二候

一三日之日御堂 御参詣御勝手口方二有之候处、御杳手鎌を以相勤候事へ御入部之年ハ因縁殿九御位牌へ万善堂曹深院様へ御参詣被遊候二付因通方御参詣候事、文政十二年

但、文政六年御祭祀奉行二而田辺良輔、御近習目付二而真山慶治、御小性組与頭二而石母田兵記相詰候所、良輔

御堂相勤候付、兵記御沓相勤 御参詣相済御座之間へ被
為入候御跡江引続御座之間北裏御縁通方御三ノ間江見積
良輔ハ御騎馬ニ廻り、兵記ハ御膳方ニ而御若水指上候
御留主之内御膳番無之候得者一騎打之内方残居御若水指
上御跡方罷越候

一表江被為出候節六軒御重戸取払外御通筋御重戸共何方ニ而
も取払申候

一三日朝御菜附御賄被下候、同日晩同断

但、御礼ハ不申上候

一三日朝 御出掛青山五左衛門御玄関上御縁通ニ 御目見被

仰付所披露之義御目付方申来次第二候

一同日昼御奉行衆於御詰所煮うんめん・御吸物・御酒・御肴
御奉行衆へ頂戴被 仰付候、若老衆・御小性頭・御留主ニ
詰候御近習之輩・御近習医師迄右相伴被 仰付候、指引御
小性組ニ候

但、御奉行衆御指引之御小性御呼被成御礼被仰上候所、
外御若老衆始御礼不申上候

一同朝御出之節御玄関切石之所へ薄縁敷候ニ付、御座敷御供
御近習之輩北之方薄縁へ罷出候

一同朝御留主ニ罷在候輩計罷出、御医師ハ当番之外不罷出候、
御物置ニ而御供ニ無之御刀番見小性等罷出へ文政八年御小

性頭吟味ニ而相済へ外惣御供ニ而罷出候

一同日晚惣詰ニ候事、御山方直々罷出候輩ハ陳羽織ニ而罷出
但、御入部翌年ハ御山方直々罷出候輩之外熨斗目半襠ニ
候

一同日晚御帰夜ニ入候而も表御玄関方御場ニ候切石へ薄縁敷
候節ハ御近習之輩薄縁へ罷出候处、右之節ハ御玄関上ニ扣
居候

一同日晚御座之間御次第之通済而於御休所ニ若老始御近習之
輩出座御野始御首尾能相済候御怡申上候

四日

一朝方御近習向常服ニ候

五日

一寺院御礼ニ付当番之者染小袖麻上下ニ候へ揃被仰出候所ニ
而相直し候へ惣詰ニ無之候

但、御入部翌年ハ携候者并詰合之御近習向熨斗目長襠ニ
候、惣詰ニハ無之候事

六日

一同日晚暮辺方御年男素袍ニ而七種御大所上段ニ而はやし申
候、御膳番相添居申候へ今晚六度、翌朝老度へ

七日

一朝御座之間御祝ニ候、右済而非番之者致下候へ御座之間揃

五ツ時朝表五ツ半時朝

但、御儉約前ハ右之通ニ候事

一御儉約中ニ付於御休所御祝ニ而候、御相伴等無之候、御膳中当番引合兼而之通御膳濟候得者朝詰致下宿候

一御儉約中於御座之間御長鮑被為祝御家老当日御祝儀申上御直々奥御対面江御出、御一門衆当日之御祝儀相濟、表御対面所へ御出、出仕濟而御直々御連歌之間被為入、御連歌有之候、御連歌之節 天神像御拝ニ付御間之内江服穢之者不罷出候、御供仕御間之外御縁通ニ扣居候儀者指支不申候、御連歌濟而被為入候

一御儉約中御座之間御長鮑御祝ニ付御^レ切内、惣詰ニ候[〈]染小袖麻上下[〉]

但、御入部翌年ハ熨斗目半襠ニ候、朝詰ハ前書之通下宿

八日

一無御別条、当番常服

九日

一御講釋始ニ付惣詰、奥御対面所ニノ間江御家老張出三ノ間方四ノ間にて出入司・御小性頭方御儒役迄聴衆被仰付候、右罷出候節五之間吟味もの御襖際へ脇指扇取候而罷出候、右濟而御家老ハ 御意有之候

一御座之間御会始之節、御歌御連衆ニノ間御障子之方筆頭ニ

罷出候、当日御寄場ニ罷出候所、人丸像御拝ニ付服穢之輩御間之内へ罷出不申、御縁通御寄場ニ罷出居候儀ハ指支不申故、右御会濟而 御意有之候[〈]御連衆惣体迄御意なり[〉]

一御歌御会濟而於奥御対面所ニ御弓始・御兵衛始・御鎗始有之候

一御始事ニ付御近習之輩染小袖麻上下、御講釋始ニ付惣詰、御歌始ニ付御連衆計、外当番計ニ候

但、御入部翌年熨斗目麻上下ニ候

十日

一無御別条、常服

十一日

一御用始ニ付当番計ニ而惣詰ニ無之候、服染小袖麻上下

但、御入部翌年ハ熨斗目半襠ニ候

一御用始ニ付評定奉行始御政事方之役々於元焼火之間御酒・御吸物被下候、指引御小性与頭相勤候

一晚御謡初ニ付惣詰、服染小袖麻上下

但、御入部年ハ熨斗目長上下ニ候

一御謡初御座間之間ニ候所、囃子方ハ御間へ罷出、大夫地謡ハ御縁通江罷出候

但、御入部翌年ハ表御対面所ニ候

一御通頂戴之節若老衆始御^レ切内之役々御三ノ間ニ揃居直々

御間之内方御二ノ間へ罷出致頂戴候、御土器者番頭方詰所
以上迄持退候

但、御縁通へ御役者罷出居候二付、寄場之輩共段々下り
筋違二居候、右之通二而御縁通方御二ノ間へ頂戴二罷出
可申様無之二付如此

一御祝済而御休所へ若老筆頭御近習之輩罷出御怡申上候

十二月十三日

一無御別条、当番常服

十四日

一御座之間御堂等始戸狭之餅御年男素袍直々御膳番添之

〈染小袖麻上下〉外詰合常服二候

十五日

一朝御座之間御祝二候、今朝御座之間御祝之方ハ惣詰二無之、

朝詰計之部二候

但、御儉約前ハ右之通二候

一御儉約中二付朝於御休所御独御祝二候、御膳中引合兼而之
通二候、御休所御膳相済候得者朝詰致下宿候

一於御座之間御長鮑被為祝御家老輩之御祝儀奥御対面所表共

二出仕例月之通相済而非番致御退出候

一今日朝詰并出仕之輩共染小袖麻上下

一表出仕済而被為入候、以後当番常服二相直し候事

十七日

一今日御城中愛宕社江 御参詣〈御熨斗目御半上下〉之処

〈東照宮江御出懸、御参詣二付、御直乗二候〉御先立麻上下、
御太刀御刀ハ布衣之者、直々役之御杏之役、若老ハ御座之
間御縁側二扣居、御小性頭御御杏相勤候、御参詣済而御座之
間方御先立御家老、布衣表御玄関方御出二候

一右二付服穢之者前日暮六ツ時方

御目通被不罷出候二付、前日之当番之者右之者有之候得者
暮六ツ時致下宿候〈東照宮御参詣〉二付而なり

一今日御供揃前方詰合之者肩衣着用致候

一御帰之節御勝手御玄関方被為入候、御帰之節詰合常服二候

廿日

一表於御対面所二法門有之、詰合之者染小袖麻上下、非番不
罷出候

廿八日

一今日之出仕肩衣二候、朝詰之者引合後御膳過迄致下宿、今
日方以後朝昼廿八日同前

二月

日不定

一卯ノ日二付揃、明六ツ時過

一表御対面所御祝并御座之間御祝相済、於御休所若老筆頭御

近習向出座御怡申上候

但、御儉約中ニ候得共、卯ノ日ハ御座之間御祝ニ候

一御座之間御祝後、御近習之輩於元焼火之間ニ御具足之餅・

御酒被下候、御札ハ見賦之御目付江申上候、今日右頂戴之

常列座両側ヘ致着座候、御次第江ハ表御規式相濟、朝御膳

前頂戴候相書候得共、御座之間御祝過頂戴ニ相成候

一御具足之餅・御酒頂戴相濟候以後非番致退出候、右頂戴ニ

罷出候ハ御目付ヘ銘々相断申候

一当番之者ハ表御飾引ケ候を見詰ニ常服ニ直し候事

一卯ノ日ニ付而ハ御行水以後ハ御神拝相濟候迄御目通服扨、

御名代帰、御目見之方ニ而ハ其御座敷計服扨

晦日

一御次御小性之間御炉今日塞キ申候

三月

三日

一詰所以上之輩染小袖麻上下非番之者も罷出

一御座之間御祝御膳相濟候得者朝詰御近習之輩退出

一重而御座之間江御出御家老当日之御祝儀申上、奥表御対面

所御出、出仕相濟候已後非番退出仕迄当番之者常服ニ直

し候

但、御儉約中ハ御膳於御休所ニ御独御祝ニ候、於御座之

間ニハ御長鮑被為祝直々御家老衆当日之御祝御申上濟而
表ヘ被為出候、朝詰ハ御休所御膳御祝相濟候得ハ致下宿

候

右正月七日十五日之通惣可申事

七日

一今日御誕生日ニ付御座之間御膳御祝有之候

一詰合詰所以上之輩染小袖麻上下ニ候、朝詰ハ勿論今日当番

之者麻上下ニ而罷出、非番之者ハ不罷出候、御祝過常服ニ

相直し候事

一御祝過詰合之若老初御近習之輩御休所ヘ出座、御祝申上候

一御儉約中御休所ニ而御膳被為祝於御座之間御長鮑被為祝候

事

日不定

一御参府ニ付奥方御饗応ニ付候惣詰

一御座之間御饗応済而於御休所若老筆頭御近習之輩出座御怡

申上候

一右ニ付御能御囃子有之御見物所ヘ被為入候以後何も肩子肩

衣拝見事済而非番退出致候、御能等有之節番頭已上臨詰所

已上

御赤飯煮^レ被下候、但御次第江相書候ニ付御札不申上候

御儉約中

一右御餐応ニ付当番計非番之者不罷出

文政八年八月十五日〔御参府ニ付お綵様・謀丸様御饗応之節如此〕

一御座之間御饗応済、於御休所若老始当番之御近習向出座御
怡申上候、右済而常服ニ相直候

御首途之日

日不定

一御首途之日九ツ時御供揃ニ付御供登之輩、九ツ時 御城江
罷出候〔染小袖麻上下〕

一右ニ付惣詰ニ者無之、当番之外御供登之輩計罷出候

一御供揃ニ相成候所ニ而御騎馬之外何も御先江罷越候、尤御
騎馬ハ御供登之者之内ハ被仰付候

一御笠御徒組方受取之儀若老衆方御供登御近習之内江被 仰

付候間、同日御城江罷出候ハ、御笠役之御徒組ヲ御メ切前

へ呼候而御供揃前藤五郎殿屋敷江罷越居、私江相渡候様可
申談、右御徒組藤五郎殿屋敷広間上之間ニ扣居候間、同所

へ罷越御笠受取藤五郎殿親類江相渡可申候、右御笠受取之
親類誰ト申儀御同人屋敷ニ而取次之小性ニ承り右親類を同

所へ呼改候而相渡可申候

但、御徒組遅ク候ハ、罷越次第早速為申聞候様取次之小
性へ可申談置候、何時も右御徒組遅ク罷越候様ニ候間、

御出前能々談置可申候

一被為入候節御上り口之縁通ニ扣居直々御供仕書院江被為入
候節、若老衆筆頭直々御寄馬江罷出居候、尤脇指帯居候

一藤五郎殿於屋敷御近習之輩へ赤飯煮メ被下候、藤五郎殿方
酒肴被相出候

一御立之節藤五郎殿親類等之使者於広間縁通 御目見御近習
之者披露

一御立以後御跡方引続引取直々御城江罷出候

一御帰城以後於御座之間御目見等御次第之通済而、於御休所
御供登若老筆頭御近習之輩詰合之者御首途無御滞被為済候

御怡申上候

右済而何も致退出候

御発駕

日不定

一御発駕之日御城江相詰候輩御小性頭御城中御火消之御近習
御申次御用前之御申次・御近習目付御用御取次御祭礼奉行・

御小性組与頭御膳番相詰候、右服付染小袖麻上下

但、若老衆方紙面を以て何云々而相詰候様被仰渡候

一御見送ニ罷出候輩野袴踏込常之羽織ニ而最初方罷出候

一御供之輩番頭以上御野襦常之羽織詰所以上ハ立付背割羽織
ニ而罷出候

一御城詰之輩御見送之輩共も御若老筆頭朝御櫛中罷出候并朝御櫛中罷出候儀元日之通二候

一御座之間江被為出候節御堂御參詣被為濟候而御直々御座之間江御出御膳被為祝御吸物之上御組付御三土器御銚子御加上之御相伴へ御土器被下、濟而御茶御張二而御茶道立之指上候濟而被為入候、右御祝之節御城詰并御供御見送之輩段々御寄場へ代り合罷出候

一御供揃被 仰出前後之内御見送之輩御先江罷出候

一奥江被為入御長鮑被為祝御直々表へ被為出、御座之間江御登御家老不殘罷出、御発駕之御怡申上、濟而御直々御立

一六間御重戸初所々御重戸取払申候

一御通之節於席々 御意有之候御玄閑江御奉行初鏡板へ罷出、詰所以上御近習之輩ハ北之方薄縁へ罷出候

一安房殿屋敷御立候段御左右申来候所二而於御奉行衆御詰所御酒・御吸物・御肴一種頂戴有之候、南之方御奉行衆・當番之大番頭・脇番頭・御用二而詰候御目付・御武頭、北之方若老・御小性頭・御近習之輩御医師迄へ但、御近習御醫師今日當番計頂戴濟而御奉行衆指引之御小性組御呼被成御礼被仰上、濟而月番之御奉行衆諸事無御滞相濟恐悦之段被相述何も致平伏仕直々引申候、別而御礼ハ不申上候

一下部屋火之元御小人目付罷越相改申候

一頂戴物濟而何茂致退出候事

追加

一御発駕之前日窺 御機嫌罷出朝詰之輩御目通二而相濟候

五日

五日

一品々三月三日之通

日不定

一御下向御着城前日八ツ時頃方御近習番頭老人へ文政七年御下向之節佐藤但馬出勤御小性組与頭老人へ同年御下向之節伊庭儀右衛門出勤へ出勤致寓番候

但、御迎二罷出候者御着城之日大年寺繰合御供等相勤候者ヲ除キ申合候而寓番いたし候

一御着城御当日御々切内惣詰二候へ染帷子麻上下へ

一御着城之節在仙境迄召候御左右申来候所二而御近習之輩御玄閑へ罷出候

一御着之節北之方薄縁へ御近習向南之方江御小性組等罷出候一於御座之間御着城之御怡等濟而、於御休所二若老筆頭御近習之輩出座御着城之御怡申上候

一御供下之御近習之輩御奉行衆御詰所若老衆御詰所へ罷出候

一御供下り之輩御着城御機嫌伺候得者御用無之者ハ退出致候

右ハ御次第江相出候事、御着日当番之御番割之者御供下り有之候得者御小性頭を以御暇被下致下宿候

一詰合御近習之輩江臨御酒御肴被下之候

但、御札者不申上候

一大年寺江御参詣以後非番致退出候

一御出以後当番常服ニ相直し候

御着城翌日

一御近習之輩御供下りハ勿論非番共ニ不殘罷出伺 御機嫌申上候何も御目通江罷出申上候（朝詰ハ御膳中相濟外御膳過出勤次第御目通江罷出相濟）御物置も同様 御目通ニ而相濟候、御小性組・御右筆等ハ御次江罷出申上候

日不定

一御下向御祝儀奥方御饗応ニ付惣詰（染帷子麻上下）

一右ニ付御能御囃子等有之御見物所へ被為入候以後何も戻子肩衣拝見事済而非番致退出候

一御座之間御饗応済而於御休所若老筆頭・御近習之輩出座御怡申上候

御俟約中

一右御饗応ニ付当番計、非番之者不罷出、文政七年六月十五日御下向御祝儀お綏様・棋丸様御饗応之節右之通二候
一御座之間御饗応済而於御休所ニ当番御近習等出座御怡申

上候

六月

十六日

一嘉祥二付今朝詰之輩御小性等染帷子麻上下、御近習之輩・非番之者も罷出、御小性組等非番之者不罷出揃朔望之通

但、朝詰之者ハ御朝御膳過退出致候

一御俟役中ニ付於御休所十六種御菓子被為 祝御俟約中ニ無之候得者、御座之間ニ而被為祝、此節当番之者計御寄場へ罷出御直々御座之間へ御出（御寄場へ若老始非番之者ハ出前ハ罷出居当番之者ハ御休所相濟候後、御苗御着御座之間御寄場へ罷出候）御苗御着座御長鮑上之引而御奉行出座嘉祥之御怡申上候、御小性頭御取合申上 御意有之退出濟而被為入

一表出仕ハ無之候

一嘉祥二付御休所出座御怡無之候

一御座之間済而非番退出、当番常服ニ相直し候事

七月

七日

一御座之間御祝ニ而御相伴等も有之候
一御俟約中ニ付御座之間御祝御膳無之於御休所御組附御三器御銚子御加上之被為祝御膳御常式方御壹菜増御初献御吸物

等上之、濟而御茶請御茶菓子御薄茶上之御相伴無之御寄場常式之通麻上下二而罷出当番御膳中引合兼而之通二而御休所御膳相濟候得者致退出候

一 御座之間御長鮑上之非番之者と御寄場へ罷出候但出仕揃朔望之通江張紙相出候

一 服染帷子麻上下非番之者も罷出

一 奥表出仕相濟候以後非番退出当番常服二相直候

十日

一 一宮御参詣二候所大社御参詣二付四日前暮六ツ時方服穢之輩 御城中退出

一 今日御参詣二付朝当番計戾衣二候非番之者不罷出

一 御衣冠以上御城詰肩衣法蓮寺麻上下御狩衣二候得者、御城詰常服法蓮寺肩衣二候、但御~~ベ~~切内計

一 御供之御近習前夜当番二候得者御暇二而致下宿候

文政六年二月十五日一宮御参詣之節布衣御供、天童右近

介・奥山出雲・松前八之助、御騎馬山家市十郎、伊藤儀

右衛門二候所、八之助・市十郎・儀右衛門、十四日当番

二付、同日晚下宿いたし候

一 一宮御参詣濟而同日御渡海十一日御帰城伺 御機嫌之節惣詰常服二候、御座之間二而御家老衆御怡申上候、以後若老始御近習之輩出座御帰城之伺 御機嫌申上候

但、御帰城暮前二候得者表御玄関暮過二候得者御勝手御玄関二候事

一 一宮江御供之御近習下宿仕候義者御暇二者無之候、加番引合受候而下宿も吟味之上懸可申事

一 御帰城之日当番二候へ者御暇二而下宿致候ハ、其段相記置可申候、尤御供之輩御帰城之翌日伺御機嫌申上候義も相記置可申事

一 御次之輩并御供之輩二而も御立前日者伺御機嫌無之候

但、御物置御小性御先番二而前日出立之者ハ御立前日伺御機嫌罷出候

十二日

一 於奥御対面所二御廟云々江御献納之御燈籠御切子御覽御服戾子御肩衣御先立之御小性頭、御刀番御供之御近習等常服奥御対面所御棚之下へ若老・出入司・御祭祀奉行・御堂番染帷子麻上下五之間へ御作事方御役人兩人麻上下二而罷出居御覽濟而被為入候

十三日、十四日、十五日、十六日

一 盆二付右日数御座之間御講釈・御兵衛・御鎗御稽古無之候十四日

一 盆二付明半時御供揃 真浄殿并大年寺・瑞鳳寺江御参詣御長上下御出懸、万善堂・因縁殿御参詣御堂江麻上下二候所、

真淨殿御參詣懸故御長上下

御先立御家老御杏御小性頭

麻上下御刀御物置へ役済而表御玄閑より御出、黒門前二而御下乗、右之所へ御先立之御家老罷出居、同所方御近習壹人御刀相勤候、御刀江御服紗持之塀風門際二而草履取之御杵相勤候、御近習者手明二而御供仕兩人共二刀ハ藤棚下江取薄縁敷候所へ取御服紗はつし其身も御はさみはつし申候御刀御唐門二而其身之左之方へ扣申候、御唐門地覆外也御杵相勤候者ハ御唐門向薄縁際其身之右之方へ扣も候御先番御近習繰合二而参り御手水差上候節脇差帶候儘二而指上候御縊差上候節御唐門向小坂之下へ罷出居脇差取候而相勤候一雨天之節御下乗方塀風門迄御長柄御徒組指上候塀風門方御手傘御近習御唐門迄差上申候、御唐門内ハ脇院之出家差上申候

大年寺・瑞鳳寺御先立若老、大年寺・万善堂江も 御參詣十五日

一今日出仕之輩繼肩衣二而罷出候、御寺御參詣御供揃五ツ半時二候へ者罷出候五ツ時二候へ者不罷出候表出仕ハ御謁二被成候

一文政八年七月十五日御寺御參詣御延引二付御座之間表出仕共二不被為受候

一盆二付御堂麻御上下御廟御長上下之所、御直々御參詣二付御堂共二御長上下

一盆之御祝儀御座之間二而御祝二候

一御儉約中二付右御祝儀御休所二而御祝御膳差上候節ハ当番之者計御寄場へ罷出候

但、朝詰之輩ハ御膳相濟候所二而退出

一盆之御祝儀二付揃五ツ時二而御へ切内非番之者も罷出候

一御休所御膳済而御座之間へ御出御筋違御着座無御茵 勁松院様御使者被召出、御口上被為聞御返答被 仰出、畢而正面御着座御刀御刀懸江掛候御長鮑上之、御家老出座盆之御祝儀申上候

但、御座之間二而御家老盆之御祝儀相濟候ハ、御小性組等出仕無之輩退出

一數之御土器宜打壱ツ上之御闕之外二疊目江置之、詰合之若老番頭以上之輩頂戴済而數之御土器宜打式ツ上之御闕之外三疊目江置之詰合之番頭已下御近習御番医師御物置へ役御小性与頭へ右式人ツ、罷出頂戴、右御土器上之御闕之外四疊目江引落直々詰合之奥表御小性御右筆御茶道御同朋頂戴之、済而被為入、右詰合之者頂戴仕候訳二候所、非番之者出仕等二而罷出候者も頂戴仕、朝詰之輩計頂戴不仕候事

天保二年七月十五日吟味之上記置候事

一 盆之御祝儀ニ付御休所出座御怡無之候事

一同日両山江被遊御参詣候所、此度真浄殿両山共二十四日被遊御参詣候段御格相直り同日ハ御祝儀之方計ニ相成候ニ付五ツ半時御座之間揃朝五ツ時揃ニ相成候ニ付、非番之者も同刻罷出候筈ニ文政九年七月十四日相済候事

文政九年方五ツ時揃盆之御祝儀、御^レ切内惣詰麻上下

八月

朔日

一 八朔御祝ニ付御近習之輩番頭以上白帷子詰所以上染帷子麻上下

一 御^レ切内非番之者も罷出

一 御座之間御祝ニ候

一 御俚約中ニ付於御休所御独御祝ニ付、七月七日ノ通

一 御休所御膳済而朝詰之者致退出候

一 御座之間揃朔望之通

一 於御座之間御長鮑被為祝御家老当日之御祝義申上、御直々表へ被為出、出仕済而被為入非番退出、当番常服ニ相直候

一 八朔ニ付御休所出座御怡無之候

十五日

一 大崎八幡宮御神事ニ付御参詣御狩衣ニ候

御参詣済而御服被為直候得者御帰之節御服染御帷子御半

上下ニ付、御騎馬之者も染帷子麻上下

一 右ニ付服穢之輩 御目通へ不罷出候ニ付前日当番服穢之者暮六ツ時方致退出候

一 御供揃五ツ半時ニ付当番非番共ニ出仕ニ罷出候

一 御出懸於御座之間御奉行当日之御祝儀申上候節御次出仕之輩御寄場へ罷出候、服穢之輩当番之者ハ御出過ニ罷出候外服穢之輩出仕ニ不罷出流ニ相成候、御座之間済而御直々表御玄關方御出ニ候

変例

一文政七年八月十五日早朝方大嵐ニ付御参詣御延引ニ罷成、御家老御名代御差上御座之間奥御対面所表共ニ兼而之通相済候、右服穢之輩御目通江不罷出儀者流ニ相成候

服穢之者御目通江不罷出候付、今日出仕ニ不罷出輩右御延引ニ付前段罷出候ニハ不及是又直々流ニ相成候

一出仕過御遙拝被遊候付御行水以後より御清ニ相成、服穢之輩御目通へ不罷出候、右之訳張紙ニ相出候

一 御名代帰 御目見之方ハ御衣裳以後方御清ニ相成、是又張紙ニ相成、服穢之輩御目通江不罷出儀同前ニ候

但、右ハ御参詣御延引之節之变例ニ候、御参詣有之節ハ最初記置候通之御定例ニ候

十五日

一御月見ニ付揃七ツ半時御連衆戾子肩衣、当番御寄場同前
一御座之間ニ而月見之御會有之、御同所御縁通へ月江之御供物有之

一御詠誦上之節御連衆御寄場共ニ平伏仕候、誦上不残済而御連衆へ御意有之、何も平伏仕候御寄場ハ平服ニ不及候
一御会済而月江御備之御水菓子差上候、御膳ハ御皿御小刀差添、月江御供之御水菓子一膳ツゝ差上、御自身被遊御取候御餅菓子御酒差上候、御儉約中ハ御休所ニ而差上候
一御連衆江御酒御肴被下御札於御次ニ御小性頭へ申上候
日不定

一新米御祝ニ付於御座之間御前被為祝済而御奉行老人ツ、御召出頂戴済而御小性頭御取合申上御奉行退出
一於焼火之間御宿老・出入司南之方方罷出頂戴、詰合之御近習向番頭已上計北之方方罷出頂戴、服染小袖麻上下
一於焼火之間頂戴之新米表御小性持出、右頂戴之内御小性頭御間之内ニ附居頂戴之面々老人ツ、御小性頭へ御礼申上引取候、北之方入口へ御小性組与頭扣居、南之方入口へ表御小性扣居、頂戴済而御三方表御小性引申候

九月

六日

一今日御誕生日ニ付御座之間御膳御祝有之候

一御祝過詰合之若老始御近習之輩御休所江出座御怡申上候
一詰合詰所以上之輩染小袖麻上下ニ候、朝詰ハ勿論今日当番之者麻上下ニ而罷出、非番之者不罷出候、御祝、過常服ニ相直候事

一御儉約中御休所ニ而御膳被為祝、於御座之間御長鮑被為怡候事

九日

一重陽ニ付御近習之輩番頭已上花色小袖、詰所以上染小袖麻上下外諸事ハ朔之通ニ候

十三夜

一諸事十五夜之通ニ候

十五日

一今日江戸芝神明御神事ニ付、於御休所御赤飯甘酒御膳替御酒御初献等差上候

一右ニ付詰合之御次御物置、御小性之間御右筆・御茶道へ御赤飯御煮ゝ被下、於御大所ニ頂戴、御礼銘々於御次ニ御小性頭へ申上候、右頂戴常服ニ候

十七日

一東照宮御祭礼ニ付前夜方服穢之者御目通江不罷出候

但、前日当番服穢之者有之候得ハ暮六ツ時方 御城致退出候

一 今朝御衣冠二而 御参詣二付朝詰之者染小袖麻上下二候、非番ハ不罷出候

一 表御玄関方御出、御帰同然、御出御帰共二御玄関へ薄縁敷二付詰所以上之輩右薄縁北之方へ罷出候

一 御留主番御小性頭・御近習目付御近習繰合を以勤候所、番頭二而も御近習之方を以勤之、御小性頭筆頭繰合を以相勤申候何茂染小袖麻上下

但、服穢之者二而も御留主番相勤申候、御帰城之節方御鏡之餅頂戴相濟候迄者御目通へ不罷出、右御頂戴相濟、御休所出座御怡申上候

文政七年九月十七日石田定之丞御近習番頭、谷田作兵衛御近習目付、服中二候得共、御留主番御指支不申由、御小性頭・御近習目付吟味二而右兩人御留主番相勤申候

文政十一年九月十七日御留主番山家市十郎繰合二而相勤申候所、同人義ハ御近習并御小性組与頭仮役兼役相勤候間、別人御近習方相詰不申候而も苦ケ間敷哉吟味致し候へ共、同日ハ御留主番耆役耆人ツ、相詰候方相当之義と御小性頭吟味いたし、月番御小性頭真山慶治繰合二而、高泉彦三郎御近習目付矢野甚左衛門、御小性組与頭山家市十郎、右四人高二御留主番二相詰申候

一 於御奉行衆御詰所二若老筆頭、大番頭、御小性頭、御近習

目付、御近習向御医師、御目付御餅菓子御酒御吸物頂戴有之、御礼ハ不申上候

一 御帰城前御へ切内之輩詰所以上染小袖麻上下二而非番之者も為御怡致登 城候

一晚之御参詣御直垂二候

一 御帰城以後於奥御御対面所二仙岳院 御目見濟而於御座之間御奉行出座、御祭礼無御滞被為濟候御怡申上、御小性頭披露濟而御祭礼奉行被召出熨斗目長上下、御奉行披露、御意有之、退出濟而 東照宮御鏡餅御頂戴濟而被為 入

一 於御座之間御三之間二 東照宮御鏡餅御奉行頂戴之持出御小性組二候

一 於焼火之間之内若老奥御対面所之所方罷出御次当番并詰合之者頂戴之御近習医師迄服穢之者頂戴無之

但、非番ハ御休所御怡濟候得者致退出候所、詰合之者江ハ御用有之相詰居候右之事二候

一朝御参詣之節御灯燈朱塗之摺卷差上候所、晴候節ハ御近習目付へ打合御小性江致差図、坂之中程迄も差上候御帰之節夜明候へ者は亦同様致差図指引申候

外人屋御見物所

一朝御参詣相濟御見物所へ被為 入、御服麻御上下

一 御近習向染小袖麻上下御供之布衣素袍も同様相直候

一於御見物所ニ御赤飯御煮^ベ并臨御糖進物被下候

一朝素袍御供御近習三人ニ有之、晚ハ兩人ニ付、朝御供老人
ハ御供相濟候ヘ者引取候事ニ候ヘ共、前々方勤形を以晚御
参詣之節迄御見物所ニ扣居頂戴物等も仕御立以後引取申候
一神輿御通行ニ付御前御簾外ヘ被為出候節相詰候御近習之輩
御供共ヘ兩側江相分レ脇差計ニ而罷出候、仙岳院罷通以後
被為 入候

一還御已後御直垂ニ而御参詣被遊候

一晚御参詣ハ柵御門之方方御参詣ニ候所御迂座前ノ段仙岳院
被申上候得者願之通桜門ニ而御拝被遊候

但、御迂座前ニ候得者 神輿願之通桜門ニ被為入候

一九月十七日渡物無之年御参詣之節御直垂ニ候

一仙岳院江被為入御服被為直候節染小袖半御上下御騎馬服
染小袖麻上下ニ候、文政九年九月十七日御参詣之節右之通
ニ候御騎馬増田菊之助、喜多山太吉相勤申候

一御殿服繼肩衣ニ候

十月

日不定

一玄猪御祝ニ付揃七ツ半時非番之者も罷出候、服染小袖麻上
下

一於御座之間玄猪餅被為祝、済而御奉行出座、玄猪之御祝申

上、引而被為入

一御座之間三之間ヘ玄猪之餅御据ヘ御敷居際江出之、御小性
組持出、御奉行頂戴、済而御小性頭ヘ御札被申上、直ニ退
出、若老頂戴御小性ヘ御札申上引、番頭以上同所ニ而頂戴
御札不申上引、済而御据之餅引、御小性組引之、三方ヘ餅
戴之御敷居際方三尺引沓疊目之内御同朋出之、詰所以上之
輩頂戴之御札ハ不申上引、済而三方式ツ同所ヘ御同朋出之、
詰所以下御同朋迄頂戴之御札不申上引之、済而御三方御同
朋引之

一御休所出座御怡無之候

一何も頂戴済而非番致退出候

日不定

一御献上之御茶御試ニ付九ツ時

一御出前御座之間御次之間御襖立切御開之方御縁通之御障子
式間分立切沓間之所明置

一御出前若松之御茶壺相出置、御茶道何も染小袖十徳ニ而罷
出居

一携候若老染小袖麻上下ニ而御闕際江罷出居、外若老始御近
習之輩常服ニ而御障子際方兼而御奉行御用被為聞候節之通
罷出居、御小性・御右筆同然

一御座之間ヘ御出、染御小袖麻御上下、御先立御小性頭染小

性半褱御刀御刀番服同然、御小性頭御座之間御縁通之所へ
扣居

一御献上之御茶御自身被為詰・御茶道へ被相渡、若老副之
廣徳院様へ御進献之御茶御自身被為詰、信恭院様江被差上
候御茶御自身二而詰、御茶道へ被相渡、若老副之、奥御対
面所へ引之濟而被為入

一於御休所御膳上之御茶数御常之通方御沓茶増御常式御膳碗
上之御給仕之御小性裏付上下、御茶請上之御献上之御茶差
上御印符被遊御覽、若老副之、御次第二右之通相出居候得
共、御封拵御印符出兼候へ者、御膳過入御覽二御茶於御陰
二立之御茶差上之、兒小性染小袖麻上下、御菓子御薄茶上
之

但、御俟約中二無之候得者御膳御座之間二而差上候、相
伴も有之候へ共、御俟約中二付於御休所二差上、御相伴
無之候

十五日

一今日方御次御小匠之間御炉開申候

但、御座之間并御茶室之御炉ハ朔日方開申候

十二月

日不定

一歳暮二付御子様方御饗応之節当日染小性麻上下非番之者ハ

不罷出候、文政七年十二月十五日お綏様棋丸様御饗応之節
一御饗応濟而若老筆頭当番御近習之輩御休所へ出座御怡申上
候

但、右二付御能御囃子有之候へ者惣詰二而、番頭已上ハ
牒被下、番頭已下詰所已上以下迄御赤飯被下候
日不定

一節分二付御膳御座之間御祝二候

一御俟約中二付御膳御休所御祝二而惣詰二無之候

一晚御祝之節惣詰、染小袖麻上下

一暮六ツ時揃二而御座之間へ被為出、御奉行出座、節分之御
怡申上、直々下之御床際へ扣居、御年男罷出、御膳番添之、
御上之間御下之間江鬼打大豆搗之、濟而鬼打大豆三方へ戴
之、御刀番上之、御年男添之被為祝候、以後御刀番引而、
御次之間御闕際へ御家老方番頭以上迄沓人ツ、罷出、頂戴
濟而、御刀番引之、御膳番鬼打大豆さら江入持出、御次之
間へ播之、御意有之、御近習・奥表御小性・御右筆・御茶
道・御同朋迄一同罷出、拾之濟而被為入、右以後御家老何
も引申候濟而若老始御近習之輩御休所江出座、節分之御怡
申上、退出

一御年男御堂へ鬼打大豆播之、夫方御座之間御上之間御膳所
初御物置等へ播之、御次へ播候、以後非番致退出候

日不定

一御煤払二付四ツ時揃

一御年男素袍御膳番麻上下添之、御大所上段払之、次二御堂

払之、御祭札奉行添之、次御休所払之

一御座之間江御出、染御小袖麻上下、御長鮑上之、則引之、

御家老出座、御煤払相濟候御怡申上退出、済而被為 入

一右二付非番者不罷出御休所出座御怡無之

一御煤払二付御先立御小性頭御長鮑上之、御小性組・御小納

戸麻上下、外裏付上下

日不定

一御講釈終二付御座之間へ被為出、染御小袖御通上下講釈被

為聞

一講師継肩衣、若老始御近習・御小性・御右筆等迄聴衆継肩

衣

一講師并御会申上候者へ御酒御肴於御大所被下候

一御稽古終二付御稽古所へ被為出、御袴、御兵衛・御鎗御稽

古有之、御相手之者継肩衣、狭川喜多之助、玉虫恒太郎於

御大所上段二御酒被下候

歳暮

一歳暮御座之間御祝二候、右二付非番之者も罷出候、染小袖

麻上下、揃九ツ時

但、御儉約中二而も歳暮ハ御座之間御祝二候

一御祝御膳済而御茶於 御前御茶道立之、御手水石之御手水

二候

一今日御近習当番之輩御茶附御賄被下、非番之輩江者御酒御

肴被下候、右二付別而御札不申上候

一御祝相濟候以後若老始御近習之輩御休所へ出座、御怡申上

候済而退出

一暮六ツ時過於御大所上段白鳥之大板有之、御小性頭御膳番

右席へ罷出候

一御参勤二付、一宮江御日帰御参詣被遊候、曉七ツ時御供揃

二而御勝手口方被為出候節、御次へ若年寄・出入司、御

切前へ奉行衆被罷出候、当番御近習之輩ハ兼而之通御猿毛

下江罷出居、直々御供致候、何も常服、右二付非番之者ハ

不罷出

一布衣御供三人、若年寄高野雅楽、御小性頭右仮役松前主水、

御近習番頭瀬上美濃素袍、御供兩人御近習山家市十郎、佐々

布八郎左衛門、右之内二而布衣御供被仰付候事二而、御騎

馬被 仰付候所、奉書無之候へ者、御供揃被仰出候所二而、

直々御先へ法蓮寺へ罷越候

但、御途中御旅服二而法蓮寺江被為 入、同所二而御装

束御参詣二付御先へ罷越候同所方御供仕候

一法蓮寺へ被為入、則社家江御通掛御目見被仰付、披露有之候事、右披露間之内ニ而有之候事、御帰之刻社僧御目見、品々社家同断

一奏者之宮江御参詣、御先立御小性頭、御刀御近習相勤候事
一御帰之節御釜鎮守へ御旅服ニ而御参詣、御先立御小性頭、御刀御近習、御騎馬之御近習ハ初之柵之所へ扣

但、布衣御供之内右御供被仰付候者御帰之節も御供不仕候、御帰城後伺御機嫌ニ登城仕候事

一表御玄関方御帰城、詰所已上之輩伺御機嫌登城、席々江罷出居御意有之、直々御床之間御茵御着座、御長鮑御刀番上之、御奉行出座、御参詣相濟候、御怡并伺御機嫌被申上、御小性頭披露之、濟而御休所へ被為入

一若老筆頭出座、御近習之輩御医師迄非番共ニ罷出伺御機嫌申上候

一右ニ付御々切内常服

一暮六ツ時前御左右申来候ハ、暮以後御帰城ニ而も表御玄関暮六ツ時過御左右申来候ハ、御勝手口方被為入

不時

公辺方御拝領物之部

一御内書御頂戴之節御座之間へ御出前方御床へ御内書相出置但、若老奥御対面所御重戸之方方相出、御床へ置之、

御間之内南東角之所へ扣居候

一御内書御拝見済而御筋違御着座、若老罷出御内書引之済而被為入

但、式日等ニ而直々御座之間御祝儀之節者御座敷番御茵上之、此節御刀番御刀ヲ持御小性御刀掛直々御座敷夫々御祝有

一文政六年二月関東川々筋御普請御手伝被仰蒙候ニ付、三月朔日於御座之間御奉書御拝見ニ候所、御出前方御奉書御床へ差置、御近習番頭附居、御次之間御披之方下之御床之柱方三疊目へ扣居、御拝見相濟候、以後右役御奉書引之、御直々右ニ付御堂江御参詣、御手水へ御奉書御拝見之間遠御寄場へ入候、御重戸ノ所へ扣居、御奉書引候所ニ而兼而御懸手水上候所へ持出御手水被遊候

一御堂御参詣ニ付御近習之輩御供之者御座之間江被為出、前方廻り居、右御奉書御拝見ニ付而惣詰ニ者無之候所、今日式日ニ而非番之者も罷出居候ニ付、当番不殘御供ニ廻り、非番之者御座之間御寄場へ罷出居候、御堂相濟候以後御直々御座之間御着座ニ付、御近習并表御小性へ奥御対面所方上り御物置之輩万善堂御橋口之方御寄場之所方上り申候但、御堂御参詣相濟御直々御座之間御着座之節御座之間方御次之間の方脇差取手を持引候而も宜敷候、今日者御

寄場之者御間ニ合ニ付、本文之通ニ上り候、式日等ニ無之、非番不罷出候節ハ御寄場之者御間ニ合不申間、御座之間方上り可然候

一右ニ付三月三日詰所以上之輩御帳江付御怡申上候、御近習向兼而之通ニ候、御座之間御目通ニ而済而御休所出座ハ無之候

一文政八年正月廿九日宿繼御奉書を以鶴御拝領之節、鶴到着ニ付揃被 仰出候処ニ而詰合之御近習向染小袖麻上下着致候、右詰合計ニ而惣詰ニハ無之候

一表御対面所ニ而御頂戴御次第之通相濟候

一於御座之間御家老衆右御怡被申上候

一御休所へ被為 入候所ニ而若老筆頭詰合之御近習向出座御怡申上候

但、右ハ詰合御近習向之者計御内證ニ而早速之御怡申上候
候訳ニ候

一右鶴御拝領ニ付触相出、二月朔日登 城出仕相濟候以後若老筆頭御近習向之輩御休所へ出座御怡申上候

但、右御表立御怡申上候訳ニ付、廿九日御内證ニ而御怡申上候輩も御医師迄、又以登 城一同出座御怡申上前之、右御怡不同有之ニ付、此節吟味之上前書之通申上候、御奉行衆ハ廿九日御座之間ニ而表立御怡被申上候ニ付今日

ハ御怡不被申上候

一文政七年十二月江戸表御上屋敷御類焼ニ付宿繼御奉書致来之節

一文政八年三月十五日御拝領之鶴御披キニ付御膳御座之間御祝御相伴も有之、右ニ付御座之間揃五ツ半時ニ候

但、御俚約中五節句等御休所御祝ニ候へ共、鶴御披キハ御座之間御祝ニ候

一御拝領之鶴拝味被 仰付ニ付、熨斗目麻上下揃五ツ半時ニ候、御座之間相濟重而表へ被為 出候節、御近習之輩御医師迄御座之間御三ノ間江揃居、鶴拝味被仰付候御礼若老披露ニ而申上候、御同所御縁通へ御小性組奥表共ニ揃居同断御礼御小性頭披露ニ而申上候、御右筆・御茶道等御猿毛下ニ而御礼可申上候へとも御間遠ニ有之候ニ付奥御対面所五之間へ揃居御小性頭披露ニ而申上候、若老衆筆頭御近習向出仕迄於元焼火之間鶴拝味仕候、右拝味ニ付当番并御用支之者ハ御奉行衆若老衆於御詰所御礼申上候、非番之者ハ兩御月番御宅へ罷出御礼申上候

但、今日鶴代江四ツ時之御供揃ニ而御出有之候所、山家市十郎非番ニ候へ共鶴代江御先江罷越ニ付、今日御用支ニ付御宅へ御礼ニ罷出兼若老衆へ相伺候所、御用支之者ハ御詰所ニ而申上候様天童右近介殿御差図ニ付、兩御詰

所へ罷出申候

一天保二年三月三日 大御前様御拝領雁肉被分進候を御披キ被遊候、御奉行衆御座之間ニ而雁肉被分進御披キ之御怡も当日之御祝儀と一同被仰上候ニ付、若老并御近習向御休所へ出座御怡義吟味仕候所出座無之候

但、文政四年、同六年、同十年何も出座御怡不相見得候ニ付而也

公辺鳴物等

一文政八年二月御老中松平右京太夫殿御死去ニ付鳴物被相禁候所鳴物中ニ候へ共、廿八日之出仕ハ有之候鶴代御満中ニ候所右者鳴物中被相謁候事

御出之部

一於奥方馬場御馬被為召候節御寢所裏方被為出、御供之御近習脇差計ニ而廻り申候、万善堂後老板戸奥御小性明申候間、同所方御弓場裏へ廻り申候、御小性者御大所御門方竹やらひ御内二枚戸所へ廻り居申候、御草り取同前、御猿毛御箱も表方廻り馬場へ出居候、御茶弁御茶道へも表方相廻り申候

一残月亭辺へ御出之節、御近習向脇差計ニ而御供仕候、御猿毛御箱等ハ相出不申候、残月亭辺御出之御供廻りニ付、御庭之内者御路地之者も御供仕候、右御出之義御目付へも首

尾相成申候

但、御長路地辺御出之節ハ御草り取りハ不召連候事ニ元文五年濟口有之候所、御近例ハ御草り取被召連来候所、右ハ別々濟口も無之候ニ付、御小性頭へ御目付森田奎右衛門打合有之候、元文五年濟口有之上者御草り取不召連候、臨時ニ被召連候節ハ其時々首尾致へく段奎右衛門江御小性頭方相答候、文政十三年五月残月亭辺迄も同断ニ候

一一致亭辺江御出之節ハ御近習向刀帶御供仕候、御猿毛御箱ニも相出し一致亭へ御出之節御行列ニ候、御目付へも首尾相成候

一文政七年閏八月十一日八ツ時御供揃ニ而奥方御同道大森御茶屋辺迄御出、御小性頭始御近習・御小性組迄大小帶御供、御小性頭・御物置・役・御刀番・御小納戸ハ御座敷内方直々大森迄御供外御近習・御小性・御手鑓・御箱御草り取御供、小走御茶弁等ハ御出前ニ御長路地ニ扣居被為 入候已後御跡方罷越、一致亭辺ニ扣居、大森御茶屋ニ而御干菓子上り候ニ付、御膳番・御茶道御茶弁御大所組頭等計同所迄罷越、同所方残月亭へ罷越、同所御膳立等之方ニ扣居御手鑓等ハ最初之通御長路地まで罷越扣居、残月亭江被為 入御上り物等有之濟而御帰被遊御立已後御近習向御跡方罷越御手鑓

等も為引取申候

一 御裏林一篇御茸狩之節御近習向脇指計と伝帳ニ有之通二候、御猿毛御箱御茶弁等其外共ニ相廻り候、御目付被首尾相成候

一文政八年二月十五日朝被 仰出御裏林へ御追見山ニ御出ニ付、御供当番方繰合ニ而御近習兩人・御小性頭・御医師兩人木村寿清・横尾恕安、当番方御供支度ハ不心懸候ニ付常服ニ而御供仕候、奥表御小性御茶道迄脇指計ニ而野装束ニ候、御脇被 仰付罷越候者同然、且御手鑑御箱御草り取御茶弁御供小走等計ニ而同勢ハ不罷越、御小性頭始御供之者自分草り取不召連候

一 御夕飯後怀急ニ被 仰出一致亭辺へ御出之節ハ当番御留主番老人残惣御供、残月亭辺も同様ニ候、御出之節之御留主ニ罷在候御近習医師御小性等脇指帶御座之間御縁類ニ扣居候、御帰之節同然ニ候、夜ニ入御帰ニ候へハ御座之間江御蠟燭付申候、御座敷番致首尾御入坊主付申候、御縁類方御入御寄場 入口迄御同朋御ほんぼり上申候

一 御本丸江御出之節虎之御門へ御城番罷出居、披露之義文政七年九月之御帳ニ有之通ニ候

一 追廻江御馬事又ハ馬喰馬御覽等ニ而被為入御厩頭罷出候節仕時ニも御近習披露ニ候

事、文政七年九月相済候事御伝帳ニ相見得候事、御本丸江御出之節

一 追見山ニ而御裏林江御出之節、御出御帰共四猪関御門方御昼御山之内、御野陣之節御近習御小性等脇指計ニ而御供仕、草り取も不召連候、御昼ニ而割合被下候

一文政七年八月廿三日石田豊前大病ニ而罷在候所、尚亦容子相勝不申候段申上候ニ付、即刻之御供揃ニ而豊前屋敷へ被為成候段被仰出、御騎馬当番繰合ニ而玉虫平藏・佐藤四郎左衛門、常服ニ而御供ニ相廻り申候、御行列川内差立候方ニ付役立ニ而御供ニ相廻り申候、御小性頭・御近習・目付・御刀番・御小納戸・奥表御小性肩衣ニ而御先番ニ罷越申候、月番之御奉行衆も御先江御越被成候所、右豊前最早落命候段御奉行衆被申上御出御延引ニ相成、御先番役ニも引取申候

窺御機嫌之部

一文政七年八月廿三日石田豊前病死ニ付、詰合之若老始御近習之輩詰所已上計早速之窺 御機嫌御内證ニ而申上、御目通ニ而相済候御小性・御右筆等ハ無暇、右ニ付触相出、翌廿四日四ツ時揃御奉行衆謁ニ而、表詰所已上之輩窺御機嫌申上、御近習向兼而之通ニ而登 城御目通江段々罷出申上候、服付常服ニ候、昨日詰合之若老始御近習之輩早速之伺

御機嫌ハ御内證ニ而申上、今日ハ触ニ付表立申上候ニ付、昨日申上候輩も罷出申上候、御小性・御右筆等無之候

一文政七年十二月五日江戸御上屋敷御類焼ニ付、早御使江戸番馬上川村主馬之助被相下、同月九日夜着ニ付、当番之者即刻之伺 御機嫌申上、非番之者江ハ急順達相出、面々承知仕次第第十日ニ罷出御目通ニ而伺 御機嫌相濟候、右ハ御内證ニ而申上、御近習向始奥御小性・御右筆・御茶道・御同朋迄申上候、別段ニ御奉行衆方触相出、同十一日御近習向詰所已上之輩登 城表立伺 御機嫌罷出次第御目通ニ而相濟候、御小性組等触之方ニ而ハ不申上候

一春秋之御灸治ニ付御次御物置惣詰、御灸治済而、若老筆頭御近習之輩御休所へ出座伺御機嫌申上候、済而非番致退出候、表御小性・御右筆ハ惣詰ニ無之、尤伺 御機嫌も不申上候

御法事之部

一文政七年八月廿七日 正操院様三回御忌御法事初之日御堂御寺共御参詣無之、御当日五ツ時御供揃ニ而御出掛、御堂迄 円通御門方御参詣、御先立御家老染帷子麻上下、御沓御小性頭染帷子麻上下、御先立之御近習目付ハ御常服、御堂済而御直々御座之間江御着座、中目内匠 正操院様御法事ニ付初日二日目御名代添之、御目見被 仰付、御直々表

御玄關方御出、表坂方御寺御広江御参詣御寺御次第有之候、済而御帰御勝手御玄關方被為 入、御法事済ニ付、御ベ切内若老始御近習伺 御機嫌常服、御座之間御法事奉行衆 御目見之節何も御寄場へ罷出、御目通ニ而相濟、出座ハ無之候、御近習医師も御目通ニ而相濟、御小性・御右筆等ハ伺 御機嫌不申上候

但、正操院様御祭御三回忌迄ハ九御位牌之通之御祭ニ候所、御三回忌以後ハ御祭之御格も相直り 英山様御代性善院様御祭之通ニ相成候間、御七回御法事之節ハ御三回之節之通ニ而ハ行違可申候間、其節吟味可有之候事

一御束帯御衣冠之節御長上下ニ被為直候へハ、御騎馬并御小性組・御右筆服付之義御目付山家大之進江取合候所、御束帯御衣冠之節御長ニ被為直候へ者、御騎馬之者熨斗目麻上下、惣御供染小袖麻上下、御狩衣方以下ハ御騎馬并御小性組・御右筆迄染小袖麻上下之段、文政十二年三月十七日右同人申聞候事

一東照宮真浄殿江年始并御法事ニ付、御直垂御狩衣ニ而御参詣済而、染御小袖半御上下ニ被為直、御帰之節惣御供染小袖麻上下ニ而御供可仕旨御奉行衆被仰渡候段、御目付大河内源太夫申聞候事、天保二年二月十七日也

一九月朔日為 御首途九ツ半時之御供揃ニ而藤五郎殿宅へ被

為入、表御玄關方被為出、御帰之節共二右二付、御供并詰合之者染袷麻上下、御騎馬ハ御供登之内方被仰付候事

一御供登之御近習向ハ御医師迄御出前御城江罷出居、御供揃被 仰出候所ニ而藤五郎殿宅へ罷越候

一右二付非番之者不罷出候

一御帰城以後於御座之間ニ藤五郎殿御首途濟之御怡被申上、御奉行衆披露、右濟而御奉行衆出座、右御小性被申上、御小性頭披露、被為入於御休所、御供登之輩、右御怡出座申上候事

月日不定

聖廟江御参詣并諸学為

御覽養賢堂江文政九年六月十七日被為 入候節之大略

一聖廟御拝礼ニ付染御帷子御長上下、御騎馬麻上下

一御出懸同所御門外へ罷出候役ニ御小性組披露之役目致披露候、但御帰之節ハ無披露

一御門内南之方へ学頭同添役指南統取、北之方江御目付已上学頭方御目付迄、御近習披露、右ハ詰所以上ニ付名披露致候、南之方江諸学指南統取同見習間を置、御儒役已上御近習披露之、指南役已下詰所已下ニ付役目披露、諸学諸生扱方以下之役々ニハ御小性組披露之役目披露致候、已上学頭已下役々 御帰候節ハ無披露

一右披露振文政八年被為入候節も学頭方御目付迄ハ名披露ニ而、諸学指南役方以下ハ役目披露ニ仕候由ニ有之、尚又月番之御小性頭へ吟味之上前文之通致披露候

一聖廟御拝礼之節御先立并御刀御沓扣所ハ絵図有之通御刀御騎馬之者勤之御隘ハ御先番之者御手水之所ニ而差上候濟而養賢堂へ御玄關方被為 入御玄關上ハ御先江詰居候御刀番御刀相勤候御騎馬之者扣居被為 入候所ニ而御次御玄關方上り申候

一日野呂輔講被為聴候節、御服戾子御肩衣、兵学川平之講积并役々往生迄之礼方所作席書 御覽之節ハ御常服ニ被為直候、御騎馬之服も其時々御服之通ニ相直、御帰之節ハ常服ニ而御騎馬仕候

但、御騎馬之服付前々ハ御服相直り候而も始終麻上下ニ而御騎馬仕候様ニ相聞江候所、御小性頭・御近習・目付江も吟味之上右之通相直候哉、右之趣御供之御目付伊庭市右衛門江も申伝候

一御玄關於末之間学頭添役指南統取兼帶、劍術指南統取間を置、諸学指南役・同見習御儒役已上之役々御通之御目見被仰付、御近習披露

但、何も名披露

一御近習披露之分御騎馬兩人ニ付御間ニ合兼候ニ付、御出掛

御門内之披露卜御立之刻未之間披露之申合、御騎馬之外御
先番并手伝之者披露候

一御出表御玄閑、御昇御勝手御玄閑

一養賢堂へ被為 入候節并御立之節前書之通御近習向ハ御玄
閑上御縁通已之間前御障子際へ罷出候

一諸学御覽之節当番之御近習御間之内へ入、御寄場仕相当之
由御小性頭追而評義有之候

一御騎馬之者ハ右之服付ニ而披露

但、御出掛之手伝講釈初而聴衆ニ付肩衣之節ハ右之服ニ
而手伝披露仕候、私ニ者講釈被為聞候節ハ御肩衣ニ付一
統聴衆之者も肩衣ニ而罷出、右済而常服ニ相直候事、嘉
永五年六月廿三日御出候節も其通なり

不時

文政九年九月四日

一今日新井弘藏御儒役御前講・孟子講終、小学開講ニ付、講
時并聴衆之輩肩衣ニ候、御服御肩衣

一御近習被仰付初而御前講江罷出候輩麻上下ニ而、聴衆ニ罷
出候、御座之間ニ而も御休所ニ而も忝度始而麻上下ニ而罷
出候得者次方ハ常服ニ而罷出候

在々

御出之節御供之輩人数積定

一御奉行、内之者拾八人・荷物四駄

一用人上下式人 一小性三人

一徒之者三人、内一人頭役兼

一手鍬持一人 一挾箱持式人

一草り取一人 一口取式人

一沓箱持一人 一食炊一人

一合羽箱持一人

一若年寄、内之者九人・荷物式駄

一用人一人 一小性式人

一徒之者式人

御奉行御供之節も外ニ若老御供之節ハ徒之者一人可相減
候事

一鍬持一人 一挾箱持一人

一草り取一人 一蓑箱持一人

但、御奉行御供ニ無之節ハ牽馬為仕、右人数之外口付

二人沓箱持一人相増内之者拾式人之高可被召連候事

一大番頭格御近習千石已上之内、内之者八人・荷物式駄

一用人一人 一小性式人

一徒之者一人 一鍬持一人

一挾箱持一人 一草り取一人

一蓑箱持一人

一大番頭格御近習千石下之者御小性頭并番頭格已上之御近

習、内之者六人・此已下荷物耆駄ツ、

一用人耆人 一小性耆人

一徒之者耆人 一鎗持耆人

一草り取耆人

右何も乗物輿ハ勝手次第継夫成共可被立候事

一御近習目付・御近習・御目付御物置ノ役・御小性組与頭、

内之者六人

一徒之者式人、内耆人留主居為兼可申事

但、御騎馬之節ハ同勢馬率可申事

一衣鉢三百石已上、内之者四人

一徒之者式人、内耆人留主居為兼可申事

一蓑箱持耆人 一草り取耆人

但、弟子等召連候共、右高之内ニ而召連可申候、百

石以下ニ而も同然之事

一同百石以上、内之者三人

一留主居耆人 一蓑箱持耆人

一草り取耆人

一同百石已下、内之者式人

一御小性組三百石以上、内之者三人

一徒之者式人、内耆人留主居為兼可申事

一草り取耆人

一同百石以上以下共々、内之者式人

一徒之者耆人、留主居為兼可申候事

一草り取耆人

一定御供百石以上以下共ニ内之者耆人

右人数方相減候義勝手次第

一前髪有之御小性并子供者兼而被 仰付候身持之通只今迄之

通可召連候事

右之通当分御儉約中相定候間、如兼而之可被相触候、已上

将監

下野

采女

明和四年正月廿七日

御目付中

右之通明和四年御儉約中相定被相触置候通ニ候所、当時逆

も御儉約中之事ニ候へハ右定を以召連候様如兼而可被相触

候、以上

美濃

豊前

孫兵衛

勘ヶ由

縫殿
和泉

文化十二年九月十四日

御目付中

塩竈松島御供覚、文政十二年二月

一上下五人 沼川助太夫

一上下四人 田辺良輔

右一宿 但、申合之上如斯書出申候、不申合候へハ老

切ニ書出申候

右之通下宿候御首尾相成候様致度候、此度塩竈松島へ被遊
御出馬候ニ付、御供被仰付相勤候間、如斯ニ御座候、已上

二月九日

右御小性頭江相出候

一御伝馬老疋

但、人足ニ直し三人

田辺良輔

右之通御首尾相成候様致度候、此度塩竈松島江被遊 御出
馬候ニ付、私御供被 仰付相勤候間、如斯ニ御座候、以上

二月

右御小性頭江相出候

一素袍老人前 田辺良輔

但、烏帽子末広共ニ

右之通来ル十二日被貸下、十五日塩竈ニおゐて直々相納候
様御首尾罷成度候、此度一宮江被遊 御参詣候ニ付素袍御
供相勤候ニ付如斯ニ御座候、已上

二月九日

十五日晩

一松島御寓式人

御小性頭御脇番牒被下、御近習老人前
牒朝晩共ニ被下候様書出可申

十六日朝

一同行式人

御昼所ハ番頭御供候節ハ二人前ニ書出
可申、文政十一年八月松島之例

同日

一利府御昼三人

右之通御賄御立下御首尾罷成候様致度如斯ニ御座候、

已上

二月九日 御近習方

小料紙堅紙也

一御伝馬老疋

右之通從仙台原ノ町通御出馬先ニ上下被貸下、合判被相渡
御書付申受度候、塩竈方松島へ被遊御出馬御供被仰付被下
候ニ付如斯ニ御座候、拙者義御祭礼奉行御近習兼役相勤候、
御知行高五十貫文ニ御座候、已上

文政十年二月

田辺良輔

大隅殿

右御勘定奉行宛名ニ而書判書申候、右を歩夫ニ直し候節ハ
右之通認御勘定所へ罷出申候

一御伝馬壹疋

右自分勝手を以人足壹人ニ被成下度如斯ニ御座候、已上

田辺良輔判

二月十三日

御勘定奉行衆

右合判之写

合判口 濱田潤之輔

歩夫三人田辺良輔從仙台御出馬先ニ上下可相立者也

文政十年

二月十三日

右を以役前へ致首尾候

右人足原町ニ而繼申候、右ハ徒之者先へ移し繼立申候、後
連候間何分早ク先へ遣人足受取置、直々挾箱兩掛等へ為替
可申候、塩竈ニ而御昼中ニ繼置松島へ御出船以後岡通遣可
申候

一宮江素袍御供其身計素袍ニ直候、内之者御旅服之儘ニ而

宜敷候、尤法蓮寺前へ扣居候計ニ候

一奏者之宮江御参詣之節階下ニ而御上草り指上候、庇縁ニ而
被遊御悦候、御帰之節御供之御近習刀草りを階下へ取り庇
縁へ上り、右御沓相勤申候

一同所ニ而御刀御供之御近習相勤申候

一宮御参詣之節素袍之御近習兩人御先へ翔稜壹人ハ持参致
相勤御献納物御唐門外ニ而御先立之御家老へ相渡右御家老
衆社家社僧へ被相渡候右之内御唐門外へ御立被遊候

一御供之布衣御唐門外へ刀草り取申候、御手水上之素袍之御
近習同様ニ候

一御手水ハ御唐門内図之所ニ而上申候

【絵図①】



大宮／大宮／別宮／御手水此所ニ而上申候／御カラ門／御手水上候以後此所へ参り扣居候／御近習／御目付

御狩衣之節右之通ニ候、神厩坂之下ニ而御下乗、裏坂を御参詣

一法蓮寺御昼ニ候へ者、同寺を御料理出申候、外御村賄も立申候

一法蓮寺御立、御釜鎮守へ御参詣、御献納物ハ無之候、御刀御近習相勤申候、二ノ柵内へ御草り取入不申候間、手明御供之御近習相勤申候

一御召船へ被為入候節、潮満不申候節ハ御さゝけニ而召船江被為入候

一御召船ニ御供仕候輩御小性頭一人・御供御近習兩人・御物置ベ役一人・御奉茶一人・御納戸御手水番・奥御小性兩人・御茶道一人・御菓込一人・奥坊主一人二候、外ニ御水主頭一人・御水主之者

一御奉行衆并御供之御近習番頭一人・御医師三人等ハ御召替江乗申候

一御大所御召船江引添参申候、御上り物之節艫之所へ御大所船つなき板はし等ニ而通を付通用仕候

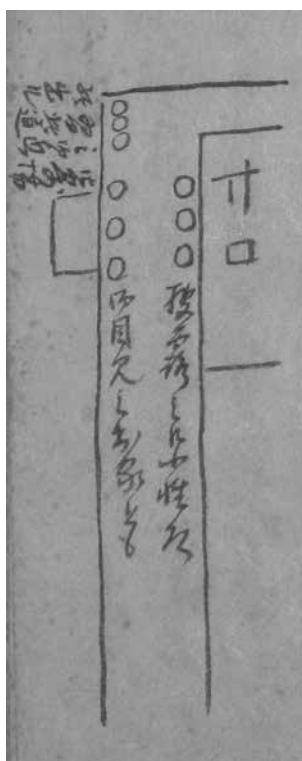
一御乗船之節面々草り入申候、無左候得者御上船之節難義いたし申候

一御上船之節板ニ而渡りを付申候

一御飯屋へ東之御門を被為入候

一御着後瑞巖寺等伺 御機嫌被罷出候節、御座之間ニ而御見目見、御小性頭披露、御寄場へ者御縁通西之方へ進罷出居候、無左候へハ御間挟り候故御間ニ合兼申候

【絵図②】



披露之御小性頭／御目見之出家とも／披露場之御近習此通罷出ル

一翌朝者明半時之御供揃ニ而御膳前ニ五大堂并陽徳院瑞巖寺へ御参詣

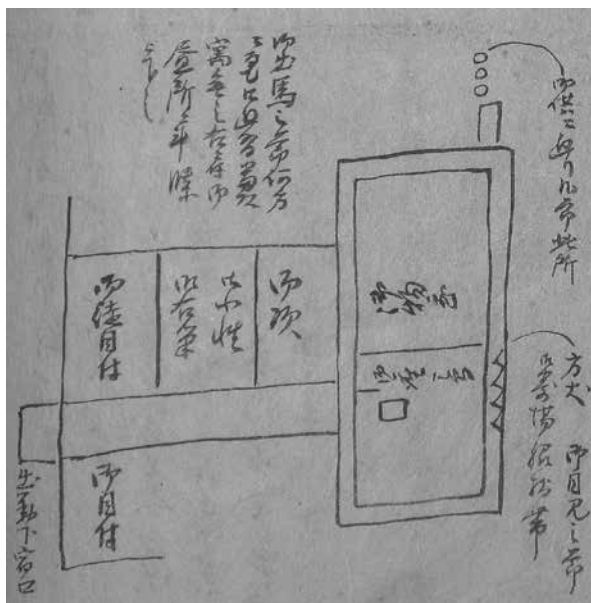
一五大堂へ御献納物持参役ハ供之御近習介添之御徒組御先へ罷越御備仕置候

一御手水ハ御水樽ニ候

一御騎馬ハ番頭御近習被 仰付相勤候
 一御旅中御騎馬之御膳番 陽徳院様御廟へ御先番ニ可罷越候
 所、御帰後則御膳被召上候二付、御物置ノ役江御先番相願
 遣し候而御飯屋江扣居候

松島御飯屋御目見之図

【絵図③】



御供ニ廻り候節此所ノ方丈御目見之節御寄場脇指帶ノ御
 物置ノ御座之間ノ御出馬之節何方ニ而も御近習番頭寓無
 之右ニ付御昼所ニ計牒被下候ノ御次ノ御小性ノ御右筆ノ
 御徒目付ノ御目付ノ出勤下宿口

追加

一御束帶御衣冠之節御城詰麻上下
 一御狩衣之節肩衣
 一御祖父様御法事御当日共常服
 一御両親様御法事御当日麻上下

附御両親様御法事之節ハ御奉行

若老御小性頭御近習番頭御近習同御目付御医師等迄御野菜献
 上之

養賢堂御出之部

一文政十一年八月廿日四ツ時之御供揃ニ而養賢堂へ被為
 入、同所御門前へ同所諸役付共罷出、御小性組披露申候、
 御門内へ学頭大槻民治罷出、同添役千葉介一郎罷出、御供
 御騎馬但馬・甚左衛門、御懷守正親也、民治・介一郎御近
 習披露二付但馬披露、次ニ諸学指南役同見習御儒役之者右
 三ヶ所役目披露甚左衛門致披露候、右役々御門内南之方へ
 罷出、次外役付之者罷出候所、右ハ御小性組披露ニ而御玄
 関方被為入、御休所へ被為入

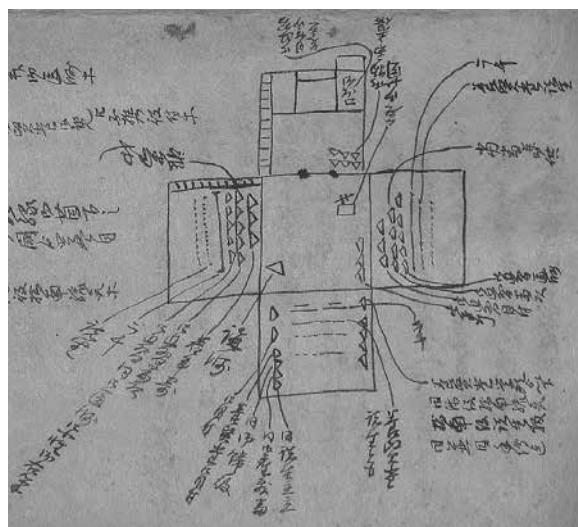
但、御門内北之方江も諸役付之者罷出候所、右之内同所御目付兩人計御近習披露二付、間二合不申候付、御先番又ハ聴衆罷出候、御近習之内へ申合手伝相受候、今日御膳番方二而安倍義之介御先江罷出、高野左太郎聴衆二而御先江罷出候所、兩人相願、義之介披露致候事

一御入部初而諸学為御覽御出（染御帷子麻御上下）御先江御奉行・若年寄・御小性頭・御近習目付・御物置ノ役・奥表御小性、右役銘御次第二出ル

一講堂中央之間へ被為出、御筋違御着座、無御茵、聴衆之輩罷出座列

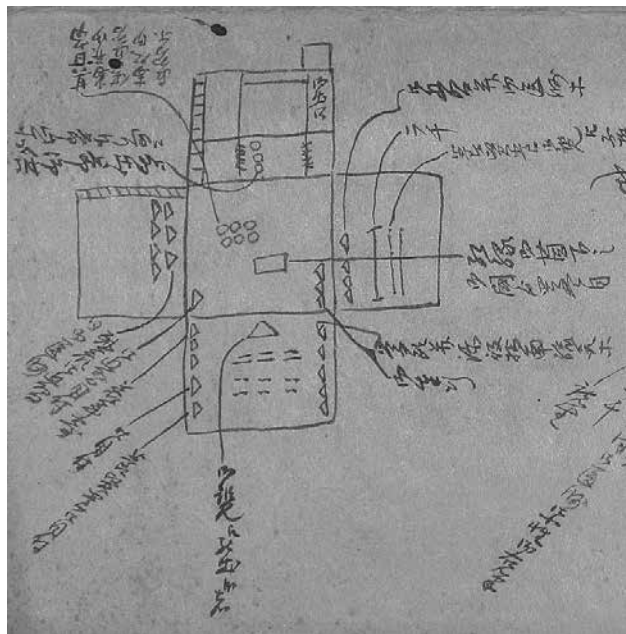
但、御額之間へ被為出、御茵御着座、御長鮑上之、大槻民治被召出、講堂中央之間上之御闕方三疊目、若老披露、御意有之御手自御長鮑被下頂戴帰座、御礼申上、同人御取合申上、学頭添役・指南頭取兼帯千葉介一郎老人被召出、講堂中央之間上之御闕方五疊目、式同然、諸学指南役・同見習老人ツ、被召出講堂中央之間上之御闕方七疊目、式同然

【絵図④】



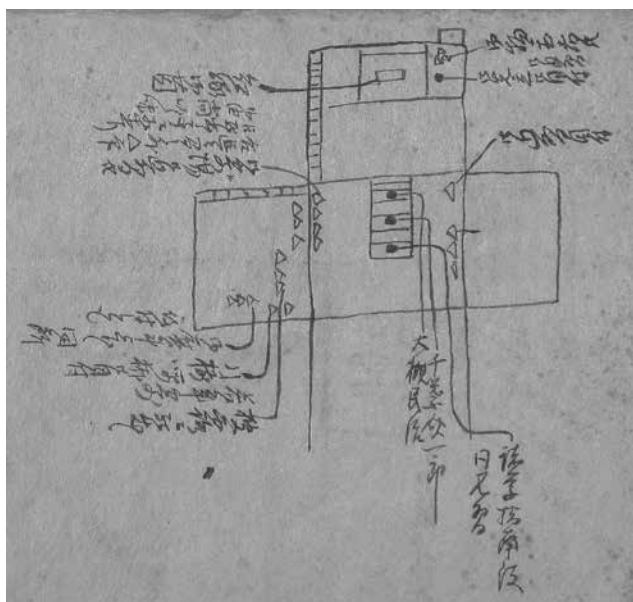
御出口／御近習目付御先立／御物置之者供／無御茵／ラ
 千／養賢堂諸生／当番并御供／御近習医師／御近習番頭
 ／御近習目付／御奉行／ラチ／養賢堂学頭方以下同添役
 指南統取、指南役諸生扱、同並同手伝迄／養賢堂諸生と
 も／非番也／諸生／ラチ／御近習向御医師御小性、御右
 筆／御近習番頭／若年寄／講師／御目付／養賢堂御目付
 ／同御締役／同御座敷番／同諸生主立

【絵図⑤】



御出口／御近習并御医師等／ラチ／養賢堂御覽江不携役
付等／紅縁御茵下之、御闕方四畳目／学頭并添役指南頭
取等／御奉行／御覽江罷出候者／養賢堂御目付／御目付
／若年寄／御近習目付／聴衆御近習、同御医師／被為出
候節御供二廻り候節此所／其日当番并御供近習番頭御近
習等

【絵図⑥】



御物置者共／御近習／御先立御目付／御近習目付／諸学
指南役／同見習／千葉介一郎／大槻民治／披露二罷出候
／若年寄／引揃呼掛御／目付／御熨斗被下候／同所／役
付とも御寄場御近習共右追々間之外△印江罷出候事二相
直り候由尚吟味紅縁御茵

一右済而被為入、養賢堂御家作御覽、書院等も御覽被遊、大槻民治御案内申上、済而被為入、御供揃被 仰出、御帰城七ツ時

一御帰之節未之間ニおゐて田島三蔵罷出、御近習披露、御供之私共御供ニ相廻り候ニ付、高野左太郎披露之、御懷守櫛田正親御座敷中御先立仕候上御供ニ相廻り候ニ付、其段御供之御目付へ断置候事

一兼々養賢堂江出席之輩聴衆被 仰付候事

一御近習向御小性組・御右筆・御用間之者聴衆被 仰付候事

一御奉行牒へ一汁香物共式菜へ御酒御吸物御肴式種被下之

一若老牒へ一汁一菜へ御酒御吸物御肴二種被下之

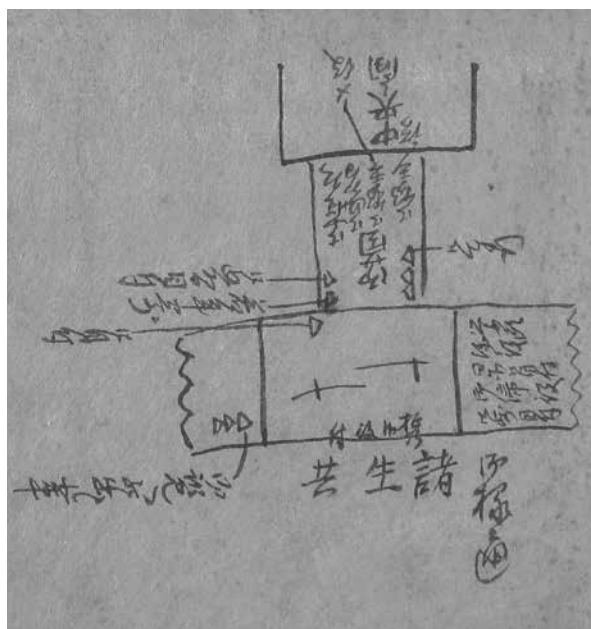
一御小性頭御膳番牒并御酒御吸物二種被下候

一御物置へ役御刀番へ牒被下候

一御供之士以上御先番御小性組割籠被下、依而私共御先番ハ前以割籠之首尾御小性頭手前へ致首尾候事

養賢堂武芸御覽之図

【絵図⑦】



中央之間／御小性頭／御近習／御物置へ役／御物置詰／御茵／御奉行／御近習目付／若年寄／御目付／御覽へ罷出候輩／諸生共／携候役付／御縁通／学頭／添役／同所御目付／御締役／御歩目付

⑥御下向御道中御記録書拔 安政五年三月 3 | 8

(表紙)

一 安政五年

御下向御道中御記録

書拔

安政五年三月十九日

一 今日 御発駕

一 五時前之御供揃二而四半時

御発駕(御羽織御野袴) 大手御門外江高泉筑後(御留守居)

古内左近介(若年寄) 熊谷文之允(江戸番頭) 黒沢龜之進

(出入司) 奥年寄間を置、田村磐二郎様御家老公義使罷出

居 御意有之

一 京橋手前二而 御乗輿

千住小塚原天王脇御下屋敷御替之以後初而 御出

御先江本多勝守・秋保清潔(公義使) 砂沢三郎兵衛(御勘

定奉行) 今村市右衛門(御作事方本、江戸定詰) 罷出居御

屋敷内御廻り御案内今村市右衛門御家作繩張之所被遊 御

覧之

御茶室江被為 入被遊 御休息

一 右付曲洲美濃守殿(中奥御小性) 方以御使者御茶筆筭一(式

部形御煎茶御道具入) 被進、御小性頭披露之済而御立

一 九半時頃千住

御小休御本陣秋葉簾次郎所江御着

一 近藤友佐(御数寄屋御坊主組頭) 近藤意泉(表御坊主) 利

倉善佐(御数寄屋方) 近藤友悦(友佐忒同上) 利倉善甫(善

佐忒同上) 何茂御坊主別而御出入) 大藏八右衛門(公義御乱

舞) 御金三百足ツ、大藏庄左衛門(同上) 大藏五十五郎(八

右衛門忒) 同二百足宛大藏久米太郎(庄左衛門忒) 同百足

何茂為伺御機嫌罷出居於広間 御目見被

仰付御懸合御料理御酒御肴被下候

一 小梁川和泉罷出御機嫌伺申上

御意有之(此通毎日罷出申上候二付日々相記候義略ス)

一 御駕籠入御弁当被召上之

和泉始江如例餅被下候

一 太田源助(関東御取締出役) 為伺御機嫌鶏卵一箱献上綿二

把被下候

一 右付橋本清右衛門(御飛脚宿) 同一箱献上御金百足被下候、

右両條御小性頭披露之

一 小梁川和泉江御有合付鶏卵一箱被下旨御小性頭申談之

一 右付亘理伯耆江同一箱被下旨右同人申渡之

一 田村伊豫守様方以御使者中館廣之助御旅中御見廻 被 仰

進、同奥様・田村数馬様方茂被仰進之

右御使者江御懸合御料理御酒御肴御金百疋被下之

一簾次郎江御昼御同様被為 入候付御金二百疋被下之 濟而

八時頃 御立

同所門外江金沢屋久助〈新吉原御用達〉罷出居御小性組披露之

一竹塚茶屋筆屋長吉所江為

御小休被為 入

一右付長吉江御金百疋被下之、無間茂御立

一草賀駅茶屋森岡屋駒之助所江為

御小休被為入

一右付駒之助江御金百疋被下之、無間茂御立

一七半時過越谷駅御寓御本陣福井權右衛門所江

御着

一小梁川和泉罷出御機嫌伺御小性頭を以申上之〈此通每晚奉

伺候二付日々相記候二付略之〉

一詰所以上之輩

御道中初日付御機嫌伺申上、右同人披露之

一御前様方以御使者谷田定之助〈奥年寄〉御旅中為御見廻生

干根魚一折被進、若年寄披露御返答被 仰出御使者江同人

申渡之

右御使者江御懸合御料理御酒御肴并御金二百疋被下旨御小

性頭申渡之

一豫州様・於觀様・於猶様・伊達大膳太夫様・於佳様方

御旅中御見廻被仰進、且遠江守様江ハ御在所江申上候間、

御容子御報々被仰聞度段共、桜田玄蕃方和泉江以書狀申上、御小性頭を以披露之〈但御前例沓州様方御徒使御狀を

以御品等被進候処、此度ハ火急之事ニ而未御承知茂不被成候二付無其儀由茂申聞之〉

右書狀持参之御使江御金百疋被下之

廿日

一於越谷駅日出前御膳被召上之

一日出過御立〈御羽織御袴〉

一上まくり茶屋秋田屋市郎右衛門所江為 御小休被為入

一市郎右衛門鰻一籠献上、御小性頭披露之

一市郎右衛門江為 御小休被為 入献上物茂仕候付御金三百

疋被下之無間茂御立

一粕壁茶屋三升屋助右衛門所江為御小休被為入

和泉始江如例餅被下之

一右付助右衛門江御金百疋被下之、濟而御立

一杉戸茶屋蔦屋吉兵衛所江為御小休被為 入

一右付吉兵衛江御金百疋被下之、濟而御立

一幸手駅茶屋小西屋与四郎所江為御小休被為 入

一右付与四郎江御金百足被下之、無間茂御立

一栗橋駅茶屋柴次郎兵衛所江為入

御小休被為入

一次郎兵衛鯉二献上御小性頭披露之

一御駕籠入御弁当被召上之

一右付次郎兵衛江別而御世話申上献上物茂仕候付、御金一両被下之

濟而御立

一房川御番所前江富田庫助・嶋田耕平・富田潤三・嶋田一之助〈何茂房川御関所番〉〈御用弁御出入〉罷出居御近習之者披露御意有之、右四人江綿二把走被下之

一同所御船場江御船賦武市九郎三郎・木幡松三郎〈何茂江戸番馬上〉罷出居、御小性組披露之

一同所江土井大炊頭様方御家来成嶋嘉奈衛〈御船奉行〉為御馳走被相附置、御近習之者披露御意有之

右嘉奈衛江御金二百足被下之

一大炊頭様方被相出候御船江被為召、船唄被仰付之

一八時頃房川御船渡無御滞相濟御直々大出漱左衛門〈中田御飛脚宿〉屋敷前二而御駕籠被為立、同人被為召、数年御世話申上候付以御目付御菓子被下之〈栗橋御飛脚宿柴次郎兵

衛江茂右付同断被下旨御目付江被仰付之〉御直々中田御

小休御本陣藤田孫右衛門所江御着

一右付孫右衛門江御昼御同様被為入候付、御金二百足被下之、濟而八半時頃御立

一中田出放方御馬被為召無間茂御乗輿

一七時頃古河駅

御寓御本陣吉沢与市所江御着〈但、古河駅江大炊頭様方前々御使者并御けん払被相出候处、当時嚴之御儉約中御断付不被相出候之事〉

一中村宗三郎所持之茶弁当二而御茶立方仕指上之

御相伴亘理伯耆・松井長安

一小梁川和泉 御旅中為伺御機嫌御菓子一箱献上之

一伊達筑前様御旅中御旅中御機嫌伺以言状申上之

一和泉江御酒之御下并御有合之鯉二被下旨御小性頭申談、右御礼同人を以申上之

一表御小性惣躰江御有合付寄合御菓子一箱被下旨右同人申渡之

廿一日

一於古河駅日出前御膳被召上之

一日出過御立〈御羽織御野袴〉

一間々田駅御本陣青木儀三郎所江為御小休被為入

一右付儀三郎江御金百疋被下之無間茂御立

一小山駄茶屋竹屋惣左衛門所江為御小休被為入和泉始江餅被下之（但、御手自士以上江被下之）

一右付惣左衛門江御金百疋被下之濟而 御立

一九時頃小金井

御小休御本陣大越忠左衛門所江

御着

一御駕籠入御弁当被召上之

一忠左衛門江 御昼御同様被為入候付、御金二百疋被下之

一濟而九時少過御立

一石橋駄茶屋川嶋屋勇助所江為

御小休被為入

一右二付勇助江御金百疋被下之無間茂御立

一雀宮駄御本陣小倉半右衛門所江為

御小休被為入

一右付半右衛門江御金百疋被下之無間茂御立

一七半時頃宇都宮

御寓御本陣上野新右衛門江御着

一志村退藏（御小性組並）順造館江交代登之处、当駄江着仕候付、御次江罷出御機嫌伺申上、御小性頭披露之处、御休所江被相通御国許之様子被為聞之

〔嘉永〕
嘉永七年四月晦日、一上野新右衛門御位階御昇進為御祝儀鯛一折献上御小性頭披露、御金二百疋被下之」

廿二日

一於宇都宮駄日出前御膳被召上之

一日出過御立（御羽織御袴）

一白沢駄茶屋猪瀬藤五郎江為御小休被為入

一右付藤五郎江御金百疋被下之無間茂御立

一四時頃絹川・安久津川御駕籠之俣二而無御滯被遊御船渡

一同所江御船賦真山惣右衛門・小松新左衛門（何茂江戸番馬

上）罷出居、御小性頭披露之

一氏家駄茶屋吉田屋伝吉所江為御小休被為入

和泉始江如例餅被下之

一右付伝吉江御金百疋被下之濟而御立

一同所出放二而立花出雲守殿御参府之处江御行会御会积有之

一右付出雲守殿方以御使者御旅中御見廻被仰進御小性組披露

之

一右二付出雲守殿江以御使者（江戸番馬上）御挨拶御見舞旁被仰進之

一喜連川中程江左馬頭殿方御使者伊藤主馬を以御旅中御見舞被仰進、御近習之者披露、御駕籠被為立御直答被 仰進之、右御使者江御金二百疋被下之

一九時過同所

御小休御本陣上野太衛門所江

御着

一御駕籠入御弁当被召上之

一太右衛門薯薪一台献上、御小性頭披露御昼御同様被為入、献上物茂仕候付御金三百足被下之

一二階堂下総〈喜連川左馬頭殿御家来〉方益御機嫌能御旅行被遊候御始以書状申上、和泉以御近習披露之

一濟而九半時頃御立

一曾根田新田茶屋水戸屋猶重所江為御小休被為入

一御近習之輩江御有合付寄合梨子被下之

一猶重江為 御小休被為入候付御金百足被下之

無間茂御立

一佐山入口江福原内匠殿方御使者福原左志摩を以御旅中御見廻被仰進、御近習之者披露、御駕籠被為立御直答被仰進之、

右御使者江御金二百足被下之

一同所茶屋亀屋利助所江為

御小休被為入

一右付利助江御金百足被下之

無間茂御立

一七半時頃大田原

御寓御本陣印南七郎右衛門所江御着

一茂貫大橋〈御目江付〉御有合付薯薪一台被下旨御小性頭申渡之

廿三日

一於大田原駅日出前御膳被召上之

一日出過 御立〈御羽織御野袴〉

一綿貫村名主渡辺六郎所江為 御小休被為入、門外江六郎罷出候居、御小性組披露之

一右付六郎江御金百足被下之 無間茂御立

一鍋懸駅御本陣菊池助之丞所江為 御小休被為入

和泉始江下之如例餅被

一右付助之丞江御金百足被下之

一はな〈国分原ノ町茶屋房吉娘〉去年十一月頃御国許出立伊勢参宮仕候处、此度帰国於途中追撤二会へ難義之由相達御聴候付、御金三步被下之

濟而御立

一越堀駅江大関能登守様多御使者渡辺文太夫御旅中御見廻被仰進、御近習之者披露御駕籠被為立御直答被 仰進之、右御使者江綿二把被下之

一柏臺富士見江

御上り御駕籠之俣二而被遊 御小休

一右付覺之助〈富士見茶屋〉鳥目二十疋被下之、無間茂御立

一芦野駅江芦野鯛之助殿方以御使者大垣八郎太夫御旅中御見舞被仰進、御近習之者披露〈御駕籠被為立〉御直答被仰進之、右御使者江御金二百疋被下之

一九時頃同所

御小休御本陣曰井孝三郎所江御着

一御駕籠入御弁当被召上之

一右付孝三郎江 御昼御同様被為入候付、御金二百疋被下之、
濟而九半時頃御立

一寄居村茶屋境屋兼右衛門所江為 御小休被為入

一右付兼右衛門江御金百疋被下之

無間茂御立

一境明神〈奥州寺社〉被遊 御参詣〈御羽織御野袴〉

御先立若林修理〈御小性組番頭〉御刀御供之御近習

長床前江豐神寺〈別当〉罷出、修理披露御会釈有之

御最花百疋御献納、持参役江戸番馬上

御神餅被遊

一豐神寺御守札献上修理披露御金百疋被下之

濟而御立 御直々同所茶屋石井七兵衛所江為 御小休被為入

一七兵衛餅一箱・鶏卵一箱献上、修理披露之

一七兵衛献上之餅被召上之

御相伴小梁川和泉〈御奉行〉亘理伯耆〈若老〉

一御近習始御右筆迄於

御前餅頂戴被 仰付之

一御目付江戸番組頭江右同断頂戴被 仰付之

一江戸番馬上定御供御徒目付御徒組江餅椽之上置之、

一包ツ、頂戴之

一御於元足輕始又者等迄於茶屋前被下之

一石井七兵衛江被為 入献上物茂仕候付、御金一両被下之

濟而 御立

一七半時頃白川駅

御寓御本陣芳賀源左衛門所江御着

一勁松院様方御旅中為御見廻、味噌漬・御肴一桶〈御目録斗〉

以御飛脚被進之

一右付御前様方

御直筆焼鮎一箱・茄子一籠〈何茂前同〉被進之

一右付延寿院様方以御直筆御肴一折〈前同〉

勁松院様方之以御飛脚被進之

一右付於侑殿方為御伺御機嫌粕漬鮑一桶〈前同〉以御口上書被指上之

一 小梁川和泉罷出御道中中ノ目付御機嫌伺以御小性頭申上之
一 右付亘理伯耆罷出鱒并薯蕷一台献上之

一 右付御近習之輩并表詰所以上之輩申上之

一 右付奥表御小性申上之

一 天寿院殿・於龜久・於智恵御旅中御機嫌伺以文被申上之

一 右付大町因幡〔御取次御奉行〕御国許若年寄・出入司以書狀申上之

一 右付古内左近介〔若年寄江戸詰〕同断申上之

一 大町因幡・伊木揆一郎繼母病氣〔死〕付御意ニ成下候御礼忌明付以書狀申上之、右何茂御小性頭披露之

一 大槻敬五郎〔定小使御菓込御鉄炮御相手〕、清水道春〔御茶道与頭何茂御小性組並〕、御右筆御茶道御同朋〔何茂非番江共〕御有合付寄合御菓子一箱被下旨於御次御小性頭申渡之

一 右付御武頭三人江寄合餅可被下旨於御々切前、右同人申渡之

一 御前様江当駅

御寓江被進物為御答礼椎茸二鉢・鯉節十五〔何茂御目録斗〕被進、御老女江御物置々役以文申遣之〔但御自筆御書を以可被進候処御旅中御混雜に付而也〕

一 御前様江以御自筆御書はり赤五十串〔前同〕被進之

一 天性院様江御自筆御書を以土佐鯉節十五・干瓢一台〔前同〕被進之、右御前様方之御飛脚戻幸便付被進、御小性頭方申登之

一 勁松院様江当駅

御寓江以御飛脚被進物為御答礼椎茸一鉢鉢・腹赤五十串〔何茂前同〕被指上旨奥老江御小性頭以手紙申遣之

一 勁松院様江以御自筆御書若さき一鉢〔前同〕被指上之

一 延寿院様江土佐鯉節十五・干瓢一台〔何茂前同〕被進旨御老女江御物置々役文を以申遣之〔但御自筆御書を以可被進候処御旅中御混雜付而也〕

一 於侑殿江当駅

御寓江被指上物有之候付土佐鯉節十〔前同〕被遣旨御附人江御小性頭以奉書申遣之、右何茂勁松院様方之御飛脚戻幸便付被指上被進被遣御小性頭方申下之

廿四日

一 於白川駅日出前御膳被召上之

一 日出過御立〔御羽織御野袴〕

一 泉崎村之内岩崎渡辺源之助所江為 御小休被為入

一 右付源之助被御金百疋被下之、無間茂御立

一 石川清水茶屋古川屋良藏所江為 御小休被為入

和泉始江如例餅被下之

一右付良藏江御金百足被下之、無間茂御立

一白川領鏡沼村郷士常松次郎太郎所江為 御小休被為入

一次郎太郎保命酒一樽并筆献上、御小性頭披露之

一次郎太郎江被為 入献上物茂仕候付、御金二百足被下之
済而御立

一九時頃須賀川

御小休御本陣藤井半右衛門所江

御着

一御駕籠入御弁当被召上之

一半右衛門御菓子一箱献上、御小性頭披露之

一右付半右衛門江 御昼御同様被為入、献上物茂仕候付御金
三百足被下之

一済而九半時頃 御立

一笹川駄茶屋松葉屋忠藏所江為

御小休被為入

一右付忠藏江御金百足被下之、無間茂御立

一七時頃郡山駅

御寓御本陣今泉久右衛門所江

御着

一小梁川和泉江御有合付保命酒一樽被下旨御小性頭申談、右
御礼以同人申上之

一右付赤坂純左衛門〈御物置^{ベリ}役〉佐藤寛之丞筆被下旨

右同人申渡、右御礼於御次申上之

廿五日

一於郡山駅日出前御膳被召上之

一日出過 御立〈御羽織御野袴〉

一於安積山御駕籠之俣ニ而御行列被遊 御覽之

和泉始御右筆迄 御手自餅被下之

一御目付・江戸番組頭・江戸番馬上・定御供御徒組江同断被
下、其外輕キ者迄御小性組を以被下之

一山本岩治〈日和田駄問屋〉鉢物一献上、御小性頭披露之

一右付岩治江掃除等仕御世話申上、且献上物茂仕候付、御金
三百足被下之

一済而 御立

一安積山伊東藤吉所江為

御小休被為 入

一右付藤吉江御金百足被下之

無間茂 御立

一本宮駄御本陣鳴原与惣左衛門所江為 御小休被為 入

一花家庭遊〈与惣左衛門父〉餅一重御花献上、御小性頭披露
之

一右付庭遊江御金三百足被下之

- 一 与惣左衛門江被為 入候付、同百疋被下之
- 一 御立之刻花家庭遊
- 一 御目通二 仰付以御目付
- 一 御意被成下之、畢而御立
- 一 大檀手前二而六郷筑前守殿二御行逢御会釈有之
- 一 同所江筑前守殿方以御使者宮川八助
- 一 御旅中御見廻被仰進、御近習出会御返答相斗申談候上披露之
- 一 右付筑前守殿以御使者〔江戸番馬上〕御挨拶御見廻旁被仰進之
- 一 大檀茶屋松屋長十郎所江為
- 一 御小休被為 入
- 一 右付長十郎江御金百疋被下之、無間茂 御立
- 一 八時頃八丁目駅
- 一 御小休御本陣桜内新兵衛所江 御着
- 一 御駕籠入御弁当被召上之
- 一 右付新兵衛江 御昼御同様被為入候付御金二百疋被下之
- 一 濟而、無間茂 御立
- 一 根子町矢吹周録所江為 御小休被為 入
- 一 右付周録江御金百疋被下之、無間茂 御立
- 一 於伏拝坂松原御駕籠之俣二而被遊 御小休
- 一 渡辺留吉〔同所茶屋〕御場所掃除仕迄候付、御金二朱被下之、無間茂 御立
- 一 暮半時頃福嶋駅
- 一 御寓御本陣黒沢六郎兵衛所江 御着
- 一 御前様方御旅中為御見廻以 御直筆御文粕漬たいらき一桶〔前同〕以御飛脚被進之
- 一 右付 天性院様方以御直書御菓子一箱〔前同〕右御飛脚を以被進之
- 一 小梁川和泉〔御奉行〕御旅中為伺御機嫌、鰯二献上之
- 一 宝積寺〔乾徳院様御廟寺〕御旅中為伺御機嫌罷出、御菓子一箱献上、御金二百疋被下之〔嚴之御俟約中付御断相成候得共品々申出候付此度二限り御受用相成遣之〕
- 一 右何茂御小性頭披露之
- 一 御奉菓二人江御有合付寄合鰯二被下旨御小性頭申渡之
- 一 御前様江当駅
- 一 御寓江被進物為御答礼串柿二連・串貝一鉢〔何茂御目録斗〕右戻り御飛脚を以被進、御老女江御物置ノ役以奉文申遣之〔組頭御自筆御書可被進候処、御旅中御混雜に付而也〕、右御小性頭方申登之
- 一 廿六日
- 一 於福嶋駅曉七時過御膳被召上之

一 曉七半時之御供揃二而明六時頃御立〈御羽織御野袴〉

但、御道中御供揃日出過二被 仰出置候処、今日者本文
之通臨時被 仰出之

一 瀬上駄木下石見守殿方御使者山中三郎太夫を以御旅中御見
廻被仰進、御近習之者披露、御乗物被為立御直答被 仰進
之

右御使者江御金二百疋被下之

一同所駄内田八郎右衛門〈御用達〉所江為

御小休被為 入

一 右付八郎右衛門江御金百疋被下之

無間茂 御立

一 摺上川出水橋落候付被遊御船渡

一 桑折駄手前江平井利兵衛・平井太郎右衛門〈何茂福勝寺様
御廟守〉罷出居、御小性組披露、御金百疋ツ、被下、直々
御案内勤之

一 福勝寺様 御廟江

御参詣御供小梁川和泉・亘理伯耆・笠原内記〈御小性頭〉

御騎馬之輩・御近習医師・御駕籠廻り御廟前二而

御下乗

福勝寺様 御廟江以

思召被遊 御拝、御先立笠原内記、御刀御近習

御廟江銀子一枚御献納、持参役御供之御近習

濟而御廟手前二而利兵衛・太郎右衛門被為召 御意被成下、
御菓子被下之、元之所二而 御乗輿

一 桑折駄茶屋田村孫左衛門所江為

御小休被為入

和泉始如例餅被下之

一 右付孫左衛門江御金百疋被下之、濟而 御立

一 藤田駄脇本陣佐竹屋專治郎所江為 御小休被為入

一 御駕籠入御弁当被召上之

一 右付專治郎江御金百疋被下之、濟而 御立

一 光明寺村江忠藏〈光明寺村名主〉、徳三郎・勇助・味作・

次郎右衛門〈何茂組頭〉

光明寺様御廟江被遊 御参詣候付、罷出居御小性組披露、
御金二朱宛被下、直々御案内勤之

一 光明寺様御廟江

御参詣御供前同、御廟入口二而御下乗

光明寺様御廟江被遊 御参詣、御先立御刀前同

御廟江銀子一枚御献納、持参役御供之御近習

濟而 御立 御乗輿

福寿寺被為召

光明寺様御廟年来奉守

御満足ニ 思召旨

御意之段并猶又火難等を始念入候様ニ仰付、御菓子一臺被下之

一越河御境目ニ吉田龍佐〔御郡奉行〕罷出居、御近習之者披露

御意有之

間を置、但木土佐〔御宿老旧御奉行〕罷出居、御小性頭披露御乗物被為立

御意有之

間を置、片倉伊豆罷出居、若年寄披露 御意有之

一越河町入口江齊藤理左衛門〔片倉小十郎家老〕罷出、御近習之者披露之

一同所御番所前江齊藤正五郎〔御境横目〕罷出、御小性組披露之

一九半時頃越河御仮屋被為

御小休被為 入、御門前江兵吉〔御仮屋守〕罷出、御小性組披露之

一右付兵吉江御昼御同様被為入候付、鳥目五十疋被下之

一但木土佐罷出御機嫌伺以御小性頭申上之

一片倉伊豆罷出同断申上御小性頭披露之

一小梁川和泉・但木土佐江御有合付を以一ツ、被下旨御小性

頭申候、右御札以同人申上之、

右何茂御小性頭披露之

一片倉小十郎御用支付為伺御機嫌、倅伊豆を以そい二献上、和泉御小性頭を以披露之

一片倉小十郎妻・同伊豆妻・片倉三之助越河 御小休被遊

御着候付御機嫌伺以使者申上和泉以御近習披露之

濟而 八半時頃 御立

一越河出放江齊藤理左衛門罷出、御近習之者披露之

一鐙越手前方 御歩行無間茂御乗輿

一齊川町検断忠助所被為 御小休被為 入

一右付忠助江鳥目二十疋被下之

濟而 御立

一白石町入口江片倉伊豆罷出居、若年寄披露之 御意有之
間を置本沢平右衛門〔小十郎家老〕罷出居、御近習之者披露之

一七半時過白石御仮屋

御寓江 御着御門外江安兵衛〔御仮屋守〕罷出御小性組披露之

一右付安兵衛江御金百疋被下之

一片倉伊豆御旅中為伺御機嫌罷出、御小性頭披露之处被召出
御目見 御意有之、同人御取合申上之

一但木土佐罷出御機嫌伺以同人申上之

一片倉伊豆鱒一献上之

一片倉小十郎為伺御機嫌御餅菓子一箱以使者献上之

右何茂御小性頭披露之

一片倉伊豆所持之茶弁当二而御茶差上之

一伊豆献上之御茶上之

御相伴小梁川和泉、但木土佐、亘理伯耆、中村宗三郎〈御申次御近習〉松井長安

一和泉・伊豆江御脇之御下被下旨、御小性頭申渡之

一若林修理・笠原内記二御酒之御下被下旨、御物置締役申渡之

一和泉江御有合付鱈一被下旨、御小性頭申渡候

一右付亘理伯耆江同一被下旨旅宿江右同人手紙を以遣之

一左之通右付被下旨御小性頭申渡之、御近習之輩同御医師江寄合を以三ほら二被下之

一御物置より役御奉菓江寄合ほら五被下之

一御物置詰惣牀江寄合鮑二十、表御小性大槻敬五郎・清水道看寄合鰯二十被下之

廿七日

一片倉伊豆罷出、今朝之御機嫌伺申上、御小性頭披露之

一片倉小十郎〈御奉行〉同三之助〈伊豆悴御相手〉白石御仮

屋二て被遊

御発駕御機嫌伺何茂御用支付以使者申上、和泉以御近習披露之

一於白石御仮屋日出前御膳被召上之

一日出過御立〈御羽織御袴〉

一同所御門外江八十歳以上之者罷出、

御目通被 仰付、御郡奉行披露、御金百足ツ、被下之

一白石町出放片倉伊豆罷出居、亘理伯耆披露、御意有之、

同所間を置本沢平右衛門罷出居、御近習之者披露之

一宮町河部傳之助所江為

御小休被為入

和泉始江如例餅被下之

一右付傳之助江鳥目二十足被下之、無間茂 御立

一大河原町御仮屋入口江丹之助〈柴田郡南方大谷村仮肝入〉、てん〈同上妻〉、ふよ〈同上子二而名取郡岩沼町百姓源六妻〉、

健藏〈同上子二而大谷村百姓源太郎賀〉、大藏・丹藏・助六〈何

茂同上子〉、松太郎・竹太郎〈同上双子〉、権五郎〈同上子〉、

兵衛・傳之助〈何茂同上孫〉 罷出居、平日家内宜敷折揃居

候付、

御目通被 仰付、御郡奉行披露、丹之助江御金二百足被下

之

一四半時過大河原御飯屋江為

御小休被為入、御門外江忠七〔御飯屋守〕罷出居、御小性組披露之

一御前附御弁当被召上之

一右付忠七江御昼御同様被為入候付、鳥目五十疋被下之

一東右衛門〔柴田葉坂村百姓〕孟宗筆一臺献上、御小性頭披露之

一左之通御有合付被下旨御小性頭申渡之、亘理伯耆孟宗筆二被下之

一御右筆・御茶道御同朋江同三被下之

一片倉小十郎・同伊豆・小十郎妻・伊豆妻・片倉三之助、大河原 御小休二被遊 御着候付御機嫌伺以使者申上、和泉

以御近習披露之

濟而九時過 御立

一船廻知行境二柴田外記〔御一家〕罷出、中村宗三郎〔御申次御近習御小性頭御用支ニ付代り〕披露、御意有之

一槻木町丈助所江為

御小休被為入

一右付丈助江鳥目二十疋可被之、無間茂 御立

一岩沼知行境江古内左近助〔若年寄在江戸候付而也〕名代使

者岩渕大之進〔家老〕罷出、御近習之者披露之

一同所町入口江御近習之輩御小性御馬様被 仰付候付罷出居

一同所町頭江芝多対馬罷出居御小性頭披露、御乗物被為置御意有之

一間を置、瀬上美濃〔御一家若年寄〕罷出居右同人披露、御意有之

一同所間を置、伊達筑前殿被罷出、対馬披露、御下乗御意有之、同人御取合申上 御乗輿

一八時過岩沼御飯屋

御寓江御着、御門外江源三郎〔御飯屋守〕罷出、御小性組披露之

一右付源三郎江御金百疋被下之

一勁松院様方御使者大越定八〔御廣敷番頭〕被召出、若年寄披露、岩沼

御寓江被遊 御着候付為御見舞御菓子一箱〔御目錄斗且前々水干根魚被進來候処御日柄付御品替〕被進、御口上被為聞

御直答被 仰付之

一伊達筑前殿被罷出御機嫌伺御小性頭を以被申上候処、御休所江被相通御目見被 仰付退出被仕

一芝多對馬罷出御機嫌伺以右同人申上、同所江被召出

御目見被 仰付之

一古内弘見〈左近介父隱居〉為伺御機嫌罷出、梨一鉢献上御

小性頭披露之處、同所江被召出 御目見被

仰付、同人御取合申上退出

一小梁川和泉〈御奉行〉、但木土佐

御寓二御着付御機嫌伺以御小性頭申上之

一右付若年寄始、御近習之輩・同御医師罷出申上之

一大立目宮内・片平勝三郎・片倉三之助・森田柰右衛門・加

藤十三郎・岩渕加兵衛、何茂御馬樣く二而罷越候付御機嫌

伺罷出申上之

一吉田龍佐〈御郡奉行〉御供之御目付・江戸番組頭・御武頭

御寓江

御着付御機嫌伺御切前江罷出申上之

一右付竹駒寺御守札一通并筆二献上、御小性頭披露之

一芝多對馬御酒之御外被下旨御小性頭申談、右御礼以同人申

上之

一古内弘見江於御次御茶御菓子被下旨御小性頭申渡、右御礼

於同所申上、同人披露之

一延寿院樣方以御使者相原大助〈御道具役〉御寓江御着付御

見廻被仰進之

一右付於侑殿方以御使者渋谷嘉右衛門〈伊達安房殿家来〉御

機嫌御伺被仰上之

一右付高泉筑後〈御奉行留主居〉御機嫌伺以書狀申上之

右何茂和泉以御小性頭披露之

廿八日

一今日竹駒明神江被遊

御參詣候付、御供揃曉七時之被 仰出之

一岩沼御飯屋二おゐて曉七時前御膳被召上之

一於龜久岩沼 御寓江被遊

御着候付為伺御機嫌御肴一折代百疋以使者献上之

一伊達筑前殿当所

御發駕付、今朝之御機嫌伺以使者被申上之

一右付古内左近介〈若年寄〉在江戸付以名代使者〈家老〉申

上之

右何茂御小性頭披露之

一古内左近介岩沼

御寓江被遊 御着候付為伺御機嫌御肴一折在江戸付以名代

使者〈家老〉献上仕候段、和泉以御小性頭披露之

一曉七時之御供揃二而明六時過岩沼御飯屋 御立〈御羽織野

袴〉

一於同所御椽通

延寿院様御使者相原大助

御通之、御目見、御近習之者披露之

一 於同所御玄關御門外於作殿御使者洪谷嘉右衛門〔安房殿家老〕御通之

御目見、右同人披露之〔於御椽通可被 仰付候処御間狭付而也〕

一 竹駒明神江

御参詣〔御羽織御野袴〕石之鳥居前二而

御下乗、御先立笠原内記、御刀御近習

長床前江竹駒寺罷出、内記披露御会釈有之、御最花二百疋御献納、持参役江戸番馬上、外二造酒錫二御最花百疋御献納、持参役御近習

於拝殿 御拝

御幣御頂戴、御右之方江御着座、神酒御頂戴御土器内記江被相渡之、竹駒寺前之通罷出

御意有之、済而 御乗輿

一 岩沼町出放方御馬被為召

一同所江玉虫恒太郎・狭川新五右衛門為伺御機嫌罷出居候処被為召 御意被成下之

一同所方増田町北入口迄之間於所々八十歳已上之者段々 御目見江罷出居、御郡奉行披露、御金百疋ツ、被下之

一 知行境江古内左近介在江戸付名代使者岩渕大之進罷出、居

御近習之者披露之

一 増田町檢断歛之助所江為

御小休被為 入

和泉始御近習之輩御小性組方御徒組迄以御近習餅被下之〔其外江も被下之〕

一 右付歛之助江鳥目二十疋被下之、済而 御立

一 増田中田之間江宮内・土佐始罷出居、外略之

一名取川南之方江但木主馬〔御宿老〕罷出居、御小性頭披露、御乗物被為置御意有之

一 長町入口江御関札打役人罷出居、右同人披露之

一 五軒茶屋長右衛門所江為

御小休被為入

一 御駕籠入御弁当被召上之

一成田武〔御旗元足輕頭御近習〕中田川并仙台川二而為漁候大かい献上、御小性頭披露之

一 右付長右衛門江鳥目二十疋被下之

一 左之通御有合付被遣被下旨御小性頭申渡之、

石川駿河殿・伊達安房殿・伊達安芸殿・伊達右近殿・伊達弾正殿・伊達主殿殿・三沢下総殿・石川主馬殿江大かい二ツ、被遣、右御礼以て御小性頭被申上之

一 小梁川和泉・亘理伯耆江同二ツ、被下之、右御礼同断申上之、濟而 御立

一 河原町外江吉田龍佐〈御郡奉行〉罷出居、御供之御近習之者披露

御意有之

一 同所間を置、佐々木兵之進〈同町奉行〉罷出居、右同人披露 御意有之

一 九二寸通 御着城

Ⅲ 山元町大條家文書目録

箱	番号	枝1	枝2	枝3	枝4	表題（内容）	日付	差出人	受取人	形態	状態	点数	備考
1	1					覚（亙理郡坂本および坂本大膳太夫殿由緒につき）	貞享元年十一月八日			冊		1	
1	2	1				（こより）	（近世・年月日未詳）			状		1	1-2-1 ～ 1-2-4-10-2-4 までこよりにて一括
1	2	2	1			（願書案、分限不相応之上納ニ而少分之御用捨、御百姓相続仕るべく候につき）	（近世・年月日未詳）			状		1	1-2-2-1 ～ 1-2-2-4-17 包紙にてにて一括、包紙「御要害御書上入・五十一」として再利用
1	2	2	2	1		（帯封、御要害御書上）	（近世・年月日未詳）			状		1	1-2-2-2-1 ～ 1-2-2-2-12 まで帯封にて一括
1	2	2	2	2	2	（書状、宝暦三年之要害屋敷書上御写成し下され候、附札には足軽屋敷四軒大條権左衛門殿へ相逕候とあるにつき）	（近世・年月日未詳） 七月廿六日	谷津六郎兵衛	舟十兵衛様	状		1	
1	2	2	2	2	3	（書状写、寛保年中御書出をもって坂元本郷屋敷軒敷書上、大條監物名代大條友之進より御勘定奉行衆へ差上候につき）	宝暦三年十一月廿一日	伊藤十郎兵衛	邊見八十右衛門様	状		1	1-2-2-2-12 と同じ文面
1	2	2	2	2	4	（書状、此度御要害所御家中屋敷軒敷等仰せ申され候につき）	（近世・年月日未詳） 七月十八日	舟山十兵衛	谷津六郎兵衛様	状		1	
1	2	2	2	2	5	（書状、宝暦三年ニハ昨日享之通につき）	（近世・年月日未詳） 七月廿六日	十兵衛	六郎兵衛様	状		1	
1	2	2	2	2	6	（覚、八十九軒ニ成ル、四軒譲渡しにつき）	（近世・年月日未詳）			状		1	
1	2	2	2	2	7	（覚、坂元本郷要害・家中屋敷書上）	宝暦三年十一月	大條監物名代・大條友之進	御勘定奉行衆	状		1	
1	2	2	2	2	8	（覚、要害屋敷より御城迄道法并家中屋敷・寺屋敷軒敷書上申来につき）	宝暦三年十一月	谷津九右衛門、同役中		状		1	1-2-2-2-11 と同じ文面
1	2	2	2	2	9	（覚、御要害所御家中屋敷等之御書上のうち侍屋敷四軒は大條権左衛門殿へ逕られ候につき）	（近世・年月日未詳） 八月十日	谷津六郎兵衛	亀川助兵衛様、御同役様中	状		1	
1	2	2	2	2	10	（書状、要害屋敷之義、宝暦三年書上御写内々御頼み申し上げたく候につき）	（近世・年月日未詳） 七月廿五日	下ニ・舟十兵衛	上・谷津六郎兵衛様	状		1	
1	2	2	2	2	11	（覚、要害屋敷より御城迄道法并家中屋敷寺屋敷軒敷書上、大内小左衛門殿より申来候につき）	宝暦三年十一月	谷津九右衛門、同役中		状		1	1-2-2-2-8 と同じ文面
1	2	2	2	2	12	（書状、御前江相出し置候御帳写之通御書出成されず、坂元本郷屋敷軒敷書上、大條監物名代大條友之進より御勘定奉行衆へ差上候につき）	宝暦三年十一月廿一日	伊藤十郎兵衛	邊見八十右衛門様	状		1	1-2-2-2-3 と同じ文面
1	2	2	2	3	1	（下知状、明和貳年日光御名代の節、元金三拾切・此利百切御借上、此度御普請金五拾切相添上金願上寄特のため永々無年貢成し下され候につき）	天明貳年寅ノ・十月	惣右衛門、問役中	地肝入・太惣右衛門殿	状		1	1-2-2-3-1 ～ 1-2-2-3-4 まで巻き込み一括
1	2	2	2	3	2	（知行宛行状、田代九拾三文につき）	天明三年八月	（印）	岡村・太左衛門	状		1	
1	2	2	2	3	3	（達書、上金神妙のため持高尙貴貳百文永々年具＜マ＞指免につき）	天明貳年寅ノ・十月	（印）	中濱・与兵衛	状		1	
1	2	2	2	3	4	（宛行状、田代貳百文につき）	天明貳年・七月	（印）	阿部卯八	状		1	
1	2	2	2	4	1	（和歌書上、日にそいてたてる雲のなかりせむ）	嘉永六年正月			状		1	包紙として再利用、1-2-2-4-1 ～ 1-2-2-4-17 包紙にて一括
1	2	2	2	4	2	（覚、月島對馬殿ハ五ツ時罷越御位牌御安置につき）	天保十三年七月廿日			状		1	
1	2	2	2	4	3	（覚、ハツ時頃御寺ニ而ハ役僧案内、略図につき）	（天保13年7月）			状		1	
1	2	2	2	4	4	（覚、法要勤役、略図につき）	（天保13年7月19日）			状		1	
1	2	2	2	4	5	（覚、十九日仙台屋敷御小休、利符を経て園城寺、松島へ到着につき）	（近世・年月日未詳）			状		1	

箱	番号	枝1	枝2	枝3	枝4	表題 (内容)	日付	差出人	受取人	形態	状態	点数	備考
1	2	2	4	6		(略図、文政十一年八月・天保十三年僧・御役人共揃の席次につき)	(近世・年月日未詳)			状		1	
1	2	2	4	7		(略図、文政十一年八月対馬殿勤候節図・文略につき)	(近世・年月日未詳)			状		1	
1	2	2	4	8		(覚、御鷹匠頭仮役・加藤奎之丞ほか8名の役職・氏名書上)	(近世・年未詳) 正月十一日			状		1	
1	2	2	4	9		正月十一日御用召 (御徒小性頭番頭格・氏家秀之進ほか6名の役職・氏名書上)	(近世・年未詳・正月) 十二日			状		1	
1	2	2	4	10		(覚、松前へ蒼野玄水ほか医師7名、および氏家秀之進蝦夷地警衛勤番御人数御指渡につき)	(近世・年月日未詳)			状		1	
1	2	2	4	11		(覚、水戸家より申来候、医師・奥番頭など役職・人数の写につき、伊達慶邦継室孝子の輿入関係カ)	(安政3年) 二月廿八日			状	破損あり	1	
1	2	2	4	12		(覚、出入司・油田重三郎ほか12名の役職・氏名書上)	安政二ノ十一月廿六日			状		1	
1	2	2	4	13		(覚、若老・大番頭兼役・瀬上美濃ほか3名の役職・氏名書上)	安政二ノ六月十五日			状		1	
1	2	2	4	14		(覚、近衛様諸大夫・廣幡様諸大夫・御附女中人数書上)	(近世・年月日未詳)			状		1	
1	2	2	4	15		(覚、六月十一日議定無く、および論語・大学など御稽古書上)	(近世・年月日未詳)			状		1	
1	2	2	4	16		水戸老公より卯十二月御屋形江御書翰 (写、愚娘御縁約之義委曲承知致候、無用之費を省富国強兵攘夷之備厚くにつき)	(安政2年カ) 極月初七夜	(徳川斉昭)	(伊達六郎殿ほか2名)	状		1	
1	2	2	4	17		(覚、延享三年五月御国御用などにつき)	(延享3年)			状		1	
1	2	3	1			(包紙)	(近世・年月日未詳)			状		1	1-2-3-1 ~ 1-2-3-5 包紙にて一括
1	2	3	2			(覚、宝暦六年忠山様より天保十二年龍山様御遺領相続年月日につき)	(近世・年月日未詳)			状		1	
1	2	3	3			(覚、斉邦君生没・続柄書上)	(近世・年月日未詳)			状		1	
1	2	3	4			(覚、十一月朔日御曹司様御登城につき)	(近世・年月日未詳)			状		1	
1	2	3	5			(覚、元禄十六年八月青山様御隠居・獅山様御家督相続などにつき)	(近世・年月日未詳)			状		1	
1	2	4	1			(包紙、龍山公御位牌瑞巖寺へ御安置ニ関する件)	(近世・年月日未詳)			状		1	1-2-4-1 ~ 1-2-4-10-2-4 包紙にて一括
1	2	4	2	1		(包紙、巳ノ十一月廿七日夜・午ノ二月廿一日取返ス、公儀略年扣勇三郎借用帰ル)	(近世・年月日未詳)			状		1	1-2-4-2-1 ~ 1-2-4-2-3 包紙にて一括
1	2	4	2	2		(名札、大條監物)	(近世・年月日未詳)			冊		1	7枚 (同じ名札) を仮綴
1	2	4	2	3		(覚、徳川家康公より家祥<家定>公まで歴代将軍略歴表)	(近世・年月日未詳)			状		1	
1	2	4	3			(覚、安政三年五月廿三日御役替につき)	(安政3年5月23日)			状		1	
1	2	4	4			(覚、傳役・用達・医師など役職・氏名・扶持書上)	(近世・年月日未詳)			冊		1	
1	2	4	5			(達書、来ル十九日御位牌御下、翌日御安置につき)	(近世・年未詳) 七月	芝多対馬	大條監物様	状	破損あり	1	
1	2	4	6			(書状、来ル廿日龍山様御位牌松嶋瑞巖寺へ御安置のため御名代仰せ付けられ候につき)	(近世・年未詳) 七月十日	芝多対馬常照 (花押)	大條監物殿	状		1	
1	2	4	7			(覚、来ル廿日龍山様御位牌松嶋瑞巖寺へ御安置のため同十九日御作事方会所より御召出につき)	(近世・年未詳・7月)			状		1	

箱	番号	枝1	枝2	枝3	枝4	表題（内容）	日付	差出人	受取人	形態	状態	点数	備考
1	2	4	8			(覚、三月廿八日・四月九日八代姫様御附人書上、水戸家より申来り候間写取申候につき)	(安政3年)二月廿八日			状		1	八代姫＝伊達慶邦継室(徳川斉昭九女)
1	2	4	9			龍山様御位牌御安置御次第	(近世・年未詳・7月)			冊	破損あり	1	
1	2	4	10	1		(包紙、安政三ノ五月手元硯箱)	(近世・年月日未詳)			状	破損あり	1	1-2-4-10-1 ～ 1-2-4-10-2-4 包紙にて一括
1	2	4	10	2	1	(包紙、御直覧)	(近世・年月日未詳)	大友松五郎	御新宅様	状		1	裏面に「のし・上・若松屋佐兵衛」とあり
1	2	4	10	2	2	御家中一統文武之藝道被相励候旨無之御制導ニ相成候(達書)	(近世・年月日未詳)			状		1	
1	2	4	10	2	3	(書状、当月十一日御覧之御尊書拝誦奉り、早速尾張町辺り鍋町へ金平糖買い求めなどにつき)	(近世・年未詳)卯月廿五日	(神田鍋丁三浦や) 大友松五郎	上	状		1	
1	2	4	10	2	4	写(去年御参府御供罷登り候者へ御番明ニ下金覚)	(近世・年月日未詳)			状	付紙1点共	1	
1	3	1				(包紙、御月番達藤又十郎様へ罷出御首尾仕候様也)	(近世・年月日未詳)			状		1	1-3-1 ～ 1-3-2 包紙にて一括
1	3	2				口上之覚(大條兵庫儀、品川様御代御役人以上之御役目、および万治二年五月までの勤仕承伝につき)	(近世・年未詳)四月十九日	同氏監物名代・大條酉之助	遠藤又七郎様(ほか2名)	状		1	
1	4					(達書、献金により御林千五百坪永々下し置かれ候につき)	文久三年十二月、文久四年四月廿六日	丹右衛門(印)(ほか3名)	菊地半四郎殿	冊		1	冒頭に「農商務省・明治卅七年十一月七日」の検閲印あり
1	5	1				(包紙、む、坂本永野町切替之御書出巻冊)	寛文六年霜月五日			状		1	1-5-1 ～ 1-5-2 包紙にて一括
1	5	2				大條監物知行所之内堤江倒永荒之所同村ニ而切替被仰申請度覚	寛文六年霜月五日、同六日、同七日	鹿又五郎右衛門(印)(花押)	春日十兵衛殿(ほか4名)	冊		1	
1	6	1				(包紙、ふ、大條源内殿江御知行高之内御分地御願書被指上候扣巻通)	貞享元年十月廿五日			状		1	1-6-1 ～ 1-6-3 包紙にて一括
1	6	2				(覚、右高之内式貫文貞享元年親類之者ニ分け取らせ申候につき)	(貞享元年)			状		1	
1	6	3				口上之覚(拙者知行高之内式貫文、親類同氏源内に分け下され願ひ奉り候につき)	貞享元年十月廿五日	大條監物	御奉行所	状		1	
1	7	1				(包紙、青山様御筆一通など)	延享四年三月廿五日			状		1	1-7-1 ～ 1-7-2 包紙にて一括
1	7	2				(覚、万治元年義山様御遠行之節品川様中途御下、不求様御供仕候につき)	(近世・年未詳)五月三日	大條土佐	柴田藏人様	状		1	
1	8	1				(包紙、貞享五年三月十四日監物様御直書巻通など)	元禄四年四月廿二日			状		1	1-8-1 ～ 1-8-2-2 包紙にて一括
1	8	2	1			(包紙、高瀬村増水笠野浜へも用申ニ付など)	元禄貳年七月廿九日			状		1	1-8-2-1 ～ 1-8-2-2 包紙にて一括
1	8	2	2			(覚、高瀬村洪水のため普請仰せ付けられ、明日より御人足相出申さるべく候につき)	元禄貳年七月廿九日	鈴木藤左衛門(印)	笠野浜小肝入・庄左衛門殿	状		1	
1	9	1				(包紙、四十七番之内)	(近世・年月日未詳)	中村日向(ほか4名)	大條監物殿	状		1	1-9-1 ～ 1-9-4 包紙にて一括
1	9	2				御請之御条文(亙理郡坂本要害屋敷普請願につき)	(近世・年未詳)十月十日	大條監物	中村日向様(ほか4名)	状		1	
1	9	3				御請之御条文(亙理郡坂本要害屋敷二ノ門屋根朽損のため畳替願につき)	(近世・年未詳)十月十日	大條監物	中村日向様(ほか4名)	状		1	
1	9	4				亙理郡坂本要害屋敷普請願之儀絵図并覚書之通達披露候	(近世・年未詳)十月九日	布施和泉(花押)(ほか4名)	大條監物殿	状		1	
1	10	1				(包紙、御居館廻り御修覆之御伺書共三通入)	貞享五年			状	破損あり	1	1-10-1 ～ 1-10-4 包紙にて一括
1	10	2				奉覧候覚(案、貞享三年坂本要害屋敷本丸東之方土手修補、絵図へ書付につき)	貞享五年三月廿九日	大條監物		状		1	

箱	番号	枝1	枝2	枝3	枝4	表題 (内容)	日付	差出人	受取人	形態	状態	点数	備考
1	10	3				奉窺候覚 (案、私居所本丸東之方より南之方迄貳拾七間、芦垣に仕りたく候などにつき)	貞享五年三月廿四日	大條監物書判		状		1	
1	10	4				奉窺候覚 (坂本要害屋敷本丸東之方土手修補、絵図へ書付の通り柵貫に仕りたく候につき)	貞享五年五月廿九日	大條監物	柴田内蔵様 (ほか2名)	状		1	
1	11	1				(包紙、黒木与一<ママ>様など)	延宝二寅六月			状		1	1-11-1 ~ 1-11-5 包紙にて一括、1-17、1-33 と関連あり
1	11	2				(覚、黒木与市殿・天童内記殿、監物屋敷之内相別をもって地形替につき)	(延宝2年) 六月十三日	大條理之	富塚三右衛門様、早川圭助様	状		1	
1	11	3				(覚、天童内記様殿より挨拶を受け御勝手次第二成さるべき由申上候につき)	(延宝2年6月)	大條理之		状		1	
1	11	4				大條監物・黒木与一・天童内記屋敷之内以相別地形替之云々仕候覚	延宝二寅六月十一日、十三日	大條理之	早川圭助様	状		1	
1	11	5				(覚、坪数四拾六坪ほか南北・横書上)	(延宝2年) 六月九日	天童内記内・瀧口善右衛門 (印)	富た基左衛門殿	状		1	
1	12					御財用方御用覚手扣・其外御入料事覚帳	天保六年			冊		1	
1	13	1				(包紙、廿三・御居館御修体肺之義二付柴田但馬殿御奉書老通)	(近世・年未詳・8月27日)			状		1	1-13-1 ~ 1-13-2 包紙にて一括
1	13	2				(達書、坂本居所破損のため修復致され候につき)	(近世・年未詳) 八月廿七日	柴田但馬宗意 (花押)	大條監物殿	状		1	
1	14	1				(包紙、四十七番之内)	(近世・年未詳・10月9日)	中村日向 (ほか4名)	大條監物殿	状		1	1-14-1 ~ 1-14-2 包紙にて一括
1	14	2				覚 (亙理郡坂本要害屋敷所々破損のため修補勝手次第の達につき)	(近世・年未詳) 十月九日	布施和泉 (ほか4名)	大條監物殿	状		1	
1	15	1				(包紙、元禄六年十一月三日大肝入十右衛門死去仕候二付)	(元禄6年11月)			状		1	1-15-1 ~ 1-15-5 包紙にて一括
1	15	2				(書状、大肝煎佐藤十右衛門去月病死仕候、跡役二子共<ママ>十左衛門か、親十郎左衛門へ申し渡したく候につき)	(元禄6年) 霜月朔日	大河内四郎兵衛 (花押)	監物様、参人々御中	状		1	
1	15	3				(覚、坂本大肝煎之義、内々監物殿へ品々申上御相談につき)	(元禄6年) 十月廿一日	大四郎兵衛	里弥八郎様	状		1	
1	15	4				(覚、大肝煎之儀、十右衛門親申付候而も坂本御支え無き由につき)	(元禄6年) 十月廿二日	大四郎兵衛	里弥八郎様	状		1	
1	15	5				(覚、大肝煎佐藤十右衛門病死のため跡役二同人親十郎左衛門仰せ付けられ候につき)	(元禄6年) 十一月三日	大條監物	大河内四郎兵衛様	状		1	
1	16	1				(漢詩、一嶺寸過又一)	乙丑 (慶応元年) 秋日	東溟姓	守屋君	状		1	1-16-1 ~ 1-16-5 まで袋一括、東溟=伊藤東溟 (1827 ~ 66年) カ
1	16	2				(漢詩、題秋山行旅図)	(慶応元年カ)	東溟散人姓	守屋君	状		1	
1	16	3				(漢詩、秋冷徒過了)	(年月日未詳)	素養生		状		1	
1	16	4				(漢詩、吟略有約不相過)	(年月日未詳)	舞修萬 (印)、 萍洲修 (印)		状		1	
1	16	5				(漢詩、治極此多幸)	(年月日未詳)		蒲生君	状	付箋共	1	
1	17					(包紙、の、屋敷■内黒木与■天童内記殿地形替之■候様老通など)	延宝貳寅六月十日			状	破損甚大	1	1-11、1-33 と関連あり
1	18	1				(こより付紙、十三・大町将監様於御宅二旦那様平助様へ被仰渡事老通)	正徳五年十二月十一日			状		1	1-81-1 ~ 1-18-5 包紙にて一括
1	18	2				(包紙、十四・御名代被相除候御答)	(正徳6年正月カ)	柴田外記	大條多門様	状		1	
1	18	3				(包紙)	(正徳6年正月カ)	柴田外記	大條多門様	状		1	
1	18	4				(書状、多門拾七歳にて、願いの如く同氏西之助名代を除け下され、御一家御座敷仰せ付けられ、西之助は亡父監物知行高之内式拾九貫六百九拾老文分地につき)	(正徳6年) 正月三日	柴田外記 (花押)	大條多門様	状		1	

箱	番号	枝1	枝2	枝3	枝4	表題（内容）	日付	差出人	受取人	形態	状態	点数	備考
1	18	5				(覚、多門儀来年拾七歳で、願いの如く西之助名代相除けられ、御一家御座敷仰せ付けられ、西之助儀養父監物願之通、多門知行高之内式拾九貫六百九拾老文分地につき)	(正徳5年12月カ)		大條多門、大條西之助	状		1	
1	19	1				(包紙、松岡兵太郎様より真庭野場此方にて御自由被成御座候御指紙老通など)	正徳四年十月			状		1	1-19-1 ~ 1-19-13 包紙にて一括
1	19	2				(覚、当村御野場、多門様御請野場仰せ渡され承知仕候につき)	(正徳4年) 十月十四日	渡辺又右衛門、木村藤右衛門	亀ヶ川弥左衛門様 (ほか2名)	状		1	
1	19	3				(覚、真庭村鉄砲野場、此度坂元本郷要害地へ付けられ候につき)	(正徳4年) 十月廿三日	鈴木元右衛門、木村藤右衛門	亀ヶ川弥左衛門様、谷津源蔵様	状		1	
1	19	4				(覚、坂元本郷御知行所より真庭村御知行所へ土地続四、五ヶ所につき)	(正徳4年) 十月五日	諏訪部弥覚、沼倉助七郎	亀ヶ川弥左衛門様 (ほか2名)	状		1	
1	19	5				(書状、先達色々御町寧之御馳走共御礼につき)	(正徳5年カ) 四月十日	沼倉助七郎、山田弥三郎	亀ヶ川弥左衛門様、木村半右衛門様	状		1	
1	19	6				(覚、諸給人衆御知行所、所拝領之衆其村一村中合給人につき)	(正徳5年カ) 三月十五日	山田弥三郎、沼倉助七郎	鈴木儀兵衛殿、佐藤仲右衛門殿	状		1	
1	19	7				(覚、御野場之御書出先刻成され候につき)	(正徳5年カ) 三月廿八日	沼倉助七郎	亀ヶ川弥左衛門様	状		1	
1	19	8				(覚、諸給人知行所野場、宝永七年所拝領之衆へ合給人につき)	(正徳5年カ) 二月十九日、同廿日、同廿三日、三月朔日、三月三日	佐藤仲右衛門		状		1	
1	19	9				(覚、此度諸給人衆野場之義、坂元本郷・笠野濱・真庭村につき)	(正徳5年カ) 三月廿六日	山田弥三郎(印)、沼倉助七郎(印)	大條多門殿御家来・亀ヶ川弥左衛門殿(ほか2名)	状		1	
1	19	10				(断簡)	(正徳5年カ)	山田弥三郎	木村半右衛門様	状		1	
1	19	11				(覚、大條多門御知行真庭村、要害地坂元在所と御知行続のため鉄砲野場当年より多門殿ニ而御自由につき)	正徳四年九月廿二日、十月五日	諏訪部弥覚(印)、沼倉助七郎(印)	亀ヶ川弥左衛門殿 (ほか2名)	状		1	
1	19	12	1			(覚、享保拾四年大條権左衛門方へ足軽屋敷四軒譲渡につき)	(近世・年月日未詳)			状		1	
1	19	12	2			(覚、真庭村之野場、上新田と申所、多門殿と金子七郎右衛門入合につき)	(正徳5年カ) 四月十日	山田弥三郎(花押)、沼倉助七郎(花押)	亀ヶ川弥左衛門様、木村半右衛門様	状		1	
1	19	13				(覚、諸給人衆野場御書出につき)	(正徳5年カ) 三月廿八日	山田弥三郎、沼倉助七郎	亀ヶ川弥左衛門様、木村半右衛門様	状		1	
1	20	1				(覚、文化十三年五月入記中につき)	昭和十四年十月	宗康		状		1	1-20-1 ~ 1-20-4 まで袋一括
1	20	2				(覚、文化十三年五月入記につき)	昭和十四年十月	宗康		状		1	
1	20	3				(覚、文化十三年五月入記につき)	昭和十四年十月	宗康		状		1	
1	20	4				(断簡、禄高二閏スル旧記)	(昭和14年10月カ)			状		1	
1	21					(伊達家財政関係記録)	(近世・年月日未詳)			冊		1	
1	22	1				(達書、大條監物病死のため御知行高嫡子多門へ下し置かれ候につき)	宝永二酉十二月廿九日、宝永三年正月十七日	白根沢十藏安次(花押)、名村甚大夫長廉(花押)	大條多門殿	冊	包紙共	1	包紙上書「八・多門様御家督被仰付候御奉行衆より之御書出・宝永三年正月十七日」とあり
1	22	2				覚(騎士・具足着スル者など御陣御定書につき)	(近世・年月日未詳)			状	包紙共	1	包紙上書「御陣御定書老通」とあり
1	22	3	1			(願書、拙者痔病などのため先年より医師数人之療治相請、御用御免成し下されたく候、神文提出につき)	(近世・年月日未詳)	(大條土佐)		状	包紙共	1	1-22-3-1 ~ 1-22-3-3 包紙「願書調置候・うノ十月十三日・案文・大條理右衛門」にて一括
1	22	3	2			(願書案、拙者痔病などのため先年より医師数人之療治相請、御用御免成し下されたく候につき)	(近世・年月日未詳)	(大條土佐)		状		1	

箱	番号	枝1	枝2	枝3	枝4	表題 (内容)	日付	差出人	受取人	形態	状態	点数	備考
1	22	3	3			口上之覚 (大條土佐病氣のため療治・養生につき)	(近世・年末詳) 十一月	大條監物	中村日向様 (ほか3名)	状	包紙共	1	
1	23	1				御系図御判物御墨印御朱印御添目録入記	文化拾老年八月改			冊	付紙共	1	1-23-1 ~ 1-23-3 紐にて一括、付紙「朱黒印知行目録重要書類目録三通」あり
1	23	2				入記 (元和八年七月六日・老通など年代および文書点数書上)	文化十三年九月			冊		1	
1	23	3	1			(手習、十封不相見得など)	明治二十五年四月廿一日、昭和十四年十月廿三日	(大條) 宗亮、宗康		状		1	
1	23	3	2			覚 (御家老方格帳一冊など色々書付物5点書上)	(近世・年末詳) 二月十二日	亀川太夫		状	破損甚大	1	1-23-3-1 ~ 1-23-3-2 まで巻き込み一括
1	24					(覚、古田舎人寛政二年御奉行職仰せられ候ほか6名書上、および気仙金九千五百五十三切・東山米千三百九拾六石余、大番頭・脇番頭書上につき)	(近世・年月日未詳)			状		1	表裏に記載あり
1	25					(略図、礮・中浜之者共海境絵図)	寛永拾八年四月廿九日	中濱船頭・二右衛門 (印) (ほか3名)		状	袋共	1	4枚1点、袋上書「寛永拾八年礮中濱之者共海境絵図書上巻枚」とあり
1	26					於詰所可申渡事 (此度勝手向役仰せ付けられ候、病死のため御用捨成し下され候につき)	(宝暦13年)			状	包紙共	1	包紙上書「四十二・宝暦十三年御館詰之御門方西堀方障候ニ付御修履 公義江被相願候御奉書入江」とあり
1	27	1				覚 (亙理郡坂本大條多門要害屋敷普請願許可の達につき)	(宝永4年) 亥十一月十一日	布施和泉 (花押) (ほか3名)	大條西之助殿	状	包紙共	1	1-27-1 ~ 1-27-2 包紙「宝永四年十一月十一日」にて一括
1	27	2				覚 (亙理坂元大條多門要害屋鋪本丸詰之門ほか屋根破損・板朽損取替願、勝手次第の思召につき)	(宝永4年) 十一月十一日	布施和泉 (ほか3名)	大條西之助殿	状		1	
1	28	1				(達書、亙理郡坂本大條多門要害屋敷、詰之門より西之方土手修築願許可につき)	(近世・年末詳) 十一月十五日	布施和泉 (花押) (ほか5名)	大條西之助殿	状	付箋共	1	1-28-1 ~ 1-28-3 包紙「廿式」にて一括
1	28	2				亙理郡坂本大條多門要害屋敷普請奉願覚 (写)	知 (近世) ノ十月十七日	大條西之助御書判	鮎貝兵庫様 (ほか5名)	状	付箋共	1	
1	28	3				(覚、亙理郡坂本大條多門要害屋敷、詰之門より西之方土手修築願許可につき)	(近世・年末詳) 十一月十五日	布施和泉御書判 (ほか5名)	大條西之助殿	状		1	
1	29					知行目録 (都合三百貫文)	承應貳年閏六月十一日	真山刑部 (印) (花押)、山口内記 (印) (花押)	大條兵庫殿	冊	包紙共	1	包紙上書「承應貳年閏六月十一日・三百貫文御加増之御目録老冊・つ」とあり
1	30	1				邊見長五郎儀ニ付仰渡之御挨拶御案文左之通 (私家来邊見十兵衛弟長五郎、江戸にて仕立屋仕り、此度長五郎親類共へ預け置候につき)	(天保14年) 七月十二日	大條監物	津田民部様 (ほか2名)	状	包紙共	1	1-30-1 ~ 1-30-2 包紙「五・天保十四年」にて一括
1	30	2				(覚、御手前家来邊見十兵衛と申者之弟長五郎、松前伊豆守殿へ仰せ達しの上御引返しにつき)	(天保14年) 七月十日	布施和泉 (ほか2名)	大條監物殿	状		1	
1	31	1				両御蔵元方御相對御借借金此度御済替ニ可被成候段書上仕候様ニ御勘定所被仰渡書上仕候金高左之通	子 (宝暦6年) 十二月廿二日	升屋伊兵衛 (印)、薩山彦七 (印)	邊見三郎右衛門殿、犬飼左右太殿	冊			1-31-1 ~ 1-31-3 包紙「三十七・海保兩替所御済替書付両通」にて一括
1	31	2				(覚、元高四百八拾五両老歩・拾三匁五分之内、年々請取候残り高につき)	(宝暦6年12月)			状		1	2紙1点
1	31	3				大條監物様大文字屋方相對御借金高左申上候	子 (宝暦6年) 十二月廿四日	矢濱甚七 (印)	邊見三郎右衛門殿	状		1	
1	32	1				(覚、御居所普請之儀ハ別紙奉書をもって申達候につき)	(貞享2年) 六月十三日	柴田但馬	大條監物様	状	包紙2点共	1	1-32-1 ~ 1-32-2 包紙「四・貞享貳年六月惣御堀」にて一括
1	32	2				(達書、其方居所惣堀毎年草取らせ、その泥にて土手之少破繕願許可につき)	(貞享2年) 六月十三日	柴田但馬 (花押)	大條監物殿	状		1	

箱	番号	枝 1	枝 2	枝 3	枝 4	表題 (内容)	日付	差出人	受取人	形態	状態	点数	備考
1	33	1				(覚、監物殿・与市殿・内記殿御屋敷地形替につき)	(延宝2年) 六月十三日	富塚三郎兵衛	大修理兵衛様	状		1	1-33-1 ~ 1-33-3 まきこみ一括、1-11-1 ~ 5 と関連あり
1	33	2				(書状、監物殿・黒木与市殿・天童内記殿屋敷地形替之儀につき)	(延宝2年) 六月十一日	早川圭助	大修理兵衛様	状		1	
1	33	3				(覚、坪数百拾三坪半につき)	(延宝2年) 六月九日	黒木与市	永沼四兵衛様	状		1	
1	34					(知行高二百七拾貫百三文内訳書上帳)	文政六年四月	大槻利大夫(ほか2名)		冊		1	
1	35	1				御免御島屋場方控	文政七年九月	大條多門(ほか2名)		冊		1	
1	35	2				(覚、御奉行衆へ年々御免の雉子御島屋場の儀につき)	(文政7年) 閏八月廿二日			状		1	
1	36	1				(覚、高拾五貫六百廿七文御買新田起目、此御役請取候につき)	寛永十四年八月十三日	遠藤式部少輔(印)	大條兵庫殿	状	包紙共	1	1-36-1 ~ 1-36-10 包紙「に・寛永九年方高百五拾五貫七百八拾五文・御役被相済候御證文とも式通」にて一括
1	36	2				(覚、高拾五貫六百貳拾七文御買谷地起目御役済切替につき)	寛永拾陸年十月十七日	富塚内蔵頭(花押)(ほか2名)	大條兵庫殿	状		1	
1	36	3				(覚、高拾五貫六百仁<ママ>十七文、此八分一之御役金老分判七切ト京錢八百拾四文請取につき)	寛永十年極月十八日	岡部才兵衛(印)(花押)(ほか2名)	大條兵庫守<ママ>殿	状		1	
1	36	4				(覚、高百六拾五貫七百八十五文内拾五貫六百廿七文買新田、六割之極高御役御切替につき)	寛永貳十年霜月九日	富塚内蔵頭(印)	大條兵庫殿	状		1	
1	36	5				(覚、高百六拾五貫七百八十五文、此内拾五貫六百廿七文買新田、上納金請取につき)	寛永十七年四月十一日	富塚内蔵頭(印)	大條兵庫頭<ママ>殿	状		1	
1	36	6				(覚、老分判拾切ト京錢四百拾六文請取申候につき)	寛永拾三年九月七日	二関三左衛門(印)(花押)、西山助右衛門(印)	大條兵庫殿	状		1	
1	36	7				(覚、高百六拾五貫七百八十五文、此内拾五貫六百廿七文ハ買新田のため上納金請取につき)	寛永十八年極月十二日	原田甲斐守(印)	大條兵庫殿	状		1	
1	36	8				(覚、高百六拾五貫七百八十五文、此内拾五貫六百廿七文買新田のため上納金請取につき)	寛永十七年霜月十四日	原田甲斐守(印)	大條兵庫殿	状		1	
1	36	9				(覚、高拾五貫六百廿七文、此八分一当御役老分判九切ト京錢六百拾四文請取につき)	寛永拾五年十月廿四日	原田甲斐守(印)	大條兵庫殿	状		1	
1	36	10				(覚、高百六拾五貫七百八拾五文、此内拾五貫六百廿七文買新田のため上納金請取につき)	寛永十九年極月三日	原田甲斐守(印)	大條兵庫殿	状		1	
1	37	1				(略図、真庭村山林・田畑)	(近世・年月日未詳)			状	包紙共、	1	1-37-1 ~ 1-37-7 包紙「第二号證・大條監物殿」にて一括
1	37	2				(略図、真庭村山林・田畑)	(近世・年月日未詳)	真庭村・九郎兵衛(印)、地肝入・弥次右衛門(印)		状		1	
1	37	3				(略図、真庭村山林・田畑)	(近世・年月日未詳)	柴田九郎兵衛様御百性・七郎兵衛(印)、弥右衛門		状		1	
1	37	4				(覚、南北六拾六間・東西五拾四間略図、および貞享三年二月大肝入より所へ申来のため相改めにつき)	(貞享3年2月)			状		1	
1	37	5				(包紙、真庭村蔵山之絵図三枚)	(近世・年月日未詳)			状		1	もとは1-37-1 ~ 3 の包紙カ
1	37	6				(覚、去年江戸御登方へ金五両指上のため居久根続御林地面三百坪永々下し置かれ候につき)	(近世・年月日未詳)	山ノ内金治		状		1	冒頭に「農商務省・明治卅七年十一月二日」の検閲印あり

箱	番号	枝1	枝2	枝3	枝4	表題 (内容)	日付	差出人	受取人	形態	状態	点数	備考
1	37	7				(書状、御知行所御野手代指し上げられ御自由成され たき御願、昨日御家老衆より 内々許可につき)	(近世・年未詳) 九月八日	大河内四郎兵衛 (花押)	三郎左衛門様	状	破損あり	1	
1	38					(覚、我妻安房寺殿へ出入 申さず相馬之境出入一件につ き)	寛永廿年十月 十日	大條兵庫		状	こより 付紙共、 破損あり	1	
1	39					大條監物・黒木与市・天童 内記屋敷之内以相對地形替々 ニ被仕候覚	延宝貳寅六月 十三日	天童内記家来・ 瀧口善右衛門 (印)(花押)(ほか 2名)	富塚三郎兵衛 様、早川圭助 様	状	包紙共	1	
1	40	1				屋鋪之内黒木与市殿・天童 内記殿江地形替々ニ申候覚	延宝貳寅六月 十日			状		1	
1	40	2				(略図、天童・黒木・大條 屋敷替)	(延宝2年6月)			状		1	
1	41					(覚、同役衆柴田内蔵殿・ 佐々豊前殿・富田老岐殿・ 拙者四人御用申上候、大條 子共・おい養子につき)	貞享五辰三月 十四日	監物(花押)	亀ヶ川弥左衛 門殿(ほか2 名)	状	包紙共	1	包紙上書「貞享五年 三月十四日・宗道様御 直筆一通」とあり
1	42	1				(覚、大條兵庫知行所坂本 本郷・真庭村・笠野浜共ニ 足輕以下に鉄炮打たせ中間 敷候につき)	寛文元年霜月 十六日	大條兵庫内・ 亀川三郎兵衛	須藤正左衛門 殿、春日十兵 衛殿	状	包紙共	1	1-42-1～1-42-2 包紙「宇 田亙理御書付・寛文元 年・合式通」にて一括
1	42	2				(覚、坂本・新地・駒ヶ岳三ヶ 所鉄放くママ>打たせ中間 敷事につき)	(寛文元年) 拾 月四日	佐々若狭守判	桑折豊後殿・ 御宿所	状		1	
1	43					御家中士凡御知行并御藏米 直高共諸拝借金等済懸之分 当年可被召上候分大図調	天保十年九月	御勘定所		冊		1	
1	44	1				(覚、新地・坂本御村境先 年御検地之圖、大森より濱 方迄堤塚築上につき)	(寛永19年) 三月十三日	亀ヶ川弥左衛 門	志か六郎兵衛 様	状	包紙共	1	1-44-1～1-44-3 包紙「寛 永十九年新地と坂本境 塚書付・亙理へ之書状」 にて一括
1	44	2				(覚、新地・坂本御村境石 塚築添申したき由につき)	(寛永19年) 四月二日	弥左衛門	志か六郎兵衛 様	状		1	
1	44	3				坂本領と新地と野山境之事	寛永拾九年二 月六日	埴濱肝煎・藤 右衛門(ほか 5名)	伊木安右衛門 殿(ほか5名)	状		1	
1	45					【欠番】						1	
1	46	1	1			覚(廿二日朝四ツ時、中村 日向宅へ家老相出候様ニと 御触御座候につき)	元禄拾七年三 月廿二日	谷津九郎右衛 門、亀ヶ川弥 左衛門		状	包紙共	1	1-46-1-1～1-46-1-2 包 紙「六・従大屋形様三 福くママ>対御懸ケ物 御拝領被遊候」にて一 括、2紙1点
1	46	1	2			覚(三幅一対中達磨左右菊・ 尚伝筆、御隠居御祝儀とし て大屋形様下し置かれ候につ き)	(元禄17年3 月)		大條監物	状		1	2紙1点
1	46	2				(覚、又家中屋敷六軒(ほか 都合式百九拾三軒書上)	宝暦三年十一 月	大條監物名代・ 大條友之進・ 重判	御勘定奉行衆	状	付紙共	1	
1	47	1				(包紙、坂本御居館御普請 之儀被仰上候付而など)	貞享四年八月 九日	も		状		1	1-47-1～1-47-2-3 包紙 にて一括
1	47	2	1			(包紙)	(貞享4年8月 9日)	柴田内蔵(ほか 2名)	大條監物殿	状		1	1-47-2-1～1-47-2-3 包 紙にて一括
1	47	2	2			(返書、亙理郡坂本要害屋 敷堀、前々之如く毎年夏中 藁草取らせ泥払、其泥ニ而 土手小破繕仕りたき由につ き)	(貞享4年) 八 月九日	大條監物	柴田内蔵様(ほか 2名)	状		1	
1	47	2	3			(達書、亙理郡坂本要害屋 敷堀、前々之如く毎年夏中 藁草取らせ泥払、其泥ニ而 土手之小破繕、願書許可につ き)	貞享四年八月 九日	富田老岐(花 押)(ほか2名)	大條監物殿	状		1	
1	48	1				(包紙、め、御即位ニ付而 不求様江戸御安着被相勤御 状迄通など合八通)	(寛永20年)			状		1	1-48-1～1-48-10 包紙 にて一括
1	48	2				(覚、土井大炊殿(ほか15名 幕府要人氏名書上)	(寛永20年)			状		1	

箱	番号	枝1	枝2	枝3	枝4	表題 (内容)	日付	差出人	受取人	形態	状態	点数	備考
1	48	3				覚 (御供有・井伊掃部殿ほか11名幕府要人氏名書上)	(寛永20年)			状		1	
1	48	4				(覚、此度御即位付而陸奥守殿より御使として当地御越につき)	(寛永20年)十月廿七日	牧内匠頭 (花押)	大條兵庫殿御宿所	状		1	
1	48	5				覚 (江戸へ御登之時、殿様より御老中へ之御案文につき)	(寛永20年)霜月	大條兵庫	松田善右衛門様 (ほか2名)	冊		1	
1	48	6				(覚、此度御使者として御出成され候につき)	(寛永20年)霜月二日	久世九左衛門	兵庫様	状		1	
1	48	7				(覚、我等去廿八日上着申候につき)	(寛永20年)霜月三日	大條兵庫	津田近江様、古内主膳様	冊		1	
1	48	8				(覚、御進物、牧野内匠殿・松平和泉殿へ御状遣わされ候につき)	(寛永20年)			状		1	
1	48	9				(覚、土井大炊殿ほか7名へ進物につき)	(寛永20年)			状		1	
1	48	10				(覚、今度菅宮御即位之義、使者御樽献上目録之披露を遂げ候につき)	(寛永20年)十一月朔日	阿部対馬、阿部豊後	松平陸奥守殿	状		1	菅宮＝素鷲宮 (すがのみや)・後光明天皇カ
1	49	1				(包紙、廿壹・御居館御修履御伺書三通入)	元禄十四年			状		1	1-49-1～1-49-5 包紙にて一括
1	49	2				亙理郡坂元私要害屋敷普請奉願候覚	元禄十四年七月廿七日	大條監物宗道 (花押)	中村日向殿 (ほか4名)	状	付箋共	1	
1	49	3				(願書写、本丸廻り塀南の方長九間柱朽損大破仕候事など四ヶ所普請仕りたく候につき)	元禄十四年七月廿七日	大條監物	中村日向殿 (ほか4名)	状		1	
1	49	4				亙理郡坂元私要害屋敷普請奉願候覚 (御扣)	元禄十四年七月廿七日	大條監物宗道 (花押)	中村日向殿 (ほか4名)	状		1	
1	49	5				亙理郡坂元私要害屋敷普請奉願候覚 (1か条のみ)	(元禄14年7月27日)	(大條監物)		状	後欠	1	
1	50	1				(覚、貴様要害屋敷普請御伺、宍岐中のため名元相除けられ指越すべく候につき)	(近世・年未詳)九月八日	津田民部	大條監物様	状	包紙共	1	1-50-1～1-50-2 包紙「廿四・御居館御玄閣御修履御伺」にて一括
1	50	2				亙理郡坂元私要害屋敷普請願之儀絵図并覚書之通達披露候	(近世・年未詳)九月廿一日	遠山帯刀 (花押) (ほか3名)	大條監物殿	状		1	
1	51					(覚、亙理之内真庭村ニ新田式貫文、今度大條兵庫知行所ニ罷成申候、右之所ニ佐藤新次郎下中之者屋敷四軒足輕屋敷四軒御座候申請につき)	寛永廿叁年十月十五日、十六日、十八日	佐藤平助、佐藤玄蕃	馬淵隼人殿	状	包紙共	1	包紙上書「真庭村佐藤新次郎殿下中足輕上屋しき御拝領被成候御書付」とあり
1	52					覚 (亙理知行所之内、須賀通松林先年自分植立之由、御吟味之上石巻より相馬境迄濱通諸給人松林召し上げられ候につき)	亥 (近世) 三月十九日	黒沢要人 (ほか2名)	大條監物殿	状	包紙共	1	包紙上書「廿六ノ印・濱通須賀松被召上御領林被成候御書付忝通」とあり
1	53	1				(包紙、二・南境双方大肝入・村肝入罷出埒明申候など)	元禄五年十月十九日			状		1	1-53-1～1-53-4 包紙にて一括
1	53	2				(覚、重村様御筆二通など御書物箱より相出、仙表へ差立申候につき)	文化八年十一月朔日	田原八郎兵衛 (ほか2名)		状		1	
1	53	3				宇多福田村・埒木崎村ト亙理郡坂本本郷へ之御境目不埒之所有之付、此度宇多・亙理大肝入衆并双方御村之者罷出境埒明申覚	元禄五年八月廿五日	亙理大肝入・鈴木藤左衛門 (印)、宇多大肝入・佐藤十右衛門 (印)	右肝煎衆	状		1	
1	53	4				南御境不埒之所此度同役鈴木藤左衛門申合、福田村・埒木崎村・坂本本郷組頭肝入罷出首尾仕候覚	申 (元禄5年)ノ八月廿七日	大肝煎・佐藤十右衛門 (印)	谷津五助殿 (ほか3名)	状		1	
1	54					(包紙、き、山境相済候老通)	(近世・年月日未詳)			状	破損あり	1	
1	55	1				(包紙、不求様より御三代御勤功御書上被成候御扣老通など)	貞享四丁卯年三月十日			状		1	1-55-1～1-55-3-5 包紙にて一括
1	55	2				従不求三代勤功書上候扣	貞享四丁卯年三月十日	大條監物御重判	永井縫殿殿	冊		1	
1	55	3	1			(覚、於御座之間御直々若老御役目仰せ付けられ候につき)	貞享三年閏三月十五日			状		1	

箱	番号	枝1	枝2	枝3	枝4	表題（内容）	日付	差出人	受取人	形態	状態	点数	備考
1	55	3	2			(覚、大守様初め塩竈へ御参詣遊ばされ候節、監物御供相勤申候につき)	同年<マ>(近世)十一月十日			状		1	
1	55	3	3			(覚、改名監物と仰せ付けられ候につき)	天和四年二月廿六日			状		1	
1	55	3	4			(覚、三郎左衛門と改名仰せ付けられ候につき)	同年<マ>(近世)十二月廿二日			状		1	
1	55	3	5			(覚、徳松様御移徙遊ばされ候、公方様・御台様への御使者相勤申候につき)	同年<マ>(近世)十一月廿八日			状		1	
1	56	1				(包紙、や、里見孫八殿へ御知行高之内式貫文御分地成され候など取合三通)	天和武年正月十一日			状		1	1-56-1～1-56-4 包紙にて一括
1	56	2				大條監物知行高之内里見源右衛門へ分ケ渡ス覚	天和元年十一月七日	里見源右衛門重判、大條監物重判	足立半左衛門殿、村上安太夫殿	状		1	
1	56	3				公義江被指出候扣（大條利兵衛美弟同氏孫八儀、里見源右衛門智養子に成し下されたく双方親類共願出につき）	延寶九年九月廿七日	大條監物	柴田中務殿（ほか3名）	状		1	
1	56	4				(覚、里見源右衛門知行高式貫文へ大條監物知行高之内式貫文分け下され、取合四貫文之高一成し下され候につき)	天和元年十月十六日、十九日、廿六日	里見源右衛門(印)（花押）	亀川平助殿、清野圭助殿	冊		1	
1	57					相馬土坂本之境相立候事古人共申傳分	寛永四年五月三日	大條兵庫（花押）	石母田大膳亮殿（ほか3名）	状	包紙共、破損あり	1	包紙上書「老・不求様御家老衆へ被相出候覚書」とあり
1	58	1				(包紙、覚書・監物様へ御奉行職仰せ付けられ、大河内源大夫殿差し下され候など)	貞享四年三月十九日			状		1	1-58-1～1-58-2-3 包紙にて一括
1	58	2	1			(包紙)	(貞享4年3月19日)	柴田内蔵	大條監物殿	状		1	1-58-2-1～1-58-2-3 包紙にて一括
1	58	2	2			(達書、其方儀奉行職仰せ付けられ、大河内源大夫指し下され候につき)	(貞享4年)三月十九日	柴田内蔵（花押）	大條監物殿	状		1	
1	58	2	3			覚（御奉行職仰せ付けられ候、御札之儀は御小袖一重など進上につき）	(貞享4年)三月十九日			状		1	
1	59	1				(天保四・五年町方・郡村調達金書上帳)	(天保5年)			冊		1	
1	59	2				天保五年十月より同六年九月迄御年貢請納金御国常式不時御遣方調	(天保7年3月29日)			状		1	
1	60					高四百貫文御物成老紙	慶應式年寅ノ二月	阿部丹右衛門（ほか3名）		冊		1	
1	61					(漢詩、膝下勿々告別離)	(近世・年月日未詳)	源聚、蘭宝聚		状		1	
1	62					(漢詩、神仙境山水絶奇)	(近世・年月日未詳)	三峰		状		1	
1	63					(漢詩、衣剣半菫弥凍離)	(近世・年月日未詳)	以坂押学人(印)		状		1	
1	64					亙理郡坂本本郷之内大條三郎左衛門拝領林書立之覚	天和三年九月十六日	大條三郎左衛門内・木村平兵衛重判、同・亀川平助同	武田善兵衛殿	状	付箋共	1	端裏「真庭村臺山相除追而於丸森武田善兵衛殿へ相納申候」とあり
1	65					(覚、高瀬村御割所より内割仕、請取渡し仰せ付けられ候につき)	寛永仁十壹年五月廿日	安房守内・伊庭野内蔵丞(印)（花押）	兵庫殿御内・清野勘左衛門殿	状	包紙共	1	包紙上書「高瀬村之内、亙理・坂本分ケ地書付老まい・た」とあり
1	66	1				(包紙、け、不求様より御三代御勤功御書上被成候御扣老通)	天和三年八月			状		1	1-66-1～1-66-5 包紙にて一括
1	66	2				従不求三代勤功書上候扣	天和三年八月	大條三郎左衛門		冊		1	
1	66	3				(覚、貞享三年閏三月十五日監物召出、御前御直々若老御役目仰せ付けられ候などにつき)	元禄貳年六月二日	弥左衛門、九郎右衛門		状		1	
1	66	4				(覚、貞享三年閏三月十五日御座之間にて御直々若老役仰せ付けられ候につき)	(元禄2年6月2日)			状		1	

箱	番号	枝1	枝2	枝3	枝4	表題（内容）	日付	差出人	受取人	形態	状態	点数	備考
1	66	5				(覚、右ハ享保式年御勤功書并天和三年御勤功書式并詰合相成候につき)	(近世・年月日未詳)			状		1	
1	67	1				(包紙、加、朴木原出入二付而覚書二通・御状二通・合四通)	(寛永) 四年			状	破損あり	1	1-67-1 ～ 1-67-5 包紙にて一括
1	67	2				新地・坂本境目之出入二付御尋ニ御座候旨申上候 (案)	寛永四年十月十四日	後藤孫兵衛内・伊藤越中、黒沢図書		状		1	
1	67	3				(覚、新地・坂本山問答之義、安房守殿より御奉行所へ御申上につき)	(近世・年月日未詳)			状		1	
1	67	4				(書状、新地・坂本山問答之義、安房守殿より御奉行所へ御申上につき)	(近世・年未詳) 八月廿九日	大條兵庫 (花押)	遠藤式部少輔様	状		1	
1	67	5				(覚、福田山へ毎年申渡之者塩木きり申候につき)	寛永四年十月十日	大條兵庫内・邊見右馬允 (花押)、早坂主殿 (花押)	遠藤式部少輔様 (ほか2名)	状		1	
1	68					(覚、亶理郡之内高瀬村と笠野境之絵図老枚請取につき)	(寛永19年) 二月廿一日	柳生権右衛門 (花押)	桑原覚左衛門殿	状	包紙共	1	包紙上書「寛永拾九年高瀬塚本絵図・老枚・と」とあり
1	69	1				(包紙、京、南境江屋敷被相立候御願享老通など四通)	元禄五年			状		1	1-69-1 ～ 1-69-5 包紙にて一括
1	69	2				(覚、右之書替御本紙并御代官衆江之書付共ニ請取申候につき)	元禄五年六月廿七日	取次・大條清十郎名之印判		状		1	
1	69	3				(覚、拙者知行亶理郡坂本本郷南境沼沢より荒巻迄之内ニ而下中屋敷七軒御定之間数ニ而拝領につき)	元禄五年三月十一日	大條監物御書判計	大河内四郎兵衛殿	状		1	
1	69	4				御村書出之證文 (新屋敷十軒計も相立てられ候につき)	元禄四年十二月廿六日	おか村・小肝煎・太郎兵衛 (ほか10名)	谷津五介殿 (ほか3名)	状		1	
1	69	5				(覚、亶理郡坂本本郷南境洪沢より荒巻迄之内野原ニ而、大條監物へ下中新屋敷七軒下し置かれ候につき)	元禄五年六月廿三日、廿五日、廿六日	岩 茂 兵 衛 (印)	大河内四郎兵衛殿 (印)	冊		1	
1	70					大條兵庫知行所亶理坂本・同真庭村地尻之野谷地新田ニ兵庫申請所と被申分	承応三年三月十六日、廿二日、廿五日、同年四月十七日	佐藤平助 (印) (花押)	大條兵庫殿	冊	包紙共	1	包紙上書「御新田廿町新屋敷拾五間被仰受候御下書老通」とあり
1	71	1				(包紙、御下中御村拝借無御利足年譜仰渡書式通在り)	(元) 禄十四年巳八月廿四日			状	破損あり	1	1-71-1 ～ 1-71-3 包紙にて一括
1	71	2				御村方江申渡ス覚 (御下中之者共段々困窮拝借、御百姓共御年貢・夫喰拝借につき)	元 禄 拾 四 年 八 月 十 四 日、十六日	岡村・甚之允 (印) (ほか33名)		冊		1	
1	71	3				御下中之者共可申渡ス覚 (御家中前々より拝借方度之御用捨につき)	(元 禄 14 年) 八月十四日	田原八兵衛 (ほか2名)		状		1	
1	72					(覚、大條監物知行高之内式貫文、同氏源内ニ当時より分け下され新規ニ召し出され候につき)	貞享元年十一月廿七日、十二月五日、六日	村上 安 大 夫 (印) (花押)、足立半左衛門 (印) (花押)	大 條 監 物 殿、大條源内殿	冊	包紙共	1	包紙上書「御知行高之内式貫文、大條源内殿江分被遣候付而御制奉行衆より之書付老通」とあり
1	73	1				(覚、大條監物殿御知行通り坂元本郷・真庭村替地、野場役入札につき)	(明 和 7 年 12 月 24 日)			状	包紙共、後欠	1	1-73-1 ～ 1-73-3 包紙「五十・明和七年十二月廿五日・御野場定詰之義御代官千葉兵之進殿・入生田左衛門殿より老封」にて一括、もとは1-73-1・2 同 じ 文 書
1	73	2				(覚、御郡奉行より申来候間、御通達致候につき)	(明 和 7 年) 十二月廿四日	入生田左衛門、千葉兵之進	大條監物殿御内・犬飼徳左衛門様、御同役様中	状	前欠	1	もとは1-73-1・2 同 じ 文 書
1	73	3				(断簡、今日見出申卷)	(近世・年未詳) 十一月廿六日			状		1	
1	74					亶理郡坂元村・真庭村之内大條二郎左衛門拝領林書立之覚	天和三年九月十六日、十二月廿三日	大條三郎左衛門内・木村平兵衛重判、同・同・亀川平助・同	武田善兵衛殿	状		1	端裏「臺山書入申候最前ニ罷出候書付ニ御座候」などあり、冒頭に「農商務省・明治卅七年十一月二日」の検閲印あり

箱	番号	枝1	枝2	枝3	枝4	表題 (内容)	日付	差出人	受取人	形態	状態	点数	備考
1	75					(達書、桃生郡中津山御蔵入御鷹場三百三拾貫四百八拾九文、大條兵庫二下し置かれ候につき)	万治貳年九月十八日	周防 (印)	笹町七郎右衛門殿	状	包紙共	1	包紙上書「ゆ・万治二年中津山御鷹場より被下候付、周防殿より笹町七郎右衛門へ書付壺通」とあり
1	76					御礼金拝見候其方居所破損之所修復之儀致言上候	(貞享3年) 八月六日	柴田内蔵 (花押)	大條監物殿	状	包紙2点共	1	包紙1上書「御城嵐之節崩候付而御書請以御絵図被仰上候所、御奉書壺通」とあり
1	77	1				(絵図、坂本之本郷徳本寺)	寛永拾九年二月十五日	伊木安右衛門 (印)、馬淵隼人 (印)		状	包紙共	1	1-77-1 ~ 1-77-3 包紙「金蔵寺・徳本寺寺内御檢地被相除候絵図式杖・書付壺通・ち」にて一括
1	77	2				(絵図、坂本本郷金蔵寺)	寛永拾九年二月十五日	伊木安右衛門 (印)、馬淵隼人 (印)		状		1	
1	77	3				(覚、真言金蔵寺・禪宗徳本寺ハ大條監物自分之家ニ御座候につき)	寛文十二年二月廿八日	亀川弥左衛門	大竹久左衛門殿 (ほか2名)	状	包紙共	1	包紙上書「御村人数御しらべ之時・書付壺」とあり
1	78					(覚、大條兵庫知行高式百貫文書上)	(寛永20年)	(大條兵庫)		状	包紙共	1	包紙上書「御知行御覚書・不求様御自筆・わ」とあり
1	79	1				(書状、今朝日御前に於いて御加増頂戴仰せ付け候につき)	(寛保3年) 九月朔日	道頼 (花押)	谷津九郎右衛門殿 (ほか2名)	状	包紙2点共	1	1-79-1 ~ 1-79-3 包紙 (1)「二十七・於江戸表ニ御加増五拾貫文御拝領」にて一括
1	79	2				(達書、遠田郡新田北浦村ほか2か村合五拾貫文御加増御割此度相済、御郡方へ申遣候につき)	寛保三年十二月朔日	早坂弥八郎 (印)	大條監物殿	状	包紙共	1	包紙上書「御加増御割相済候御書付」とあり
1	79	3				(書状、後藤孫兵衛様より御指紙至来、今朝御屋形へ御出成され、殿様御前へ召し出され御直々御意を蒙りなされ候などにつき)	(寛保3年) 十月朔日	谷津平右衛門 (花押)	谷津九郎右衛門殿 (ほか2名)	冊		1	
1	80					覚 (常々御国許に於いては百五拾石以上馬上役たるべき由、今度之御條目へも相載せ候など三か条につき)	(宝暦8年) 六月五日			状	包紙共	1	包紙上書「宝暦八年七月十七日・御代替に付御條目貳通」とあり
1	81					御ひかい・覚 (義祖父大條左衛門宗綱より大條宗快家族書上)	延宝九年三月廿二日	大條監物 (宗快) 御書判斗	富塚長門殿、遠藤■■■殿	冊	包紙共、綴紐に付紙あり	1	包紙上書「御先祖御書上御扣式通・て」とあり
1	82					(達書、大條兵庫隠居仰せ付けられ知行高三百三拾貫五百四拾五文、同氏監物へ相違無く下し置かれ候につき)	寛文貳年四月十四日、十六日	柳生権右衛門 (印) (花押)、堀越甚兵衛 (印) (花押)	大條監物殿	状	包紙共	1	包紙上書「御黒印御下書老枝・ら」とあり
1	83					東根郷城請取申条目之事	元和八年戌十月六日	三宅権之助 (花押)、石井平太夫 (花押)	大枝<ママ>兵庫様、奥山大学様	状	包紙共	1	包紙上書「い・最上東根城請取證文老枝」とあり
1	84					(覚、大條監物隠居仰せ付けられ跡式知行高三百三拾貫六百九拾五文、同氏三郎左衛門二下し置かれ候につき)	天和貳戌三月廿一日、廿七日、廿九日	村上安大夫 (印) (花押)、足立半左衛門 (印) (花押)	大條三郎左衛門殿	冊	包紙共	1	包紙上書「御下書」とあり
1	85					(こより一括)	(年月日未詳)			状		1	
2	1					(家系図、伊達弾正少弼宗遠公三男大條孫三郎宗行より孫三郎道徳まで)	(年月日未詳)			状	卷子	1	
2	2					宮城丸略図	(年月日未詳)			状		1	
2	3					会津歎願書写	(慶応4年)	坂本屋敷		冊		1	
2	4					御申次手扣	(安政6年カ)	道徳方		冊		1	安政6年=道徳の申次役就任
2	5					風説抜書	寅 (慶応2年) 五月			冊		1	
2	6					公義年中御献上物調目録	文久壬戌 (2年) 晩秋初二日	山崎景憲編集、都下在番・大條藤道徳写 (印) (印)		冊		1	
2	7	1				仙臺藩下谷區郷友名簿	(近代・年月日未詳)	事務所・下谷金杉上町・常盤扇壽宅		状	印刷物	1	2-7-1 ~ 2-7-25 袋にて一括
2	7	2				(冊子、文字情報なし)	(年月日未詳)			冊	破損甚大	1	

箱	番号	枝 1	枝 2	枝 3	枝 4	表題 (内容)	日付	差出人	受取人	形態	状態	点数	備考
2	7	3				(草稿、新地村佐吉こと鐵道院瑞岸義祥居士につき)	大正八年	旧主・伊達宗亮書、男・宗康撰		状		1	罫紙、朱書あり、2-7-6と同文
2	7	4				正五位勲四等内山廬君墓誌(草稿)	昭和九年	伊達宗康撰		冊		1	罫紙、朱書あり
2	7	5				匣甲記文(草稿)	大正乙丑(14年) 春三月二日	宗康謹識		冊		1	罫紙、朱書あり
2	7	6				(草稿、新地邑佐吉につき)	大正八年十二月	旧主・伊達宗亮書、男・宗康撰		状		1	罫紙、2-7-3と同文
2	7	7				(草稿、有文事、功績につき)	大正甲子(13年) 秋	関天閣主長濤・伊達康識		冊		1	罫紙
2	7	8				記(旧仙台藩士一門から着座名簿につき)	(近代・年月日未詳)			冊		1	罫紙
2	7	9				田邊文宗君墓誌銘	大正十年九月	友人・伊達宗康誌		状		1	罫紙
2	7	10				(草稿、北米羅府日本人会へ招聘につき)	大正十四年			状		1	
2	7	11				(草稿、手対抗角舩競技会文雄上場健闘など)	戊辰(昭和3年) 九月	梧川漁長識、榮拝■(印)		状		1	
2	7	12				桔梗長兵衛・妻いね之墓(碑文図案)	(近代・年月日未詳)			状		1	
2	7	13				(原稿、宮城県亘理郡坂元小学校講堂新設并学舎増設工事落成式につき)	昭和戊寅(13年) 十一月初	梧川伊達康識		状		1	罫紙
2	7	14				先考遺墨記	大正甲子(13年) 秋日	(伊達) 康識		状		1	罫紙
2	7	15				(覚、高文乱暴塗抹返璧につき)	大正十三年十一月八日	岡	伊達様	状		1	全文朱書
2	7	16				賀年辞(草稿)	庚申(大正9年) 元旦	伊達宗康		状		1	罫紙、朱書あり
2	7	17				桔梗長兵衛君墓碑銘(草稿)	昭和十六年一月	伊達宗康撰并書		状		1	罫紙
2	7	18				匣甲録記(草稿)	大正丙寅(15年) 四月十三日	伊達宗康謹識		状		1	罫紙、朱書あり
2	7	19				(草稿、有文事、功績につき)	甲子(大正13年) 十一月			冊		1	罫紙、朱書あり
2	7	20				(草稿、興予納明浦君につき)	(近代・年月日未詳)			状		1	
2	7	21				(草稿、録其所得数首につき)	昭和甲戌(9年) 初冬	梧川伊達康識		状		1	
2	7	22				賀新年辞	大正九年庚申元旦	伊達宗康		状		1	罫紙
2	7	23				(断簡、白紙)	(年月日未詳)			状		4	
2	7	24				正五位勲四等内山廬君墓誌(草稿)	昭和九年	伊達宗康撰		状		1	罫紙
2	7	25				(断簡)	(年月日未詳)			状		1	コピー用紙、「内(○囲い)」の記載あり
2	8	1				東禅寺御法事之節之圖	安政六初秋 暮六日	大條徳主人		状		1	2-8-1～2-8-8 袋にて一括
2	8	2				(絵図、御廣間など屋敷間取)	(近世・年月日未詳)			状		1	
2	8	3				(絵図、表御対面所正月配置)	(近世・年月日未詳)			状		1	
2	8	4				(断簡、白紙)	(近世・年月日未詳)			状		1	もとは2-8-5～7の包紙カ
2	8	5				(絵図、奥御対面御目見など)	(近世・年月日未詳)			状		1	
2	8	6				(絵図、水戸様より御使者御入部につき)	文政十一年六月廿二日			状		1	
2	8	7				(絵図、表御対面所正月元日配置図)	(文政11年6月22日)			状		1	2-8-6と関連あり
2	8	8				(絵図、屋敷間取)	(近世・年月日未詳)			状		1	
2	9	1				青葉日記(御在江戸、正月朔日から十二月晦日まで)	天保丙申(7年)			冊		1	2-9-1～2-9-13 袋にて一括
2	9	2				御帰国御禮之御使者相動候二付御着城ニ而登城覚書	安政三年五月十三日			冊		1	
2	9	3				二月十五日御次第(御座之間へ御出・家督之御礼・御申次披露などにつき)	(近世・年末詳) 二月十五日	孫三郎方		冊		1	

箱	番号	枝1	枝2	枝3	枝4	表題 (内容)	日付	差出人	受取人	形態	状態	点数	備考
2	9	4				勤松院様御初七日御法事御次第	(文久元年) 六月十一日	孫三郎方		冊		1	勤松院 = 伊達斉邦正室、文久元年5月10日逝去
2	9	5				謹按往昔 (写、朝廷政權ヲ失シ武臣天下ヲ掌握シ甚キ陪臣ニシテ国命ヲ執ルニ至リにつき)	慶応四年三月			冊		1	
2	9	6				二月六藩建白 (写、皇上の御英断能く天下之大勢を御觀察遊ばされ候につき)	(慶応4年) 二月	(越前宰相 (ほか5名))		冊		1	
2	9	7				草稿 (写、王政復古・浪華行幸につき)	(慶応4年3月)			冊		1	
2	9	8				上疏草文 (王政御一新万機御親裁之盛時ニ遭遇仕候につき)	(慶応4年)			冊		1	
2	9	9				(開鎖・海防につき建白書)	元治元年十月三日	男澤又左衛門眞成		冊		1	
2	9	10				御帰国御禮之御使者江府にて相勤候覚書	安政三歳五月			冊		1	
2	9	11				(戊辰戦争東海道・東山道・北陸道・京都立の陣容書上、写)	(慶応4年) 二月十一日	紀州家来・久野丹波守		冊		1	
2	9	12				(達書、従来支配地総高并現米惣高など諸務変革取調につき)	(慶応4年) 六月	御一家・准御一家・御一族		冊		1	
2	9	13				五月十三日より覚書・御帰国御禮之御使者被仰付候覚書勤向計	安政三歳年六月廿日	(花押)		冊	破損あり	1	
2	10	1				(覚、御位階御昇進并蝦夷地御拝領年始御祝儀につき)	(万延元年カ) 三月十八日	(大條左衛門)		状		1	2-10-1 ~ 2-10-5 まで挟込一括
2	10	2				實名御禁字	(天保15年2月カ)			状		1	
2	10	3				(覚、実名御禁字書上)	天保拾五年二月			状		1	
2	10	4				(覚、御能見物、御連歌之間に於いて大條左衛門へ御料理・御茶・御菓子下され候につき)	(万延元年3月カ) 十八日	(大條左衛門)		状		1	
2	10	5				(政務・儀礼・交際勤向および大條氏歴代覚書)	(近世・年月日未詳)			冊	付箋共	1	
2	11					(漢文書籍、松島曉暉など)	(近世・年月日未詳)	半偈菴主・□浅		冊	破損甚大	1	
2	12					(安政五年より文久二年海防・御進發関係文書写)	(近世・年月日未詳)			冊	破損甚大	1	
2	13					大條君江送書 全 (上洛記録書上)	安政六年十二月	表組頭・輔道 (花押)		冊		1	
2	14					(略図断簡、旗・鎧)	(近世・年月日未詳)			状	破損甚大	1	
2	15					三月十六日追廻状拔写 (支那上海へ御用のため罷越、大樹上洛、賊臣武田正生 (耕雲斎) などにつき)	(幕末・年月日未詳)	(菅原龍吉)		冊		1	
2	16					二月廿八日追廻状写 (小普請組曲洩安藝守支配・辰之助父隠居、海陸器械製造御用出役・浅野伊賀守など幕府役人書上)	(幕末・年月日未詳)			冊		1	
2	17					(孝明天皇行幸配列書上写)	(文久3年)			冊		1	
2	18					会津家来差出書付 (松平肥後守在京人数取賄方統兼、御手当成し下されたく歎願につき)	(幕末・年未詳) 十二月、正月六日出	松平肥後守内・石澤民衛		冊	破損あり	1	
2	19					(徳川氏待遇につき建言書・英国軍艦ラツトル横濱到着覚書写)	(明治2年) 正月	(牧野遠江守内・古田宇忠太 (ほか2名))		冊		1	
2	20					三月九日大政官代ニ而行幸之節被仰出候・御宸翰之写	(慶応4年) 三月十五日			冊		1	
2	21					辰正月十八日写 (鳥羽・伏見の戦い、各大名通達につき)	(慶応4年) 正月			冊		1	
2	22					千八百六拾五年第一月十一日・我十二月十四日・新聞 (横浜の情報を筆写カ)	千八百六拾五年第一月十一日			冊		1	

箱	番号	枝 1	枝 2	枝 3	枝 4	表題 (内容)	日付	差出人	受取人	形態	状態	点数	備考
2	23					新聞・千八百六十五年二月一日・我正月六日(写、蝦夷島の材木并日本島の各港を開き貿易せば利益あるべき告文)	千八百六十五年 第二月一日	(在箱館・女王陛下のコンシユルエスホルドワイス)		冊		1	
2	24					(新聞写カ、神奈川奉行より松平三河守領内小豆嶋於て英国軍船乗組のもの之ためニ炮殺受候もの之義ニ付同国岡土引引会御趣申上候書付は(ほか)につき)	元治二巳年二 月十五日	(白石下総守、早川庄次郎)		冊		1	
2	25					写(松平陸奥守徒士・佐藤右七郎、料理茶屋ニ而酒給立婦候途中にて相手佐吉へ疵負わせ、不届のため中追放申付につき)	未(近世) 十二月八日			冊	破損あり	1	
2	26					(風説書、当春御上洛、下関事件などにつき)	(文久3年)			冊		1	
2	27					五月四日廻状写(御座之間・紀伊中納言殿ほか御進発之節御後備御軍令につき)	(文久3年)			冊		1	
2	28					尾張前大納言殿江再度御達書写	元治二年三月			冊		1	
2	29					(職務年中日記)	(幕末・年月日未詳)			冊		1	
2	30	1				(天保七年・八年江戸登見聞覚書)	天保七年十二 月廿三日～天 保九年三月廿 二日			冊	破損あり	1	
2	30	2				御本丸所々御門二階江上置候御用物等左之通	(天保9年カ)			状		1	2-30-1の挟み込み文書
2	31	1				諸願等不相出候(ほか年中職務書上)	(文政2年11 月)			状		1	2-31-1～2-31-5まきこみ一括、朱書あり
2	31	2				御精進日(年中一覽)	(文政2年11 月)			状		1	
2	31	3				御殺生被相扣日(年中一覽)	(文政2年11 月)			状		1	
2	31	4				御前御用日(評定日・出入司寄合日など一覽)	(文政2年11 月)			状		1	
2	31	5				御梁寶立被相控日(ほか公義御精進日など一覽)	(文政2年11 月)			状		1	
2	32					千八百六十五年第二月一日・我元治乙丑正月六日横濱ニ而(ほか長崎ニ而新聞写、外国事務関係につき)	(元治2年)			冊		1	
2	33					一通リヨリ御足輕屋數頭迄惣御人数扣帳(着座以下大條家中書上)	文化四年六月 廿八(日)	亀井川三郎兵衛		冊		1	
2	34					(覚、信恭院様御位牌瑞岩寺へ御安置などにつき)	(天保13年7 月)			冊	破損あり	1	
2	35	1				青葉雜記・禁他見(政宗公より斉義公まで御治世考年代ほか伊達家事蹟・家臣一覽につき)	(近世・年月日未詳)	(印、大條)		冊	破損あり	1	
2	35	2				(覚、河内狭山一万石・北條遠江守様など大名書上)	天保十一年六 月十一日			状		1	2-35-1の挟み込み文書
2	36					公方様江貞山様御茶被指上候御道具附(寛永5・11・12年)	(近世・年月日未詳)	清水氏		冊	破損あり	1	
2	37	1				(覚、廣幡大納言様より大條孫三郎帰国のため時候御見舞、および近衛様などへ御進物御使者相勤申候につき)	(幕末・年末詳) 二月			冊		1	
2	37	2				(覚、此度御位階仰せ出され候、近衛大納言様ほかへ時候御見舞御使者相勤申候につき)	(幕末・年末詳) 二月			冊		1	
2	37	3				(覚、此度御位階仰せ出され候、近衛大納言様へ御太刀一腰など御進物御使者相勤申候につき)	(幕末・年末詳) 二月			冊		1	
2	38					月番覚	(天保7年)			冊		1	
2	39					(文政十一年・天保十三年水戸申納言様御使者接待記録)	(天保13年6 月16日)			冊	破損あり	1	

箱	番号	枝1	枝2	枝3	枝4	表題 (内容)	日付	差出人	受取人	形態	状態	点数	備考
2	40					正月廿八日御次第(公方様・和宮様より歳暮御祝儀御拝領などにつき)	(幕末) 正月廿八日	孫三郎方		冊		1	
2	41					(月番職務記録)	文政八年正月	月番・多門		冊		1	
2	42					乙卯危言(西洋砲銃に関する記録)	(安政2年カ)			冊		1	
2	43					御記録書抜(元禄十六年・文化九年・文政二年・同三年御讀物につき)	(近世・年月日未詳)			冊		1	
2	44					(紫巖譜略写、山城國愛宕郡紫野龍寶山大徳禪寺・武州品川邑萬松山東海禪寺歴代僧侶一覧につき)	文久三年七月十九日(筆写)	是水亭主人(印)		冊		1	なかに一紙あり
2	45					(覚、御奉行・御宿老など役職・家格書上)	(近世・年月日未詳)			状		1	
2	46					日記(月番御用につき)	文政九年四月朔日(より六月十三日)			冊		1	
2	47					江戸・口宣御頂戴之御使者・御手段書	天保二年正月六日			冊		1	
2	48					日報(明治十二年東京・長崎新聞記事写につき)	明治十二年			冊		1	
2	49					(江戸屋敷および御使者勤方覚帳)	(近世・年月日未詳)			冊		1	
2	50					(伊達家御両歌・様付覚帳)	(近世・年月日未詳)			冊		1	
2	51					屋形様御在国中并御在江戸中神社并御礼御一同様御祭御参詣御名代之格(御帰国・御参勤・御神事など書上帳)	寛政十一年三月廿五日			冊	破損あり	1	
2	52					(覚、会津襲撃之勅令につき)	(慶応4年)	坂本屋敷		冊		1	
2	53					(風説書、長州毛利大膳父子追討・下関表開書・越前藩原田某陣中日記などにつき)	子(元治元年)			冊		1	
2	54					風説書(毛利大膳父子追討につき)	元治元年	手塚正左衛門		冊		1	
2	55					(風説書、子六月廿六日十津川郷土より届出・紀水二藩土本願寺へ差出し書などにつき)	子(元治元年)			冊		1	
2	56					寄贈自作詩書	昭和乙亥(10年)晩春	六明莊主、四明莊主人		冊		1	
2	57					(木片・断簡一括)	(年月日未詳)			状		1	
3	1					撮手扣(伊達家江戸屋敷へ諸大名・公卿使者・寺院など招待につき)	(近世・年月日未詳)			冊		1	
3	2					元文四年以来江戸御国許被仰出事并仲ヶ間傳事留	(宝暦6年3月11日)			冊		1	
3	3					御出馬方御留龜仕置(十二代大條道頼時代・吉村公(獅山)御成二関スル書類、三冊ノ内)	享保十五年七月二十六日			冊	表紙破損甚大	1	
3	4					年中行事(覚帳)	(文政10年)			冊		1	
3	5					(覚、平伏御目見之事・士凡下罪之輕重次第などにつき)	(宝暦13年)			冊		1	
3	6					(寺社参拝御先番勤仕覚帳)	(近世・年月日未詳)			冊		1	
3	7					(御使者勤仕覚帳)	(近世・年月日未詳)			冊		1	
3	8					御下向御道中御記録書抜	安政五年三月			冊		1	
3	9					(仙台北城大広間作法帳)	(近世・年月日未詳)	(大條道德カ)		冊		1	
3	10					御座之間御規式	安政六己未年正月元日	(大條道德カ)		冊		1	
3	11					江戸御近習手扣	(文政4年)	道德		冊		1	
3	12					薩藩建白(写)	(慶応2年)四月十四日、五月十一日写	(大久保市蔵)		冊		1	
3	13					御入部御祝儀一番座御一門衆始御料理被遣候御次第(手扣)	(近世・年未詳)五月廿六日	多門		冊	破損あり	1	

箱	番号	枝1	枝2	枝3	枝4	表題（内容）	日付	差出人	受取人	形態	状態	点数	備考
3	14					御両敬并御片敬（および様付之御方様書上帳）	(近世・年月日未詳)			冊	破損あり	1	
3	15					遠慮之格（遠島・改易・閉門など御仕置書上帳）	(安永4年)			冊		1	
3	16					参府年割（当戊年より来子年大名書上帳）	戊（近世・年月日未詳）			冊		1	
3	17					坂本江御成之節御役人附（吉村公（獅山）十二代大條道頼時代、三冊之内）	享保十五年七月			冊		1	
3	18					坂本御成に付而諸御留（吉村公（獅山）十二代大條道頼時代、三冊之内）	享保拾五庚戌年七月廿六日	清野勘左衛門（ほか3名）		冊		1	
3	19					御成御用一卷（綱村公（青山）十一代大條宗道時代）	貞享五年二月十六日	大槻八兵衛、里見孫八郎		冊		1	
3	20					若老方日記	安永七年五月五日（～閏七月晦日）			冊		1	
3	21					御番方服忌令写（扣）	(天明2年)	監物		冊		1	なかに一紙2点あり
3	22					勤方覚帳（扣）・道直日記	文政八年四月十三日、文政九年	道直		冊		1	
3	23					秀峯院様六月十四日暮六時御在所於御館御卒去被遊徳本寺江御出棺御葬礼御法事御百ヶ日迄之諸式留	安永四未年六月十五日	御家老執事・亀掛川東、御用人・早坂武左衛門		冊	破損あり	1	なかに一紙および付箋6点あり、秀峯院＝大條道頼夫人
3	24					三席一等申合吟味帳	文化六年六月廿日、文政四年十月十四日			冊		1	付箋2点あり
3	25					御兵具定	■拾四年(近世)八月廿八日	黒沢要人（ほか2名）	大條監物殿（ほか2名）	冊	破損甚大	1	
3	26	1				(こより)	(年月日未詳)			状		1	3-26-1～3-26-3 こよりにて一括
3	26	2				御成に付萬心掛物諸覚書（吉村公坂元居館御宿泊ニ関スル附属用書類二通につき）	宝暦九年（7月26日）			冊		1	
3	26	3				(覚、伊達吉村、坂本居館入部につき)	(宝暦9年)七月廿五日			冊	破損あり	1	
3	27	1				傳方秘事（三冊之内、薬方・治療につき）	文化壬申九年如月十七日	(印)		冊		1	表紙に印あり
3	27	2				(覚、ゑんしやうく焔硝>拾々など竹へ詰候花火之目形申上につき)	(近世・年未詳)六月廿一日	田原但右衛門	上	状		1	
3	27	3				(覚、昨日申上候、ゑんしやう拾々・鉄炮薬五匁など花火之目形につき)	(近世・年未詳)七月二日	田原但右衛門	上	状	破損あり	1	
3	28					屋形様御在江戸中神社并御先祖様江於江戸御参詣等之格之内	(近世・年未詳)七月十三日（～十五日）			冊		1	
3	29					若老方自筆写	文化九年八月（廿一日）ヨリ（文化14年3月9日）			冊		1	
3	30					(覚、勤仕ニ関スル旧記)	(年月日未詳)			状		1	
3	31					御申次方手扣	(文政7・12・13年)			冊		1	朱書あり
3	32	1				百九十六号（横濱開板日本新聞写帳）	千八百六十五年十一月廿五日（丑）（慶応元年）十月八日			冊		1	3-32-1～3-32-4 袋にて一括
3	32	2				(風説書、先般長州侯老職三人、多人数相率い京師表江罷登り裏訴之趣につき)	(元治元年)八月			冊		1	
3	32	3				(覚、我皇国維新後の外国交際、および版籍返上御旨趣の知藩事任命につき)	(明治2年)五月			冊		1	
3	32	4				格式帳写・向後漫談之巻相記可申事	元文五申歳正月朔日（～宝暦2年4月）	谷津一郎右衛門（ほか2名）		冊		1	
3	33					(覚、御家中相続大小進共至極之窮迫、江戸番頭・出入司・御小性頭、仙台にてハ五百石之高御役料など吟味につき)	(近世・年未詳)三月十四日			冊		1	

箱	番号	枝1	枝2	枝3	枝4	表題（内容）	日付	差出人	受取人	形態	状態	点数	備考
3	34					仙臺御屋敷御定	文政五年九月 （～文政12年 5月）			冊		1	なかに一紙・付箋あり
3	35					若老方日記	安永七年八月 朔日（～安永 8年3月23日）			冊		1	
3	36					日記	文政七年閏八 月廿三日より 十月廿七日迄			冊		1	
3	37					屋形様今日常全院様江被為 入御帰城之節殿様御病氣に 而被成御座候之處為御尋被 為入候萬御留	寛延三年五月 廿八日	御用人方当番・ 桃井小右衛門		冊		1	常全院＝伊達綱宗息女 三姫（中村成義正室、 1671～1753年）
3	38					段々御下中除屋敷御自分切 立屋敷改帳	寛永拾九年よ り元禄五年迄			冊	破損あり	1	なかに一紙・付箋あり
3	39					大坂大変来状之写（大塩平 八郎大騒動につき）	（天保8年2月）	大條氏		冊		1	
3	40					大坂大変・二冊目（大塩平 八郎大騒動につき）	天保八丁酉年 二月	大條氏		冊		1	
3	41					承傳記下（式冊之内）	享保拾八年丑 六月	（大條氏）		冊		1	
3	42					御発駕御道中（江戸参府日 記、二冊の内）	文政十年三月 廿二日（～六 月卅日）	道直		冊		1	なかに一紙・付箋あり、 「閏六月は外別冊＝記」 とあり
3	43					武家要覧 全（筆写）	文政十丁亥冬			冊		1	
3	44					吟信詩草	（昭和10年）	花明柳暗樓		冊		1	
3	45					臥遊隨録・丹青志（筆写）	（年月日未詳）	（朱柳泰著、王 梶登撰）		冊	破損あり	1	
4	1					（達書、奉行職之祝儀御使 者太刀馬代黄金十両・時服 一重につき）	（貞享4年） 卯 月十日	（花押）	大條監物殿	状	包紙2 点共	1	包紙1上書「監物様江 御奉行職被仰付候付而 御札被仰上候・御奉書 老通・ひ」とあり
4	2					（黒印状、合七拾貫三百八 拾文下し置かれ候につき）	元和二年七月 廿四日	（印）	大條兵庫殿	状	包紙共	1	包紙上書「十七・元和 貳年兵庫様へ之御墨印 老通」とあり
4	3					密傳記 巻第四（四冊之内）	（元禄3年）			冊		1	
4	4					密傳記 巻第二	（元禄7年）			冊		1	
4	5					密傳記 巻第三	（寛文元年）			冊	破損あり	1	
4	6					（卷子、大條尾張守宗直君 之御息男左衛門宗綱君御誕 生より宗頼君まで事績につ き）	（近世・年月日 未詳）			状		1	
4	7					（黒印状、亙理郡坂本郷 ほか都合三百貫文下行につ き）	承応貳癸巳年 閏六月十一日	（印、忠宗）	大條兵庫殿	状	包紙共	1	包紙上書「忠宗君御黒 印」とあり
4	8	1				（判物、伊達西根大枝之郷 ほか加恩として下付につ き）	天文廿二年癸 丑正月十七日	晴宗（花押）	大枝左衛門尉 殿	状	木箱共	1	木箱上書「晴宗様御判 物・貞山様御墨印」と あり
4	8	2				（黒印状、奥仙ノ内今泉 など都合貳百貫百拾三文下 し置かる者也）	慶長九年八月 廿八日	（印、政宗）	大條尾張守殿	状		1	4-8-1の続き（同じ紙）
4	9					知行目録（亙理郡坂本郷 ほか4ヶ村都合三百廿貫 五百四拾五文につき）	寛文貳年六月 十日	内馬場蔵人 （印）（花押）（ほ か4名）	大條監物殿	冊	包紙共	1	包紙上書「な・御知行 御目録老通」とあり
4	10	1				（包紙）	（宝暦13年8 月5日）	鮎貝志摩（ほ か3名）	大條監物殿	状		1	4-10-1～4-10-3 包紙に て一括
4	10	2				（達書、亙理郡坂元本郷 要害屋鋪本丸塀修補、願いの 如く申付につき）	宝暦拾三年八 月五日	大立目下野（花 押）（ほか3名）	大條監物殿	状		1	
4	10	3				宝暦十三年御館塀御修復に 付御竈被相出候一巻（写）	宝暦十三年八 月五日、六日	（大條監物）		状		1	
4	11	1				（包紙、道頼君御奉行職御 再役被為蒙仰候被仰渡写・ 三拾六）	宝暦六年閏 十一月廿七日			状		1	4-11-1～4-11-3 包紙に て一括
4	11	2				於御連歌之間（御奉行職仰 せ付けられ候につき）	（宝暦6年閏 11月27日）		大條監物	状		1	
4	11	3				（覚、遠藤内匠殿より申来、 御奉行職再役仰せ付けられ 候につき）	宝暦六年閏 十一月廿六日、 廿七日			状		1	
4	12					（達書、大條監物新田亙理 郡坂本郷ほか三口合拾六 貫百四拾六文御竿入につ き）	寛文拾三丑六 月十八日、廿 五日、廿九日	甲田甚兵衛 （印）（花押）、 松林仲左衛門 （印）（花押）	大條監物殿	冊	包紙共	1	包紙上書「御新田御書 出老通・但御竿入・あ 」とあり

箱	番号	枝1	枝2	枝3	枝4	表題（内容）	日付	差出人	受取人	形態	状態	点数	備考
4	13					御林留（写、手扣）	弘化三年二月	八軒町住人・鈴木小太郎（印）		冊		1	
4	14					覚（御領内要害屋敷修補之儀、今度豊後守殿御老中御内談にて仰せ付けられ候、城さらひなども早々申出につき）	貞享四年六月朔日	富田老岐（花押）（ほか2名）	大條監物殿	冊	包紙共	1	包紙上書「十八・居館修補之儀ニ付御奉書」とあり
4	15					（黒印状、漆之事当年よりハ代官にて仰せ付けらるべく候、木の実之事は百本ニ五斗俵三ツ宛迄につき）	慶長六年九月一日	（印、政宗）	大條尾張守殿	状	包紙共	1	包紙上書「十六・貞山様御代漆之義ニ付御墨印老通」とあり
4	16	1				（包紙、十式・御分地書出し御奉行衆より御勘定奉行衆へ被相出候御書差式通入ル）	正徳五年十二月十八日			状		1	4-16-1～4-16-3 包紙にて一括
4	16	2				（覚、大條多門知行之内高式拾九貫六百九拾老文、大條西之助一分地成し下され候につき）	正徳五年十二月十八日、廿二日、廿三日	平大八郎（印）（花押）（ほか4名）	大條多門殿	冊		1	
4	16	3				（覚、大條多門来年拾七歳罷成、大條西之助名代相除られ、西之助へ高式拾九貫六百九拾老文分地仰せ付けられ候につき）	正徳五年十二月十八日、廿二日、廿三日	平大八郎（印）（花押）（ほか4名）	大條多門殿	冊		1	
4	17					（御近習勤覚書・若老方覚書）	文政七年六月朔日（～文政13年2月13日）			冊		1	
4	18					覚（凶作・飢饉のため町人・百姓へ幕府触書につき）	寛永十九年六月廿九日、七月十日	奥山大学助（花押）、茂庭周防（花押）	大條兵庫殿	状	こより共	1	2紙1点、こより付紙「寛永十九年江戸御不進書付一まい・を」とあり
4	19					若老自分留写	宝暦式年十二月廿八日（～文政7年閏8月23日）	道直（花押）		冊		1	なかに一紙2点あり
4	20					（田畑付之事など七十六か条覚帳）	（文政10年10月）	大條監物家中・早坂五郎右衛門（花押）		冊		1	
4	21					知行目録（亙理郡真庭邑・坂本本郷・高瀬村都合貳百貳拾貫文につき）	寛永仁十老年八月十四日	和田因幡（印）（花押）（ほか3名）	大條兵庫殿	冊	包紙共	1	包紙上書「貳百貳拾貫文・御知行御目録老冊・れ」とあり
5	1					坂本磯濱ニ而見懸申候唐船図（写）	元文四年五月廿六日	安部定楠・写		状		1	
5	2					支配調（江戸番頭など役職都合七拾六役書上）	萬延庚申（元年）	藤原道徳		状		1	翻刻コピー用紙あり
5	3					（墨書、無）	（年月日未詳）	真浄書（印）		状	破損あり	1	
5	4	1				（数珠袋）	（年月日未詳）			状		1	5-4-1～5-4-15まで袋一括
5	4	2				（御夢想図）	（年月日未詳）	補陀樂山法泉寺・浄達和尚・八十五才筆（印）		状		1	
5	4	3				（御札、室内安全祈願）	（年月日未詳）			状	包紙・こより共	1	
5	4	4				（御札、愛染明王供御守護）	（近世・年月日未詳）	金蔵寺	若殿様	状	包紙・こより共	1	
5	4	5				（御札、妙見供御祈禱御守）	（近世・年月日未詳）	金蔵寺	若殿様	状	包紙共	1	
5	4	6				（七福神図）	（年月日未詳）	（印）		状		1	
5	4	7				（御守、神心理気境・五道太神）	（年月日未詳）			状	包紙共	1	
5	4	8				（御札、妙見尊星供御守護）	（近世・年月日未詳）	金蔵寺	若殿様	状	包紙・こより共	1	
5	4	9				（御札、牛頭天王社御祈禱守護）	（近世・年月日未詳）	寶積院	若殿様	状	包紙・こより共	1	
5	4	10				（御札、愛染明王供御守護）	（近世・年月日未詳）	金蔵寺	殿様	状	包紙・こより共	1	

箱	番号	枝1	枝2	枝3	枝4	表題 (内容)	日付	差出人	受取人	形態	状態	点数	備考
5	4	11				(御札、御祈祷守護)	(近世・年月日未詳)	金蔵寺	多門様	状	包紙・こより共	1	
5	4	12				鹽竈宮御札	(近世・年月日未詳)	法蓮寺		状	包紙共	1	
5	4	13				(御札、北野天満宮御守護)	(年月日未詳)	御祈願所		状	包紙共	1	
5	4	14				(經典)	(近世・年月日未詳)	金蔵寺	若殿様	状	包紙共、木箱共	1	
5	4	15				(札・木具・断簡など一括)	(年月日未詳)			状		1	
5	5					(大條宗直より道頼まで勲功書上)	安政五年八月	大條多門		冊		1	
5	6					大枝氏六世・大枝参河守宗家近親(および七世大條宗直・八世左衛門宗綱家族書上)	(近世・年月日未詳)			状		1	
5	7					(伊達氏略歴書上)	寛永十八年	従四位下右近衛少将兼陸奥守藤原朝臣・忠宗		状		1	前欠
5	8					(大條氏由緒書差出控)	延宝五年六月廿一日	大條監物重判	後藤五郎左衛門殿(ほか2名)	冊		1	
5	9					(願書控、亙理郡坂元町監物居館并家中屋敷東二而常々火難など心元無き場所御吟味成し下されたくにつき)	元文五年四月	大條監物家来・谷津一郎右衛門(ほか2名)		冊		1	
5	10					在郷屋敷書出之覚	西(宝暦3年)ノ十一月廿一日	邊見八十右衛門		冊		1	
5	11					在郷屋鋪書出之覚	元禄拾四年十二月廿五日	大條監物(印)(花押)	芦立正左衛門殿、真柳權之允殿	冊		1	
5	12					在郷屋鋪書出之覚	宝暦三年十一月	大條監物名代・大條友之進重判	勘定奉行殿	冊	付箋共	1	
5	13					(漢詩、松張移一榻風露)	(近世・年末詳)中秋	金鶏青草		状		1	
5	14					(漢詩、桜花露)	(近世・年月日未詳)	磐溪未定草(印)		状		1	
5	15					(漢詩、陶壺古器大如杯)	(近世・年月日未詳)	磐溪崇未定草		状		1	
5	16					(漢詩、佐用姫如某生)	(近世・年月日未詳)	磐溪崇稿(印)		状		1	
5	17					意心和而後止不得■和而心聊	文久三年癸亥嘉平月(12月)	頼復拝識(印)		状	破損あり	1	
5	18					(漢詩写、自綻自香嫩)	(近代・年月日未詳)	佐治谷周	大條若瑠璚	状		1	
5	19					(兵部少輔氏家・法名東孝ほか法名・没年書上)	(年月日未詳)			状		1	
5	20					(漢詩、東海清遊久有期)	(年月日未詳)	山縣・源玉再拝(印)	奉呈・仙臺督学大槻先生	状		1	
5	21					(漢詩、満腔有策出)	鳴時壬戌三月朔	小野寺謙・拝具(印)		状	破損あり	1	
5	22					(漢詩、應教恭賀藩公増封出)	(年月日未詳)	樋口寧・拝稿		状		1	
5	23					(漢詩、甲子秋仲余将赴平戸大槻子親君令将去)	(年月日未詳)	藝陽藤直良具(印)		状		1	
5	24	1				(漢詩、采蓮船者水煙長)	(年月日未詳)	菊室草		状		1	
5	24	2				(断簡、何宗何寺老軒など難型)	(年月日未詳)			状		1	
5	25					(漢詩、松声有語取慮)	(年月日未詳)	三五・拝		状		1	
5	26					(漢詩、気仙麻客中)	(年月日未詳)	大田石子請屋		状		1	
5	27					(漢詩、不覚吟筵夕日沈)	(年月日未詳)	卷雲生将		状		1	
5	28					(漢詩、懷古傷時夢不成)	(年月日未詳)	春山詩史惇		状		1	
5	29	1				(漢詩、竹裏有第堂)	(年月日未詳)	春山木惇・再拝具(印)		状		1	
5	29	2				(漢詩、南風驟雨送梅天)	(年月日未詳)	蕉園大内一・再拝(印)		状		1	
5	30					(漢詩、曾相貧儒照)	(年月日未詳)	春山酒伴・拝草		状		1	
5	31					(漢詩、何以消永夕寒燈影輝)	(年月日未詳)	春山散人惇・拝具		状		1	

箱	番号	枝1	枝2	枝3	枝4	表題 (内容)	日付	差出人	受取人	形態	状態	点数	備考
5	32					(漢詩、每到君家心自清青山相對)	(年未詳) 新春望後二日	鳴瀬河畔老漁春山惇・拝草(印)		状		1	
5	33					(漢詩、秋晴徒伴瀬ミ左澤絶句)	(年月日未詳)	磐溪崇未定草(印)		状		1	
5	34					(漢詩、應教楠正成)	(年月日未詳)	靈桃寺太陽・拝具(印)		状		1	
5	35					(包紙)	承應式年			状		1	
5	36					(漢詩、夜泊逢秋客)	(年月日未詳)	九十九橋・草(印)		状		1	
5	37					(漢詩、偶対高人泊)	(年月日未詳)	紅雲・拝具		状		1	
5	38					(漢詩、奉教恭煙松島月)	(年月日未詳)	臣・高屋美章・謹具		状		1	
5	39					(包紙、慶寿公引裁御朱印老通)	天保拾三年八月廿八日			状		1	
5	40					(漢詩、吾是四方客行)	(年月日未詳)	野將順・拝具		状		1	
5	41					(漢詩、聞清沙役續有成)	(年月日未詳)	風了・拝草		状		1	
5	42					(漢詩、乍聞遊子命巾車)	(年月日未詳)	池内正毅・拝具		状		1	
5	43					(漢詩、鳥草羣飛、添削あり)	(年月日未詳)			状		1	朱書あり
5	44					(漢詩、少小早為觀國賓)	(年月日未詳)	多富源觀・草(印)		状	破損あり	1	
5	45					(包紙、奉呈督学大槻先生)	(年月日未詳)	源玉・再拝		状		1	
5	46					(漢詩、岩城大須賀子東見、添削あり)	(年月日未詳)	磐溪平密未定稿		状		1	朱書あり
5	47					眞社會約(東坡先生與弟子由書)	(年月日未詳)			状	破損あり	1	
5	48					(漢詩、自松島舟行至富山)	(年月日未詳)	北山老人未定		状		1	
5	49					(漢詩、伊達閣・名取川・大年寺など)	(年月日未詳)	加倉井調稿拝草		状		1	
5	50					(漢詩、隔橋異風致更見)	明治十七季五月十五日	清老記実		状		1	
5	51					(漢詩、芳野嵐山瓊浦濱)	(年月日未詳)	九十九橋(印)		状		1	
5	52					(漢詩、別石川桜所)	辛未(明治4年)四月	磐溪大槻密稿		状		1	
5	53					(中村常陸入道宗村ほか法名・没年書上)	(年月日未詳)			状		1	後欠、5-19と関連あり
5	54					(漢詩、平泉懷古)	(年月日未詳)	北山老衲未定		状		1	
5	55					(漢詩、偶讀拝史得此二絶)	(年月日未詳)	晚景病夫		状		1	
5	56					(漢詩、捕吏相駆擁馬前)	(年月日未詳)	苟全脩		状		1	
5	57					(漢詩、石経盤回)	(年月日未詳)	迂豹・拝稿		状		1	
5	58					(漢詩、送大槻子繩君歸東都)	(年月日未詳)	少君・大東敦・拝草		状		1	
5	59					(包紙、六番巻)	嘉永庚戌(3年)六月	東岫藏(印)		状		1	
5	60					(漢詩、早春詞驚應)	(年月日未詳)	臣・清崇・謹稿(印)		状		1	
5	61					(漢詩、帰田賦就掩柴関占断)	(年月日未詳)	鳴瀬老恒惇・拝草		状	破損あり	1	
5	62					(漢詩、送男友光干役蝦夷)	壬戌春三月朔旦	靖亭(印)		状		1	
5	63					(漢詩、次韻報見贈)	(年月日未詳)	江清慎		状		1	
5	64	1				(和歌集、詠二首倭調)	(年月日未詳)	謙道(ほか3名)		冊	封筒共	1	5-64-1 ~ 5-64-81 封筒にて一括
5	64	2				詠梅有喜色・和歌	(年月日未詳)	了珀		状		1	
5	64	3				秋日回詠菊籬月・和歌	(年月日未詳)			状		1	
5	64	4				春日詠梅有喜色・和歌	(年月日未詳)	藤原隆從		状		1	
5	64	5				詠梅有喜色・和歌	(年月日未詳)	法眼了珪		状		1	
5	64	6				春日詠梅有喜色・和歌	(年月日未詳)	藤原真蕃		状		1	
5	64	7				(和歌、池氷尽解)	(年月日未詳)	謙道		状		1	
5	64	8				(和歌、松前の軍舟ヲ悦ふて)	(年月日未詳)			状		1	
5	64	9				(和歌、如月のなかは都にのほらむ)	(年月日未詳)	法橋謙道・真蕃・隆從		状		1	
5	64	10				春日詠梅有喜色・和歌	(年月日未詳)	平行直		状		1	
5	64	11				詠春山・和歌	(年月日未詳)	法眼了珪		状		1	
5	64	12				(和歌短冊綴、初春祝ほか)	天保十三年正月十四日	謙道・隆從・真蕃		冊		1	
5	64	13				(和歌短冊綴、落梅香ほか)	(年月日未詳)	隆從・了珀、信方・濱子		冊		1	

箱	番号	枝1	枝2	枝3	枝4	表題 (内容)	日付	差出人	受取人	形態	状態	点数	備考
5	64	14				(和歌短冊綴、花久盛ほか)	天保十一年二月三日	了珪、隆從、行直、了珀		冊		1	
5	64	15				(和歌短冊綴、栽萩ほか)	天保十一年八月十九日	為胤、縄保、林設、真蕃		冊		1	
5	64	16				(和歌短冊綴、月前草ほか)	(年月日未詳)	縄保、真蕃、為胤、林設		冊		1	
5	64	17				(和歌短冊、春月)	(年月日未詳)	真蕃		状		1	
5	64	18				(和歌短冊、古々路にきもに)	(年月日未詳)	了珀		状		1	
5	64	19				(和歌短冊、いらはやき君かみゆひ)	(年月日未詳)	了珀		状		1	
5	64	20				(和歌短冊、梅盛開)	(年月日未詳)	了珀		状		1	
5	64	21				(和歌短冊、霜雪ニたへつゝ)	(年月日未詳)	了珀		状		1	
5	64	22				(和歌短冊、春月)	(年月日未詳)	親賢		状		1	
5	64	23				(和歌短冊、夏夜待月)	(年月日未詳)	親賢		状		1	
5	64	24				(和歌短冊、夕立過山)	(年月日未詳)	親賢		状		1	
5	64	25				(和歌短冊、柳糸)	(年月日未詳)	親賢		状		1	
5	64	26				(和歌短冊、江畔螢火)	(年月日未詳)	親賢		状		1	
5	64	27				(和歌短冊、水辺夏草)	(年月日未詳)	親賢		状		1	
5	64	28				(和歌短冊、簷頭夕顔)	(年月日未詳)	顯則		状		1	
5	64	29				(包紙)	(年月日未詳)			状		1	
5	64	30				(和歌短冊、うしるつて見に来し人の心まで)	(年月日未詳)	信近		状		1	裏面にも和歌あり
5	64	31				(和歌短冊、うしるつて見に来し人の心まで)	(年月日未詳)	信近		状		1	裏面にも和歌あり
5	64	32				(和歌短冊、深之草ゆるしの)	(年月日未詳)	信近		状		1	
5	64	33				(和歌短冊、はれ鳥のいろねにめてよ)	嘉永五閏二月	信近		状		1	
5	64	34				(和歌短冊、旧約)	(年月日未詳)			状		1	
5	64	35				(和歌短冊、水辺夏草)	(年月日未詳)	顯則		状		1	
5	64	36	1			(和歌短冊、追懷)	(年月日未詳)	飯瀬藤三郎		状		1	5-64-36-1 ~ 5-64-36-2 包紙にて一括
5	64	36	2			(和歌短冊、おそろしきむかひはなしに花さきて)	(年月日未詳)	飯瀬藤三郎		状		1	
5	64	37				(和歌短冊、夏夜待月)	(年月日未詳)	顯則		状		1	
5	64	38				(和歌短冊、水辺夏草)	(年月日未詳)	顯則		状		1	
5	64	39				(和歌短冊、島花)	(年月日未詳)	常州浪士・伊能三真顯則		状		1	
5	64	40				(和歌短冊、梅泉待月)	(年月日未詳)	顯則		状		1	
5	64	41				(和歌短冊、竹裏鶯)	(年月日未詳)	謙道		状		1	
5	64	42				(和歌短冊、近忘)	天保十三年二月八日	謙道		状		1	
5	64	43				(和歌短冊、夏野)	(年月日未詳)	謙道		状		1	
5	64	44				(和歌短冊、夏夜待月)	(年月日未詳)	玄妙		状		1	
5	64	45				(和歌短冊、松風入琴)	(年月日未詳)	玄妙		状		1	
5	64	46				(和歌短冊、水辺夏草)	(年月日未詳)	玄妙		状		1	
5	64	47				(和歌短冊、対泉待月)	(年月日未詳)	玄妙		状		1	
5	64	48				(和歌短冊、水辺夏草)	(年月日未詳)	隆從		状		1	
5	64	49				(和歌短冊、梅風)	(年月日未詳)	隆從		状		1	
5	64	50				(和歌短冊、時来ぬと)	(年月日未詳)	隆從		状		1	
5	64	51				(和歌短冊、夏夜待月)	(年月日未詳)	隆從		状		1	
5	64	52				(和歌短冊、てまえにも)	(年月日未詳)	隆從		状		1	
5	64	53				(和歌短冊、夏夜待月)	(年月日未詳)	信近		状		1	
5	64	54				(和歌短冊、川辺夏月)	(年月日未詳)	信近		状		1	
5	64	55				(和歌短冊、行路夏草)	(年月日未詳)	信近		状		1	
5	64	56				(和歌短冊、川辺夏月)	(年月日未詳)	信近		状		1	
5	64	57				(和歌短冊、春駒)	(年月日未詳)	信近		状		1	
5	64	58				(和歌短冊、水辺夏草)	(年月日未詳)	信近		状		1	
5	64	59				(和歌短冊、行路夏草)	(年月日未詳)	信近		状		1	
5	64	60				(和歌短冊、はる風の)	(年月日未詳)	信近		状		1	
5	64	61				(和歌短冊、夕梅)	(年月日未詳)	信方		状		1	
5	64	62				(和歌短冊、君ヲ今)	(年月日未詳)	真蕃		状		1	
5	64	63				(和歌短冊、別れ行千里の)	(年月日未詳)	真蕃		状		1	
5	64	64				(和歌短冊、捲簾待風)	(年月日未詳)	好次		状		1	
5	64	65				(和歌短冊、梅紅白)	(年月日未詳)	勝明		状		1	
5	64	66				(和歌短冊、美人撲萤)	(年月日未詳)	和良		状		1	
5	64	67				(和歌短冊、水辺夏草)	(年月日未詳)	和良		状		1	

箱	番号	枝 1	枝 2	枝 3	枝 4	表題 (内容)	日付	差出人	受取人	形態	状態	点数	備考
5	64	68				(和歌短冊、野経雄)	(年月日未詳)	好次		冊	状	1	
5	64	69				(和歌短冊、はる風のいと 長閑にも)	(年月日未詳)	好次		冊	状	1	
5	64	70				(和歌短冊、夜春雨)	(年月日未詳)	依保		冊	状	1	
5	64	71				(和歌短冊、歎前の情進)	(年月日未詳)	元俊		冊	状	1	裏面にも和歌あり
5	64	72				(和歌短冊、青柳の緑の色 は)	(年月日未詳)	依保		冊	状	1	
5	64	73				(和歌短冊、夏夜待月)	(年月日未詳)	和良		冊	状	1	
5	64	74				(和歌短冊、樹陰納涼)	(年月日未詳)	和良		冊	状	1	
5	64	75				(和歌短冊、遊絲)	(年月日未詳)	和良		冊	状	1	
5	64	76				(和歌短冊、風ふかはちり や)	(年月日未詳)	和良		冊	状	1	
5	64	77				(和歌短冊、郭公帰山)	(年月日未詳)	好次		冊	状	1	
5	64	78				(和歌短冊綴、左右軍雁ほ か)	天保六年八月 廿八日	為胤、縄保、 行直、隆従、 林設、真蕃		冊	冊	1	
5	64	79				(和歌短冊綴、多年甌梅ほ か)	(年月日未詳)	了珪、信近、 隆従、信方、 東華俊		冊	冊	1	
5	64	80				(和歌短冊綴、江上霞ほか)	天保十一年正月 八日	了珪、真蕃、 行直、隆従、 了珪		冊	冊	1	
5	64	81				(和歌短冊綴、霞中花ほか)	天保十一年正月 十九日	了珪、了珪、 隆従、行直、 真蕃		冊	冊	1	
5	65					(断簡、白紙)	(年月日未詳)			冊	状	1	
5	66					(覚、大條監物殿遠田郡北 浦村など四か村御加増相済 につき)	宝暦十二年 十二月廿九日	蜂屋又左衛門 (印)	大條悦之進殿	冊	包紙共	1	包紙上書「徳春院様御 加増御拝領御割書付・ 四十三」とあり
5	67					(断簡、白紙)	(年月日未詳)			冊	状	1	
5	68					(断簡)	(年月日未詳)	尾柏要右衛門	佐藤司馬様	冊	状	1	
5	69					(断簡、白紙)	(年月日未詳)			冊	状	1	
5	70					(書状断簡、不引合之事二 而、一統之気然二抱甚宜し からざるよう御座候につ き)	(年月日未詳)			冊	破損あり	1	
5	71					(包紙)	(年月日未詳)		尾柏要右衛門 様、三浦治右 衛門様	冊	状	1	
5	72					(覚、別紙御足輕長右衛門 へ相下申候につき)	(近世・年未詳) 八月十八日	小泉和中	要右衛門様	冊	状	1	
5	73					十日不出席(菊地甚五右衛 門ほか24名書上)	(近世・年月未 詳) 十日			冊	状	1	切り取り部分あり
5	74					(覚、金蔵寺客殿障子紙何 程御入用二相成候哉につ き)	(近世・年未詳) 四月五日	千葉八十八(ほ か2名)		冊	状	1	
5	75					(覚、阿部文蔵などノ拾三 人書上)	(近世・年月未 詳) 十一日			冊	状	1	
5	76					覚(火薬御払金拾切などノ 金五拾切・九分六厘式毛勘 定につき)	(近世・年月日 未詳)			冊	状	1	後欠
5	77					(覚、藤次郎様・総次郎様 ト申御名、御代々様御幼名 につき)	(近世・年月日 未詳)			冊	状	1	前後欠
5	78					(断簡)	(近世・年月日 未詳)	外守	要右衛門様	冊	状	1	前欠
5	79					(断簡)	(近世・年月日 未詳)	丸甚兵衛	阿部兵右衛門 殿、同道中	冊	状	1	前欠
5	80					(断簡)	亥(近世)ノ 十月十九日	後藤孫兵衛		冊	状	1	前欠
5	81					(覚、左之通申来候につき)	(近世・年未詳) 九月廿四日	佐藤司馬	尾柏要右衛門 様	冊	状	1	
5	82					(覚、御自分病気のため宅 之御用共相勤兼候段、御届 下され候につき)	(近世・年未詳) 十二月十八日	佐藤司馬	尾柏要右衛門 様	冊	状	1	後欠
5	83					(覚、富田利右衛門并小泉 和申につき)	(近世・年未詳) 八月六日	丸山甚兵衛	尾柏要右衛門 様	冊	破損あり	1	
5	84					(覚、当座仮役仰せ付けら れ候、キケ川岩五郎・渡部 平作表御用人に仰せ付けら れ候につき)	(近世・年未詳) 十一月十四日	要右衛門	丹蔵様	冊	状	1	前欠
5	85					(覚、廿二日・廿三日藁巻 御普請仰せ付けられ候につ き)	(近世・年月日 未詳)			冊	状	1	後欠

箱	番号	枝 1	枝 2	枝 3	枝 4	表題 (内容)	日付	差出人	受取人	形態	状態	点数	備考
5	86					(覚、うなぎ式拾本請取、早速大殿様へ指上申候につき)	(近世・年末詳) 九月十四日			状		1	
5	87					(覚、御使番など役職・道具書上)	(近世・年月日未詳)			状		1	前後欠
5	88					(覚、御武具方・歩銃一隊大番組など役職者書上)	(近世・年月日未詳)			状		1	前欠
5	89					(包紙)	(年月日未詳)	知尚丹藏	早坂五郎右衛門様	状		1	
5	90					(覚、御兵具物御風入につき)	(近世・年末詳) 九月十日	要右衛門	谷津今朝十郎殿 (印) (ほか3名)	状		1	
5	91					(覚、御隠居様方火薬きつと御蔵ニ入置候につき)	(近世・年末詳) 四月十七日			状		1	
5	92					(覚、仙表遠方御用之節は御普請場へ出勤致さず候につき)	(近世・年末詳) 六月廿六日	尾柏要右衛門		状		1	
5	93					(覚、御足輕傳五郎願申出につき)	(近世・年末詳) 十二月廿一日	要右衛門	五郎右衛門様 (ほか2名)	状		1	
5	94					(覚、甚七罷下り内勤ニ相詰居候事、御普請はかとり申さずなどにつき)	(近世・年月日未詳)			状		1	前後欠
5	95					(断簡、外ニしふ紙・代百三文相添)	(近世・年月日未詳)	和仲	要右衛門	状		1	
5	96					(断簡、白紙)	(年月日未詳)			状		1	
5	97					(断簡)	(年月日未詳)		右御役中	状		1	前欠
5	98					(覚、鎗術稽古仰せ付け置かれ候につき)	(近世・年末詳) 二月廿七日	尾 要右衛門	吉田行馬殿 (印) (ほか9名)	状		1	後欠
5	99					(覚、左之通り仙より申来候につき)	(近世・年末詳) 十二月廿日			状		1	前後欠
5	100					(包紙、封)	(近世・年月日未詳)	引地甚五兵衛	尾柏要右衛門様	状		1	
5	101					(覚、足輕三之助運上鉄炮討方仕りたく願指出、許可につき)	(近世・年末詳) 十二月廿七日	佐藤司馬	尾柏要右衛門殿	状		1	
5	102					(覚、大仙屋御普請御用係り仰せ付けられ、御大工甚七も小家御普請方へ相登りにつき)	(近世・年月日未詳)			状		1	後欠
5	103					(遠書、鈴木周作・阿部建治御暇につき)	(近世・年末詳) 十一月六日			状		1	
5	104					(覚、当御蒔満萱三方四千四百廿把、御間ニ合ニも相成候につき)	(近世・年末詳) 十二月四日	山内万右衛門、谷津喜東次		状		1	
5	105					(覚、大殿様方大忌のため相登られ候につき)	(近世・年末詳) 三月五日			状		1	
5	106					(覚、岡ノ貞治様など11名書上)	(近世・年月日未詳)			状		1	前欠
5	107					(覚、屋敷西五百三十八坪など、千九百四十六坪書上)	(近世・年月日未詳)			状		1	
5	108					(断簡、斎藤伊右衛門義相続向)	(近世・年月日未詳)	知尚丹藏	尾柏要右衛門殿	状		1	後欠
5	109					(覚、鎗術先生梅森大六郎殿御登之節、稽古人一統より金老両御礼ニ指上につき)	(近世・年月日未詳)			状		1	後欠
5	110	1				(覚、先日御礼御家内様へ宜敷仰せ立てられ候、および今日御米御遣わし下され有り難く存じ奉り候につき)	(近世・年末詳) 閏五月廿三日	中村佐吉	要右衛門様	状		1	
5	110	2				(覚、御徒組大槻文平相下し、佐藤彦之助御暇成し下され候などにつき)	(近世・年末詳) 七月十一日			状		1	
5	111					(覚、御館御納戸物之件、其後御館軍務局ニ相成候、御品々取調につき)	(明治元年カ) 十二月	尾柏要右衛門、御納戸役・千葉八十八		状		1	
5	112					(覚、御酒桶御結方につき)	(近世・年月日未詳)	知尚丹藏	尾柏要右衛門様	状		1	後欠
5	113					(覚、御造り方老本も早く登せ下されたく候につき)	(近世・年末詳) 十月十日			状		1	前欠
5	114					(覚、左之通相渡候につき)	(近世・年末詳) 十二月晦日	佐藤司馬	尾柏要右衛門殿	状		1	

箱	番号	枝1	枝2	枝3	枝4	表題 (内容)	日付	差出人	受取人	形態	状態	点数	備考
5	115					(包紙、別紙御物借石願)	(近世・年月日未詳)	要右衛門	文吾様、小右衛門様	状		1	
5	116					(覚、たんぼ五寸四方三枚など書上)	(近世・年月日未詳)			状		1	
5	117					(包紙、上)	(近世・年月日未詳)			状	こより共	1	
5	118					(覚、内拾六人御奉公之外ニ罷成申候、御扶持方式斗式升七合五勺などにつき)	(近世・年未詳) 十二月廿三日	丸山甚兵衛 (ほか2名)		状		1	前欠
5	119					(書状、私事も無事ニ勤仕御休意下さるべく候につき)	(近世・年月日未詳)	丹藏	要右衛門様	状		1	後欠
5	120					(断簡、御三ノ丸新ギ御長屋普請ニ付諸材木等)	(近世・年月日未詳)			状		1	後欠
5	121					(断簡)	(近世・年月日未詳)	白土川一馬	尾柏要右衛門様、御同人御中	状		1	
5	122					(覚、薬壺計、極細かこ製法相成候様仕りたくにつき)	(近世・年未詳) 五月十六日	信次	要右衛門様、鉄右衛門様	状		1	前欠
5	123					(覚、式十六切・式分五厘、此度山立氣師鉄炮御新領様ニ而召し上げられ候につき)	(明治元年カ)			状		1	
5	124					(覚、明日着仙のため御使馬拝借成し下されたく申出候につき)	(近世・年未詳) 三月廿五日	鉄右衛門	阿部小東太殿	状	破損あり	1	
5	125					(覚、砂沢市右衛門殿御取扱御扶持方につき)	(近世・年未詳) 三月中			状		1	後欠
5	126					(断簡)	(近世・年月日未詳)	大宮外守	尾柏要右衛門様	状		1	
5	127					(書状、御用状忝封外ニ自分手代老封相預け御持参下されたく候、来ル九日弥御引越シ之御取合につき)	(近世・年未詳) 四月五日	[]	要右衛門様	状	破損あり	1	
5	128					(断簡、左之通御取合之)	(年月日未詳)	丹藏	要右衛門様	状		1	
5	129					(覚、番宿へ飛脚厳重ニ仰せ渡され候につき)	(近世・年未詳) 七月十六日			状		1	前欠
5	130					(覚、御小性上之列ニ仰せ付けられ候につき)	(近世・年未詳) 十二月廿二日			状		1	前欠
5	131					(覚、此節貨銀莫太之御入料かゝりにつき)	(近世・年月日未詳)			状		1	前欠
5	132					(覚、御足輕三之助忌中之段につき)	(近世・年未詳) 六月五日	佐藤司馬	尾柏要右衛門様	状		1	
5	133					(覚、後藤潤御川余之分につき)	(近世・年月日未詳)	尾 要右衛門	引地今朝吉殿、同役中	状		1	後欠
5	134					(覚、太鞍打嘉吉ヲ拝借成し下されたく候などにつき)	(近世・年月日未詳)			状	破損あり	1	前後欠
5	135					(覚、染置廿五日払金式切など書上)	(近世・年月日未詳)			状		1	
5	136					(覚、今日御本蔵江出勤致し、依指明日出勤之御通達相成候様仕りたくにつき)	(近世・年未詳) 十一月八日	五郎右衛門	要右衛門様	状		1	
5	137					(断簡)	(年月日未詳)	要右衛門	丹藏様、紋治様	状		1	
5	138					(覚、米三石式斗・此金式拾切など書上)	(近世・年月日未詳)			状		1	
5	139					(覚、山林役見分、人足相懸り時節柄ニ而御出方痛ニ御座候につき)	(近世・年未詳) 四月十四日	白井利兵衛 (ほか3名)		状	破損あり	1	前欠
5	140					覚 (利平金老切・式分八厘四毛など六切・三分六厘九毛勘定につき)	未 (近世) ノ年十二月			状		1	
5	141					(断簡)	(近世・年月日未詳)	大宮外守	尾柏要右衛門様、御同役中	状		1	
5	142					(覚、御作事守清蔵兄与平、御細工御入料頂戴仕らず、御扶持方計頂戴仕候につき)	(近世・年未詳) 十二月九日			状		1	
5	143					(達書、来正月門松、寺山御林ニ而下し置かれ候事につき)	(近世・年未詳) 十二月廿日	佐藤司馬	尾柏要右衛門殿 (ほか4名)	状		1	後欠
5	144					(断簡、尾柏要右衛門様迄当老)	(近世・年月日未詳)			状		1	

箱	番号	枝 1	枝 2	枝 3	枝 4	表題 (内容)	日付	差出人	受取人	形態	状態	点数	備考
5	145					(覚、私昨日より風邪にて銃術方欠席につき)	(近世・年末詳)三月十一日			状	破損あり	1	
5	146					(断簡、覚・当番方)	(近世・年月日未詳)			状		1	後欠
5	147					(覚、金蔵寺客殿障子并本尊左右之さま張紙下されたく願申出につき)	(年月日未詳)			状		1	後欠
5	148					(覚、米八斗代など金拾六切請取、差引金尠切余不足につき)	(近世・年月日未詳)			状		1	
5	149					(覚、今廿六日早飯後、大奥様愛宕社へ御参詣につき)	(近世・年末詳)六月廿六日	文五郎	要右衛門様	状		1	
5	150					(書状、当時麻疹流行ニ而江戸随分死人も多きよしニ御座候につき)	(近世・年月日未詳)			状		1	後欠
5	151					(書状、御願仕候くるまの輪御届け下され候、および御城下ハ看至而不足、しびなどは只今とれ申さずにつき)	(近世・年末詳)四月十六日	大六郎	要右衛門様	状		1	
5	152					(断簡)	(近世・年月日未詳)	大宮外守	尾柏要右衛門殿	状		1	
5	153					(覚、米尠升ニ付三百五拾六文など書上)	(近世・年月日未詳)			状		1	
5	154					(覚、砂沢平右衛門殿御扶持方ノ式拾四人分書上)	(近世・年月日未詳)			状		1	
5	155					(覚、八月中藤五郎様・筑前様御館江御繰込ニ相成候節御酒道具など御借受につき)	(近世・年月日未詳)			状		1	前後欠
5	156					(覚、谷津磨、御内証ニ而日数十日御暇成し下されたく願申上につき)	(近世・年末詳)四月二日			状		1	後欠
5	157					(覚、此度小藤太、薬師堂御固メ江罷出候につき)	(近世・年月日未詳)			状		1	後欠
5	158					(覚、阿部要治反別取調入料金ノ拾四銭三毛皆済につき)	(明治・年末詳)七月廿四日			状		1	
5	159					(断簡、巻・御酒初)	文久貳年閏八月			状		1	
5	160					(断簡、日数今二日より来ル十一日迄)	(近世・年月日未詳)			状		1	前欠、5-156の後半部分カ
5	161					安盛流炮術傳授次第(谷津喜東治ほか5名、文久三年九月より元治二年正月)	(元治二年正月)			状		1	
5	162					(覚、御下り之節御買上物仰せ付けられ候につき)	(近世・年末詳)六月朔日			状		1	
5	163					(覚、錦旗二流ほか軍役・泉田志摩など役職者書上)	(近世・年月日未詳)			状		1	前後欠
5	164					(断簡)	(近世・年月日未詳)		尾柏要右(衛門様)	状		1	
5	165					(覚、御手元御金無く、御拂米見当ニ金三拾切かり受仰せ出され候につき)	(近世・年末詳)五月十八日			状		1	
5	166					(覚、今日昼後より御出下されたき由につき)	(近世・年末詳)三月九日	鉄右衛門	要右衛門様	状		1	
5	167					(覚、紙面ハ民治方手係御用につき)	(近世・年末詳)五月三日			状		1	前欠
5	168					(断簡)	(近世・年月日未詳)	早坂源右衛門	尾柏要右衛門様	状		1	
5	169					(覚、御作事取調之通請取申候につき)	(近世・年末詳)十二月廿六日	丹藏	要右衛門様	状		1	
5	170					(覚、西洋銃相下され候砌、取ノ罷下り候様仰せ付けられ候につき)	(近世・年月日未詳)	佐藤司馬	尾柏要右衛門殿、御同役中	状		1	後欠
5	171					(覚、奥様御産方係り仰せ付けられ候につき)	(近世・年末詳)七月二日	佐藤司馬	尾柏要右衛門殿	状		1	
5	172					(断簡)	(近世・年月日未詳)	知・丹藏	尾・要右衛門様	状		1	
5	173					(覚、当暮より御知行所御わり付相成候につき)	(近世・年末詳)八月十六日			状		1	前欠
5	174					(覚、今十二日より十八日迄日数七日御暇成し下され候につき)	(近世・年末詳)十二月十二日			状		1	前欠

箱	番号	枝 1	枝 2	枝 3	枝 4	表題 (内容)	日付	差出人	受取人	形態	状態	点数	備考
5	175					(覚、此流行ニ而何之咄しも無く、只今はしかの咄ばかり御座候、および京都近衛様官白<ママ>宣下などにつき)	(文久2年) 七月十八日	外守	要右衛門様、秀作様	状		1	前欠、文久2年6月＝近衛忠熙閣白就任
5	176					(覚、今日御代官衆御通行のため出役仕候につき)	(近世・年末詳) 三月九日			状		1	
5	177					(覚、若殿様仙御屋敷御発駕、江戸御登りにつき)	(近世・年末詳) 三月十九日			状		1	
5	178					(覚、ミニウル銃拾挺・太鼓沓ソなど書上)	(近世・年月日未詳)			状	破損あり	1	前後欠
5	179					(断簡、可有之候)	(近世・年末詳) 十二月廿日			状		1	
5	180					(覚、岩佐氏四十之二とせを祝ひ詠歌につき)	(年月日未詳)	小龍子三衛		状		1	後欠
5	181					(覚、来正月御下々江下し置かれ候門松、寺山御林ニ而堀川権之允・阿部栄次見分につき)	(近世・年月日未詳)	佐藤司馬	尾柏要右衛門殿	状		1	後欠
5	182					(覚、大宮貞之助様ほか12名書上)	(近世・年月日未詳)			状		1	後欠、5-199と関連あり
5	183					(覚、当藻巻御普請御家中御人数相改候につき)	(近世・年末詳) 七月十六日	大宮外守	尾柏要右衛門殿、御同役中	状		1	
5	184					(覚、大殿様過ル朝日より御不快のため御医師療治、此段殿様へ仰せ上げられ候につき)	(近世・年末詳) 四月七日			状		1	
5	185					(覚、米式斗代・駄ちんゞ銭老費三拾六文勘定につき)	(近世・年月日未詳)			状		1	
5	186					(覚、御吟味之上、向後御村役へ申渡候につき)	(近世・年末詳) 七月五日			状		1	
5	187					(断簡)	(近世・年月日未詳)	大宮外守	丸山甚兵衛様	状		1	
5	188					(覚、別紙之通申出候につき)	(近世・年月日未詳)			状		1	後欠
5	189					(覚、不作御見分今・明日之内御出につき)	(近世・年月日未詳)			状		1	後欠
5	190					(覚、数ノ子三百八十文など合計銭老費三百式十文勘定につき)	(近世・年末詳) 十二月廿八日			状		1	
5	191					(覚、大殿様御備初御登せ遊ばされ候につき)	(近世・年月日未詳)	外守	要右衛門殿、文五郎様、御同役中	状		1	後欠
5	192					(覚、小藤太御知行所御手作ニ相成候、年具<ママ>米当年よりハ老石五斗ヲもって御作り下されたく候につき)	(近世・年末詳) 十月十三日			状		1	
5	193					口上 (拙者四、五日以前より風邪ニ而罷在候につき)	(近世・年末詳) 四月八日	志賀勇之助		状		1	
5	194					(覚、御小人目付方の御通行承り心付ヲもって罷出候につき)	(近世・年末詳) 三月十日			状		1	前欠
5	195					(覚、蔵入高之分、田数共ニ高配立札致候趣につき)	(近世・年末詳) 九月廿九日	取ヅ方	東五郎様 (ほか5名)	状		1	前欠
5	196					(漢詩写、早間囊底脱)	(年月日未詳)	(穉松佐治 為周)	(大條君)	状		1	
5	197					(覚、御納戸物の儀、別紙の通り受取申候につき)	(近世・年月日未詳)	司馬	要右衛門様	状		1	後欠
5	198					(覚、上々様江御薬服指し上げられ候、御下々共ニ薬服料金老切ニ四拾服之割ヲもって受納につき)	(近世・年月日未詳)			状		1	
5	199					(覚、千葉八十八様ほか17名書上)	(近世・年月日未詳)			状		1	前欠、5-182と関連あり
5	200					(覚、御足輕勇助仙 (台) 定詰仰せ付けられ、御金式切拝借願指出につき)	(近世・年末詳) 十二月廿七日			状		1	
5	201					(覚、取調へ申候間、御承知につき)	(近世・年末詳) 四月四日			状		1	前欠
5	202					(覚、大殿様御買上小鴨式羽請取につき)	(近世・年月日未詳)	知尚丹藏	尾柏要右衛門様	状		1	後欠
5	203					(断簡)	(近世・年月日未詳)	知尚丹藏	尾柏要右衛門様	状		1	

箱	番号	枝1	枝2	枝3	枝4	表題 (内容)	日付	差出人	受取人	形態	状態	点数	備考
5	204					(覚、来ル廿二日未明ニ御用之儀、御館へ罷出につき)	(近世・年未詳) 七月十九日	要右衛門	山ノ内良助殿 (印) (ほか4名)	状		1	前欠
5	205					(覚、御用方至而片付かず、御交代申し受けず只今ニ而御見詰下されたく候につき)	(近世・年未詳) 十一月二日	森惣右衛門	尾柏要右衛門殿	状		1	
5	206					(覚、当町百姓共御備廻拜借成し下されたく願申上、麻疹へ新米相用いかたく迷惑致、拾四石五斗御かし付につき)	(文久2年) 閏八月七日	佐藤司馬	森惣右衛門殿、尾柏要右衛門殿	状		1	
5	207					(覚、御使馬貳疋、仙表へ相登せ候につき)	(近世・年未詳) 十二月三日	引地安蔵 (印)、三浦勇治 (印)	要右衛門殿	状		1	
5	208					(覚、只今申来候間、各之内止宿へ罷出候につき)	(近世・年未詳) 六月廿八日	佐藤司馬	尾柏要右衛門様、森惣右衛門様	状		1	
5	209					(覚、別紙之通申来候につき)	(近世・年未詳) 四月廿四日	惣右衛門	要右衛門様	状		1	
5	210					(覚、龜相ニも板椽ニ成し下され候につき)	(近世・年未詳) 三月	白井利之助 (ほか3名)		状		1	前欠
5	211					(覚、今廿三日御用人仮役、および丸山甚兵衛御目付御仮役仰せ付けられ候につき)	(近世・年月日未詳)			状		1	前欠
5	212					(断簡)	(近世・年月日未詳)	早坂源右衛門	尾柏要右衛門様	状		1	
5	213					(覚、阿部治兵衛内職願、御細工物御隠居様より仰せ付けられ候につき)	(近世・年月日未詳)			状		1	前欠
5	214					(断簡)	(近世・年月日未詳)		小泉伸之助殿 (印) (ほか2名)	状		1	前欠
5	215					(覚、昨日御賄一条延引につき)	(近世・年未詳) 四月廿四日	一馬	惣右衛門様	状		1	
5	216					奥様御事御懐胎御安産御願成之御名代	(近世・年月日未詳)			状		1	後欠
5	217					(覚、仙 (台) 定詰御足輕庄右衛門・慶藏など出奔につき)	(近世・年未詳) 七月廿八日			状		1	
5	218					(断簡、御自分病氣押而出勤)	(近世・年月日未詳)	司馬	要右衛門様	状		1	後欠
5	219					(覚、木挽清藏・又蔵、御奉公のほか日雇の吟味につき)	(近世・年未詳) 十二月廿六日	佐藤司馬	尾柏要右衛門殿	状		1	
5	220					(断簡、当藻巻御普請来江)	(近世・年月日未詳)			状		1	後欠
5	221					(覚、昨九日藤五郎様当所御通行ニ相成候につき)	(近世・年月日未詳)			状		1	後欠
5	222					(断簡、金式切・八分六厘式毛)	(近世・年月日未詳)			状		1	前欠
5	223					(断簡、共ニ御首尾合可被下候、以上)	(近世・年未詳) 十一月一日			状		1	前欠
5	224					(断簡、此段相達申候、以上)	(近世・年未詳) 十月廿五日			状		1	前欠
5	225					(覚、追々承り御館江参り相尋候につき)	(近世・年月日未詳)			状		1	前欠
5	226					(断簡)	(近世・年月日未詳)	斎藤文五郎		状		1	
5	227					(断簡、尚々向江も相達)	(近世・年月日未詳)			状	破損あり	1	
5	228					(覚、御残之分ハ付札致さるべく、思召相伺候につき)	(近世・年未詳) 七月四日			状		1	前欠
5	229					(断簡)	(年月日未詳)			状		1	
5	230					(断簡、白紙)	(年月日未詳)			状		1	
5	231					(断簡、白紙)	(年月日未詳)			状		1	
5	232					(断簡、此ノ所相除可申由ノ事)	(年月日未詳)			状		1	
5	233					(断簡一括、御用人御目付へ遙り渡可被致候、以上)	(近世・年月日未詳)			状		1	
5	234					(断簡)	(近世・年月日未詳)	小泉和仲	要右衛門様	状		1	
5	235					(断簡、ニ而二日ふり)	(年月日未詳)			状		1	前欠
5	236					(断簡一括)	(年月日未詳)			状		1	

箱	番号	枝 1	枝 2	枝 3	枝 4	表題（内容）	日付	差出人	受取人	形態	状態	点数	備考
6	1	1				原本影印 王右丞集箋註 (卷之十五～十七所収)	(近代・年月日 未詳)	唐王摩詰先生 著、揚永年・ 題簽、仁和趙 殿成松谷・輯 録、上海文瑞 樓書局發行		冊		1	6-1-1 ～ 6-1-6 帙入り
6	1	2				原本影印 王右丞集箋註 (卷之十八～十九所収)	(近代・年月日 未詳)	唐王摩詰先生 著、揚永年・ 題簽、仁和趙 殿成松谷・輯 録、上海文瑞 樓書局發行		冊		1	
6	1	3				原本影印 王右丞集箋註 (卷之二十～二十一所収)	(近代・年月日 未詳)	唐王摩詰先生 著、揚永年・ 題簽、仁和趙 殿成松谷・輯 録、上海文瑞 樓書局發行		冊		1	
6	1	4				原本影印 王右丞集箋註 (卷之二十二～二十四所収)	(近代・年月日 未詳)	唐王摩詰先生 著、揚永年・ 題簽、仁和趙 殿成松谷・輯 録、上海文瑞 樓書局發行		冊		1	
6	1	5				原本影印 王右丞集箋註 (卷之二十五～二十八所収)	(近代・年月日 未詳)	唐王摩詰先生 著、揚永年・ 題簽、仁和趙 殿成松谷・輯 録、上海文瑞 樓書局發行		冊		1	
6	1	6				原本影印 王右丞集箋註 (卷之末所収)	(近代・年月日 未詳)	唐王摩詰先生 著、揚永年・ 題簽、仁和趙 殿成松谷・輯 録、上海文瑞 樓書局發行		冊		1	
6	2	1				原本影印 王右丞集箋註 (卷之一所収)	(近代・年月日 未詳)	唐王摩詰先生 著、揚永年・ 題簽、仁和趙 殿成松谷・輯 録、上海文瑞 樓書局發行		冊		1	6-2-1 ～ 6-2-6 帙入り、 帙に「前函」と朱書あ り
6	2	2				原本影印 王右丞集箋註 (卷之二～四所収)	(近代・年月日 未詳)	唐王摩詰先生 著、揚永年・ 題簽、仁和趙 殿成松谷・輯 録、上海文瑞 樓書局發行		冊		1	
6	2	3				原本影印 王右丞集箋註 (卷之五～六所収)	(近代・年月日 未詳)	唐王摩詰先生 著、揚永年・ 題簽、仁和趙 殿成松谷・輯 録、上海文瑞 樓書局發行		冊		1	
6	2	4				原本影印 王右丞集箋註 (卷之七～九所収)	(近代・年月日 未詳)	唐王摩詰先生 著、揚永年・ 題簽、仁和趙 殿成松谷・輯 録、上海文瑞 樓書局發行		冊		1	
6	2	5				原本影印 王右丞集箋註 (卷之十～十一所収)	(近代・年月日 未詳)	唐王摩詰先生 著、揚永年・ 題簽、仁和趙 殿成松谷・輯 録、上海文瑞 樓書局發行		冊		1	
6	2	6				原本影印 王右丞集箋註 (卷之十二～十四所収)	(近代・年月日 未詳)	唐王摩詰先生 著、揚永年・ 題簽、仁和趙 殿成松谷・輯 録、上海文瑞 樓書局發行		冊		1	
6	3	1				鑑蘊奥之巻	寛政八年正月	鹿又喜平太次 高 (印)	大條監物殿	状	卷子	1	6-3-1 ～ 6-3-6 紐にて一 括
6	3	2				馬形名所之巻	寛政八年正月	鹿又喜平太次 高 (印)	大條監物殿	状	卷子	1	
6	3	3				武羅之巻	寛政八年正月	鹿又喜平太次 高 (印)	大條監物殿	状	卷子	1	継ぎ目はずれ
6	3	4				武具加持之巻	寛政八年正月	鹿又喜平太次 高 (印)	大條監物殿	状	卷子	1	

箱	番号	枝1	枝2	枝3	枝4	表題 (内容)	日付	差出人	受取人	形態	状態	点数	備考
6	3	5				旗之巻	寛政八年正月	鹿又喜平太次高 (印)	大條監物殿	状	卷子	1	
6	3	6				裁衣之巻	寛政八年正月	鹿又喜平太次高 (印)	大條監物殿	状	卷子、破損あり	1	
6	4					辻の (書)	寛政八丙辰年十月吉日	市川友四郎盛秀 (印) (花押)	大條監物殿	状	卷子	1	継ぎ目はずれ
6	5					鑑蘊奥之巻	寛政八年正月	鹿又喜平太次高 (印)	大條監物殿	状	卷子	1	
6	6					柳生當流免許巻	天明元壬寅年三月廿七日	大内忠右衛門隆俊、松元勘兵衛保行 (印) (花押)	引地織右衛門殿	状	卷子	1	6-6-1 ~ 6-6-2 で1点、継ぎ目はずれ
6	7	1				(包紙、兜頬鉾之図・伺控)	天保七年十二月十七日			状		1	
6	7	2				鉾之図	(天保7年12月17日)			状		1	6-7-2 ~ 6-7-8 で1点
6	7	3				(兜之図)	(天保7年12月17日)			状		1	
6	7	4				(面頬之図)	(天保7年12月17日)			状		1	
6	7	5				(兜之図)	(天保7年12月17日)			状		1	
6	7	6				兜面頬鉾之図	(天保7年12月17日)			状		1	
6	7	7				(面頬之図)	(天保7年12月17日)			状		1	
6	7	8				(面頬之図)	(天保7年12月17日)			状		1	
6	8					射の (書)	寛政八丙辰年十月吉日	市川友四郎盛秀 (印) (花押)	大條監物殿	状	卷子	1	6-8-1 ~ 6-8-2 で1点、継ぎ目はずれ
6	9					(卷子断簡、白紙)	(年月日未詳)			状		1	
6	10					高麗流八条家抜書目録三	天明七年四月吉日	岩淵甚三郎寛敦 (印) (花押)	丸山嘉藤右衛門殿	状	卷子	1	
6	11					敬白起誓文 (穴澤流長刀并諸道具利方)	(年月日未詳)	佐々木氏娘・宮子 (ほか40名)		状	卷子	1	
6	12					矢入之伝	寛政八年四月	鹿又喜平太次高 (印)	大條監物道英殿	状	卷子	1	
6	13					高麗流八条家抜書目録二	宝暦拾貳年壬午二月吉日	岩淵加兵衛 (印) (花押)	大槻加大夫殿	状	卷子	1	
6	14					高麗流八条家抜書目録一	宝暦拾貳年壬午二月吉日	岩淵加兵衛 (印) (花押)	大槻加大夫殿	状	卷子	1	
6	15					田原藤太秀郷流弓道極秘	(年月日未詳)			状	卷子、包紙共	1	継ぎ目はずれ
6	16					使頭引接之禮	寛政八年三月十五日	堀越左兵衛尉重治 (ほか4名)		状	卷子	1	
6	17					南蛮様木流五百目追許	享和元年八月吉辰	山田清左衛門利定 (印) (花押)	大條監物殿	状	卷子、包紙共	1	
6	18	1				星禽之巻	寛政八年正月	鹿又喜平太次高 (印)	大條監物殿	状	卷子	1	6-18-1 ~ 6-18-41 行李箱にて一括
6	18	2				鑑六十四種之巻	寛政八年正月	鹿又喜平太次高 (印)	大條監物殿	状	卷子	1	
6	18	3				軍詞之巻	寛政八年正月	鹿又喜平太次高 (印)	大條監物殿	状	卷子	1	
6	18	4				鑑着初之次第	寛政八年正月	鹿又喜平太次高 (印)	大條監物殿	状	卷子	1	
6	18	5				鑑直垂之巻	寛政八年正月	鹿又喜平太次高 (印)	大條監物殿	状	卷子	1	
6	18	6				八龍鑑之巻	寛政八年正月	鹿又喜平太次高 (印)	大條監物殿	状	卷子	1	
6	18	7				鑑蘊奥之巻	寛政八年正月	鹿又喜平太次高 (印)	大條監物殿	状	卷子	1	
6	18	8				訓閑集螺貝之巻	寛政八年正月	鹿又喜平太次高 (印)	大條監物殿	状	卷子	1	
6	18	9				籠縄之巻	寛政八年正月	鹿又喜平太次高 (印)	大條監物殿	状	卷子	1	
6	18	10				武羅鑑奥之巻	寛政八歳正月	鹿又喜平太次高 (印)	大條監物殿	状	卷子	1	
6	18	11				反閉之巻	寛政八年正月	鹿又喜平太次高 (印)	大條監物殿	状	卷子	1	

箱	番号	枝 1	枝 2	枝 3	枝 4	表題 (内容)	日付	差出人	受取人	形態	状態	点数	備考
6	18	12				韃之巻	寛政八年正月	鹿又喜平太次高 (印)	大條監物殿	状	卷子	1	
6	18	13				敷皮之巻	寛政八年正月	鹿又喜平太次高 (印)	大條監物殿	状	卷子	1	
6	18	14				兵鼓之巻	寛政八年正月	鹿又喜平太次高 (印)	大條監物殿	状	卷子	1	
6	18	15				杠之巻	寛政八年正月	鹿又喜平太次高 (印)	大條監物殿	状	卷子	1	
6	18	16				頸檢知之巻	寛政八年正月	鹿又喜平太次高 (印)	大條監物殿	状	卷子	1	
6	18	17				軍扇之巻	寛政八年正月	鹿又喜平太次高 (印)	大條監物殿	状	卷子	1	
6	18	18				曜宿日取之巻	寛政八年正月	鹿又喜平太次高 (印)	大條監物殿	状	卷子	1	
6	18	19				六具之巻	(寛政8年)	(印、鹿又喜平太次高カ)		状	卷子	1	
6	18	20				策之巻	寛政八年正月	鹿又喜平太次高 (印)	大條監物殿	状	卷子	1	
6	18	21				鎧之巻	寛政八年正月	鹿又喜平太次高 (印)	大條監物殿	状	卷子、破損あり	1	
6	18	22				馬具名所之巻	寛政八年正月	鹿又喜平太次高 (印)	大條監物殿	状	卷子	1	
6	18	23				鳥氣之巻	寛政八年正月	鹿又喜平太次高 (印)	大條監物殿	状	卷子	1	
6	18	24				団蘊奥之巻	寛政八年正月	鹿又喜平太次高 (印)	大條監物殿	状	卷子	1	
6	18	25				訓閑集杠之巻	寛政八年正月	鹿又喜平太次高 (印)	大條監物殿	状	卷子	1	
6	18	26				策蘊奥之巻	寛政八年正月	鹿又喜平太次高 (印)	大條監物殿	状	卷子	1	
6	18	27				乳付旗之巻	寛政八年正月	鹿又喜平太次高 (印)	大條監物殿	状	卷子	1	
6	18	28				廳之巻	寛政八年正月	鹿又喜平太次高 (印)	大條監物殿	状	卷子	1	
6	18	29				實檢之巻	寛政八年正月	鹿又喜平太次高 (印)	大條監物殿	状	卷子、破損あり	1	
6	18	30				内蔀蘊奥之巻	寛政八年正月	鹿又喜平太次高 (印)	大條監物殿	状	卷子	1	
6	18	31				兵雲之巻	寛政八年正月	鹿又喜平太次高 (印)	大條監物殿	状	卷子、破損あり	1	
6	18	32				幕之巻	寛政八年正月	鹿又喜平太次高 (印)	大條監物殿	状	卷子	1	
6	18	33				出軍之巻	寛政八年正月	鹿又喜平太次高 (印)	大條監物殿	状	卷子	1	
6	18	34				指物之巻	寛政八年正月	鹿又喜平太次高 (印)	大條監物殿	状	卷子	1	
6	18	35				内蔀之巻	寛政八年正月	鹿又喜平太 (印)	大條監物殿	状	卷子	1	
6	18	36				實檢蘊奥之巻	寛政八年正月	鹿又喜平太次高 (印)	大條監物殿	状	卷子	1	
6	18	37				頸対面之次第	寛政八年正月	鹿又喜平太次高 (印)	大條監物殿	状	卷子	1	
6	18	38				肴組之巻	寛政八年正月	鹿又喜平太次高 (印)	大條監物殿	状	卷子	1	
6	18	39				城取之巻	寛政八年正月	鹿又喜平太次高 (印)	大條監物殿	状	卷子	1	
6	18	40				水冠之巻	寛政八年正月	鹿又喜平太次高 (印)	大條監物殿	状	卷子	1	
6	18	41				虎之巻	寛政八年正月	鹿又喜平太次高 (印)	大條監物殿	状	卷子、破損あり	1	
6	19	1				夢餘偶筆 (絵画等雜記帳)	天保乙未(6年)八月十六日			冊		1	6-19-1 ~ 6-19-20 包紙「客座録廿冊」・紐にて一括
6	19	2				客座録 拾 (絵画等雜記帳)	文政七年甲申閏八月	鈴木重之		冊		1	
6	19	3				(雅楽譜面帳)	(年月日未詳)			冊		1	
6	19	4	1			(客座録)	(年月日未詳)			冊	破損あり	1	
6	19	4	2			(寛、此粉東京御成街道骨董商より買、博物館在勤中につき)	(近代・年月日未詳)			状		1	6-19-4-1 挟み込み文書

箱	番号	枝 1	枝 2	枝 3	枝 4	表題（内容）	日付	差出人	受取人	形態	状態	点数	備考
6	19	4	3			(越天楽など雅楽譜面書上)	(年月日未詳)			状	破損あり	1	6-19-4-1 挟み込み文書
6	19	4	4			覚（嘉永六丑年御拝借木品代之内、金巻分式朱請取につき）	嘉永七年寅五月十八日	御普請方（印）	鱸半兵衛殿	状		1	6-19-4-1 挟み込み文書
6	19	5				(客座録)	(年月日未詳)			冊		1	
6	19	6	1			客座録 巻四	(年月日未詳)	道齋逸人路藏		冊		1	
6	19	6	2			(和歌、榎テ庭ヲ掃ク)	(年月日未詳)			状		1	6-19-6-1 挟み込み文書
6	19	6	3			(略図、回向院周辺)	(年月日未詳)			状		1	6-19-6-1 挟み込み文書
6	19	7	1			(客座録)	(年月日未詳)			冊		1	
6	19	7	2			(略図、水差)	(年月日未詳)			状		1	
6	19	8				客座録 九	(年月日未詳)			冊		1	
6	19	9				(客座録)	(年月日未詳)			冊		1	
6	19	10	1			客座録 十一	(年月日未詳)			冊		1	
6	19	10	2			客座録 拾三	(年月日未詳)			冊		1	
6	19	11				客座録 拾四・拾五	(年月日未詳)			冊		1	
6	19	12				西郊写真（客座録 八）	天保 甲午（5年）正月十一日			冊		1	
6	19	13				客座録 拾六	(年月日未詳)			冊		1	
6	19	14				客座録 拾七・拾八	(年月日未詳)			冊		1	
6	19	15				文苑清娛（客座録 廿）	天保改元甲辰（弘化元年）			冊		1	
6	19	16	1			客座録 五	(年月日未詳)			冊		1	
6	19	16	2			(断簡、ね・廿一・廿二・廿三・廿四)	(年月日未詳)			状		1	6-19-16-1 挟み込み文書
6	19	16	3			(覚、渝・説文など書上)	(年月日未詳)			状		1	6-19-16-1 挟み込み文書
6	19	16	4			(覚、小買物・伊セヤ・長崎屋安五郎など書上)	(年月日未詳)			状		1	6-19-16-1 挟み込み文書
6	19	17				客座録 二	天保 壬辰（3年）			冊		1	
6	19	18				文苑餘芳（客座録 一・拾九）	（天保11年）一月朔一日起筆			冊		1	
6	19	19				一揮傳真（客座録 七）	天保 庚子（11年）仲冬初七			冊		1	
6	19	20				(題箋、客座録廿冊)	(年月日未詳)			状		1	

本目録は、荒武賢一朗（東北大学東北アジア研究センター上廣歴史資料科学研究部門教授）が作成した。

執筆者紹介

野本 禎司 東北大学東北アジア研究センター上廣歴史資料学研究部門 助教

瀧本 正志 宮城県山元町教育委員会生涯学習課（文化財担当）、副参事

後藤 三夫 東北大学東北アジア研究センター上廣歴史資料学研究部門 事務補佐員

菅沼 楓 新潟市美術館学芸員

東北大学東北アジア研究センター叢書 第 70 号

仙台藩奉行大條家文書
—家・知行地・職務—

2022 年 2 月 17 日発行

編 著 者	野本禎司
発 行 者	東北大学東北アジア研究センター 〒 980-8576 仙台市青葉区川内 41
印 刷	有限会社 明倫社 〒 983-0842 仙台市宮城野区五輪 2-9-5

大條量物

CNEAS

